

独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第2冊

旧練兵場遺跡Ⅱ（第19次調査）

第二分冊

2011.2

香 川 県 教 育 委 員 会
独立行政法人国立病院機構善通寺病院

本文目次

第8節	河川跡の遺構・遺物	1
第9節	遺構に伴わない遺物	204
第4章	自然科学的分析	211
第1節	放射性炭素年代測定	211
	放射性炭素年代測定	211
	旧練兵場遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）	215
第2節	堆積層の土壌分析及び河川出土樹木の樹種同定	220
	香川県旧練兵場遺跡における土壌分析・樹種同定・種子同定	220
	旧練兵場遺跡出土木製品の樹種	246
	香川県旧練兵場遺跡出土木製品の樹種調査結果 その1	252
	香川県旧練兵場遺跡出土木製品の樹種調査結果 その2	264
第3節	動物遺存体同定	266
	旧練兵場遺跡から出土した動物遺存体と古人骨	266
第4節	青銅器鉛同位体比分析	274
第5節	鉄器および鍛冶関連資料の構造分析	303
	鉄製品及び鍛冶関連資料の構造分析	303
	鉄製品及び鍛冶関連資料の構造分析に対するコメント	360
	出土鉄製品の構造分析	362
第6節	黒変部を認める石製品について	373
第7節	旧練兵場遺跡出土赤色顔料の蛍光X線分析	394
第8節	ガラス玉の蛍光X線分析による元素分析	411
第5章	総括	417
第1節	弥生中期後半から古墳初頭の土器編年	417
第2節	旧練兵場遺跡における外来系土器	444
第3節	弥生時代中期から古墳時代前期の金属器	463
第4節	旧練兵場遺跡の漁具	472
第5節	旧練兵場遺跡の弥生時代集落について	476
第6節	古代・中世の景観	494

挿図目次

図 309	SR01 平・断面 遺物出土状況 F 区南壁断面	3	図 367	SR02 上層溝下層 B ブロック出土遺物 (2)	76
図 310	SR01 出土遺物 (1)	4	図 368	SR02 上層溝下層 F ブロック出土遺物 (1)	77
図 311	SR01 出土遺物 (2)	5	図 369	SR02 上層溝下層 F ブロック出土遺物 (2)	78
図 312	SR01 出土遺物 (3)	6	図 370	SR02 上層溝下層 L・J ブロック出土遺物 (1)	79
図 313	SR02 最下層下位平・断面 遺物出土状況	7	図 371	SR02 上層溝下層 L・J ブロック出土遺物 (2)	80
図 314	SR02 最下層下位出土遺物	10	図 372	SR02 上層溝下層 L・J ブロック出土遺物 (3)	82
図 315	SR02 下層平・断面 遺物出土状況	11	図 373	SR02 上層溝下層 W ブロック出土遺物 (1)	83
図 316	SR02 最下層番号取り上げ出土遺物 (1)	14	図 374	SR02 上層溝下層 W ブロック出土遺物 (2)	84
図 317	SR02 最下層番号取り上げ出土遺物 (2)	15	図 375	SR02 上層溝下層 E ブロック平・断面 遺物出土状況	85
図 318	SR02 最下層一括取り上げ出土遺物 (1)	16	図 376	SR02 上層溝下層 E ブロック出土遺物 (1)	86
図 319	SR02 最下層一括取り上げ出土遺物 (2)	17	図 377	SR02 上層溝下層 E ブロック出土遺物 (2)	87
図 320	SR02 下層下位出土遺物 (1)	19	図 378	SR02 上層溝下層 E ブロック出土遺物 (3)	88
図 321	SR02 下層下位出土遺物 (2)	20	図 379	SR02 上層溝下層一括取り上げ出土遺物 (1)	89
図 322	SR02 下層下位出土遺物 (3)	21	図 380	SR02 上層溝下層一括取り上げ出土遺物 (2)	90
図 323	SR02 下層下位出土遺物 (4)	22	図 381	SR02 上層溝上層 B・N ブロックアゼ出土遺物	91
図 324	SR02 下層下位出土遺物 (5)	23	図 382	SR02 上層溝上層 L・J ブロック出土遺物 (1)	93
図 325	SR02 下層下位出土遺物 (6)	24	図 383	SR02 上層溝上層 L・J ブロック出土遺物 (2)	94
図 326	SR02 下層南半出土遺物 (1)	26	図 384	SR02 上層溝上層 L・J ブロック出土遺物 (3)	95
図 327	SR02 下層南半出土遺物 (2)	27	図 385	SR02 上層溝上層 L・J ブロック出土遺物 (4)	96
図 328	SR02 下層南半出土遺物 (3)	28	図 386	SR02 上層溝上層 L・J ブロック出土遺物 (5)	97
図 329	SR02 下層南半出土遺物 (4)	29	図 387	SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物 (1)	98
図 330	SR02 下層南半出土遺物 (5)	30	図 388	SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物 (2)	99
図 331	SR02 下層南半出土遺物 (6)	31	図 389	SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物 (3)	100
図 332	SR02 下層南半出土遺物 (7)	32	図 390	SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物 (4)	101
図 333	SR02 下層南半出土遺物 (8)	33	図 391	SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物 (5)	103
図 334	SR02 下層南半出土遺物 (9)	34	図 392	SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物 (6)	104
図 335	SR02 下層北半出土遺物 (1)	35	図 393	SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物 (7)	105
図 336	SR02 下層北半出土遺物 (2)	36	図 394	SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物 (8)	106
図 337	SR02 下層中位出土遺物 (1)	38	図 395	SR02 上層平・断面 遺物出土状況 E 区北壁断面	107
図 338	SR02 下層中位出土遺物 (2)	39	図 396	SR02 上層 遺物出土状況	109
図 339	SR02 下層中位出土遺物 (3)	40	図 397	SR02 上層 A ブロック出土遺物 (1)	112
図 340	SR02 下層中位出土遺物 (4)	41	図 398	SR02 上層 A ブロック出土遺物 (2)	113
図 341	SR02 下層中位出土遺物 (5)	42	図 399	SR02 上層 B ブロック出土遺物 (1)	114
図 342	SR02 下層上位出土遺物 (1)	44	図 400	SR02 上層 B ブロック出土遺物 (2)	116
図 343	SR02 下層上位出土遺物 (2)	45	図 401	SR02 上層 B ブロック出土遺物 (3)	117
図 344	SR02 下層上位出土遺物 (3)	46	図 402	SR02 上層 B ブロック出土遺物 (4)	118
図 345	SR02 下層上位出土遺物 (4)	47	図 403	SR02 上層 B ブロック出土遺物 (5)	119
図 346	SR02 中層出土遺物 (1)	49	図 404	SR02 上層 B ブロック出土遺物 (6)	120
図 347	SR02 中層出土遺物 (2)	50	図 405	SR02 上層 B ブロック出土遺物 (7)	121
図 348	SR02 上層溝下層平・断面 遺物出土状況	51	図 406	SR02 上層 B ブロック番号取り上げ出土遺物 (1)	122
図 349	SR02 上層溝下層遺物出土状況	55	図 407	SR02 上層 B ブロック番号取り上げ出土遺物 (2)	123
図 350	SR02 上層溝最下層出土遺物 (1)	57	図 408	SR02 上層 B ブロック番号取り上げ出土遺物 (3)	124
図 351	SR02 上層溝最下層出土遺物 (2)	58	図 409	SR02 上層 C ブロック出土遺物 (1)	125
図 352	SR02 上層溝下層 B ブロック番号取り上げ出土遺物 (1)	59	図 410	SR02 上層 C ブロック出土遺物 (2)	126
図 353	SR02 上層溝下層 B ブロック番号取り上げ出土遺物 (2)	60	図 411	SR02 上層 C ブロック番号取り上げ出土遺物	127
図 354	SR02 上層溝下層 B ブロック番号取り上げ出土遺物 (3)	61	図 412	SR02 上層 E ブロック出土遺物 (1)	128
図 355	SR02 上層溝下層 B ブロック番号取り上げ出土遺物 (4)	62	図 413	SR02 上層 E ブロック出土遺物 (2)	129
図 356	SR02 上層溝下層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (1)	64	図 414	SR02 上層 E ブロック出土遺物 (3)	130
図 357	SR02 上層溝下層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (2)	65	図 415	SR02 上層 F ブロック出土遺物 (1)	132
図 358	SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物 (1)	66	図 416	SR02 上層 F ブロック出土遺物 (2)	133
図 359	SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物 (2)	67	図 417	SR02 上層 F ブロック出土遺物 (3)	134
図 360	SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物 (3)	68	図 418	SR02 上層 F ブロック出土遺物 (4)	135
図 361	SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物 (4)	70	図 419	SR02 上層 F ブロック出土遺物 (5)	136
図 362	SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物 (5)	71	図 420	SR02 上層 F ブロック出土遺物 (6)	137
図 363	SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物 (6)	72	図 421	SR02 上層 F ブロック出土遺物 (7)	138
図 364	SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物 (7)	73	図 422	SR02 上層 F ブロック出土遺物 (8)	139
図 365	SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物 (8)	74	図 423	SR02 上層 F ブロック出土遺物 (9)	140
図 366	SR02 上層溝下層 B ブロック出土遺物 (1)	75	図 424	SR02 上層 F ブロック出土遺物 (10)	141

図 425	SR02 上層 F ブロック出土遺物 (11) ……	142	図 485	包含層出土遺物 (4) ……	208
図 426	SR02 上層 F ブロック出土遺物 (12) ……	143	図 486	包含層出土遺物 (5) ……	209
図 427	SR02 上層 F ブロック出土遺物 (13) ……	145	図 487	包含層出土遺物 (6) ……	210
図 428	SR02 上層 F ブロック出土遺物 (14) ……	146	図 488	暦年較正結果 ……	214
図 429	SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (1) ……	147	図 489	[参考] 暦年較正年代グラフ その1 ……	218
図 430	SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (2) ……	148	図 490	[参考] 暦年較正年代グラフ その2 ……	219
図 431	SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (3) ……	149	図 491	旧練兵場遺跡 B 区西壁における植物珪酸体分析結果 ……	224
図 432	SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (4) ……	150	図 492	旧練兵場遺跡の植物珪酸体 (プラント・オパール) ……	238
図 433	SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (5) ……	151	図 493	旧練兵場遺跡の木材 I ……	239
図 434	SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (6) ……	152	図 494	旧練兵場遺跡の木材 II ……	240
図 435	SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (7) ……	153	図 495	旧練兵場遺跡の木材 III ……	241
図 436	SR02 上層 G ブロック出土遺物 (1) ……	155	図 496	旧練兵場遺跡の木材 IV ……	242
図 437	SR02 上層 G ブロック出土遺物 (2) ……	156	図 497	旧練兵場遺跡の木材 V ……	243
図 438	SR02 上層 G ブロック出土遺物 (3) ……	157	図 498	旧練兵場遺跡の木材 VI ……	244
図 439	SR02 上層 G ブロック出土遺物 (4) ……	158	図 499	旧練兵場遺跡の種実 ……	245
図 440	SR02 上層 G ブロック出土遺物 (5) ……	159	図 500	写真図版: 旧練兵場遺跡出土木製品の切片の光学顕微鏡写真(1) ……	250
図 441	SR02 上層 G ブロック番号取り上げ出土遺物 ……	160	図 501	写真図版: 旧練兵場遺跡出土木製品の切片の光学顕微鏡写真(2) ……	251
図 442	SR02 上層 I ブロック出土遺物 (1) ……	161	図 502	香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真 その1 ……	255
図 443	SR02 上層 I ブロック出土遺物 (2) ……	162	図 503	香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真 その2 ……	256
図 444	SR02 上層 J ブロック出土遺物 (1) ……	163	図 504	香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真 その3 ……	257
図 445	SR02 上層 J ブロック出土遺物 (2) ……	164	図 505	香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真 その4 ……	258
図 446	SR02 上層 J ブロック出土遺物 (3) ……	165	図 506	香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真 その5 ……	259
図 447	SR02 上層 J ブロック出土遺物 (4) ……	166	図 507	香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真 その6 ……	260
図 448	SR02 上層 J ブロック出土遺物 (5) ……	167	図 508	香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真 その7 ……	261
図 449	SR02 上層 J ブロック番号取り上げ出土遺物 (1) ……	168	図 509	香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真 その8 ……	262
図 450	SR02 上層 J ブロック番号取り上げ出土遺物 (2) ……	169	図 510	香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真 その9 ……	263
図 451	SR02 上層 J ブロック番号取り上げ出土遺物 (3) ……	170	図 511	香川県旧練兵場遺跡出土木製品の顕微鏡写真 その10 ……	265
図 452	SR02 上層 J ブロック番号取り上げ出土遺物 (4) ……	171	図 512	SR02 (弥生時代後期前半期) における動物遺存体の出土分布状況 その1 ……	268
図 453	SR02 上層 K ブロック番号取り上げ出土遺物 (1) ……	172	図 513	SR02 (弥生時代後期前半期) における動物遺存体の出土分布状況 その2 ……	269
図 454	SR02 上層 K ブロック番号取り上げ出土遺物 (2) ……	173	図 514	銅鏃 1 (左: 試料採取前、右: 試料採取後) ……	276
図 455	SR02 上層 K ブロック番号取り上げ出土遺物 (3) ……	174	図 515	鉛 1 の XRF スペクトル ……	276
図 456	SR02 上層 K ブロック番号取り上げ出土遺物 (4) ……	175	図 516	銅鏃 2 ……	277
図 457	SR02 上層 L ブロック出土遺物 (1) ……	177	図 517	鉛 2 の XRF スペクトル ……	277
図 458	SR02 上層 L ブロック出土遺物 (2) ……	178	図 518	銅鏃 3 (左: 試料採取前、右: 試料採取後) ……	278
図 459	SR02 上層 L ブロック出土遺物 (3) ……	179	図 519	鉛 3 の XRF スペクトル ……	278
図 460	SR02 上層 L ブロック出土遺物 (4) ……	180	図 520	銅鏃 4 ……	279
図 461	SR02 上層 L ブロック出土遺物 (5) ……	181	図 521	鉛 4 の XRF スペクトル ……	279
図 462	SR02 上層 L ブロック出土遺物 (6) ……	182	図 522	銅鏃 5 ……	280
図 463	SR02 上層 L ブロック番号取り上げ出土遺物 ……	183	図 523	鉛 5 の XRF スペクトル ……	280
図 464	SR02 上層 M ブロック番号取り上げ出土遺物 ……	184	図 524	銅鏃 6 ……	281
図 465	SR02 上層 N ブロック出土遺物 (1) ……	185	図 525	鉛 6 の XRF スペクトル ……	281
図 466	SR02 上層 N ブロック出土遺物 (2) ……	186	図 526	銅鏃 7 ……	282
図 467	SR02 上層 N ブロック出土遺物 (3) ……	187	図 527	鉛 7 の XRF スペクトル ……	282
図 468	SR02 上層 N ブロック出土遺物 (4) ……	188	図 528	銅鏃 8 ……	283
図 469	SR02 上層 O ブロック出土遺物 (1) ……	190	図 529	鉛 8 の XRF スペクトル ……	283
図 470	SR02 上層 O ブロック出土遺物 (2) ……	191	図 530	銅鏃 9 ……	284
図 471	SR02 上層 O ブロック出土遺物 (3) ……	192	図 531	鉛 9 の XRF スペクトル ……	284
図 472	SR02 上層 O ブロック出土遺物 (4) ……	193	図 532	銅鏃 10 ……	285
図 473	SR02 上層 P ブロック出土遺物 (1) ……	194	図 533	鉛 10 の XRF スペクトル ……	285
図 474	SR02 上層 P ブロック出土遺物 (2) ……	195	図 534	銅鏃 11 ……	286
図 475	SR02 上層 P ブロック出土遺物 (3) ……	196	図 535	鉛 11 の XRF スペクトル ……	286
図 476	SR02 上層層位不明出土遺物 (1) ……	198	図 536	銅鏃 12 (左: 試料採取前、右: 試料採取後) ……	287
図 477	SR02 上層層位不明出土遺物 (2) ……	199	図 537	鉛 12 の XRF スペクトル ……	287
図 478	SR02 上層層位不明出土遺物 (3) ……	200	図 538	銅鏃 13 ……	288
図 479	SR02 上層層位不明出土遺物 (4) ……	201	図 539	鉛 13 の XRF スペクトル ……	288
図 480	SR02 上層層位不明出土遺物 (5) ……	202	図 540	銅鏃 14 ……	289
図 481	SR02 上層層位不明出土遺物 (6) ……	203	図 541	鉛 14 の XRF スペクトル ……	289
図 482	包含層出土遺物 (1) ……	205	図 542	銅鏃 15 (左: 試料採取前、右: 試料採取後) ……	290
図 483	包含層出土遺物 (2) ……	206	図 543	鉛 15 の XRF スペクトル ……	290
図 484	包含層出土遺物 (3) ……	207	図 544	銅鏃 16 ……	291

図 545	鉛 16 の XRF スペクトル	291	図 597	遺跡出土製品の顕微鏡組織写真	367
図 546	鉛 17 の XRF スペクトル	292	図 598	遺跡出土製品の顕微鏡組織写真	368
図 547	本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料の鉛同位体比 (A 式図)	298	図 599	SEM-EDX による成分分析 (B 切断片)	369
図 548	本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料の鉛同位体比 (図 547 の拡大 - A 式図)	298	図 600	SEM-EDX による錆化鉄の成分分析 (B 切断片)	370
図 549	本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料の鉛同位体比 (B 式図)	299	図 601	E D X 分析	371
図 550	本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料の鉛同位体比 (図 549 の拡大 - B 式図)	299	図 602	X 線回折図	372
図 551	本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料と比較資料が示す鉛同位体比 (A 式図)	300	図 603	石製品実測図	373
図 552	本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料と比較資料が示す鉛同位体比 (図 551 の拡大 - A 式図)	300	図 604	蛍光 X 線分析測定位置	375
図 553	本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料と比較資料が示す鉛同位体比 (B 式図)	301	図 605	軟 X 線写真図	376
図 554	本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料と比較資料が示す鉛同位体比 (図 553 の拡大 - B 式図)	301	図 606	X 線スペクトル (測定箇所 1)	377
図 555	旧練兵場遺跡第 19 次調査銅鍍の変遷	302	図 607	X 線スペクトル (測定箇所 2)	378
図 556	分析鉄器	321	図 608	X 線スペクトル (測定箇所 3)	379
図 557	鉄製品の顕微鏡組織	322	図 609	X 線スペクトル (測定箇所 4)	380
図 558	鉄製品の顕微鏡組織	323	図 610	X 線スペクトル (測定箇所 5)	381
図 559	鉄製品の顕微鏡組織	324	図 611	X 線スペクトル (測定箇所 6)	382
図 560	微細遺物の顕微鏡組織	325	図 612	X 線スペクトル (測定箇所 7)	383
図 561	微細遺物の顕微鏡組織	326	図 613	X 線スペクトル (測定箇所 8)	384
図 562	鉄製品の顕微鏡組織	327	図 614	X 線スペクトル (測定箇所 9)	385
図 563	鉄製品・微細遺物の顕微鏡組織	328	図 615	X 線スペクトル (測定箇所 10)	386
図 564	微細遺物・鉄製品の顕微鏡組織	329	図 616	X 線スペクトル (測定箇所 11)	387
図 565	微細遺物の顕微鏡組織	330	図 617	資料写真図	388
図 566	微細遺物の顕微鏡組織	331	図 618	作業状況写真図	389
図 567	微細遺物の顕微鏡組織	332	図 619	実体顕微鏡写真図	390
図 568	微細遺物の顕微鏡組織	333	図 620	軟 X 線写真図	391
図 569	微細遺物の顕微鏡組織	334	図 621	分析前後資料写真	392
図 570	微細遺物の顕微鏡組織	335	図 622	赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (1)	398
図 571	微細遺物の顕微鏡組織	336	図 623	赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (2)	399
図 572	微細遺物・鉄製品の顕微鏡組織	337	図 624	赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (3)	400
図 573	ガラス質溶解物の顕微鏡組織	338	図 625	赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (4)	401
図 574	ガラス質溶解物・錆化鉄片の顕微鏡組織	339	図 626	赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (5)	402
図 575	マクロ組織	340	図 627	赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (6)	403
図 576	マクロ組織	341	図 628	赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (7)	404
図 577	マクロ組織	342	図 629	赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (8)	405
図 578	マクロ組織	343	図 630	赤色顔料の蛍光 X 線分析結果 (9)	406
図 579	マクロ組織	344	図 631	赤色顔料光学顕微鏡写真 (1)	407
図 580	マクロ組織	345	図 632	赤色顔料光学顕微鏡写真 (2)	408
図 581	マクロ組織	346	図 633	赤色顔料光学顕微鏡写真 (3)	409
図 582	マクロ組織	347	図 634	赤色顔料光学顕微鏡写真 (4)	410
図 583	マクロ組織	348	図 635	旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 8 (104253) の蛍光 X 線スペクトル	413
図 584	マクロ組織	349	図 636	旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 9 (104254) の蛍光 X 線スペクトル	413
図 585	マクロ組織	350	図 637	旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 12 (104255) の蛍光 X 線スペクトル	413
図 586	マクロ組織	351	図 638	旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 13 (104256) の蛍光 X 線スペクトル	414
図 587	マクロ組織	352	図 639	旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 14 (104257) の蛍光 X 線スペクトル	414
図 588	EPMA 調査	353	図 640	旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 16 (104258) の蛍光 X 線スペクトル	414
図 589	EPMA 調査	354	図 641	旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 17 (104259) の蛍光 X 線スペクトル	415
図 590	EPMA 調査	355	図 642	旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 18 (104260) の蛍光 X 線スペクトル	415
図 591	EPMA 調査	356	図 643	旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 20 (104261) の蛍光 X 線スペクトル	415
図 592	EPMA 調査	357	図 644	旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 21 (104262) の蛍光 X 線スペクトル	416
図 593	EPMA 調査	358	図 645	旧練兵場遺跡出土ガラス小玉 22 (104263) の蛍光 X 線スペクトル	416
図 594	鉄製品の顕微鏡組織	359	図 646	土器編年 その 1	424
図 595	資料の切断状況	365	図 647	土器編年 その 2	425
図 596	遺跡出土製品のマクロ組織写真	366	図 648	土器編年 その 3	426
			図 649	土器編年 その 4	427
			図 650	土器編年 その 5	428
			図 651	土器編年 その 6	429
			図 652	土器編年 その 7	430
			図 653	土器編年 その 8	431
			図 654	土器編年 その 9	432
			図 655	土器編年 その 10	433
			図 656	土器編年 その 11	434

図 657	土器編年	その 12	435	図 679	旧練兵場遺跡における鍛冶遺構・鍛冶関連遺物の変遷	465
図 658	土器編年	その 13	436	図 680	銅鍬変遷	468
図 659	土器編年	その 14	437	図 681	銅鍬集成	469
図 660	土器編年	その 15	438	図 682	旧練兵場遺跡における石錘の変遷	472
図 661	土器編年	その 16	439	図 683	旧練兵場遺跡と関連遺跡の蛸壺	473
図 662	外来系土器	その 1 (河内・阿波)	445	図 684	日本海沿岸の刺突漁具と旧練兵場遺跡への搬入	474
図 663	外来系土器	その 2 (土佐)	447	図 685	中期後半古段階 (Ⅱ-2 様式)	479
図 664	外来系土器	その 3 (伊予)	448	図 686	中期後半中段階 (Ⅲ-2 様式)	480
図 665	外来系土器	その 4 (伊予)	449	図 687	中期後半新段階古相	481
図 666	外来系土器	その 5 (吉備)	450	図 688	中期後半新段階新相	482
図 667	外来系土器	その 6 (吉備)	451	図 689	後期前半古段階	483
図 668	外来系土器	その 7 (吉備)	452	図 690	後期前半中段階	485
図 669	外来系土器	その 8 (備中)	453	図 691	後期前半新段階	486
図 670	外来系土器	その 9 (備中)	454	図 691	後期前半新段階	486
図 671	外来系土器	その 10 (備後)	455	図 692	後期後半古段階	488
図 672	外来系土器	その 11 (備後)	456	図 693	後期後半新段階	489
図 673	外来系土器	その 12 (安芸)	457	図 694	終末期古段階	490
図 674	外来系土器	その 13 (西部瀬戸内)	458	図 695	終末期中段階	491
図 675	外来系土器	その 14 (豊前・豊後ほか)	459	図 696	終末期新段階	492
図 676	外来系土器	その 15 (系統不明)	460	図 697	古墳前期古段階	493
図 677	外来系土器	その 16 (系統不明・山陰・伊勢湾)	461			
図 678	旧練兵場遺跡における鉄器の変遷		464			

表目次

表 16	SR02 上層溝下層出土遺物報告区分	53
表 17	SR02 上層溝上層出土遺物報告区分	54
表 18	SR02 上層出土遺物報告区分	106
表 19	測定試料及び処理	213
表 20	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果	213
表 21	分析試料及び結果 (その 1)	217
表 22	分析試料及び結果 (その 2)	217
表 23	旧練兵場遺跡における植物珪酸体分析結果	223
表 24	旧練兵場遺跡における樹種同定結果 その 1	232
表 25	旧練兵場遺跡における樹種同定結果 その 2	233
表 26	旧練兵場遺跡における種実同定結果	237
表 27	旧練兵場遺跡出土木製品の樹種同定結果リスト	249
表 28	香川県旧練兵場遺跡出土木製品同定 その 1	254
表 29	香川県旧練兵場遺跡出土木製品同定 その 2	265
表 30	旧練兵場遺跡から出土した動物遺存体の種名一覧	267
表 31	SR02 (弥生時代後期前半) から出土した動物遺存体 (L/R)	272
表 32	集計表 (L/R)	273
表 33	分析試料一覧	274
表 34	分析試料から検出された元素とその強度	275
表 35	本調査における香川県善通寺市旧練兵場遺跡出土資料の鉛同位体比	295
表 36	これまでに測定された弥生時代の銅鏃・三稜鏃の鉛同位体比 その 1	296
表 37	これまでに測定された弥生時代の銅鏃・三稜鏃の鉛同位体比 その 2	297
表 38	供試材の履歴と調査結果	318
表 39	供試材の履歴と調査項目	319
表 40	出土遺物の調査結果のまとめ	320
表 41		363
表 42	測定条件	374
表 43	蛍光 X 線分析結果	376
表 44	土器の時期ごとの付着顔料	394
表 45	弥生時代後期の土器の器種ごとの付着顔料	394
表 46	分析対象資料 その 1	396
表 47	分析対象資料 その 2	397
表 48	分析した旧練兵場遺跡出土ガラス小玉の詳細出土地区・玉の特徴	412
表 49	旧練兵場遺跡出土ガラス玉の化合物元素濃度分析結果	412
表 50	型式分類 1	419
表 51	型式分類 2	420
表 52	型式の共伴状況	421
表 53	編年対照	440
表 54	外来系土器の集計	444
表 55	銅鏃一覧	466
表 56	鉄鏃と銅鏃の法量分布	467
表 57	銅鏃保有率	470
表 58	掘立柱建物跡と溝状遺構の方向による分類	497
	掲載資料一覧表	499

第8節 河川跡の遺構・遺物

今回報告する調査区では、縄文時代晩期河川跡（SR02 最下層）、弥生時代前期河川跡（SR01）、弥生時代中期河川跡（SR02 下層・中層）、弥生時代後期～終末期の低地帯（SR02 上層溝・SR02 上層）を検出した。

第3章第2節微地形と土層序でも述べたように、調査地の弥生時代遺構の基盤は扇状地起源の礫層の凹凸を覆う黄色系シルト層である。黄色系シルト層中には縄文時代後期から晩期にかけての遺物が含まれており、層中で遺構の検出を試みたが、その存在を明確に捉えることはできなかった。一方、弥生時代中期の河川跡 SR02 を下層まで調査した後、さらに下部の掘削を行った結果、最下層から縄文時代晩期後半の突帯文期の遺物が出土した。したがって弥生時代中期の河川跡 SR02 は縄文時代晩期から継続する河川跡である。ただし、最下層は微高地へ立ち上がる層界線が明瞭ではなく、黄色系シルト層中に収束する可能性もある。その場合は、微高地の基盤層となる黄色系シルト層の形成途上から存続し続けた河川跡と解釈できる。

それと異なり、弥生時代前期の河川跡 SR01 は下層にやや濁った黄色系シルト層が堆積し、上層に褐色系粘質シルト層が堆積する。河床レベルも SR02 と比較して 1.7 m 高く、その後の発掘調査でも微高地を大きく蛇行しながら浅く流れることが判明していることから、黄色系シルト層形成後の浅い窪地と考えられる。弥生時代前期の微高地には、このような部分的な窪地が各所に存在したものと考えられる。

弥生時代中期の河川跡 SR02 は中期末までにはある程度埋没するが、依然として低地帯としての微地形は継続する。低地帯最下部に東西方向に掘削された溝状遺構が SR02 上層溝である。掘削時期は出土遺物から見て後期初頭頃と推定される。この溝には大量の遺物投棄が行われる。遺物投棄は上層溝をすべて埋め尽くした後、低地帯全域に及んでおり、終末期には中期の河川跡 SR02 の河川域のうち、蛇行後の北側範囲全域が大量の土器で埋め尽くされた。上層溝を覆う低地帯全域に広がる土器群を SR02 上層として取り扱った。

以下、一部時期的に前後するが、SR01（弥生時代前期前半）→SR02 最下層（縄文時代晩期後半）→SR02 下層（弥生時代中期）→SR02 中層（弥生時代中期）→SR02 上層溝（弥生時代後期前半）→SR02 上層（弥生時代後期後半～終末期）の順で報告することとする。（森下）

（1）河川跡 SR01

A区南西隅からF区南にかけて緩やかに南向きのカーブを描きながら走向する河川跡である。A区調査時には南西方向に傾く自然傾斜地に堆積する遺物包含層として調査を進めた。F区調査時に遺物がまとまって出土したことにより、弥生時代前期前半期に埋没した浅い河川跡と判明したが、F区では本来の遺構面から 20cm 程下げて検出したため、本来の川幅は明確ではない。断面図や調査時の写真を検討した結果、図に示したように、川幅約 6 m、深さ 0.7 m で東南から南西に向かって走向する河川跡として復元した。

埋土は最下部にやや濁った黄色系シルト層が約 0.2 m 堆積する。有機物を含むような湿潤な堆積層ではなく、乾痕を伴う乾燥環境を反映した堆積層である。その上面で弥生時代前期の土器を検出した。土器は川底中央やや北岸寄りに 2 群（A群・B群）に分かれて分布する。調査時には両群は層位的な上下がなく、同一面で検出したが、出土レベルを断面 a ラインに投影すると、B群が 20cm 程低い。これは、

B群付近を中心として川底に窪みが存在し、その傾斜に沿って土器群が投棄されたことによる。

A群・B群は土器や石器に器種の偏りはなく、土器型式も共通することから、比較的短時間に連続して北側から投棄された遺物群と判断できる。

なお、出土土器には弥生時代中期の土器(2324～2326)が混じる。これはいずれもA区出土品である。A区ではSR01上層の褐色系粘質シルト層から調査を行っており、上層の最終埋没時期は中期に下るものとする。(森下)

SR01 出土遺物 (図 310～312)

土器 出土土器には弥生前期土器(2280～2322)、縄文晩期土器(2323)、弥生中期土器(2325,2326)がある。2280～2296は壺である。形態や施紋の属性から見て、瀬戸内型甕出現直前の弥生前期前半期の新相を示す資料と見られる。2280の大型壺は口頸部界に1条の貼り付け突帯を施す。2281、2288～2291は、ミガキ状の細線で山形紋や重弧紋を描く。2297～2311、2313は甕である。2297は突帯紋系の甕との折衷形態であり、口縁部下に1条の刻目突帯を施す。2299、2300は外面に僅かに段部を留め、刻目や竹管刺突による施紋を行う。2312は形態や内面ミガキから見て、高杯か鉢の可能性が高い。2314は前期初頭の有段鉢からの型式変化が想定できる鉢で、1条の貼り付け突帯を施す。2315は小形の突帯紋系の甕である。2316は無頸壺であり、内外面をミガキ締める。2319～2322は蓋である。いずれも甕蓋と考えられるが、天井部の厚みは見られず、弥生前期後半期に近い属性を留める。2323は縄文晩期の浅鉢の口縁部片である。形態から変容浅鉢の可能性が高い。

2318、2324～2326は上位から掘り込まれた遺構からの混入品と考えられる遺物である。2324は細頸壺の口縁部片で、2325は跳ね上げ状口縁をもつ甕であり、ともに弥生中期前半期の所産と見られる。2326は高杯脚部片であり、外面を凹線紋帯と綾杉紋で飾るもので、弥生中期後半期と見られる。2318は内面に赤色顔料の付着が確認できるが、形態から見て、弥生後期の混入品の可能性が高い。

以上土器群は、弥生前期前半の中でも新段階に位置付けられる資料が主体であり、本河川北側の貯蔵穴群と一部併行する時期の所産とすることができる。(信里)

石器 2327、2328はいずれも上層出土のサヌカイト製打製石鏃である。平基式及び凸基式でいずれも小型品である。2329はサヌカイト製スクレイパーである。刃部はやや不規則な調整加工を施し、背部は三角形状に加工を施す。2330はB群遺物の下部で出土したサヌカイト製打製石庖丁である。側縁に自然面、表裏に石核分割面を残す。刃部加工は丁寧に施し、直線的に整形する。背部は分割時の折れ面に敲打を加えて調整する。抉りを施した形成は見られない。刃部には顕著な摩滅は見られず、僅かに平滑感を残す程度である。2331は下層上面で出土した蛇紋岩製の磨製石斧体部片である。2332は結晶片岩製柱状片刃石斧である。基部は平坦に整形し、着柄用の抉りは備えない。出土層位は不明だが、出土日付がA・B群より2週間程早いことから、上層出土で弥生時代中期に所属するものとする。2333はA群で出土した結晶片岩製石棒転用の叩石である。表裏面にあばた状の敲打痕、側面に線状の敲打痕を残す。(森下)



図 309 SR01 平・断面 遺物出土状況 F 区南壁断面

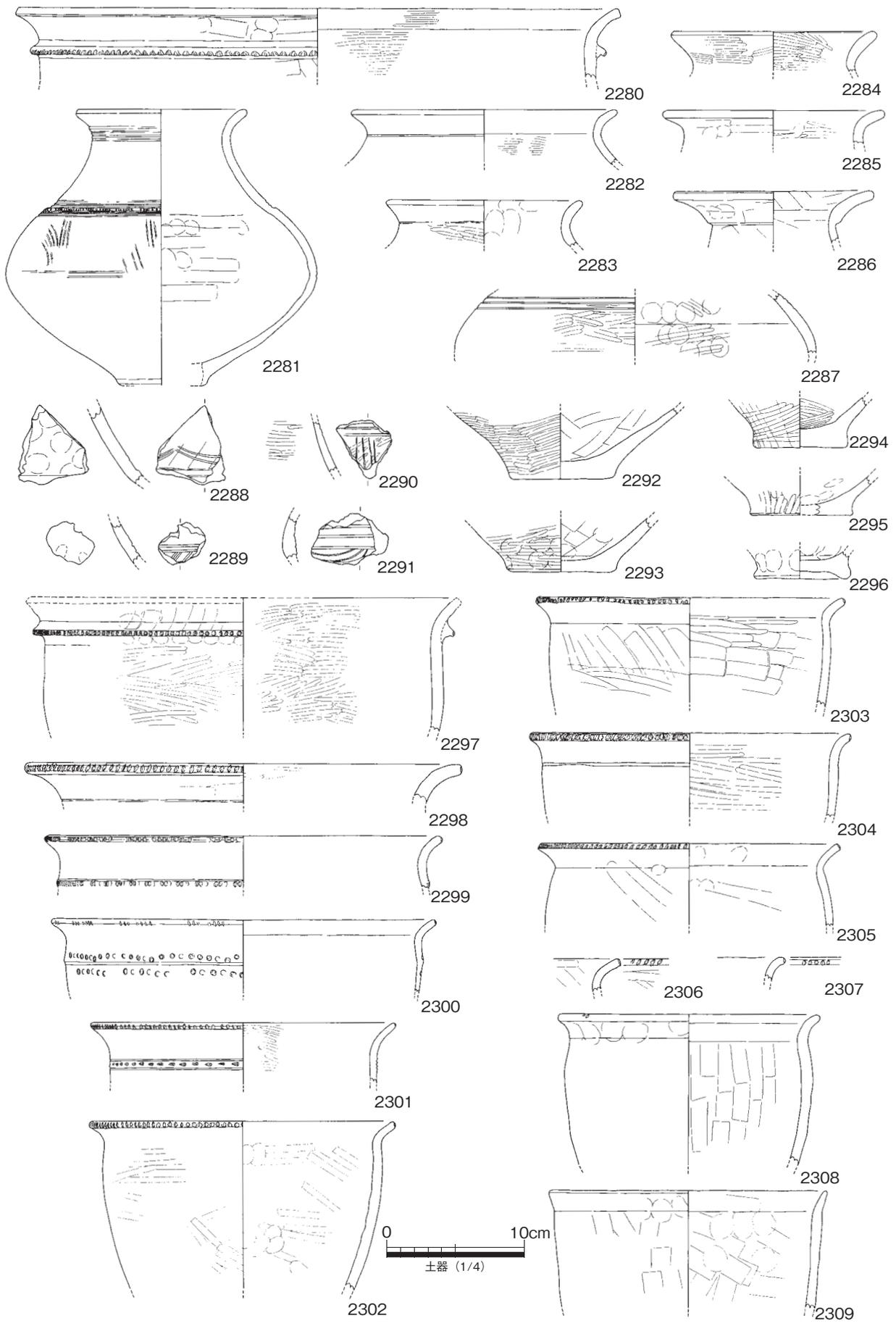


图 310 SR01 出土遺物 (1)

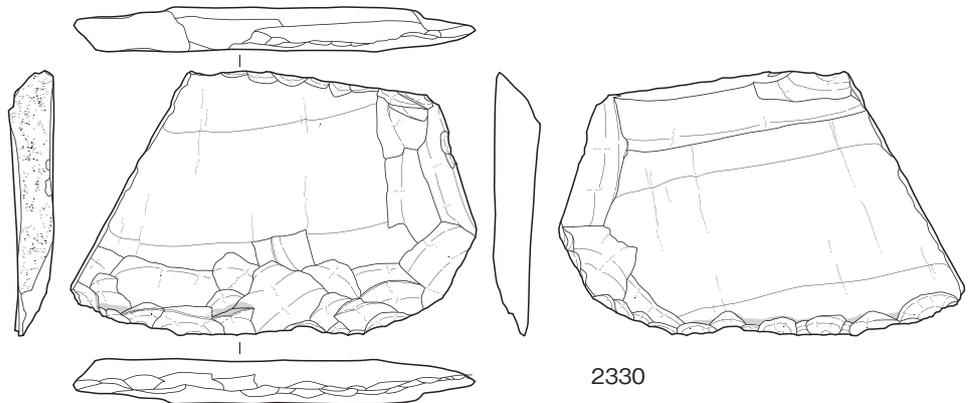
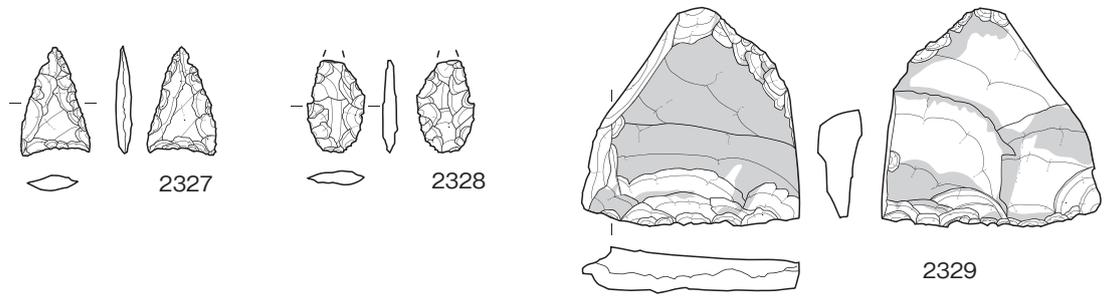
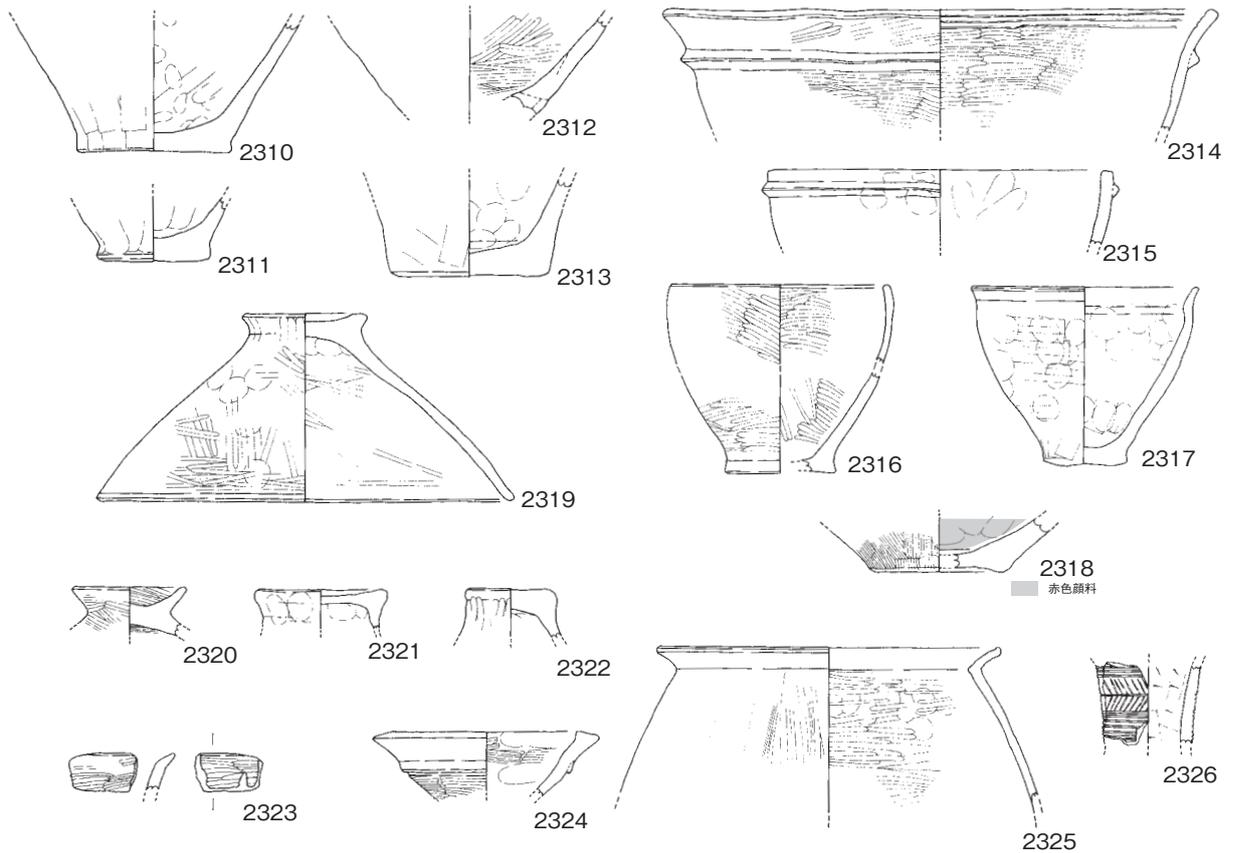


图 311 SR01 出土遺物 (2)

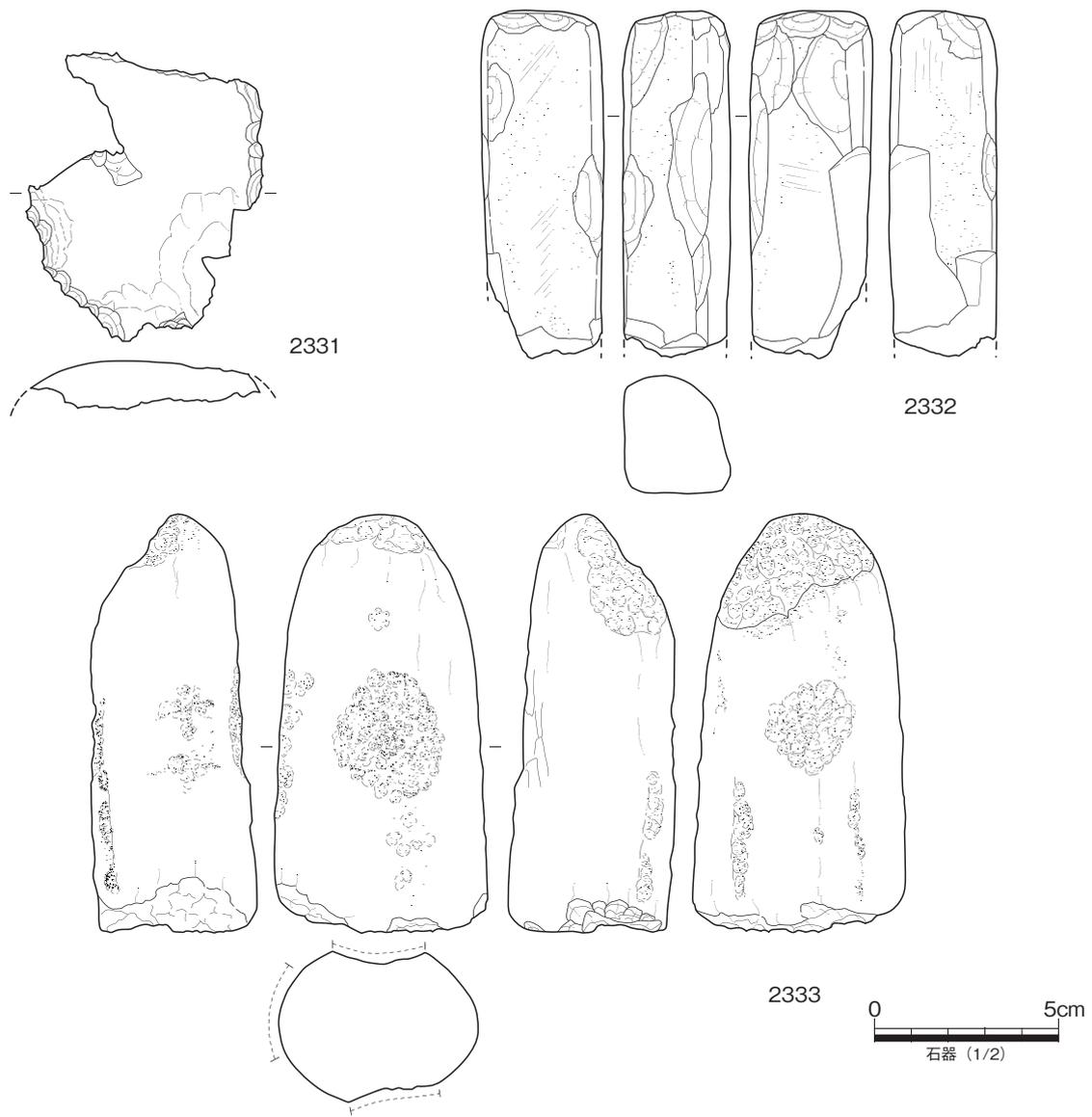


図 312 SR01 出土遺物 (3)

(2) 河川跡 SR02 最下層

B、E区境付近でSR02は強く蛇行する。最下層は主に蛇行部分で検出した堆積層である。SR02下層(弥生時代中期)の黒色シルト層(図3層)をさらに掘り下げると、顕著な流水を示す砂層とシルト層の交互堆積層が出現し、その下部に暗茶色～黒褐色の泥炭質層が現れる。泥炭層も細かく見ると白色の粗砂を介在しつつ、複数の層に分かれる。最下層遺物は多くがその泥炭質層中に含まれる。出土遺物は細かな泥炭層ごとに区分して取り上げた訳ではない。したがって一定の時間幅を有する遺物群である。泥炭層を除去すると、礫層上面の川底に至る。

泥炭層中には多数の自然木が含まれていた。また一部には加工痕を残すものもある。図化したもののうち、2340、2387は下端を尖らせるような加工が観察できる木製品である。杭材と推定した。2388は明確な加工痕は認められないが、表面が炭化した木材である。この他、32点の自然木について樹種同定を行った。詳細は第4章の報告に拠るが、アカガシが53%と最も高率で、ヤマグワ・フジ・トチノキといった周辺植生を反映する樹木が認められた。河川岸付近にヤマグワ等の樹木、微高地にはトチノ

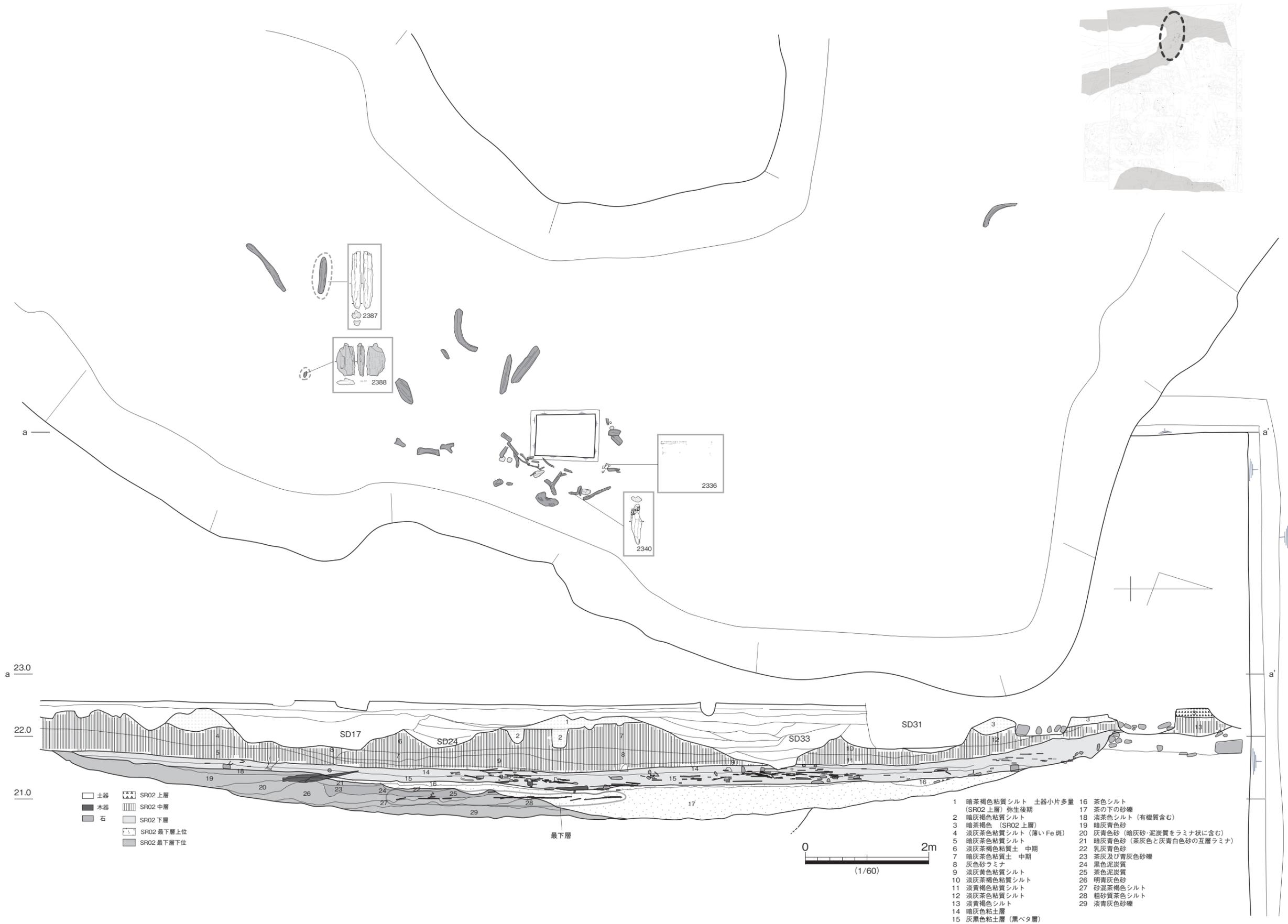


図 313 SR02 最下層下位平・断面 遺物出土状況

キ等の高木が群生したものと推定する。また、種実遺体も多数出土しており、アカガシ・イチイガシ・トチノキの堅果が多い。少量ながら土器片や石器が出土していることから河川岸近辺に居住域が存在した可能性が高く、食用堅果をもつ樹木が多いことと関連している可能性がある。なお、弥生時代中期のSR02下層下位で多出するヒノキやヤナギは最下層では認められない。(森下)

SR02 最下層出土遺物 (図 314)

土器 出土土器には、縄文晩期土器(2334.2336.2337)、弥生前期土器(2335)がある。2334は復元される器形から壺形土器の肩部片である可能性が高い。色調は浅鉢と共通したもので、胎土中に砂粒を多く含む。2336は突帯紋土器の深鉢で、胴部外面にケズリ頸部外面に貝殻条痕が見られ、頸胴部界に貝殻復縁による押捺を行う。突帯紋土器出現期の縄晩期後葉の範疇で捉えられる。2337は浅鉢の胴部片である。2335は弥生前期の壺底部片であり、底部外面にモミ圧痕と繊維状の圧痕が見られる。形態から、弥生前期初頭に比定できる。(信里)

石器 2339はサヌカイト製打製石斧である。長さ9.3cmの小型品で、側縁に自然面を有する横長剥片を素材とする。刃部は着柄部より身幅がやや広い。側縁に顕著な摩滅があり、長軸方向に微細な線状痕が残る。

木器 2340、2387はアカガシ亜属の芯持ち材を利用した木杭である。下端部に縦方向の加工痕を認める。2388はアカガシ亜属の炭化材である。外面に加工痕を残し、全面が炭化する。(森下)

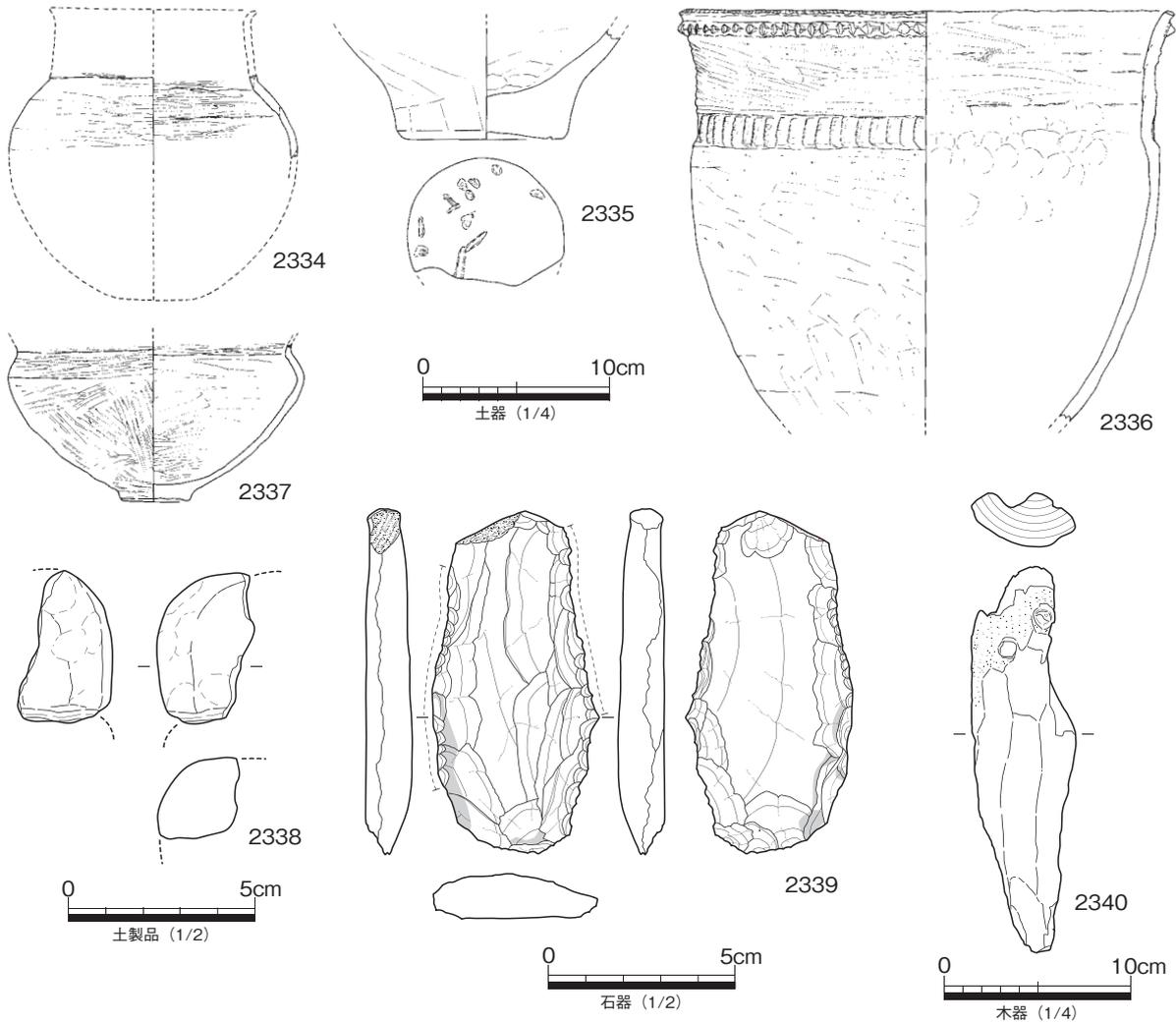


図 314 SR02 最下層下位出土遺物

(3) 河川跡 SR02 下層・中層

SR02 下層・中層は、E 区から B 区へ東方向に走向した後、B・E 区境付近で強く蛇行反転、E 区北端を西方向に走向して X 区北側を通過し、やや北に向きを変えながら調査区外へ抜ける河川跡である。下層は下位・中位・上位の 3 層に細分した。下位層は現場で「黒ベタ」と表現したような湿潤な黒色砂質シルト層、中位層は灰色やグライ化した青灰色を呈す粘質シルト層、上位層は鉄分の沈着が顕著で暗黄褐色～暗灰黄色を呈する粘質シルト層である。出土遺物の中で木製品はすべて下位層、土器・石器は下位層・中位層が多く、上位層は少ない。

中層は厚さ約 0.4 m の灰茶色砂質シルトである。均質な堆積層で、出土遺物は少ないことから、長期間にわたって居住域近辺で堆積した土層とは考え難い。洪水等の自然環境により比較的短時間に埋没した可能性が高い。微高地上の居住遺構は連続して営まれることを考慮すると、一度に洪水堆積を被った可能性もあると考えられる。なお、蛇行部より上流側では中層がよく残るが、蛇行部より下流側では後述する SR02 上層溝と重複するため、中層は河川域の南北の肩部でのみ確認できる。

出土遺物は図に示したように、下位層で多数の木製品・土器・石器が出土した。特に蛇行部の川底が周辺と比べて一段低いため、遺物溜まりを形成している。遺物とともに直径 20～40cm の砂岩重円礫

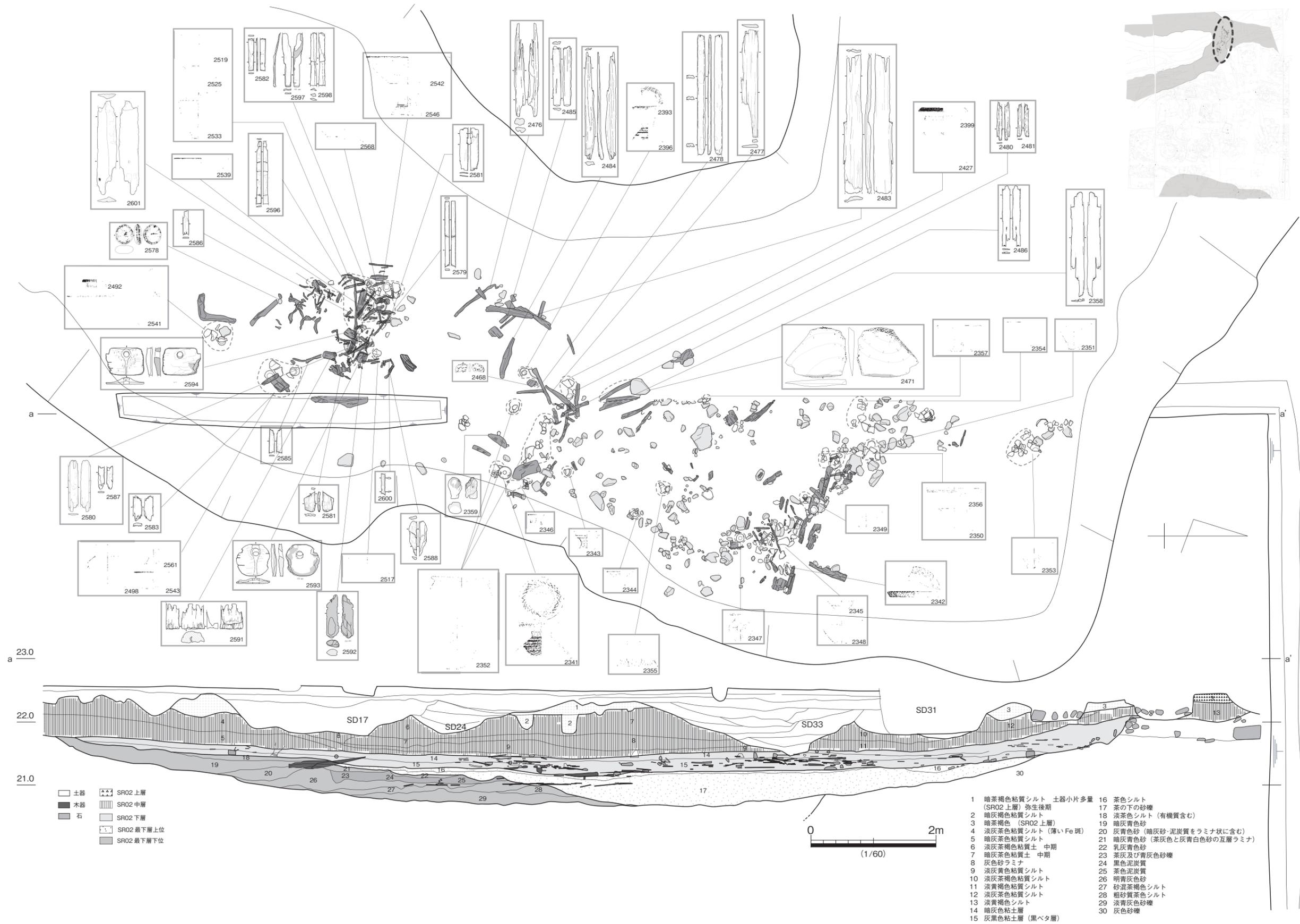


図 315 SR02 下層平・断面 遺物出土状況

が多数出土した。蛇行部の最も東側では直線的に配列される箇所があり、やや鈍角に折れ曲がり北西方向に接続する。川底の最下部の窪みに伴う護岸等の施設があった可能性もある。

遺物番号の2341～2643が下層下位とした黒色の湿潤堆積層で出土した遺物である。下層・中層の遺物のなかで、最も出土量が多い。これらを出土位置や微妙な出土レベル差等をもとに、1～5の単位に細分して報告する。2644～2729は下層中位出土遺物、2730～2832は下層上位出土遺物である。2833～2869は中層で出土した遺物である。(森下)

SR02 下層下位出土遺物 1 (図 316・317)

2341～2359は下層下位出土遺物のうち、主に蛇行部の北側の遺物溜まりで出土位置を記録して取り上げたものを提示した。(森下)

土器 出土土器には、壺(2341～2349)、甕(2350～2353)、ジョッキ形土器(2354.2355)、台付鉢(2356.2357)が見られる。2341、2342は口縁部及び内面に櫛描による斜格子紋と列点紋で加飾する。2343～2345は口縁部下に突帯を施す細頸壺の口縁部である。2346は小形の直口壺である。これらは、弥生中期前半新段階の時間幅で捉えられる。

2350～2353の甕内面には、密なミガキあるいはハケ調整が確認でき、初期調整のケズリを入念に消去する。壺と同じく弥生中期前半新段階の時間幅で捉えられる。

2355のジョッキ形土器の脚部には三角形の透かしが確認できる。2356の台付鉢の口縁部外面には2条の凹線紋と凹線紋上面に刻目を施す。2357の台付鉢は脚部に方形透かしを施し、口縁端部下に1条の凹線紋を施す。これらの遺物は、弥生中期前半新段階から中期後半古段階の時間幅で捉えられる。(信里)

木器 2358はアスナロ(もしくはヒノキ)の板目材を素材とする板状木製品である。左右で厚みが異なり、一方が1.1cm、他方が1.6cmを測る。側面は直線的に面取りを行う。2359はイヌマキの芯持ち材である。枝分箇所で切断され、切断部が炭化する。(森下)

SR02 下層下位出土遺物 2 (図 318・319)

2360～2386は下層下位出土遺物のうち、主に蛇行部の北側の遺物溜まり周辺で出土位置を記録せず、初期に一括して取り上げた土器・石器を提示した。層位的には次の下層下位出土遺物3より上位である。2387、2388は最下層出土の木器で、最下層の項目ですでに報告した。(森下)

土器 出土土器には、壺(2360～2367)、甕(2368～2371.2374.2380)、台付鉢(2373.2377)、鉢(2375)、深鉢(2381)がある。壺は口縁部内面加飾や形態から見て、弥生中期前半新段階のものが多いが、2366の細頸壺は形態や櫛描紋の属性から見て、中期前半中段階に遡る可能性が高い。2371の甕底部は、器壁が厚く上げ底状の形態を採ることから見て、弥生中期前半古段階から中段階の時間幅で捉えられる。2380の甕は、口径の復元に検討の余地があるが、くの字状口縁の甕の最初期のものと考えられる。2372は蓋形土器の可能性が高い。2374の甕や2375の鉢は、突帯貼り付けを行う口縁部から見て、弥生中期前半古段階から中段階の所産と考えられる。2376の水平口縁をもつ高杯は、脚部と杯部の境に断面三角形突帯を3条施すもので、弥生中期後半古段階に位置付けられる。2381は縄文深鉢と考えられ、内外面に植物

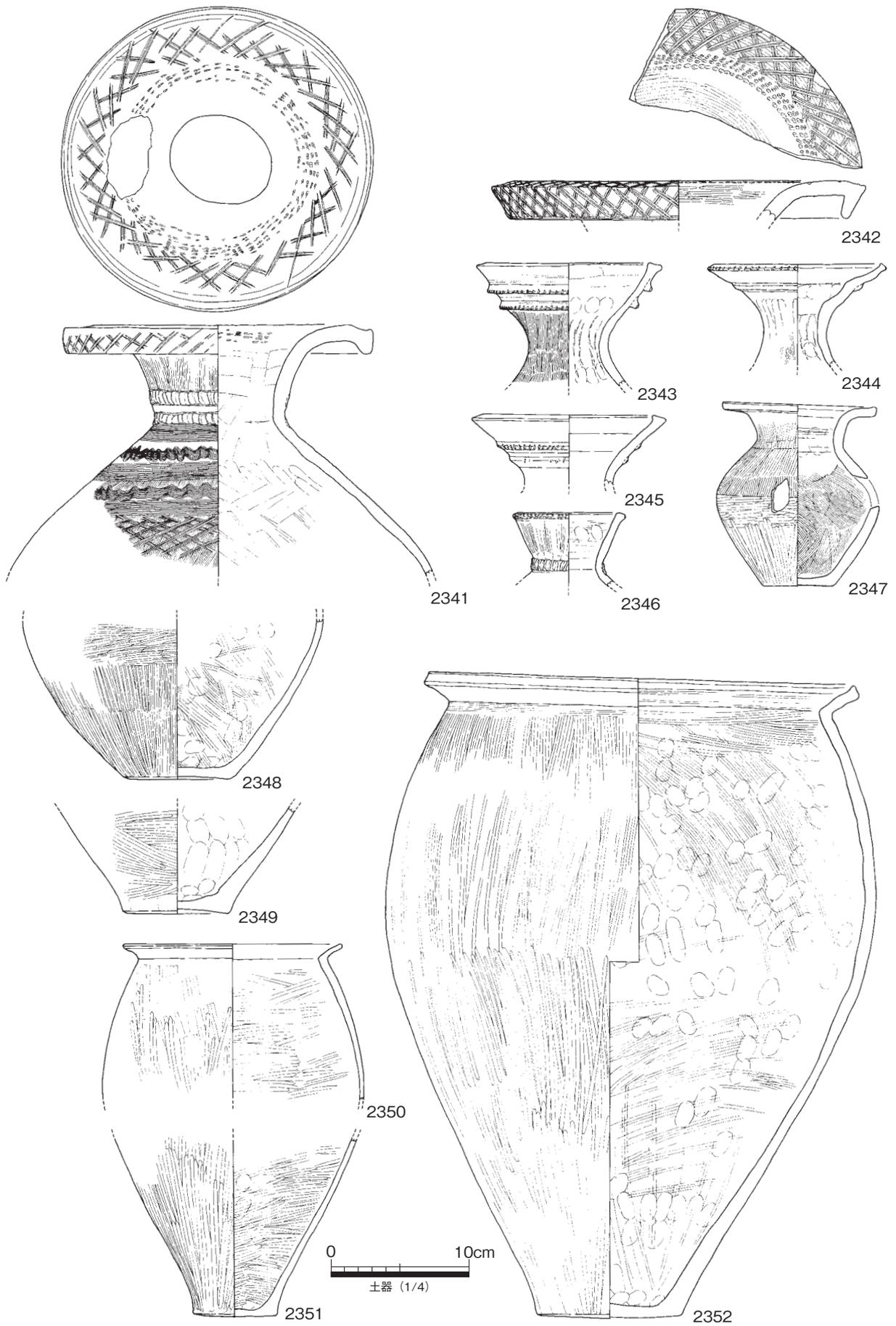


図 316 SR02 最下層番号取り上げ出土遺物 (1)

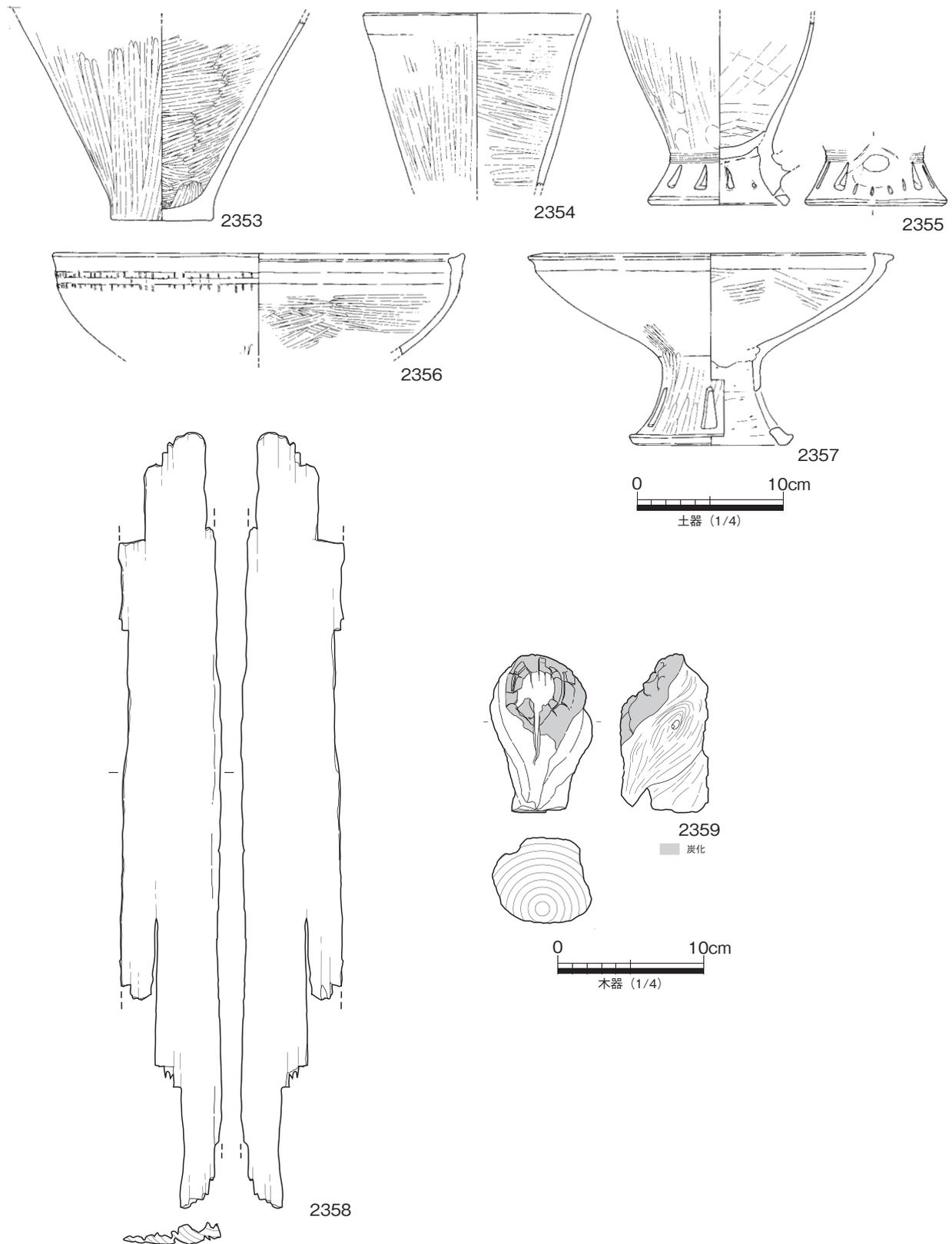


図 317 SR02 最下層番号取り上げ出土遺物 (2)

繊維状の原体による細密条痕調整と外面に細かな LR の縄紋帯を留める。形態から見て、縄文後期に遡る可能性が高い。

一部に縄文期の遺物が認められるが、土器群全体としては弥生中期前半古段階から弥生中期後半古段

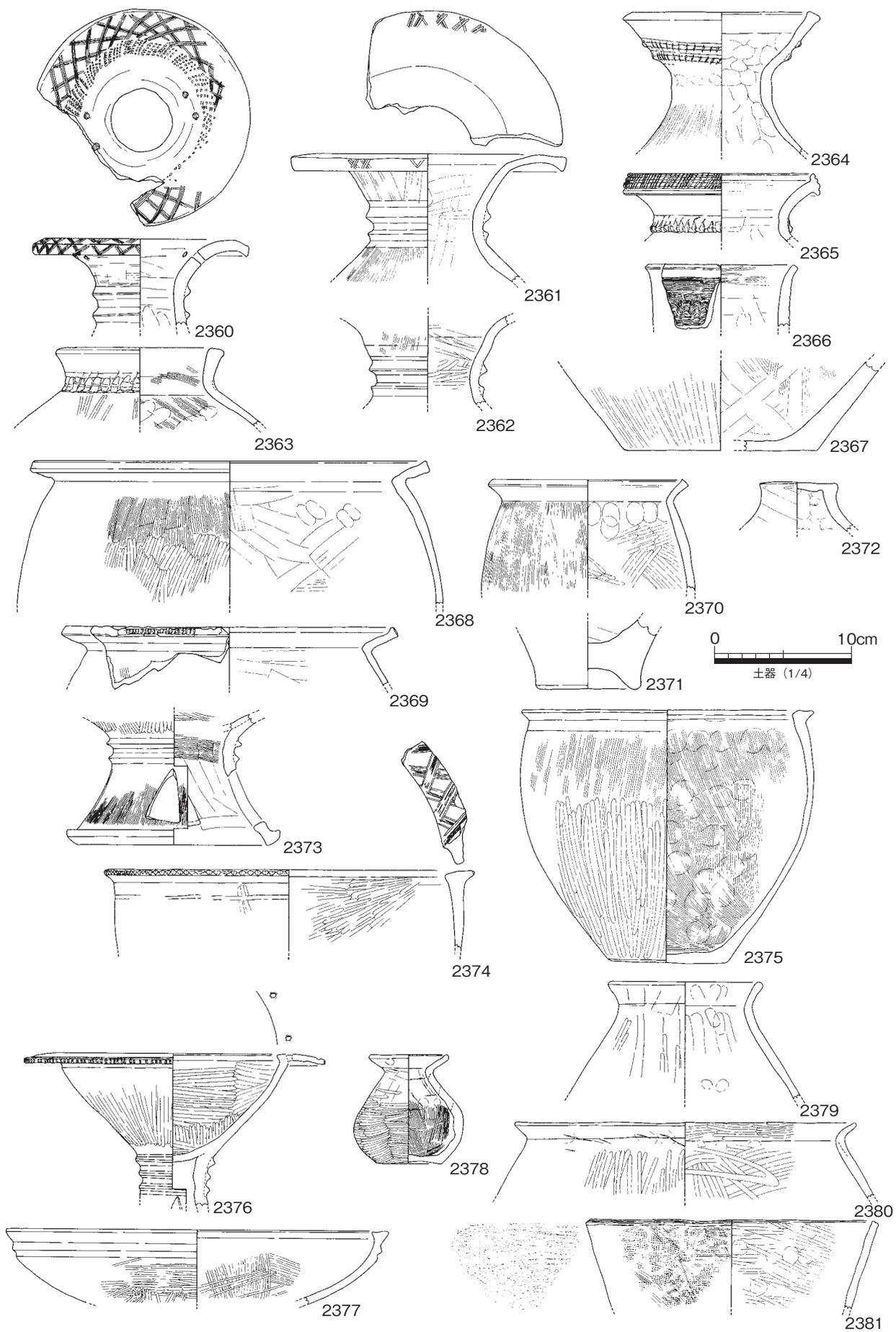


図 318 SR02 最下層一括取り上げ出土遺物 (1)

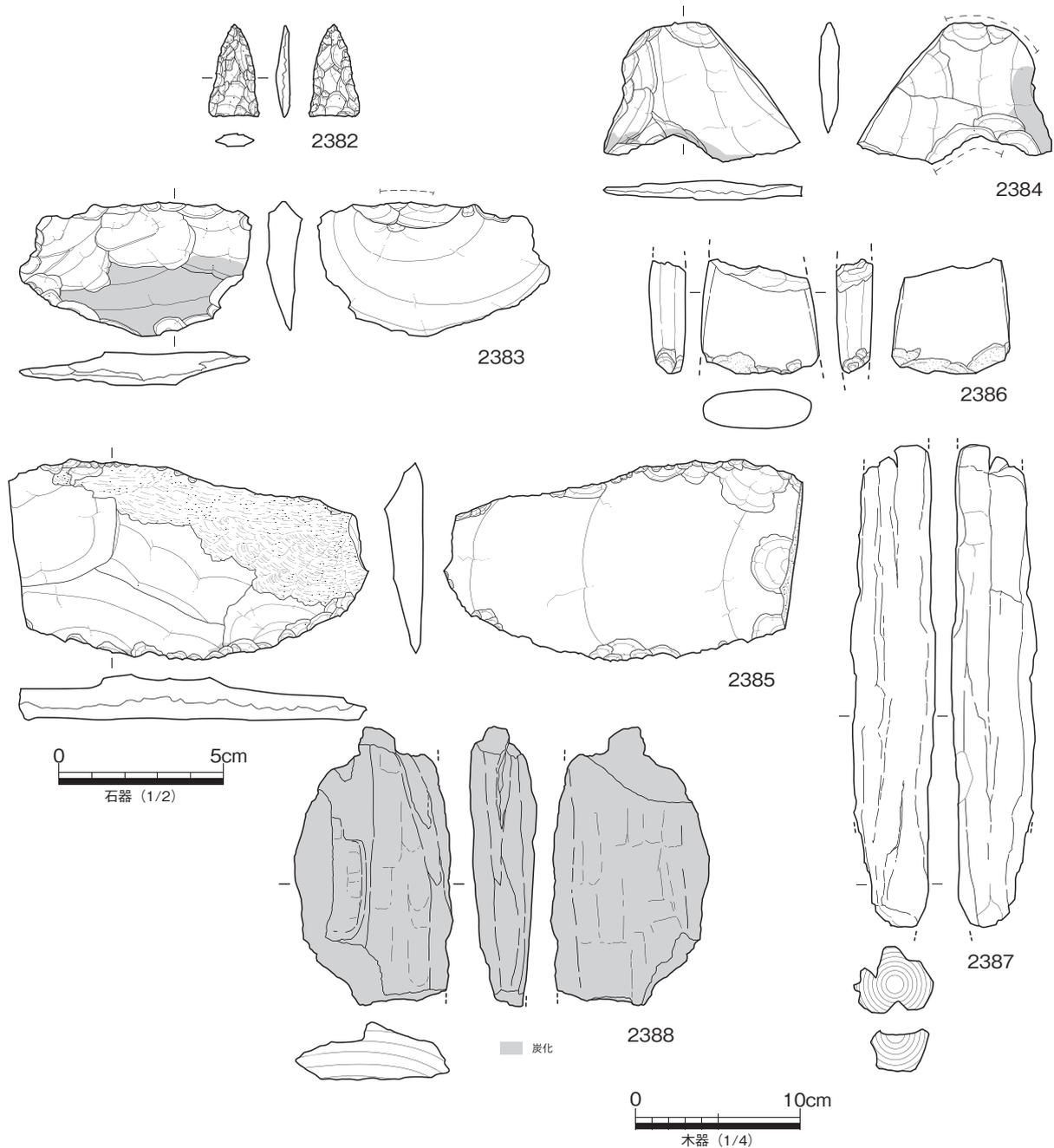


図 319 SR02 最下層一括取り上げ出土遺物 (2)

階の時間幅で捉えられる。(信里)

石器 2382 はサヌカイト製打製石鏃である。基部を直線的に整形する平基式である。2383 は打面調整を施して板状の石核から剥離されたサヌカイト製剥片である。剥離前に行われた打面調整は打点を中心に左右1回ずつ調整剥片を剥離した後、作業面と打面の間に形成された鋭い稜線を敲打により直線的に整形する。剥片の側縁には、剥片剥離後に主要剥離面側から抉り状の加工を施す。2384 はサヌカイト製楔状石核である。上縁を敲打、下縁部に敲打による抉りを施す。2385 はサヌカイト製打製石庖丁である。自然面を残す縦長剥片の側縁に連続的な調整加工を施すものである。もう一方の側縁は敲打による背部調整を行う。2386 は結晶片岩製の小型磨製石斧である。刃部に向かって直線的に開く平面形を呈し、側縁は幅 0.5cm の範囲で面取りを行う。基部・刃部は折損するが、類例から見て両刃石斧の可能

性が高い。(森下)

SR02 下層下位出土遺物 3 (図 320 ~ 325)

2389 ~ 2466 は下層下位出土遺物のうち、主に蛇行部の北側の遺物溜まり周辺で出土位置を遺物を記録せず一括して取り上げた土器・石器を提示した。下層下位出土遺物 1 と同じ層位に相当し、下層下位出土遺物 2 で提示した土器より下位で出土したものである。また、2467 ~ 2486 の石器・木器については出土位置を記録して取り上げた蛇行部下層下位の遺物群である。(森下)

土器 出土土器には、壺(2389 ~ 2424)、甕(2425 ~ 2445)、鉢・台付鉢(2446 ~ 2457)、高杯(2458)、蓋(2461)、回転台形土器(2463)がある。

壺では口縁部内面加飾を行う広口壺(2389 ~ 2395)、厚手の口縁部と頸部に押捺突帯を施す広口壺(2397 ~ 2401)、短頸広口壺(2402.2403)、直口壺(2404 ~ 2406)、受口状の口縁部をもつ細頸壺(2407 ~ 2416)、細頸壺(2417)、無頸壺(2418)が見られる。2392、2393、2395、2397、2399 は口縁部外面の凹線紋の上面に刻目を施すもので、弥生中期後半古段階に特徴的な属性をもつ。2402、2403 の短頸広口壺は、形態から見て弥生中期末葉に下るものと見られる。2407 ~ 2416 の細頸壺は、2412 が最初期、2415、2416 が最終形態と考えられ、弥生中期前半新段階から中期後半古段階の時間幅で捉えられる。

甕は、くの字状口縁をもつ弥生中期前半新段階の 2425 ~ 2429、大形品で頸部に押捺突帯を施す 2430 ~ 2433、2436、口縁端部を拡張し凹線紋をもつ 2435、2437 ~ 2439 に大きく分けられる。2435、2436 は口縁部外面の凹線紋の上面に刻目を施し、壺と共通する属性をもつ。

2436 の鉢は異形品であり、本遺跡及びその周辺に類例が乏しい。2449 は脚台付のジョッキ形土器の破片で、内面に円盤充填を留める。2452、2455 ~ 2457 の台付鉢は、凹線紋上面に刻目を施す弥生中期後半古段階の属性をもつ。2446 の甕は、下膨れの胴部や水平に引き出される口縁部形態から筑前地方の須玖Ⅱ式段階に見られるものに類似するが、器高に対する口径の比率や口縁端部の形態に差異が認められるため、模倣土器と考える。

2459 は穿孔が見られることから無頸壺の底部片と見られる。

これらの出土土器は、弥生中期前半新段階から中期後半新段階新相の時間幅で捉えられる。(信里)

石器 2467 はサヌカイト製打製石鏃である。製作中に下端部を折損した未完成品である。素材面に打製石庖丁に通有の摩滅が残る。2468 は結晶片岩剥片である。薄い緑色を呈し、結晶化が顕著な石材である。側縁は敲打を施す。2469 は蛇紋岩製の磨製石斧である。左右で不均等な厚みの素材を使用した両刃の伐採斧である。一方の側面は刃部付近で面取り研磨を施す。2470 はサヌカイト製打製石庖丁の折損品である。刃部付近に強い摩滅を残す。2471 はサヌカイト製板状大型剥片の刃部に顕著な摩滅痕と微細な剥離痕を残す大型農具である。通常の打製石庖丁とは形態が大きく異なるが、刃部に打製石庖丁と共通する摩滅が見られることから、イネ科植物に対して鋭い刃が作用するという機能を果たしたものと推定される。重量が 2838.16g と手で保持する実用域から逸脱しており、床置きによる脱穀等に使用した可能性も考えられる。同サイズ大型板状素材は県西部で出土することは稀で、県東部の鴨部川田遺跡における弥生時代前期の資料が知られる程度である。中期段階の板状素材資料は県内では綾川町陶畑遺跡で出土しているが、一回りサイズが小さいものであり、同サイズの類例は兵庫県玉津田中遺跡等県外にある。

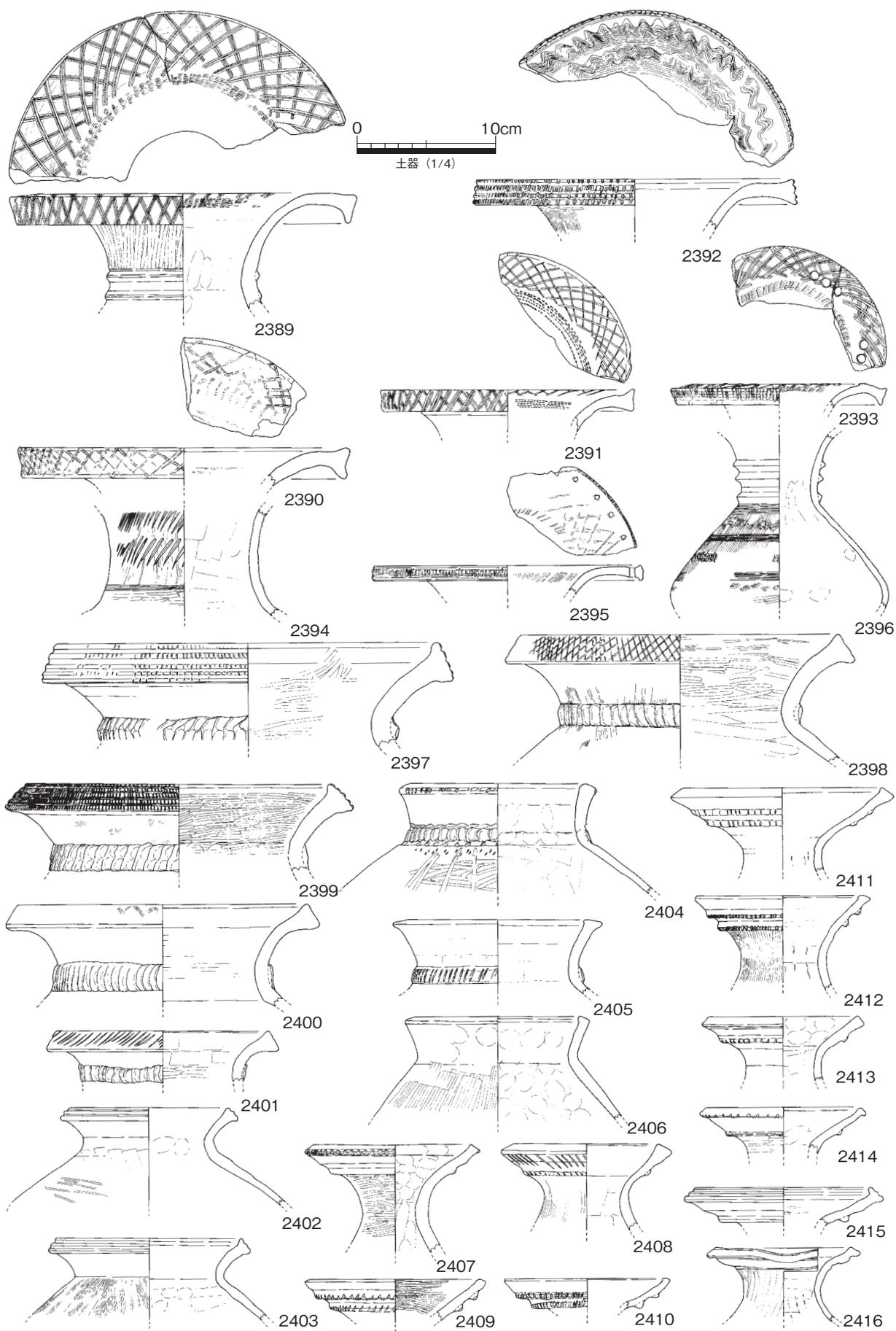


图 320 SR02 下層下位出土遺物 (1)

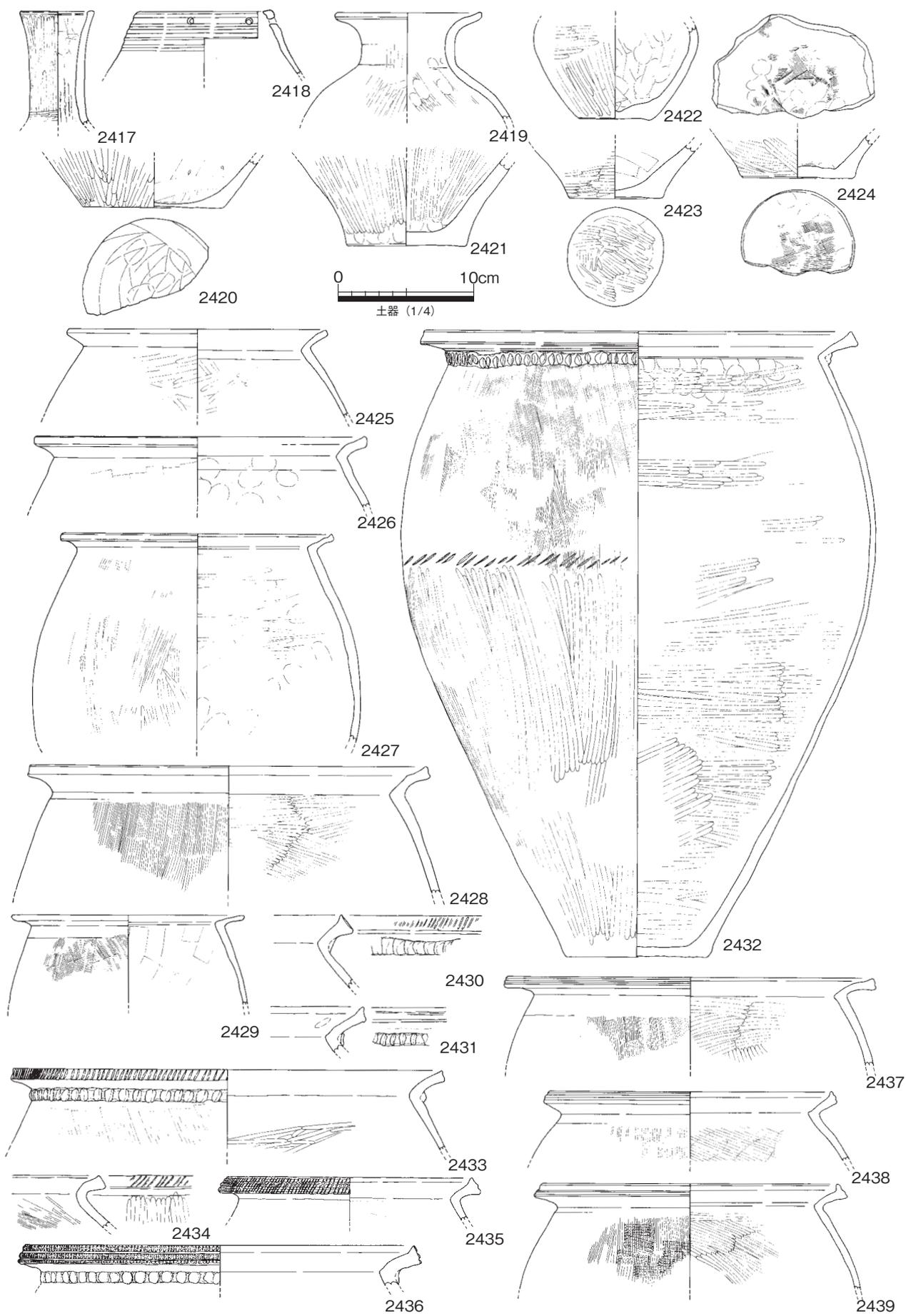


图 321 SR02 下層下位出土遺物 (2)

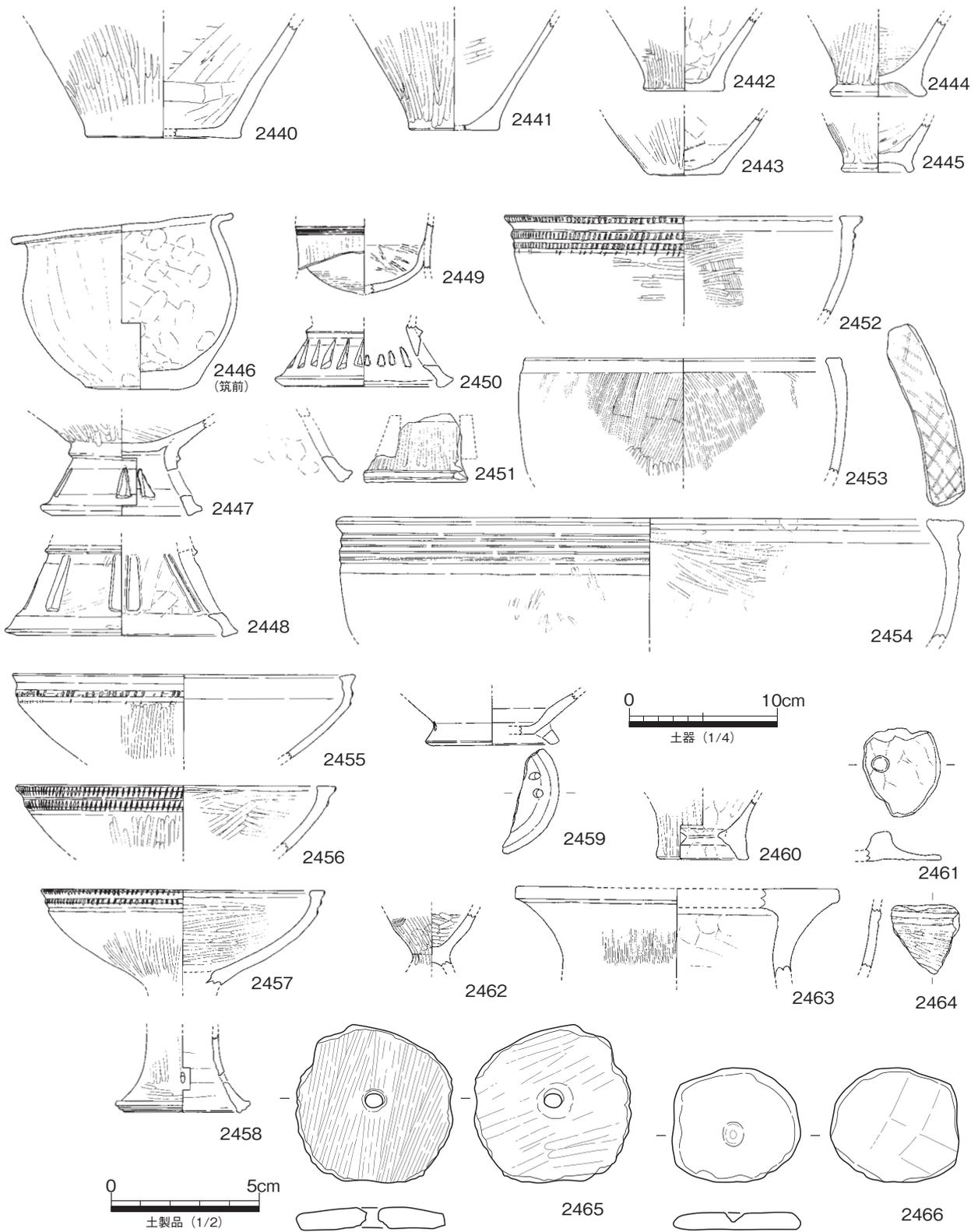


图 322 SR02 下層下位出土遺物 (3)

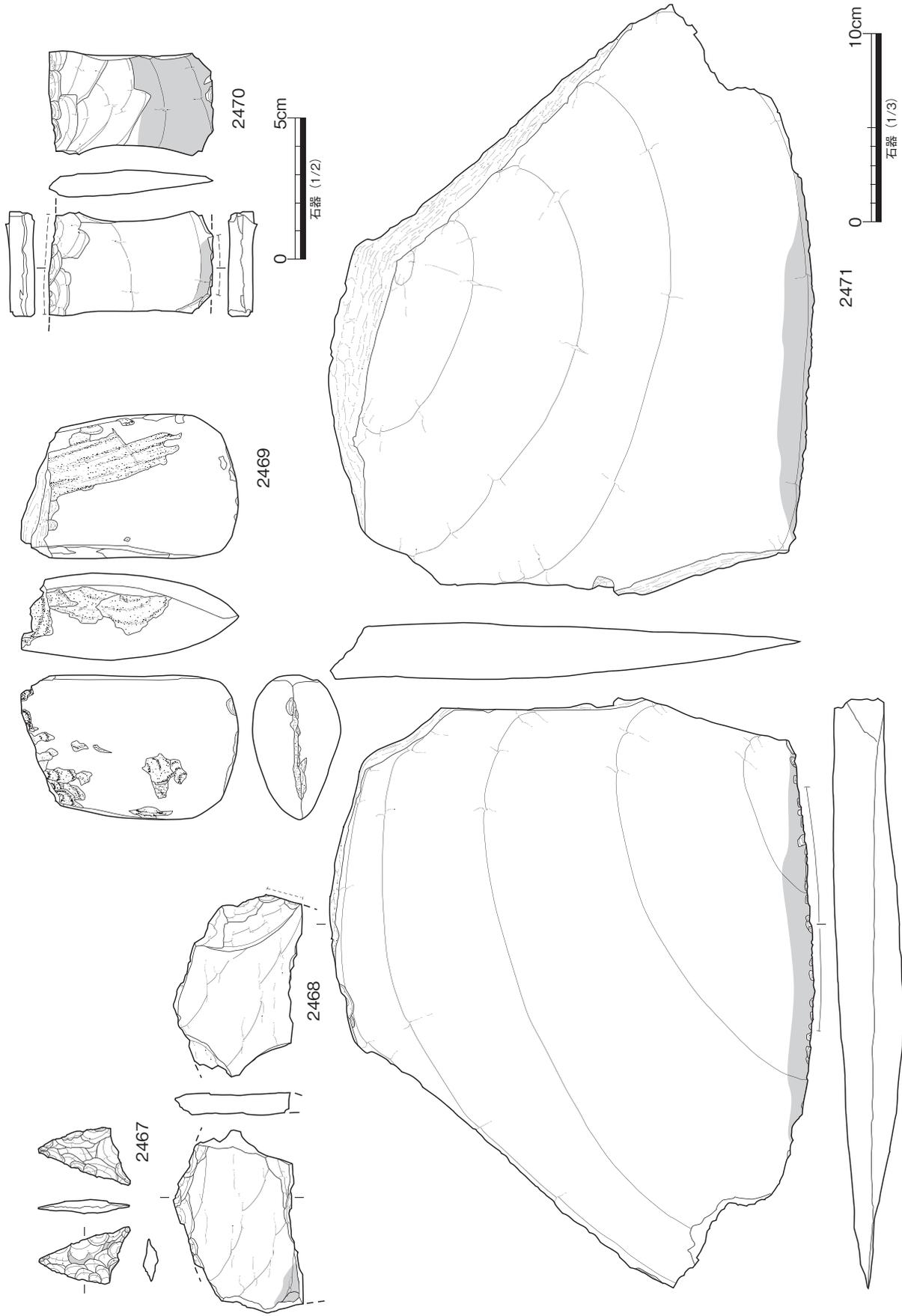


图 323 SR02 下層下位出土遺物 (4)

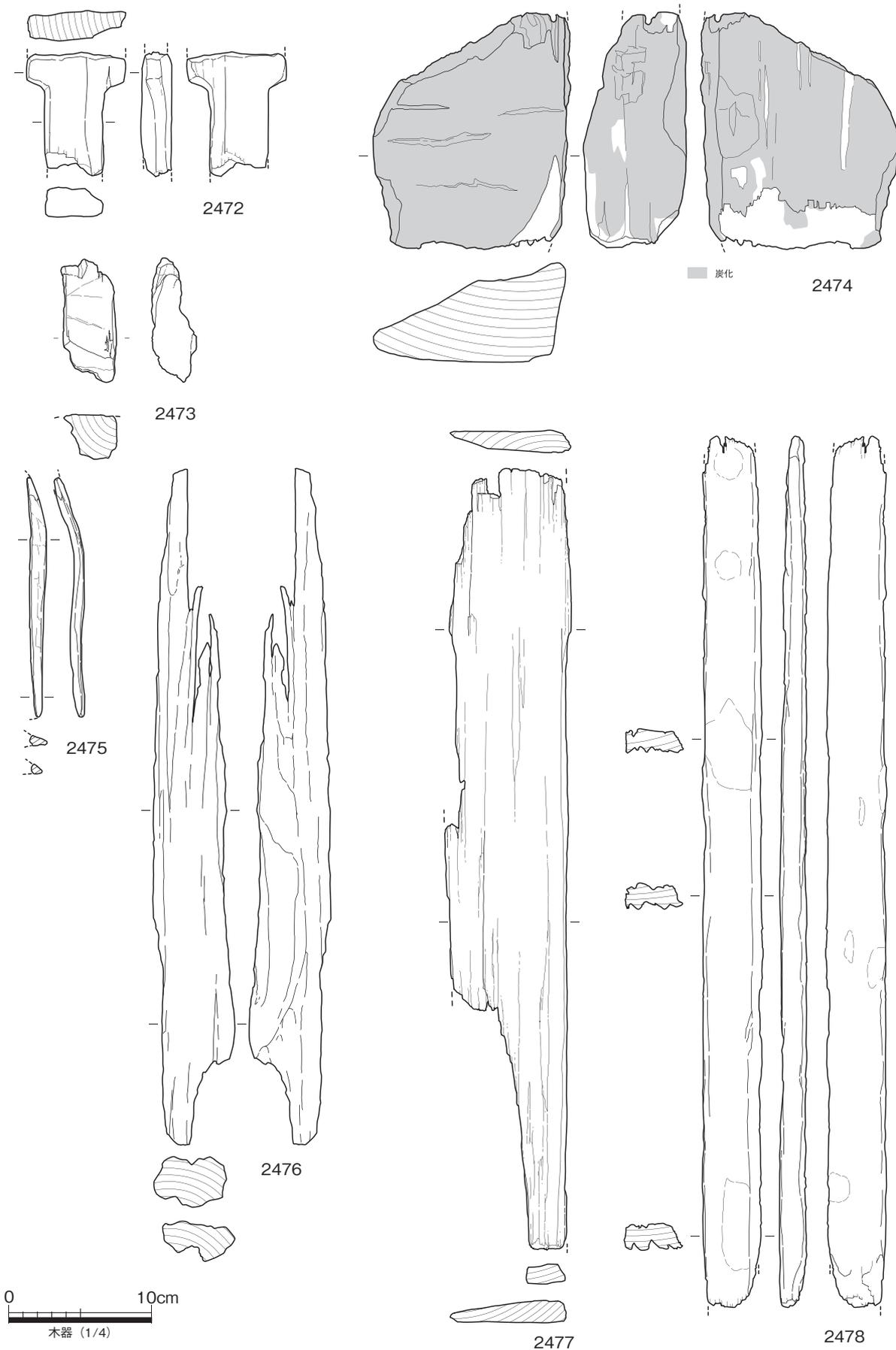


图 324 SR02 下層下位出土遺物 (5)

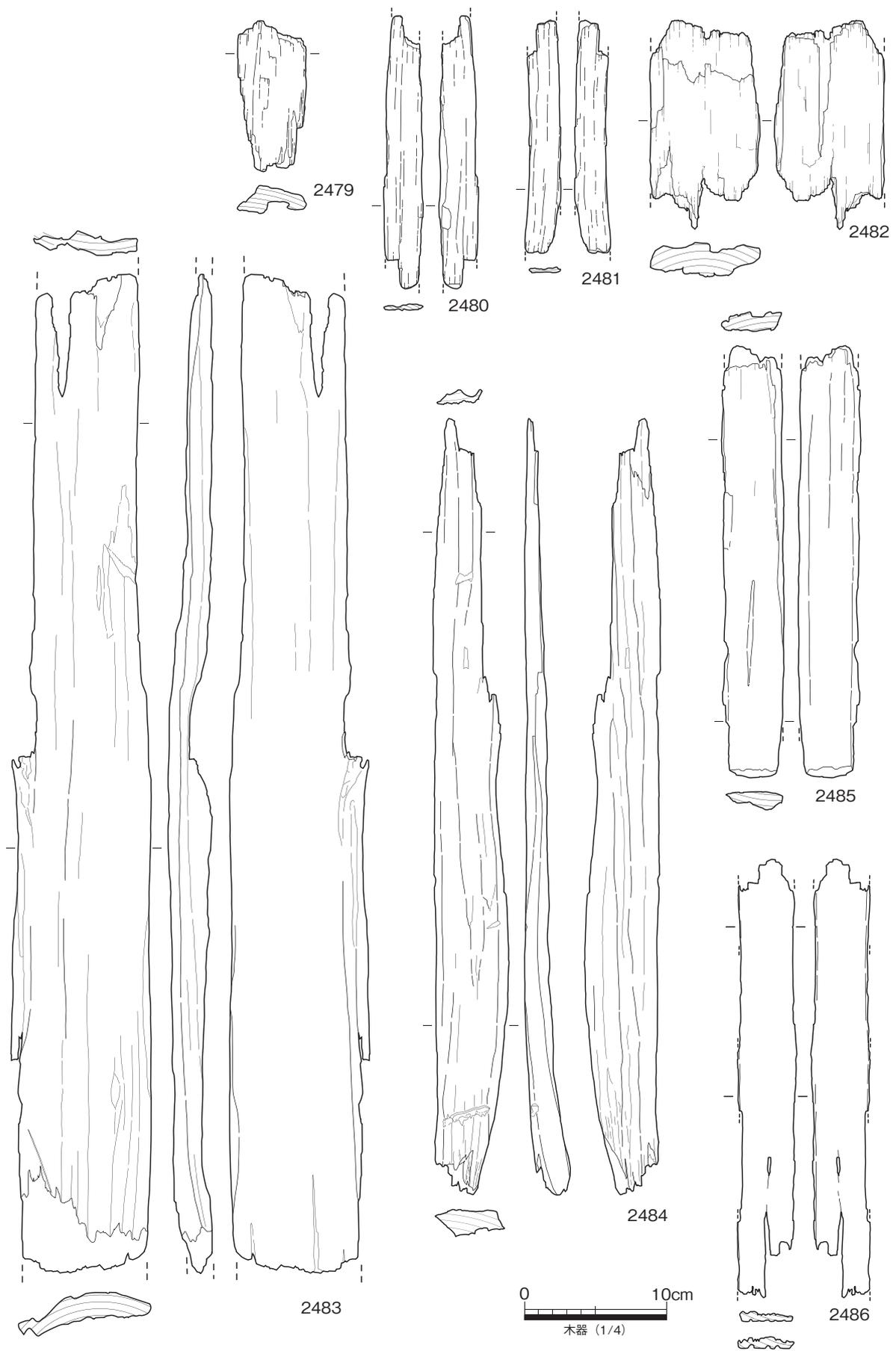


图 325 SR02 下層下位出土遺物 (6)

木器 2472～2474、2477～2486はヒノキ（アスナロ）を素材とする板状木製品である。幅8～10cmの板材、幅4～5cmの板材、幅3cm以下の棒状の板材がある。その他2472は武器型の関部形状を想起させる平面形を呈するが、削り込み加工か自然の折損か表面が劣化しており、明確に捉えることができない。2474は厚みのある面取り加工材の表面が炭化したものである。2475、2476はマツ属の柁目材である。（森下）

SR02 下層下位出土遺物 4（図 326～334）

2487～2578は下層下位出土遺物のうち、蛇行部より上流で出土位置を記録せず、一括して取り上げた土器・石器を提示した。下層下位出土遺物1と同じ層位に相当する。2579～2608の木器については出土位置を記録して取り上げた蛇行部下層下位の遺物群である。（森下）

土器 出土土器には、壺(2487～2515)、甕(2516～2538)、鉢(2539～2542.2550)、ジョッキ形土器(2546～2549.2552～2553)、台付鉢(2545.2554～2560.2561)、高杯(2559)、蓋(2562～2565)がある。

壺は口縁部内面を中心に櫛描紋で加飾する広口壺(2487.2490.2493～2495)、頸部に押捺突帯を施す広口壺(2492.2496.2497)、直口壺(2498～2503)、受口状の口縁部をもつ細頸壺(2504～2511)、無頸壺(2512.2513)に分けられる。いずれも、弥生中期前半新段階から弥生中期後半古段階の時間幅に納まる。

甕は、くの字状口縁をもつ(2516～2525.2527)と口縁部の拡張と凹線紋を施す(2526.2528～2532)がある。くの字状口縁をもつ甕は2519や2525を典型例として口縁端部を跳ね上げるものが多く凹線紋出現直前の様相を呈している。また、内面ケズリをミガキやハケ調整によって丁寧に消去するものが多い。2526、2528、2529は凹線紋上面に刻目を施すもので、弥生中期後半古段階に位置付けられる。2531、2532、2534は弥生中期後半中段階以降に下るものと見られる。

2553はジョッキ形土器の把手である。2551はジョッキ形土器あるいは壺の胴部片と見られ、櫛描直線紋の上下に扇形紋を施すもので、遺跡内や周辺地域で類例を見ないものである。2559は形態や内面ケズリ、外面の凹線紋の加飾から見て高杯の脚部と考えられる。

2563は甕蓋、2564、2565は無頸壺等の壺蓋の可能性が高い。

2567、2568は回転台形土器であり、上端面を中心にミガキ締め、口縁端部に凹線紋は見られない。2569は壺口縁部片で口頸部界に2条沈線を施すもので、弥生前期前半期の所産と見られる。2570は縄文鉢で、口縁部の内面の沈線の状況から波状口縁となる可能性が高い。

2571は楕円形を呈する椀形の土製品である。内外面ともにナデ調整を基調とし、際立った差異は見られない。2572は円盤状の土製品である。2個の穿孔が見られ、蓋の可能性も考えられるが、成形が粗雑なため土製品とした。

以上、これらの土器群は、弥生中期前半新段階～中期後半古段階のものが主体を占め、一部に弥生中期後半中段階まで下る。（信里）

石器 2573は平基式のサヌカイト製打製石鏃である。2574～2576はサヌカイト製打製石庖丁である。いずれも素材面及び刃部縁辺に軽度の摩滅が残る。2576は背面に複数の先行剥離面が残る薄い横長剥片を素材とする。石核幅一杯を使い連続して剥離した横長剥片とは異なる。2577、2578は砂岩製の磨石・

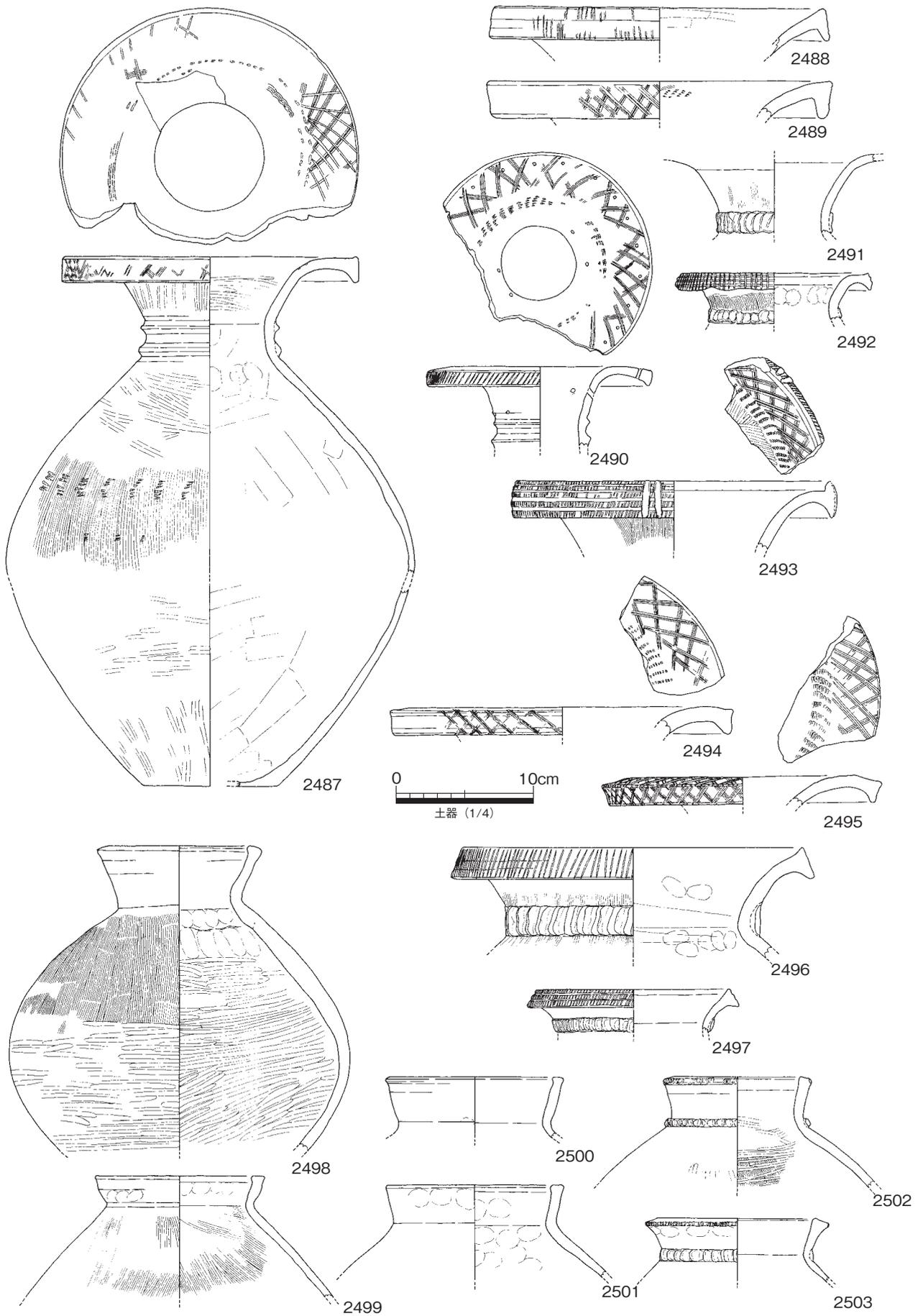


图 326 SR02 下層南半出土遺物 (1)

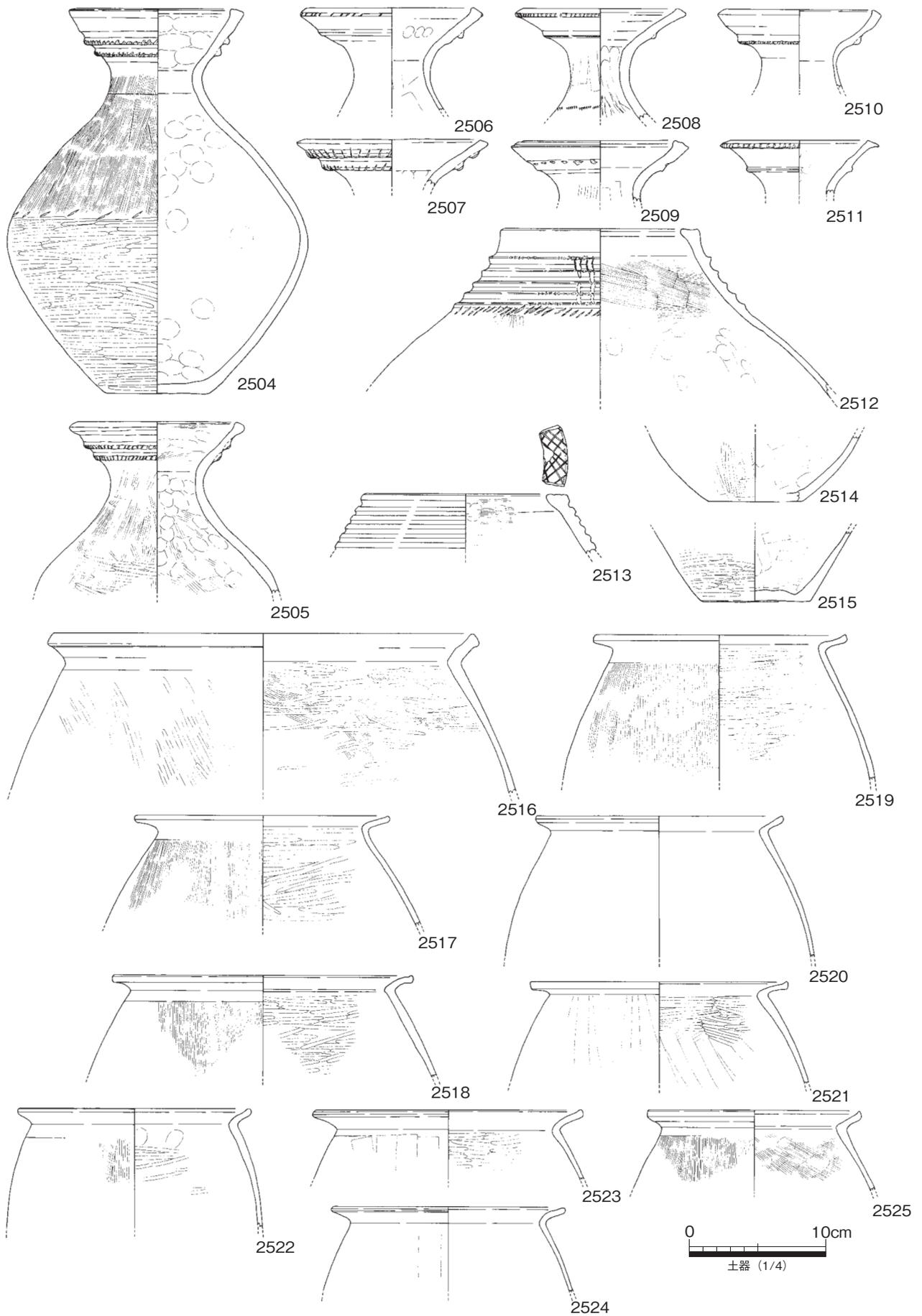


图 327 SR02 下層南半出土遺物 (2)

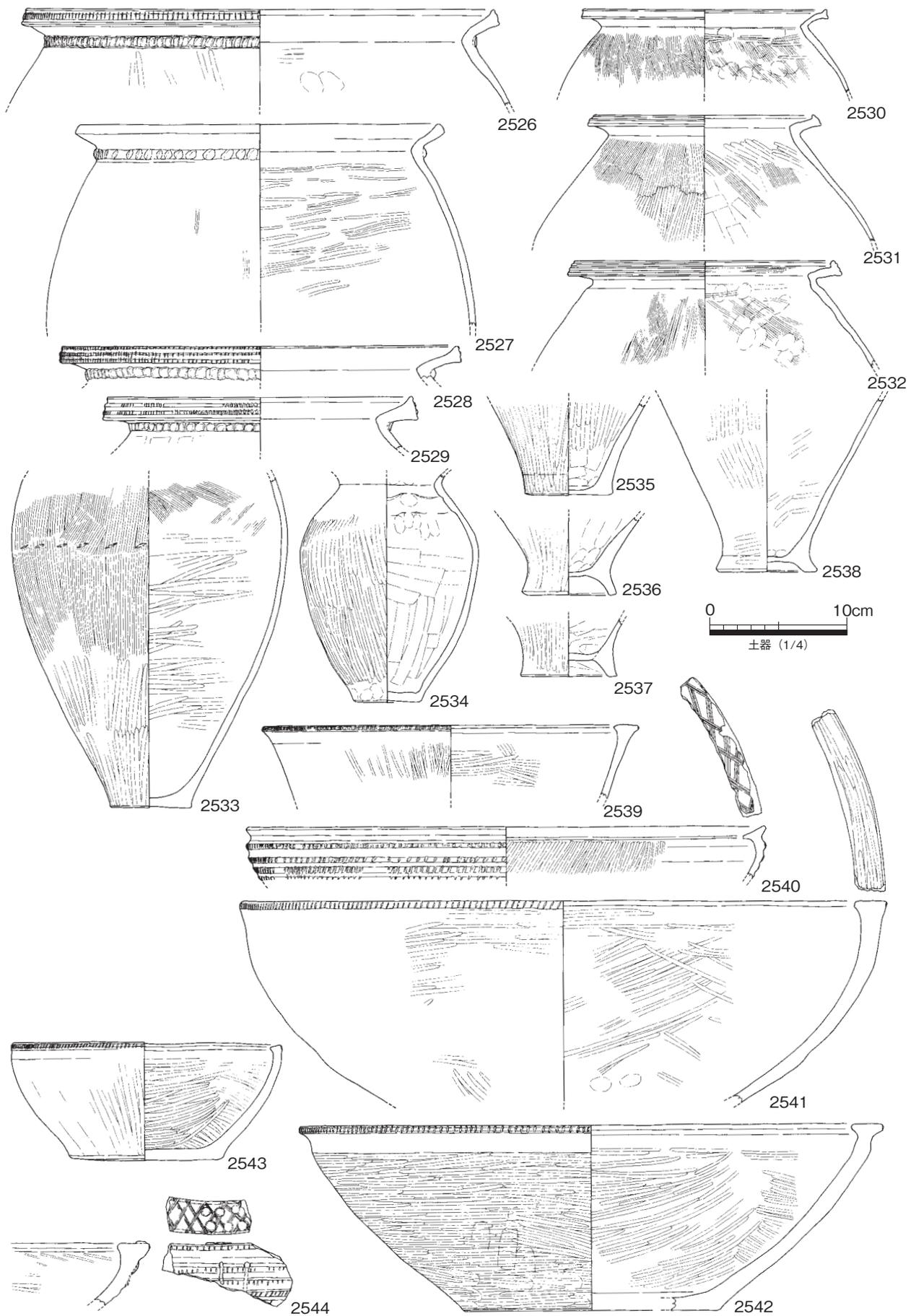


图 328 SR02 下層南半出土遺物 (3)

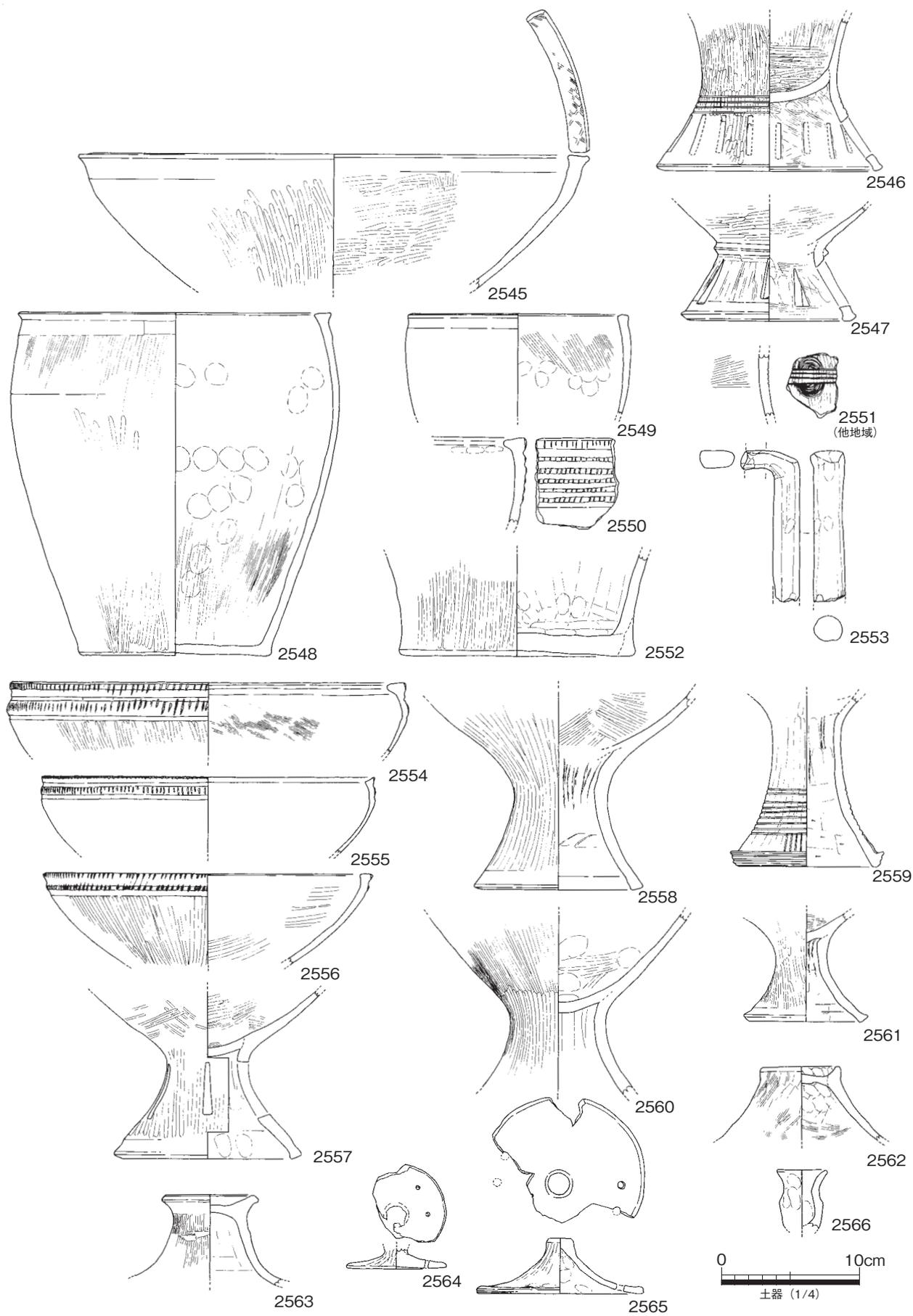


图 329 SR02 下層南半出土遺物 (4)

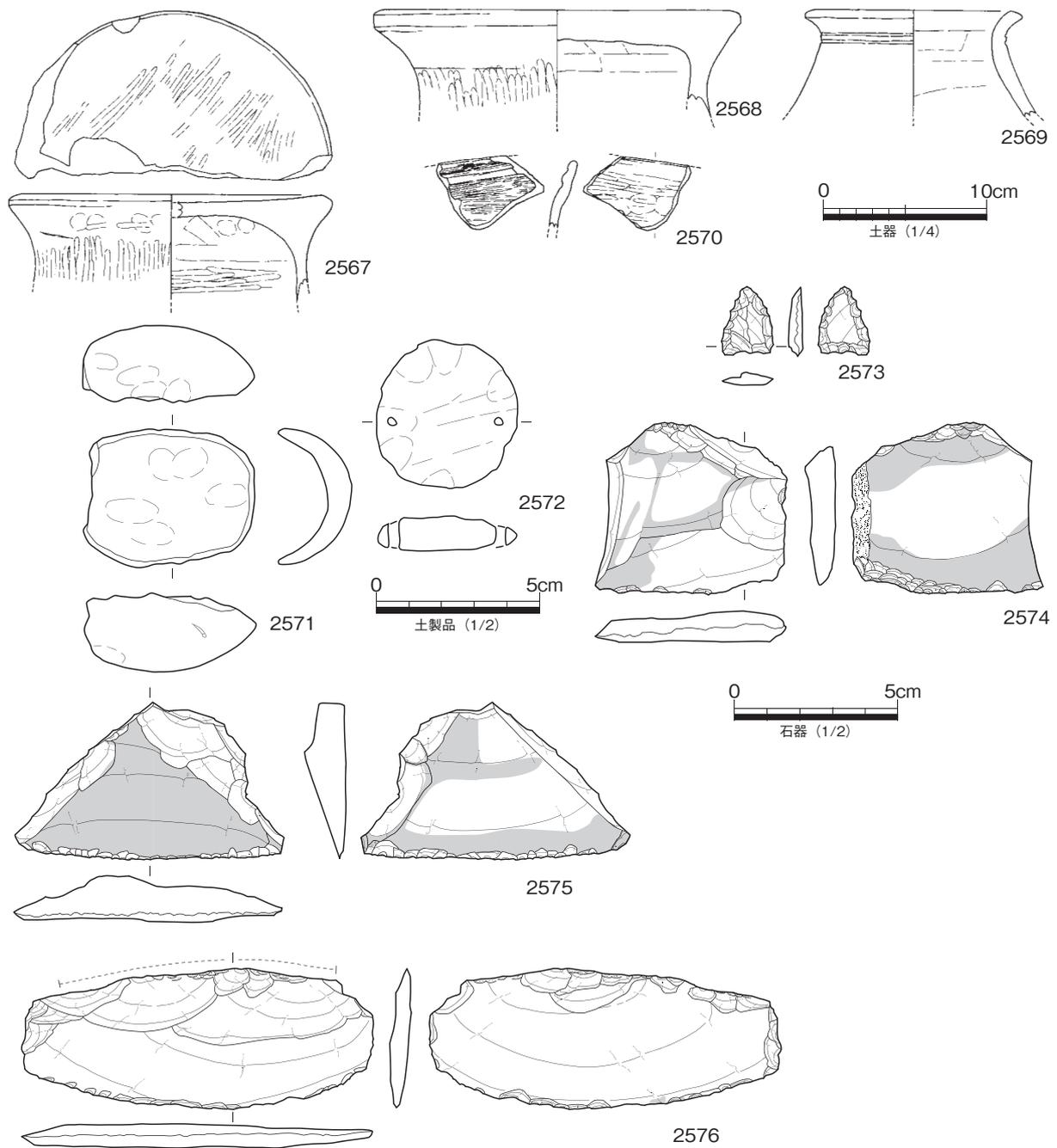


図 330 SR02 下層南半出土遺物 (5)

叩石である。2578 は腹面中央に線状敲打痕を残す。

木器 2579～2587、2601～2608 はアスナロ（ヒノキ）を素材とする板状木製品である。幅 3cm 前後で左右側面を丁寧に面取りするものと、幅 5cm 前後で側面の仕上げがやや粗雑なもの他、幅 4～7cm で縦方向に一定間隔（約 2.2cm）に細かな穿孔を施すもの（2581.2602.2604）がある。穿孔を施す 3 個体は表面の質感や厚みが共通し、側縁は縦方向に割れた可能性があることから、元来同一個体であった可能性もある。

2588～2592 はクスノキを素材とする木製品である。2588 は器種不明の加工材、2589、2590 は容器類の一部と考えられる。2591、2592 は芯持ち丸太材で柱材等に使用された可能性があると考えられる。

2593、2594 はいずれもアカガシ亜属を素材とする鋏である。着柄孔が貫通した完成品で、周縁は炭

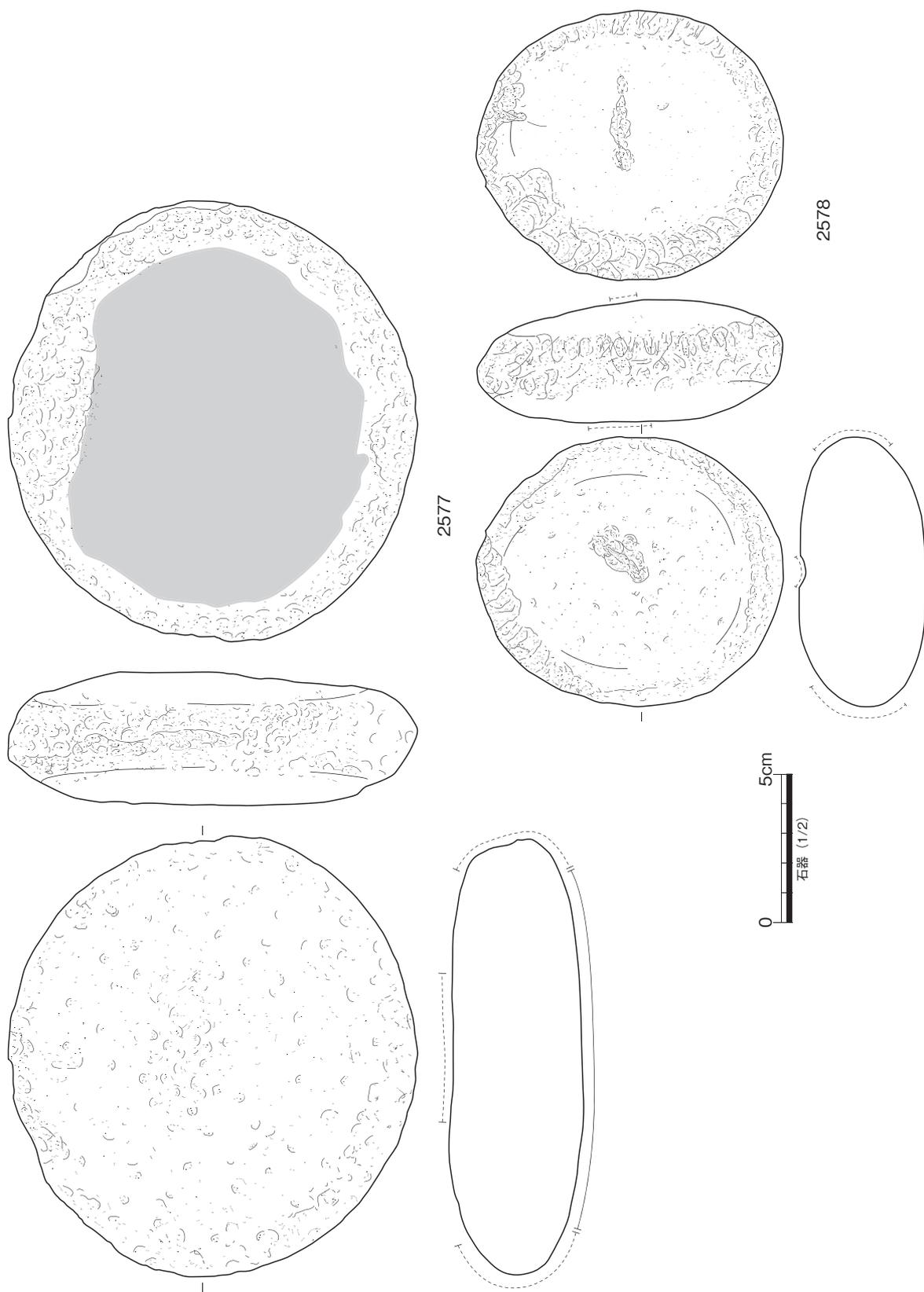


図 331 SR02 下層南半出土遺物 (6)

化する。正面からみて木目が横方向に入ることから、打ち鋤ではなく、土ならし等に使用する農耕具と考える。高松市多肥松林遺跡の同時期資料に類例がある。2595～2597はアカガシ亜属を素材とする板状木製品である。同様に2598～2600はそれぞれシイ属・マタビ属・アオキを素材とする板状木製品である。2599は曲棒状を呈す。(森下)

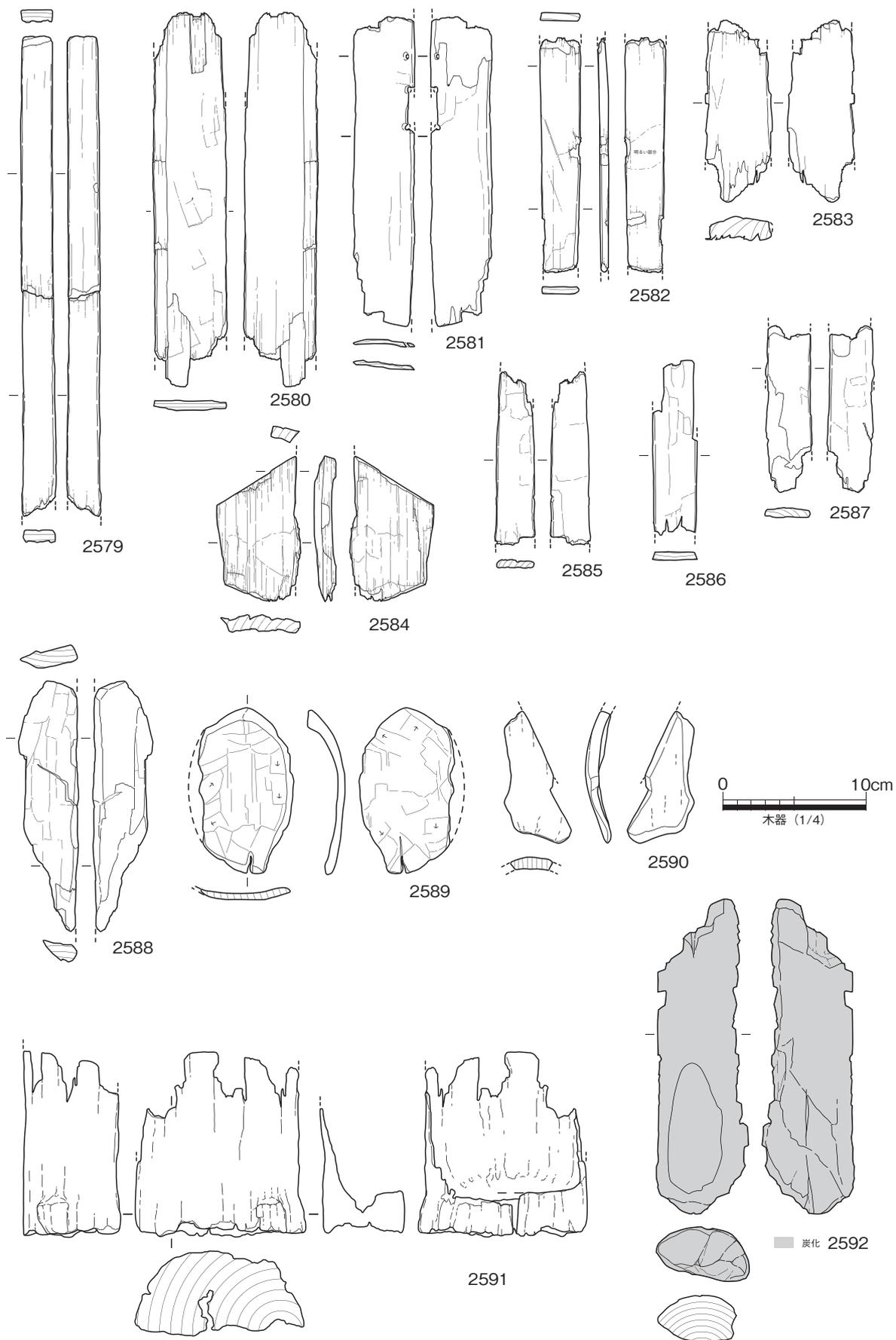


图 332 SR02 下層南半出土遺物 (7)

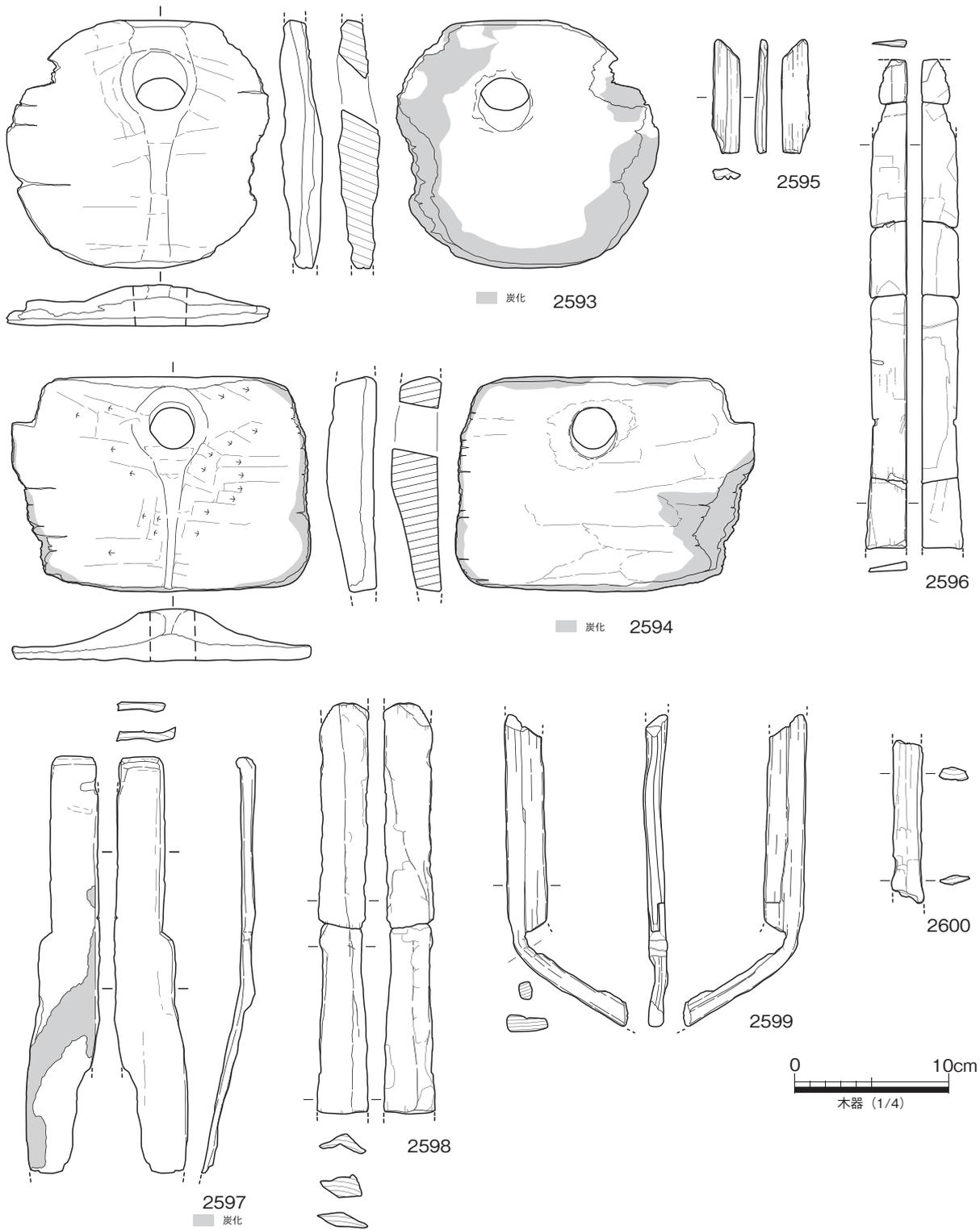


図 333 SR02 下層南半出土遺物 (8)

2597 は曲柄平鋏の身部片であり、身部中軸線で半折しており、一側縁に柄装着のために刳方が残存する。樹種はアカガシ亜族である。(信里)

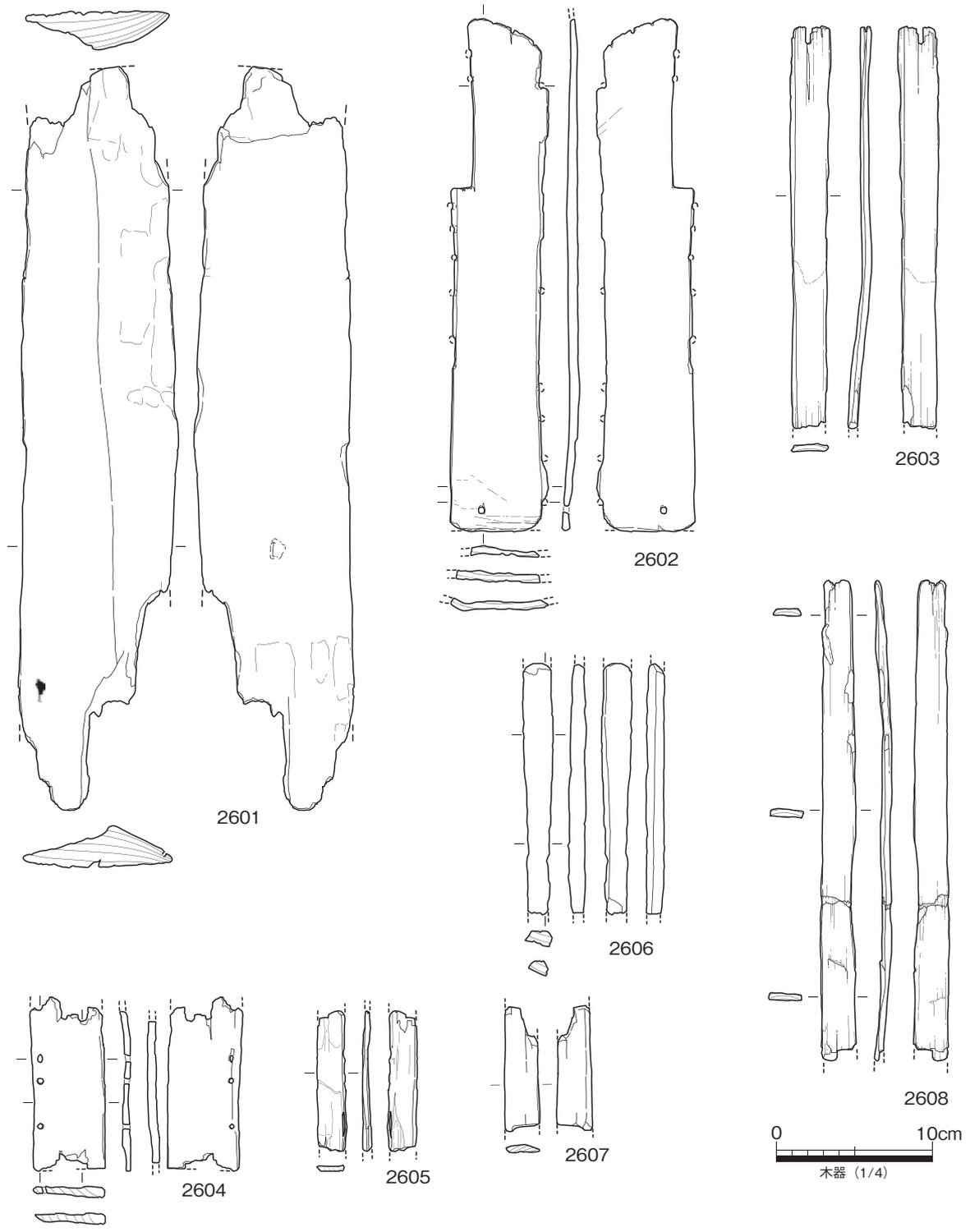


図 334 SR02 下層南半出土遺物 (9)

SR02 下層下位出土遺物 5 (図 335・336)

2609～2643 は下層下位出土遺物のうち、蛇行部より下流の西側で出土した土器・石器である。黒色を呈する湿潤な堆積層が薄く、土器の出土量も少ない。(森下)

土器 出土土器には壺 (2609～2624)、甕 (2625～2631)、鉢 (2632.2633)、台付鉢 (2634.2635)、ジョッキ

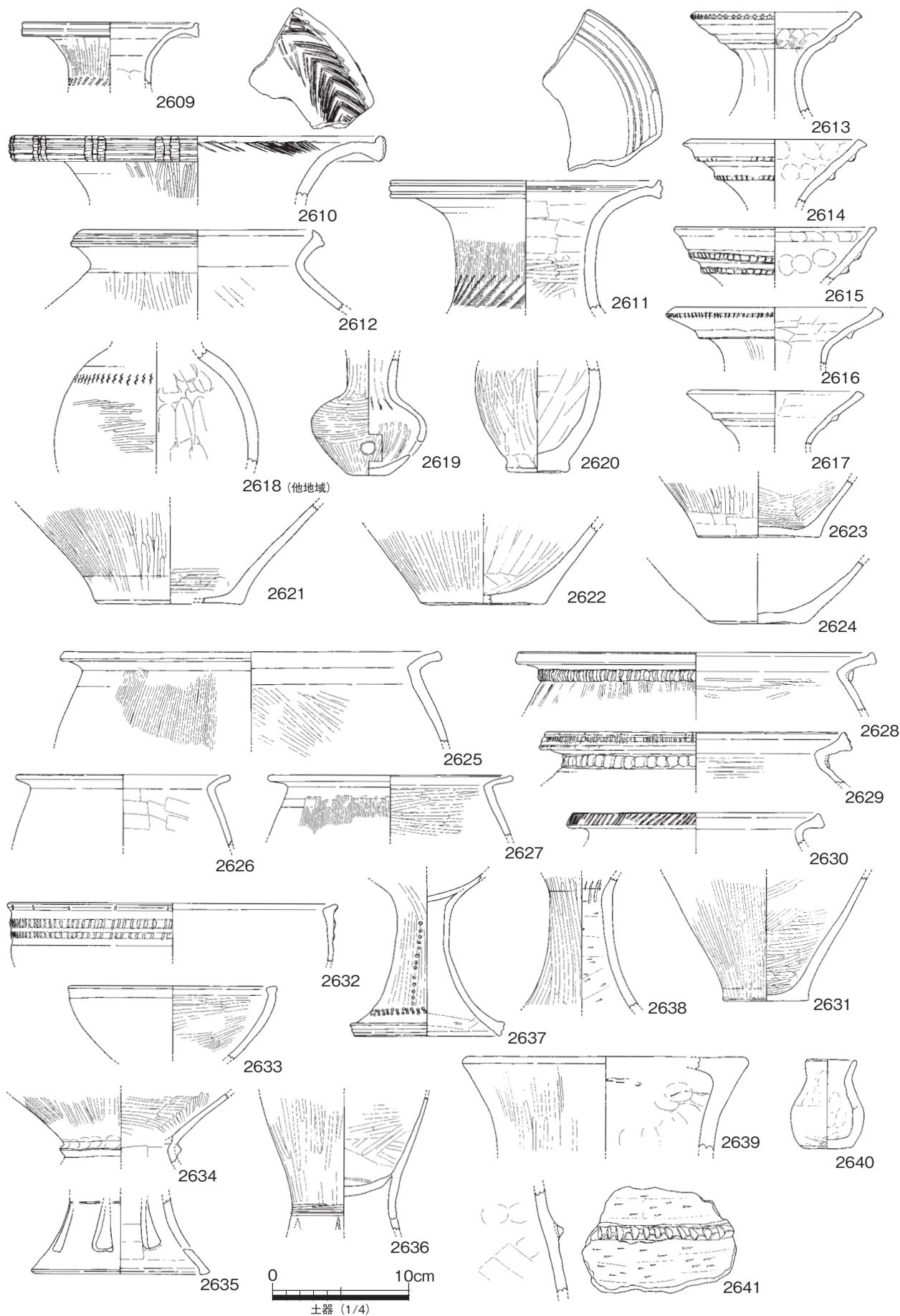


图 335 SR02 下層北半出土遺物 (1)

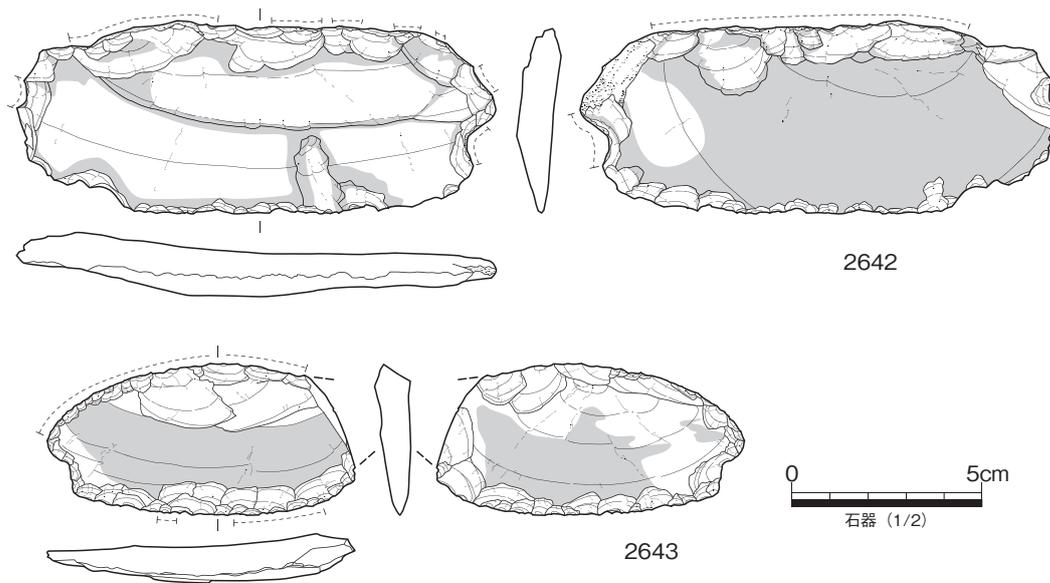


図 336 SR02 下層北半出土遺物 (2)

形鉢 (2636)、回転台形土器 (2639)、小型壺 (2640)、縄文深鉢 (2641) がある。

壺の中で広口壺 (2609 ~ 2611) は、口縁端部外面の凹線紋と内面の施紋が目立つ。短頸広口壺の 2612 は形態から中期後半新段階まで下る。2613 ~ 2617 は口縁部が受口状となる細頸壺であり、口縁端部に凹線紋は見られない。

甕は、くの字状口縁甕 (2625 ~ 2627.2630)、頸部に押捺突帯をもつ甕 (2628.2629) がある。2629 のみが時間的に弥生中期後半古段階に下るが、中期前半新段階のものが主体を占める。2637 の高杯脚部外面には、竹管による小列点が連続して施紋される。

2641 は 2 条突帯の深鉢の胴部片と見られ、高さのある突帯に明瞭な刻目をもつ。

以上、これらの土器群は弥生中期前半新段階から中期後半新段階の時間幅で捉えられる。(信里)

石器 サヌカイト製打製石庖丁 2 点が出土している。2642 は板状素材に打面調整を施し、打面を後退させながら連続的に剥離した横長剥片を素材とする。側縁の一部に自然面を残し、左右に抉りを施す。また、刃部には強い摩滅が見られる。2643 は小型品で側縁に小さな抉りを施す。(森下)

SR02 下層中位出土遺物 (図 337 ~ 341)

2644 ~ 2729 は下層中位出土遺物である。下位出土遺物と異なり、粘質シルト層中に含まれていた遺物であることから、器面の剥落が生じる等遺存状態は良くない。

このうち、2646、2647、2652、2657、2658、2662、2665、2666、2668、2670 ~ 2672、2674、2677、2686 ~ 2690、2693、2695、2697 ~ 2708、2713、2714、2716、2722、2723 については、下層中位でもやや低い位置で出土した土器である。(森下)

土器 出土土器には壺(2644～2664)、甕(2670～2686.2716.2717)、鉢(2687.2688.2692)、台付鉢(2689～2691.2696～2700.2702.2705.2721)、ジョッキ形鉢(2693～2695)、高杯(2703.2704.2706～2712)、蓋(2714.2715)、回転台形土器(2718～2720)、小形壺(2723)がある。

壺(2644～2646.2648.2649)は、弥生中期後半古段階までの口縁部内面の櫛描施紋が簡略化しており、中期後半中段階の様相を示す。2652は直口壺の口縁端部を拡張することにより、短頸広口壺とするもので、同形式の最初期に位置付けられる。2657の大形壺は頸部外面に突帯が低平化しており、形態から見て弥生中期後半中段階に比定される。2658～2664は口縁部が受口状となる細頸壺であり、2663、2664はその最終型式である。

2670～2686の甕は、弥生中期前半新段階から中期後半中段階の時間幅で捉えられる。2684、2685は凹線紋出現期の特徴を良好に留める。2683は口縁部を水平に折り返し、胴部下半部がスリムな形態をもつ甕であり、弥生中期後半中段階に特徴的なものである。2686は内面に赤色顔料の付着が認められる。2701はジョッキ形土器の把手の可能性が高い。2705の台付鉢は、器種組成上少数派であり、弥生中期後半中段階以降に出現するものである。

2703は口縁部が内側に屈曲する高杯であり、本地域に特徴的な形式である。2703は口縁部形態、脚端部を拡張せず、高さのある脚部形態等から、同形式の最初期である弥生中期後半中段階に位置付けられる。2712は、2703より型式変化が進み中期末葉に近い口縁部形態をもつ。2704は弥生中期前半新段階から継続する水平口縁をもつ高杯の最末期のものと思われ、弥生中期後半中段階に属する。2712は台付鉢の脚部として図化したのが、大形であるため、寸胴形の器形をもった鉢の口縁部の可能性もある。

2713は甕蓋、2714、2715は無頸壺等の壺蓋と考えられる。

2719は回転台形土器であり、摘み出された口縁端部に凹線紋が見られないことから、弥生中期前半新段階から後半古段階に比定される。

2722は弥生前期の壺である。形態から弥生前期後半古段階の所産と考えられる。

以上、これらの土器群は、弥生中期後半新段階のものが主体を占め、一部に前後する時期の資料が含まれていると見られる。(信里)

石器 2725は平基式のサヌカイト製打製石鏃である。大きさの割りに厚みがあり、平面形は左右が不均等な仕上がりである。2726は長さ5cm弱のサヌカイト製大型石鏃である。上半部は丁寧な調整加工を施し鏃を作出し、断面は菱形を呈す。また、側縁に細かな鋸歯状加工を施す。先端及び基部が僅かに折損する。細長の平面形で、刃部下端が僅かに窄まり、緩やかな凹基を呈する形状は、当地域の弥生時代中期後半に一般的である。2727は結晶片岩製の磨製石斧である。上端が平坦で、側縁は一方が直線的、他方が緩やかなカーブをもつ等不均等な形状である。節理に沿って剥離した柱状片刃石斧基部片の再加工品である可能性が高い。淡緑色で結晶化が進行し、剥離性の高い石質である。2728、2729はサヌカイトの横長剥片を使用した打製石庖丁である。素材剥片は板状石材から不規則に剥離した剥片である。

(森下)

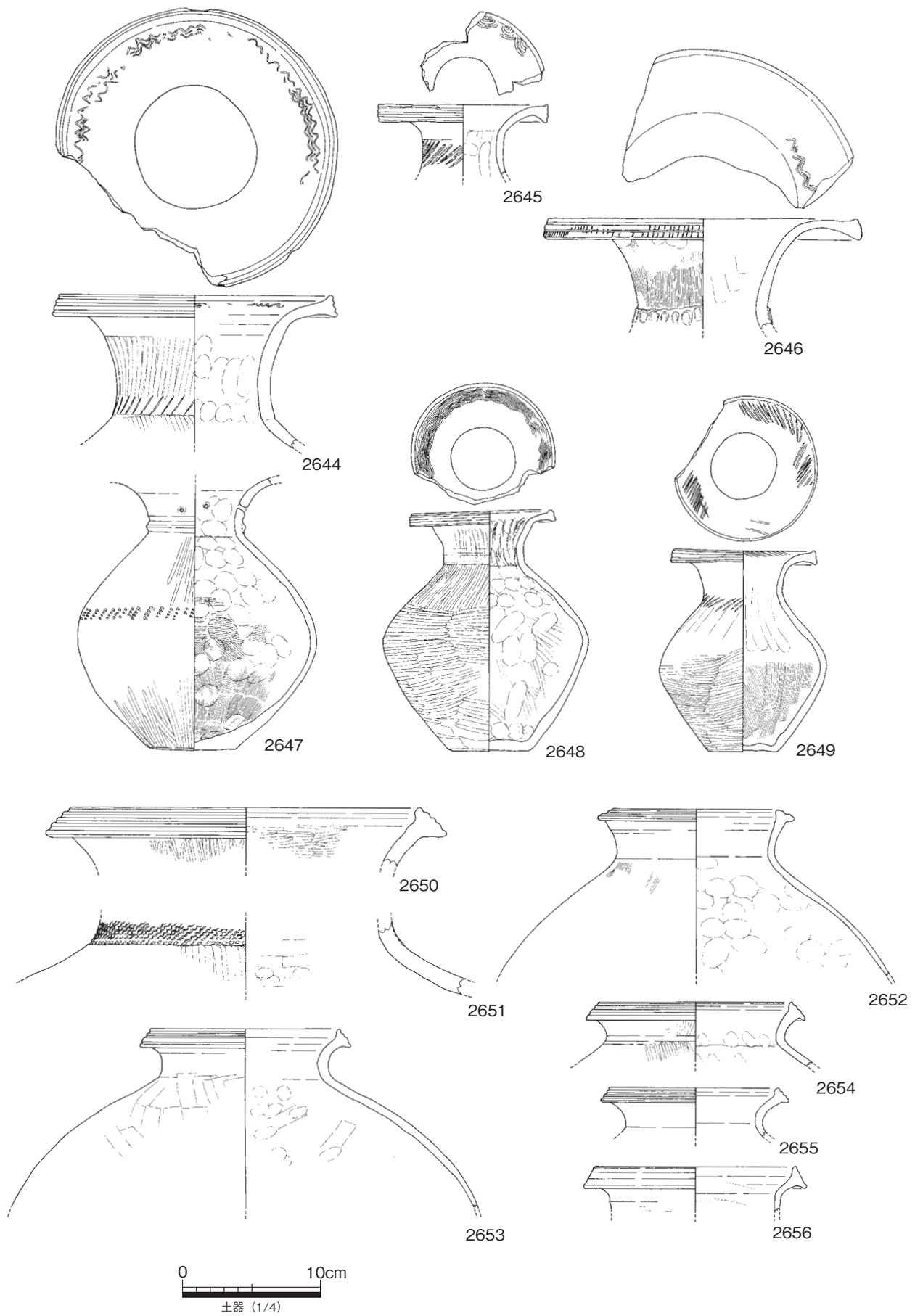


图 337 SR02 下層中位出土遺物 (1)

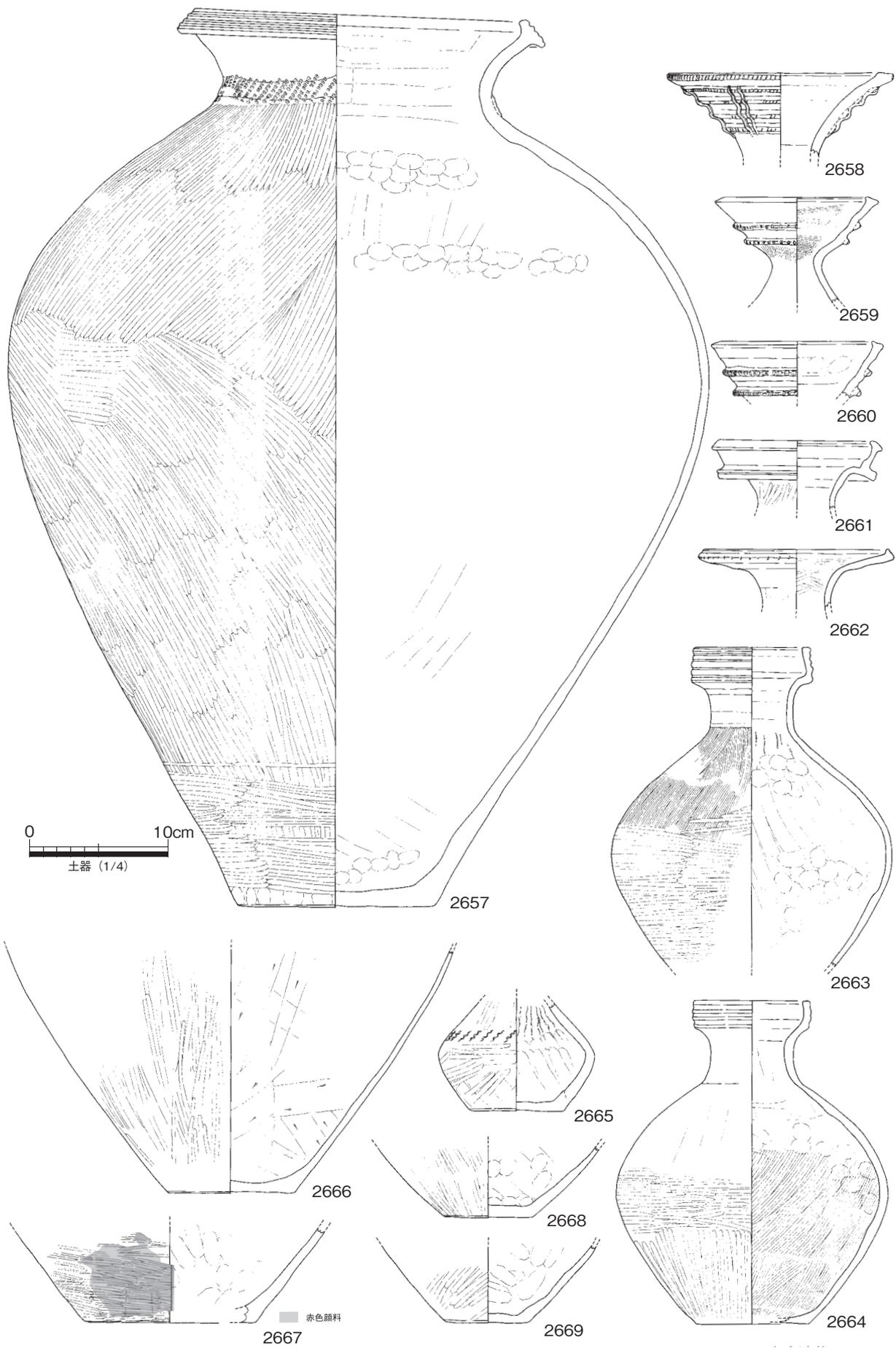


图 338 SR02 下層中位出土遺物 (2)

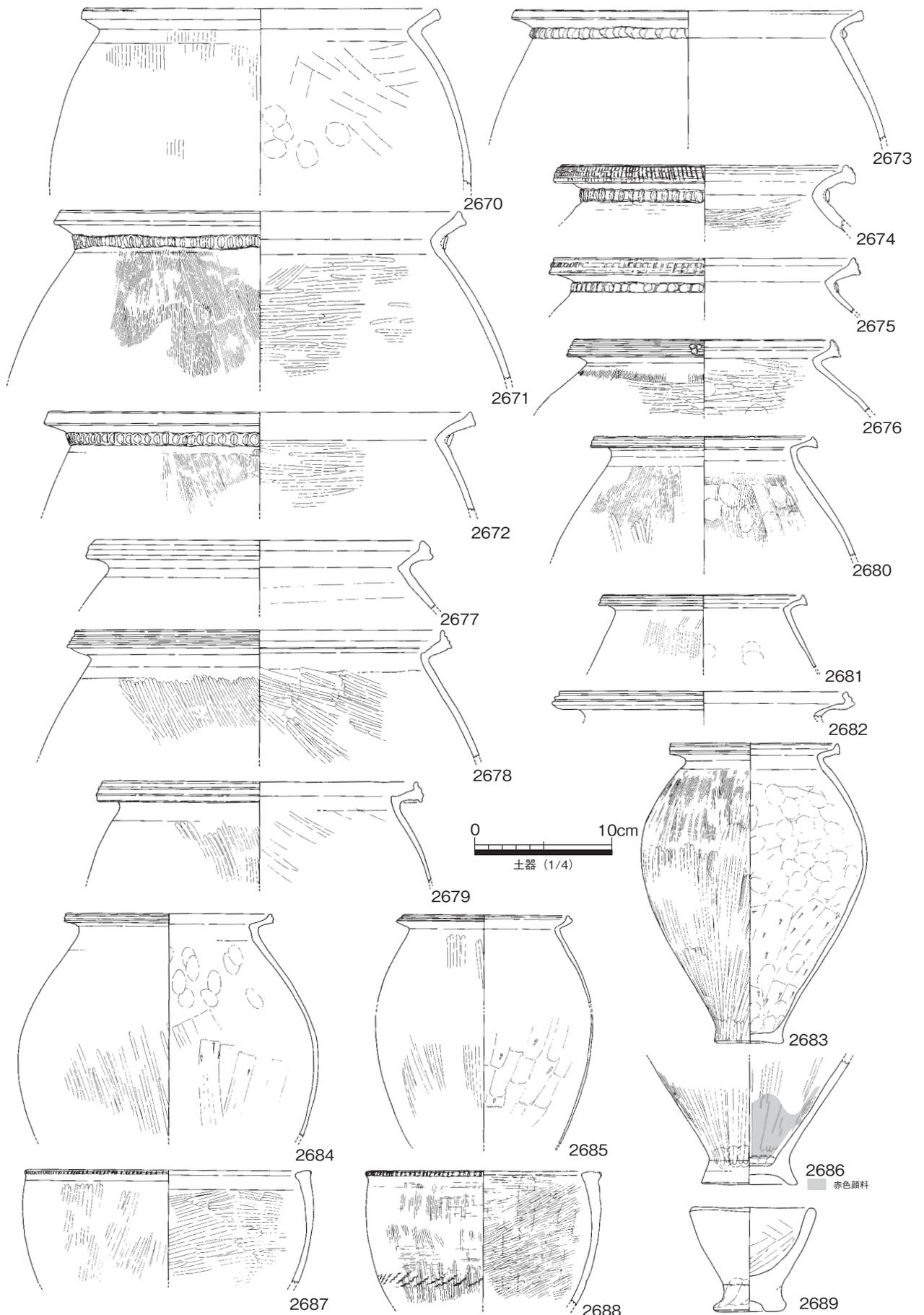


図 339 SR02 下層中位出土遺物 (3)

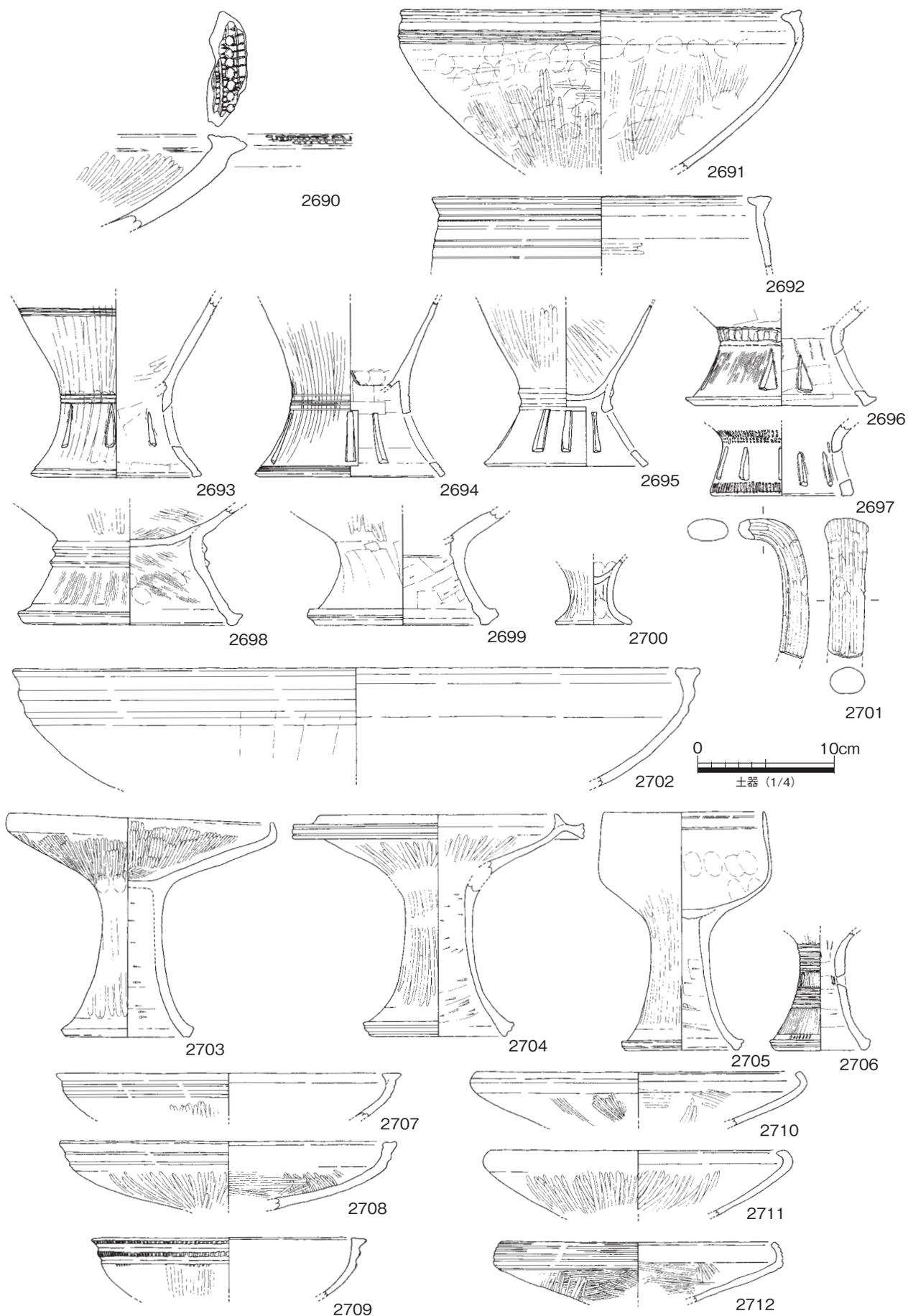


图 340 SR02 下層中位出土遺物 (4)

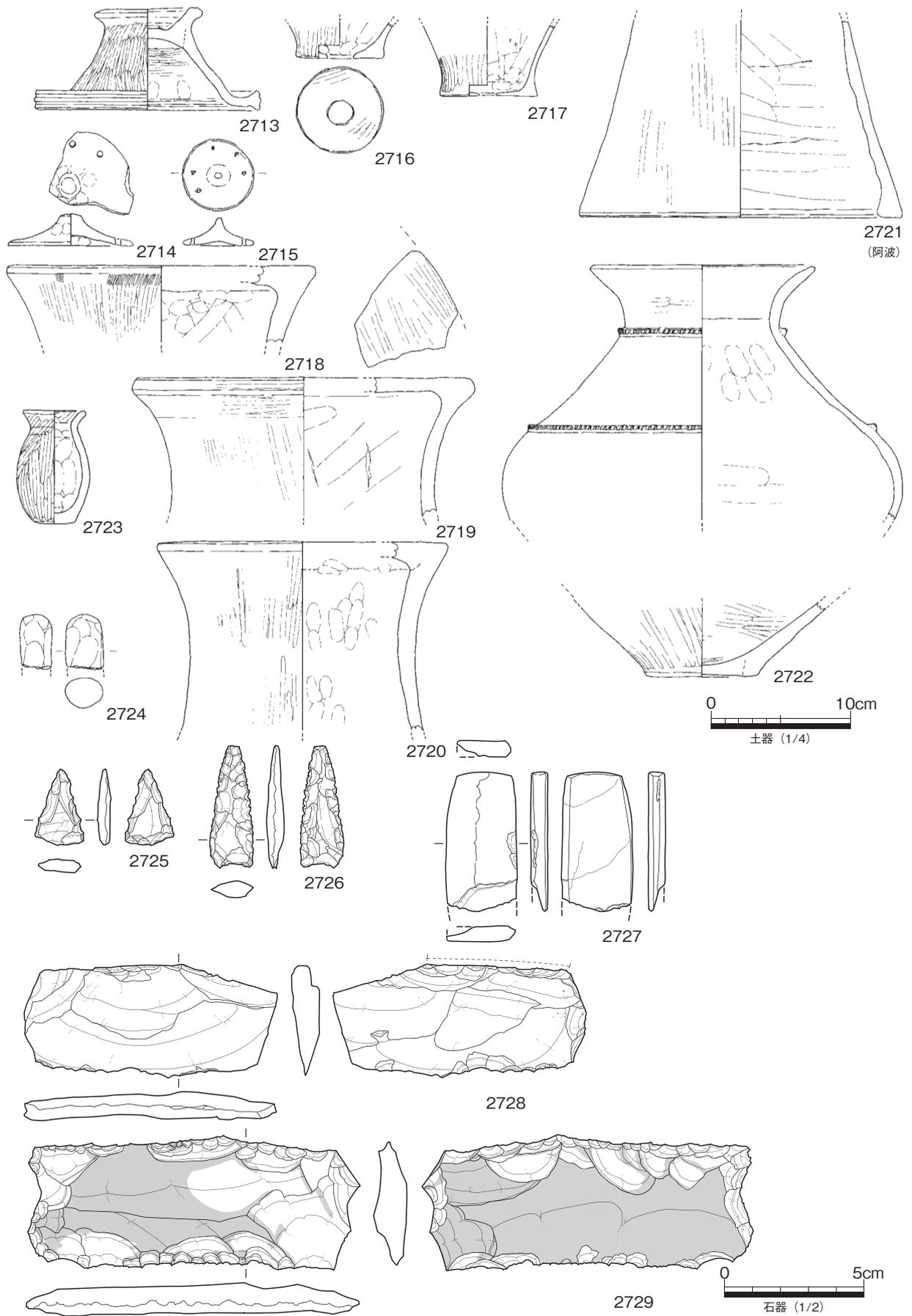


图 341 SR02 下層中位出土遺物 (5)

SR02 下層上位出土遺物 (図 342 ~ 345)

2730 ~ 2832 は下層上位出土遺物である。ただし、2736、2740、2775、2804 は本来 SR02 中層として報告すべき遺物が混在した。また、2730、2731、2734、2738、2746 ~ 2752、2756、2757、2760、2762、2766 ~ 2768、2770、2771、2778、2780、2781、2785、2787、2789、2791、2792、2795、2799、2801、2805、2810、2811、2820、2821、2823 ~ 2825 はトレンチ等で下層上位~下位まで層位区分することなく取り上げた土器であり、古い時期の遺物が混在する。(森下)

土器 出土土器には、壺 (2730 ~ 2757)、甕 (2758 ~ 2787)、鉢・台付鉢 (2788 ~ 2805)、高杯 (2806 ~ 2811、2813 ~ 2820)、蓋 (2821 ~ 2825)、回転台形土器 (2828)、支脚 (2827) がある。

2730 の広口壺は頸部に三角形突帯から変化した凹線紋帯をもち、口縁部内面にやや粗雑な櫛描直線紋と列点紋を描く。2731 は口縁部内面を中心に貼り付け突帯や円形浮紋で加飾する広口壺であり、弥生中期後半古段階に属する。2739 の広口壺は口縁部を上下に拡張するもので、大きく開く口縁部形態や凹線紋の粗雑な状況から、弥生中期後半新段階に下るものと見られる。2744 ~ 2750 の口縁部が受口状となる細頸壺は、弥生中期前半新段階から弥生中期後半古段階の時間幅をもつものと見られ、2744 を最初期とし、2750 への変化が追える。2754 は弥生中期後半に少数見られる細頸壺であり、算盤玉状の胴部が想定される。

2758 ~ 2787 の甕は、弥生中期前半新段階から弥生中期後半新段階までの時間幅をもつものと見られる。2755 は肉厚な口縁部が短く屈曲しており、弥生中期後半新段階に特徴的な要素をもっている。2783 は口縁部を上方にのみ拡張する甕であり、形態から備後地域の後期初頭の甕に類似している。

2788 の鉢は胴部外面を中心に櫛描施紋や貼り付け突帯で加飾するもので、弥生中期後半古段階に特徴的なものである。2807 ~ 2809 は口縁部が内側に屈曲する高杯であり、2817 はその脚部となる可能性が高い。2808 は口縁端部が先細りとなっており、弥生中期後半新段階でも新しい要素を備える。2810 は弥生後期前半中段階に下る装飾高杯であり、杯部外面の器形反転部に対して断面方形の突帯を 1 条付与する。2813 の高杯脚は、脚端部の形態から見て、弥生後期前半古段階に下る。

2827 は低平な支脚であり、弥生後期前半期以降の所産と見られる。2828 は回転台形土器であり、外側へ発達した口縁端部外面に凹線紋を施すもので、弥生中期後半中段階の所産と見られる。

2829 は弥生前期前半の壺口縁部であり、口頸部境に折り曲げに伴う明瞭な指頭圧痕を留める。2830 は紡錘車であり、片側からの穿孔途上で放置されており、未製品と考える。周縁部の状況から転用品と判断でき、平板な断面形から、壺・甕等の大形品を用いたものと見られる。

以上の本層位出土資料は、一部に弥生前期資料を含んでいるが、弥生中期前半新段階から後期前半中段階のものが見られ、かなりの時間幅が看取される。(信里)

石器 2831 はサヌカイト製の凹基式打製石鏃である。2832 はサヌカイト製石器で小型剥片の周縁に調整加工を施す石鏃未製品である。(森下)

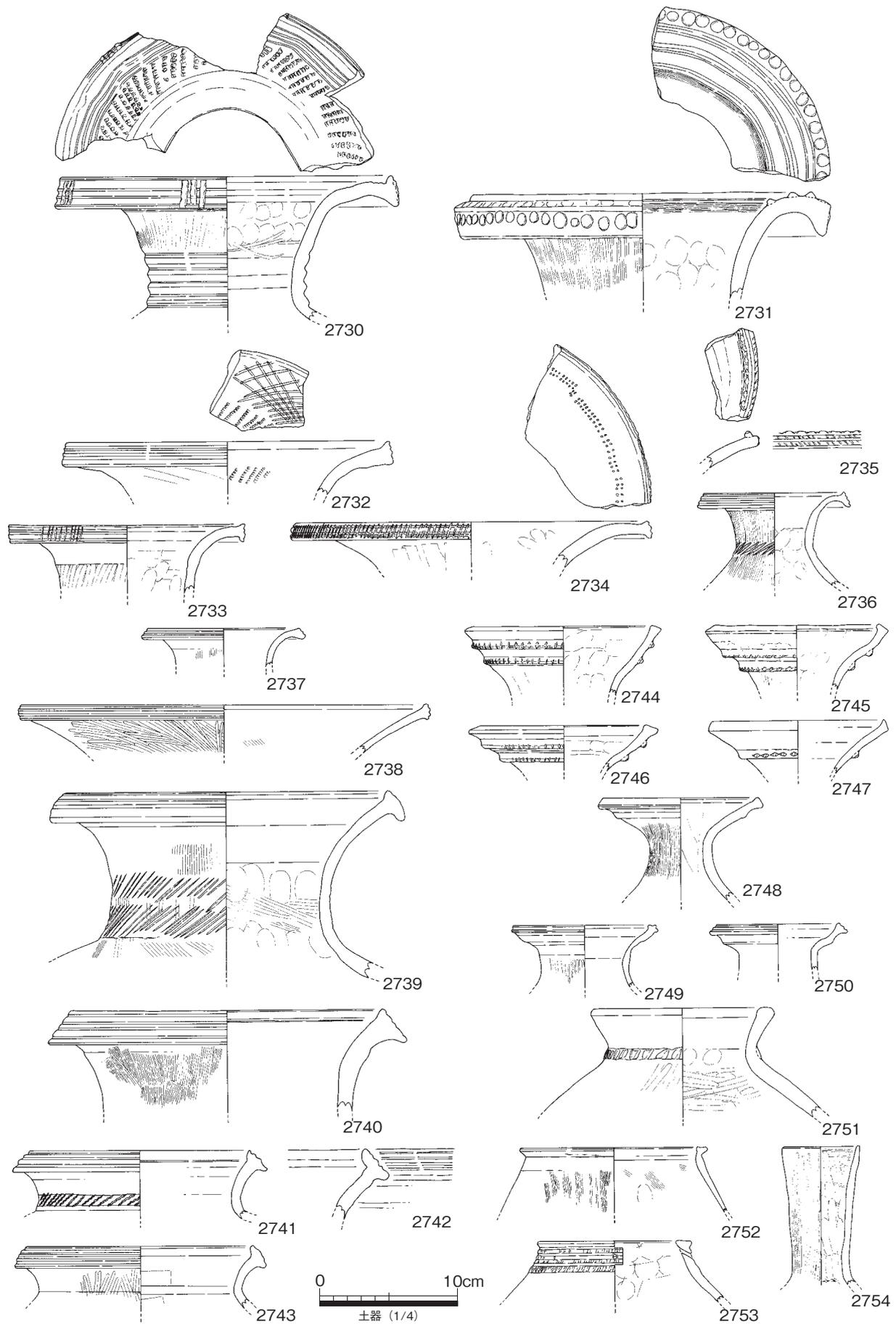


图 342 SR02 下層上位出土遺物 (1)

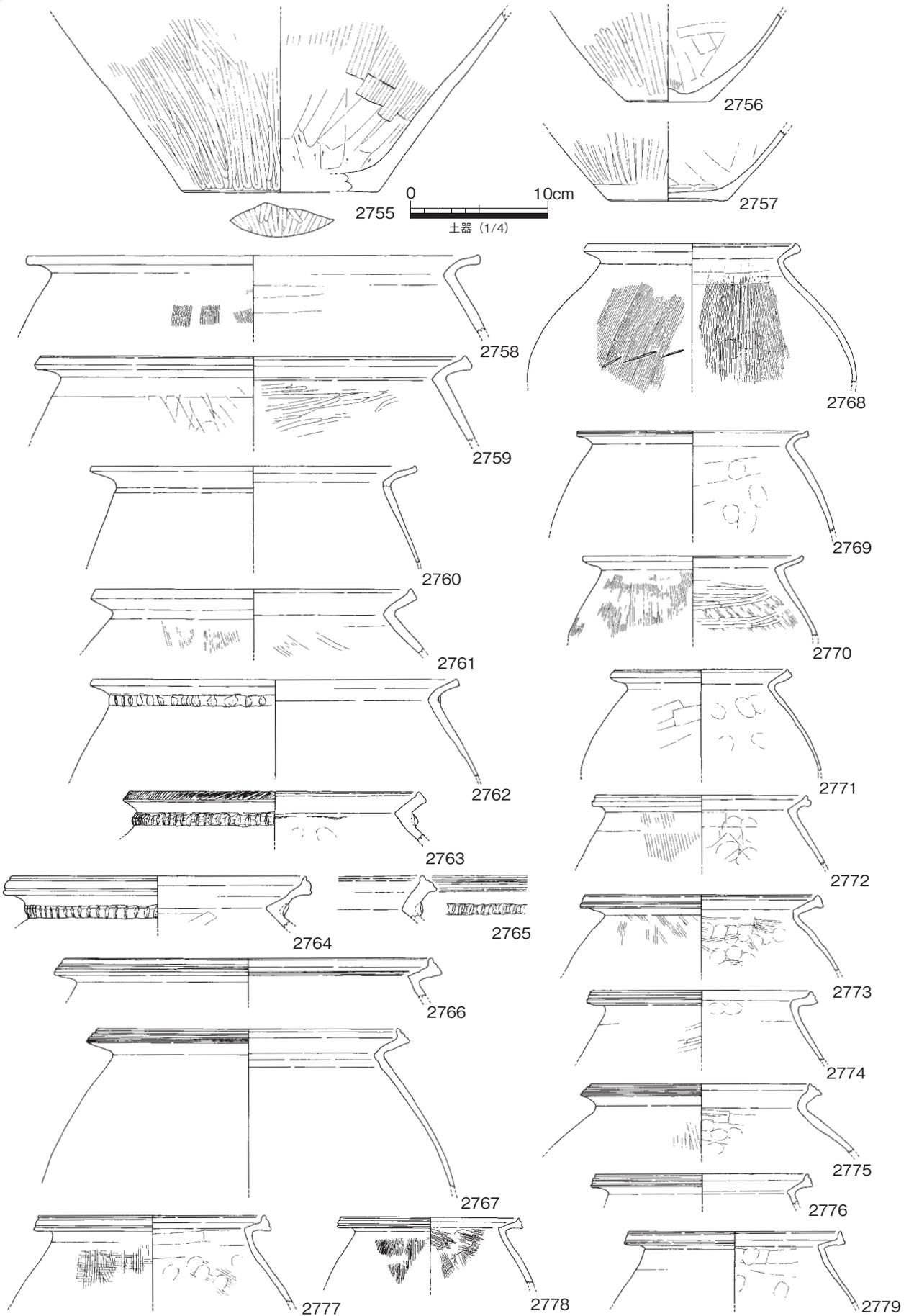


图 343 SR02 下層上位出土遺物 (2)

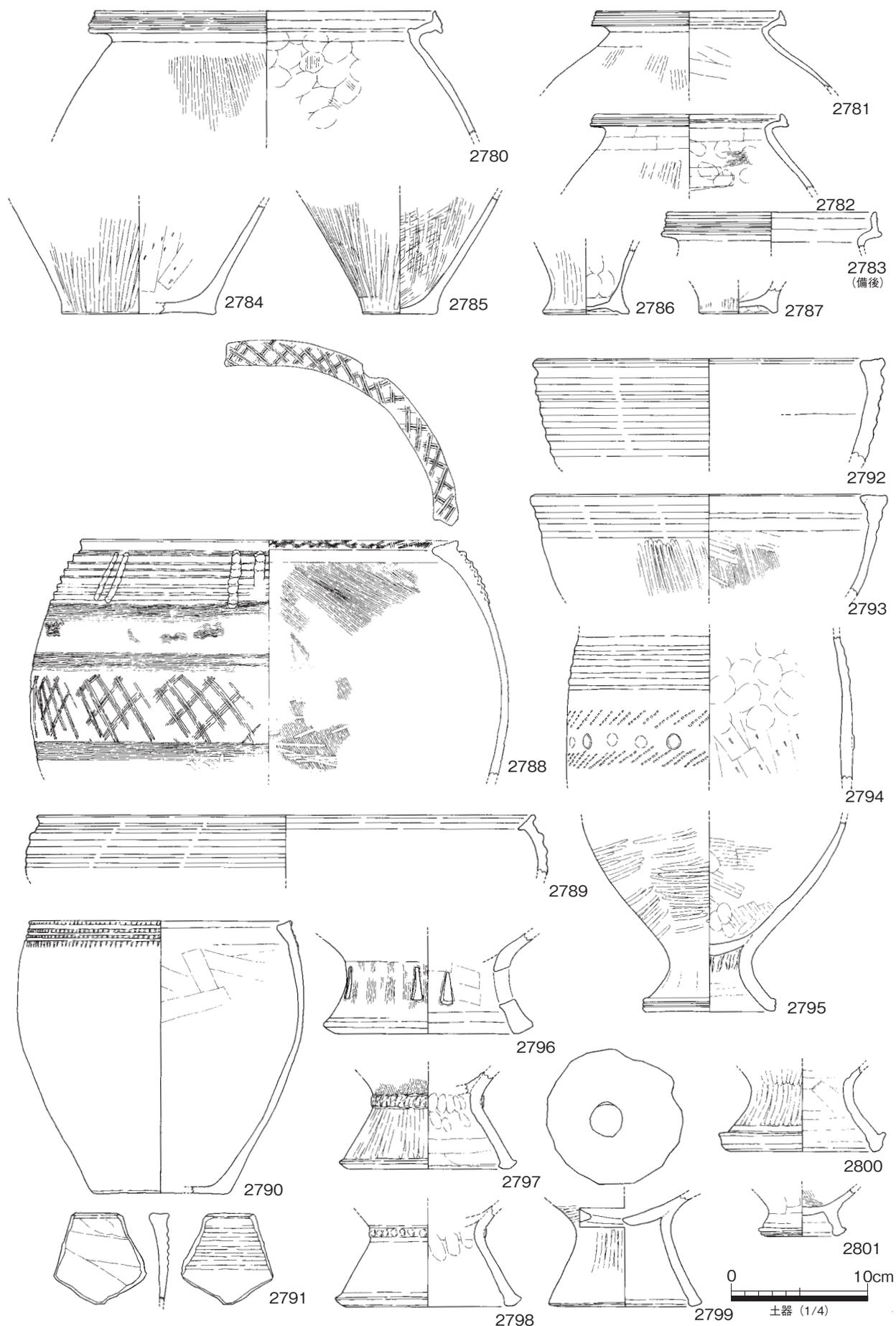


图 344 SR02 下層上位出土遺物 (3)

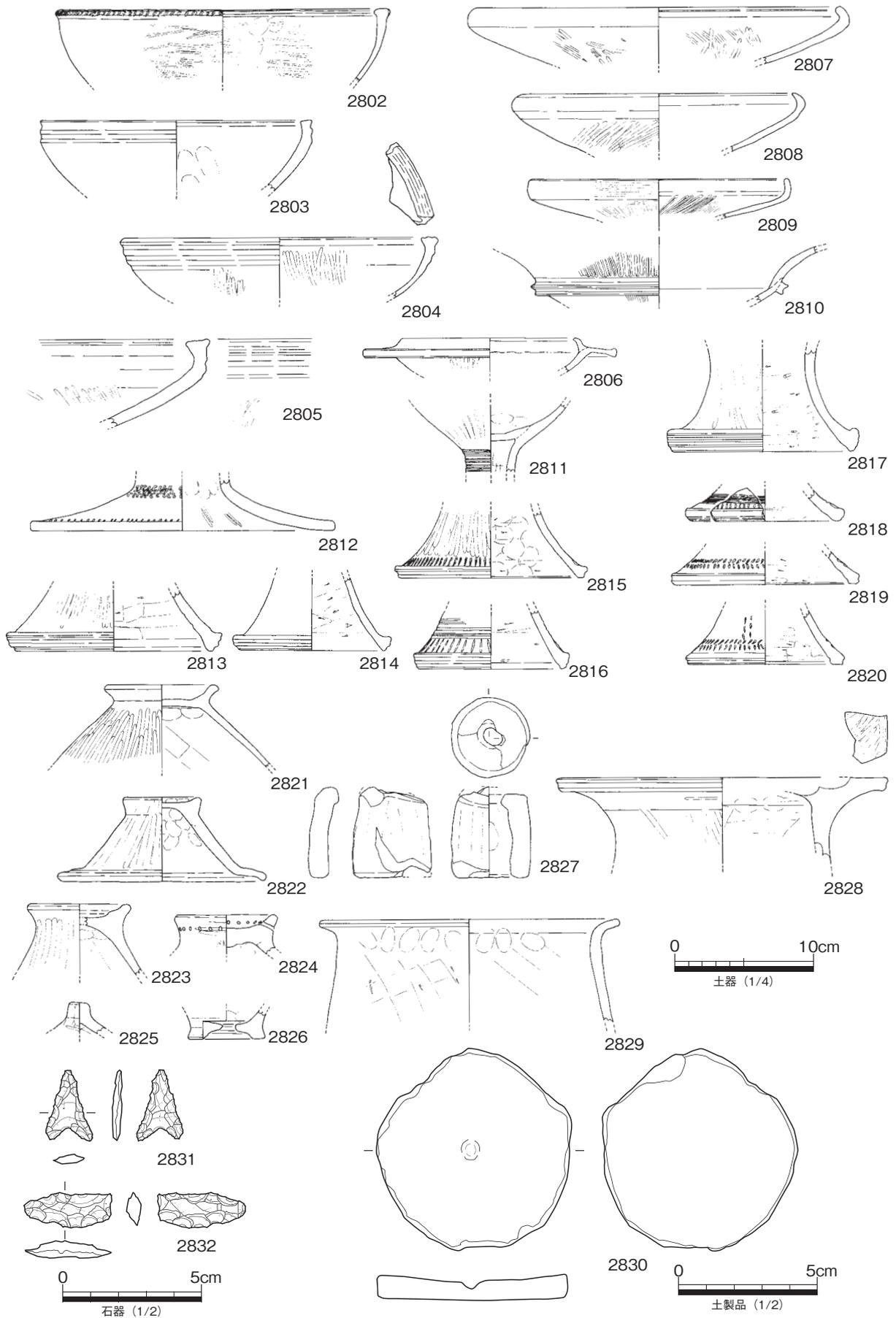


图 345 SR02 下層上位出土遺物 (4)

SR02 中層出土遺物 (図 346・347)

土器 出土土器には、壺 (2834～2838.2844)、甕 (2839～2842)、台付鉢 (2845.2848.2853.2855)、鉢 (2846.2847.2849～2851.2856)、器台 (2833)、高杯 (2854.2855.2857.2858) がある。壺は、弥生中期後半古段階の 2837、後期前半期の 2835 を除き、中期末葉の様相を示す資料が多い。2844 の底部片は、形態から弥生後期前半新段階以降に下る。甕 (2839.2841) も後期前半古段階以降に下る可能性が高い。

台付鉢 (2848) の外面には、連続した焼成破裂痕が見られる。2858 の拡張口縁をもつ高杯は弥生後期前半古段階に特徴的なものである。2859、2860 は小形土器であり、ともに手づくねで成形されている。

以上、本層準の土器全群は、弥生中期後半古段階から弥生後期前半新段階までの時間幅で捉えられる。

2861 の鉄器片はほぼ前面が破断面に覆われるため、器種の特特定が困難である。層状に剥離した惨状から鍛造品と見られ、厚みから鉄斧片の可能性が高い。(信里)

石器 2862～2864 はサヌカイト製打製石鏃である。2863 は風化が進行しており、縄文期の混在の可能性がある。2862 は側縁に細かな鋸歯状の加工を施す完形品である。2864 は側縁に裁断面を残す未製品である。2865 はサヌカイト製打製石庖丁である。厚みのある不定形剥片の左右側縁に小さな抉りを施す。刃部に僅かな摩滅が残る。2866 は深緑色を呈する結晶片岩製柱状片刃石斧である。2867 は安山岩の円礫を使用した砥石である。稜線を形成せず、表裏面に緩やかなカーブを留めた砥面が残る。2868 は結晶片岩製の扁平片刃石斧である。刃部折損後に再加工した痕跡が残る。2869 は結晶片岩製柱状片刃石斧片である。破損後に周縁に加工を施し、刃器に転用する。(森下)

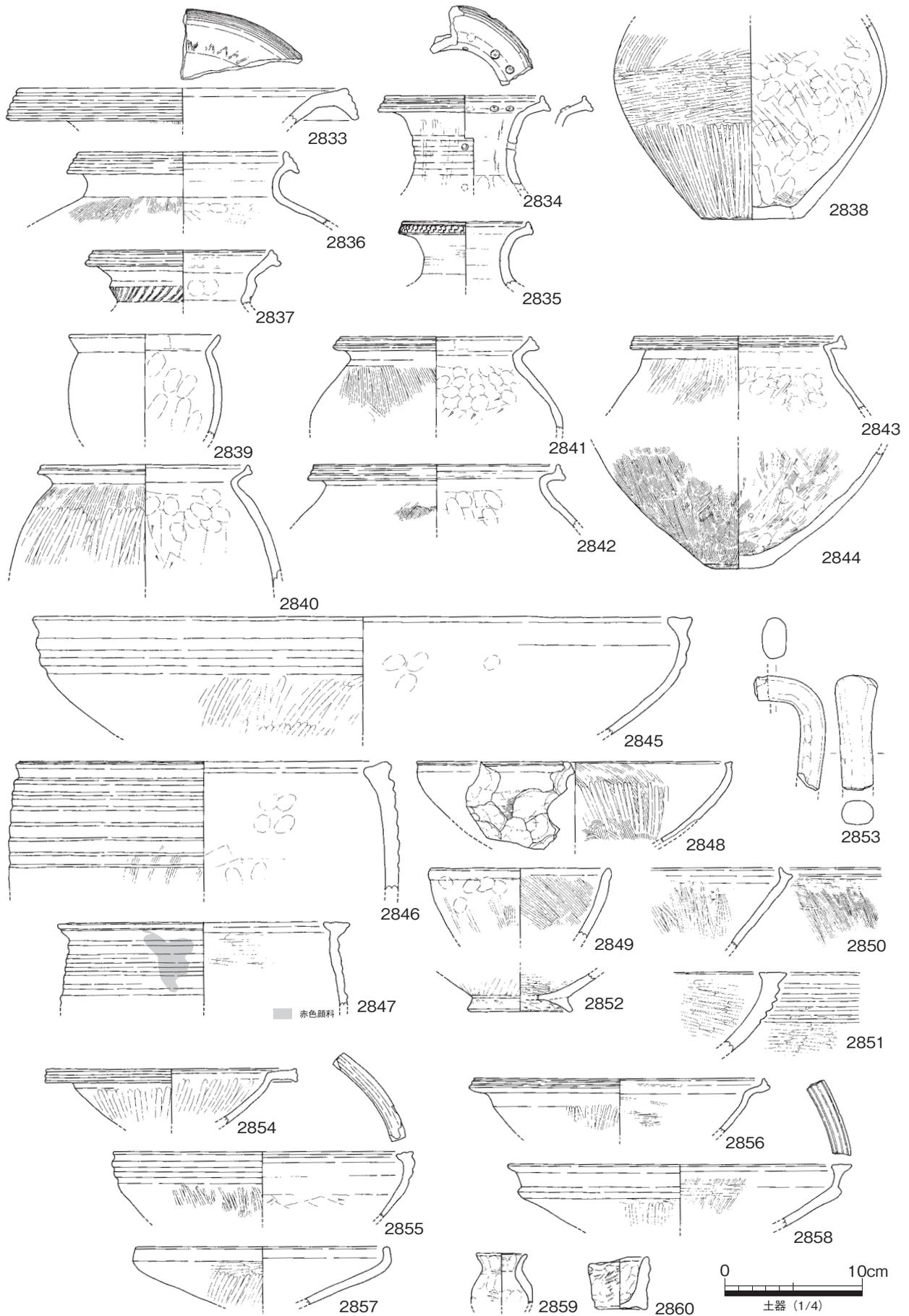


图 346 SR02 中層出土遺物 (1)

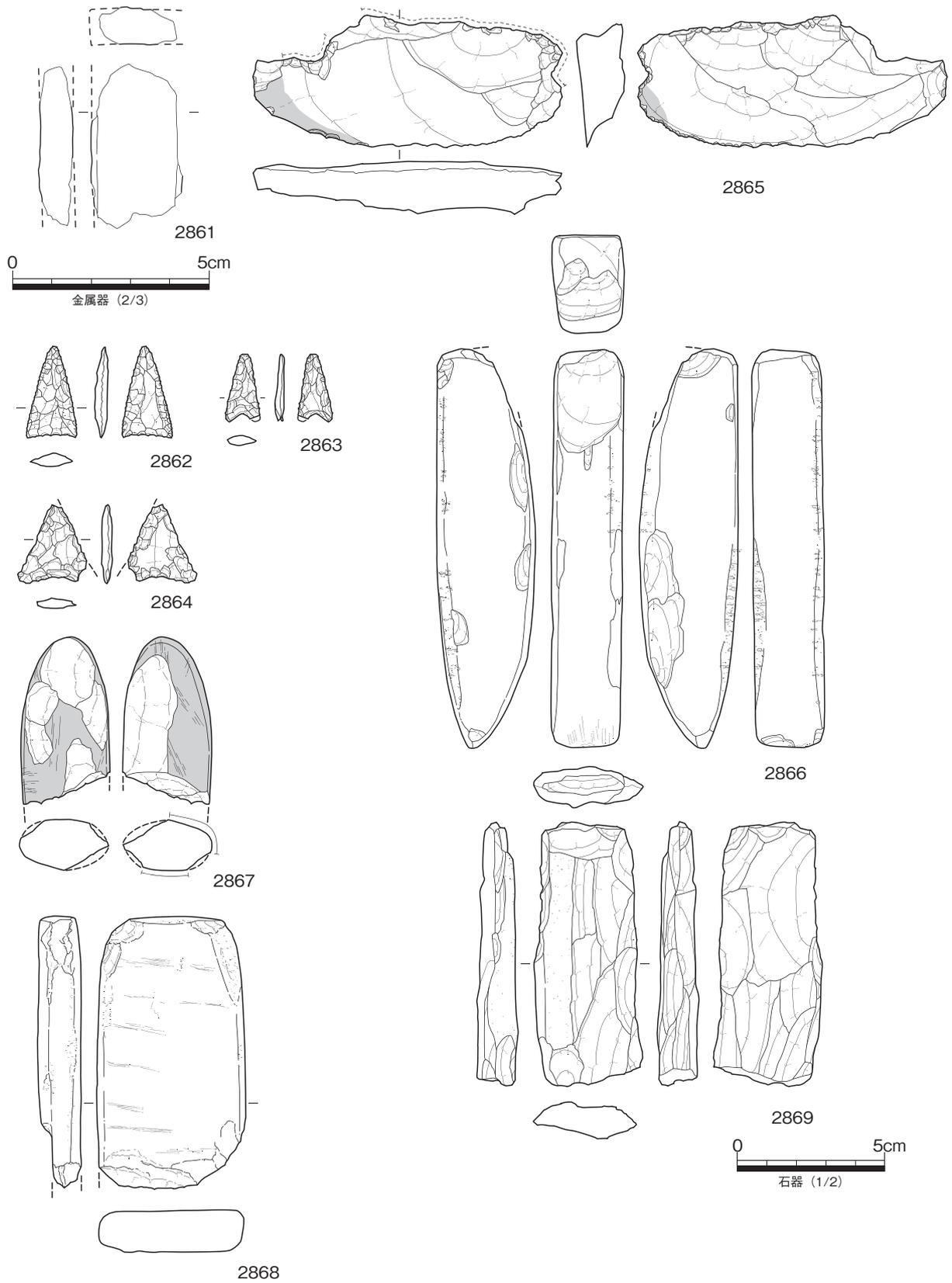


图 347 SR02 中層出土遺物 (2)

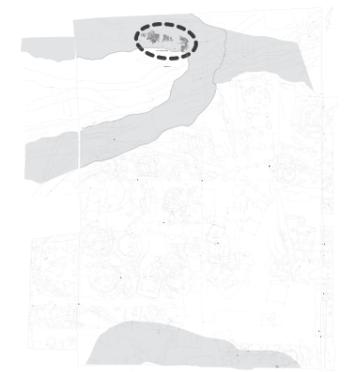


図 348 SR02 上層溝下層平・断面 遺物出土状況

(4) SR02 上層溝

河川跡 SR02 は上述のように、中期後半新段階の遺物を含む中層の堆積により河川部の埋没を終える。ただし、河川跡に向かって緩やかに傾斜する微地形は依然として継続し、河川跡の上部には緩やかな窪みが存在する。

B・E区境の蛇行部より下流側では、その窪みの最深部で東から西に向かう溝状遺構を検出した。溝状遺構の東端はSR02の蛇行部を越え、一部クランクしながらB区の中世埋没の条里溝SD17に掘り込まれるまで軌跡を辿ることができる。

溝状遺構は幅7m、深さ1mで断面台形・U字形を呈し、上端の肩部は緩やかに開いてSR02中層上面に収束する。断面形が逆台形を呈する箇所は、前後と比べ溝底が深さ約0.5m、延長46mにわたって土坑状に深い。埋土は黒褐色粘質シルトに黄色土ブロックが混在するやや粘性が強く、やや乾燥した土である。土坑溝状遺構以外の範囲でも、同様の黒褐色系シルトが堆積しており、砂礫層やラミナ層が目立つような流水堆積ではない。人工的に埋めた可能性が高い土層である。28リットル入りコンテナで8箱程度の遺物が出土した。SR02全体から見ると、出土量は僅かである。この層位で出土した遺物を最下層として取り上げ、図350・351の2870～2904に示した。

最下層埋没後の溝底は肩部より約0.7m低い緩やかな窪みとなる。その窪みから、部分平面図(図349)に示したように人頭大までの多数の礫とともに大量の土器が出土した。遺存状態の良い完形土器も含まれ、極めて近い箇所から投棄された土器群と推定できる。大小の礫は角が取れた砂岩亜円礫が多く、一見意図的な配石のようにも見えるが、平成20年度に当該箇所のすぐ北側の発掘調査が行われた結果、同様の礫が弥生時代以後の遺構の基盤層を構成することが明らかとなった。したがって、土器とともに出土する礫は近隣の遺構構築等の掘削に伴って排出された自然礫と推定できる。堆積土は淡褐色砂質シルトで層厚は0.35～0.4mを測る。土壌より土器や礫の容量が多い箇所もあり、遺物の隙間に介在する土壌中には獣骨や微細な炭化物を多数含む。ただし、木製品は出土していない。この様に溝底付近で出土した遺物を下層とした。遺物出土量は28リットル入りコンテナで73箱分である。遺物はSR02蛇行部から10m下流までの範囲に最も密集する。出土量が多いこの範囲については、溝底直上で出土した遺物をBブロック、Fブロック、L・Jブロックの3箇所に区分し、出土位置を記録しながら取り上げた。また、最初に溝状遺構を確認した調査区であるB区では、部分的であるが出土位置を図面に記録している。出土位置の記録を残していない遺物は、上記の3ブロック区分に加え、調査区B区で出土した遺物をEブロック、上記のL・Jブロックよりさらに下流側で出土した遺物をWブロックとしてブロックごと一括して取り上げている。出土遺物は下表の区分で報告する。

挿図番号	遺物番号	遺構名・層位	調査区	ブロック名	出土位置記録	遺構挿図番号
図352～355	2905～2957	SR02上層溝下層	E区	Bブロック	あり	図349
図356～357	2958～2979	SR02上層溝下層	E区	Fブロック	あり	図349
図358～365	2980～3111	SR02上層溝下層	E区	L・Jブロック	あり	図349
図366～367	3112～3132	SR02上層溝下層	E区	Bブロック	なし	—
図368～369	3133～3157	SR02上層溝下層	E区	Fブロック	なし	—
図370～372	3158～3238	SR02上層溝下層	E区	L・Jブロック	なし	—
図373～374	3239～3281	SR02上層溝下層	E区	Wブロック	なし	—
図376～378	3282～3324	SR02上層溝下層	B区	Eブロック	一部あり	図375
図379・380	3325～3357	SR02上層溝下層	E区	調査区一括	なし	—

表16 SR02上層溝下層出土遺物報告区分

SR02 上層溝下層の堆積が終わり、その上部には 0.15 ～ 0.2 m の厚さで暗灰黒色砂質シルトが堆積する。この層準は元来遺物量が少なく、次に報告する SR02 上層の大量土器分布層との間層となる。ただ、SR02 上層溝下層土器群の存在が明らかとなり、出土位置を記録するという調査方針を立てるまでの間、SR02 上層溝下層土器群の上位に含まれる遺物を「SR02 上層溝上層」として多数取り上げている。特に L・J ブロックでは、溝底に近い面まで上層溝下層の遺物を混在させている。したがって、SR02 上層溝上層として提示する遺物は、純粹に断面で確認できる「上層溝上層」の層準で出土した遺物だけではない。その量は 28 リットル入りコンテナで 51 箱分である。報告に当たっては、次のとおり区分した。(森下)

挿図番号	遺物番号	遺構名・層位	調査区	ブロック名
図 381	3358 ～ 3368	SR02 上層溝上層	E 区	B・N 間あぜ
図 382 ～ 386	3373 ～ 3504	SR02 上層溝上層	E 区	L・J ブロック
図 387 ～ 390	3505 ～ 3588	SR02 上層溝上層	E 区	W ブロック
図 391・392	3589 ～ 3624	SR02 上層溝上層	B 区	E ブロック
図 393	3625 ～ 3652	SR02 上層溝上層	E 区	W と L・J ブロックの間
図 394	3653 ～ 3661	SR02 上層溝上層	E 区	W ブロック西側

表 17 SR02 上層溝上層出土遺物報告区分

SR02 上層溝最下層出土遺物 (図 350)

土器 出土土器には、壺 (2871 ～ 2879)、甕 (2880 ～ 2886)、鉢 (2887.2898)、高杯 (2888 ～ 2896)、器台 (2870)、水差 (2900)、支脚 (2899) がある。

小形の広口壺 (2874) は、垂下口縁に似た肉厚の口縁端部外面に円形浮紋と竹管紋、口縁部内面に竹管紋を配するもので、胎土中に粗粒の角閃石を多く含む。形態・施紋・胎土の属性から、河内地域からの搬入品と見られ、河内 V -1 ～ V -2 様式の後期前半期に比定される。2875、2876 は弥生後期前半古段階の長頸壺である。2877 ～ 2879 は口縁部が受口状となる細頸壺であり、弥生中期前半新段階から中期後半古段階の所産と見られ、河川下位からの混入品の可能性が高い。

2885 の甕は、跳ね上げ状の口縁部外面に 1 条の凹線紋、胴部外面に貝殻腹縁による 2 段の列点紋を施す。形態から弥生中期後半古段階を中心とした時期に比定されるが、2 段の列点紋の構成が在地のものとは異なるため、安芸等の山陽西部地域の搬入土器の可能性も考えられる。2886 は口縁部下に突帯貼り付けを行う甕である。突帯等の属性は遺跡内の出土資料中にあまり見ないものであるが、旧練兵場遺跡に隣接する石川遺跡出土資料の中に完形品が確認できるため、在地品と考える。2884 の甕は形態から、弥生後期前半新段階に比定される。

2888 の高杯はやや内傾する口縁部が外面に凹線紋を施すもので、胎土は他の遺跡内の土器群と違和感は見られないが、形態から吉備地域からの搬入・模倣土器と考える。2891 の高杯は、ほぼ垂直に立ち上がる口縁端部外面に 3 条の凹線紋を施し、淡灰白色の胎土をもつ。形態・施紋の特徴から吉備地域からの搬入品と見られる。2888、2891 とともに中期末葉の仁伍式に比定される。2895 の高杯脚部片は、垂下気味の脚端部に凹線紋帯をもつもので、形態から備後北部地域からの搬入土器と考える。時間的には、様式編年 V -1 様式に比定されると考えられる。2900 は水差形土器の把手を中心とした破片である。2870 は形態や内面施紋の状況から器台と考えた。

以上、本層準の土器群は、河川下位からの巻き上げの遺物を含むものの弥生後期後半古段階から後期前半中段階を中心とする遺物が主体を占め、他地域からの搬入土器が目立つ内容となっている。(信里)



图 349 SRO2 上層溝下層遺物出土狀況

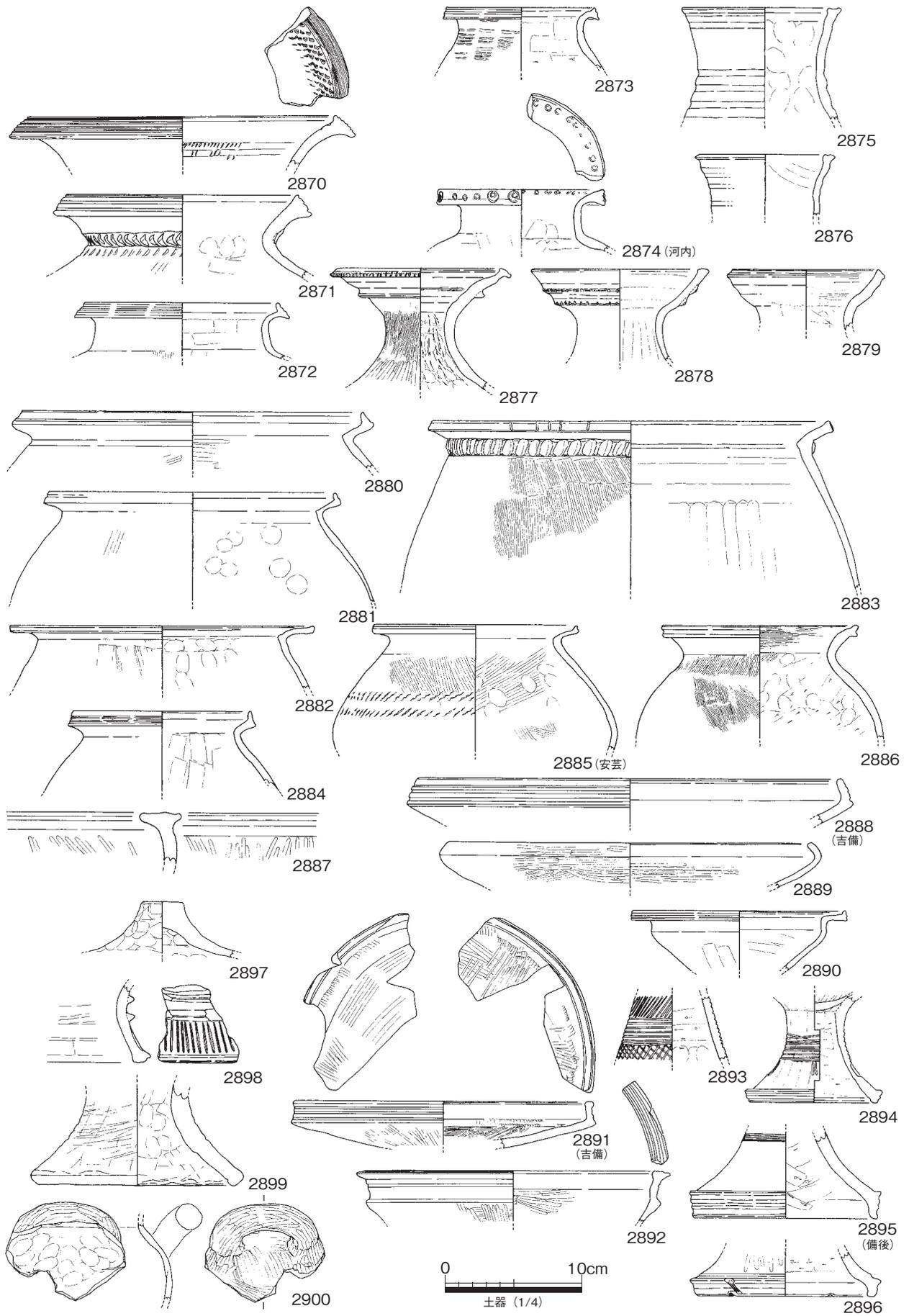


图 350 SR02 上層溝最下層出土遺物 (1)

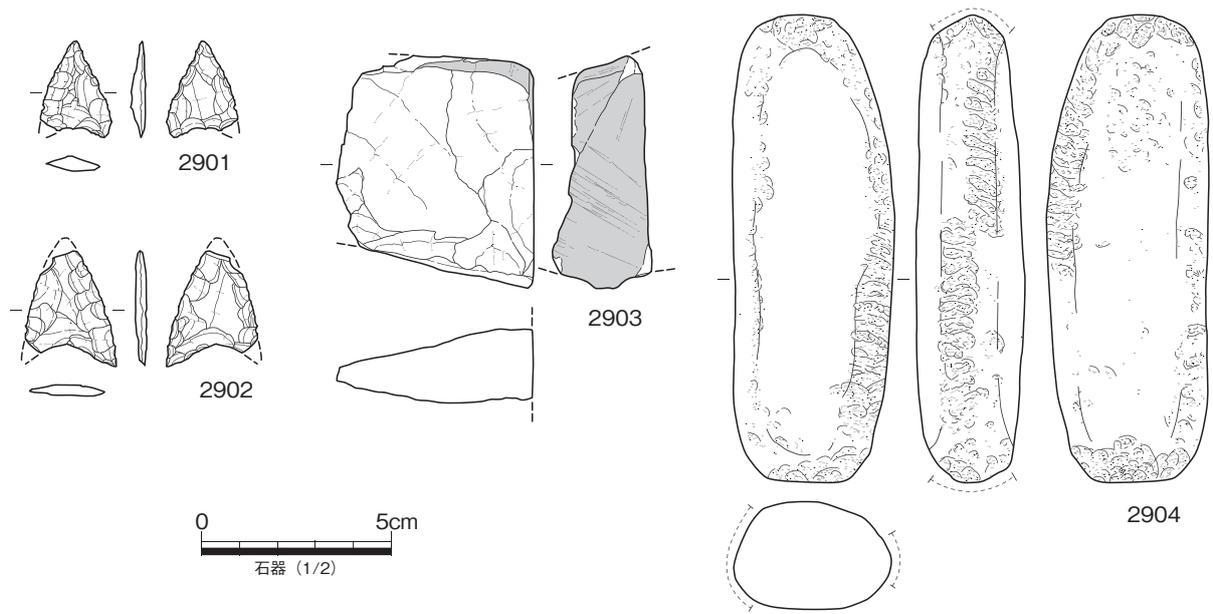


図 351 SR02 上層溝最下層出土遺物 (2)

石器 2901、2902 はサヌカイト製打製石鏃である。2901 は左右側縁の調整加工が不十分で、基部の折損も製作時の可能性が高いことから、未製品と考えられる。2902 は通常より薄身に仕上げる凹基式鏃である。先端部・基部を折損する。2903 は白色の流紋岩製砥石片である。断面方形で二側縁に線状痕を伴う使用痕が残る。2904 は砂岩製の棒状叩石である。側縁に線状敲打痕、小口にあばた状の敲打痕が残る。(森下)

SR02 上層溝下層出土遺物 (図 352 ~ 355)

土器 出土土器・土製品には、壺 (2905 ~ 2914)、甕 (2918 ~ 2928)、鉢 (2929 ~ 2933, 2956)、高杯 (2934 ~ 2942, 2951)、器台 (2943 ~ 2950)、支脚 (2952 ~ 2955)、紡錘車 (2957) がある。土器群全体の様相は、弥生後期前半期の時間幅で捉えられ、豊後地域からの少数の搬入品が認められる。

2905 の大形壺は、頸部から連続して外反する口縁部に 5 条の凹線紋と 2 個一対の円形浮紋を施す。遺跡内に類似した形態が見られないが、胎土は在地品と変わりがない。2906 の大形壺は頸部にハケ原体による列点紋、肩部外面に分割ミガキを施すもので、弥生後期後半古段階に比定される。2907 ~ 2911 の広口壺は、形態から弥生後期前半中段階から新段階の時間幅で捉えられる。

2912 は突帯や円形浮紋で加飾する胴長の形態をもち、胎土中に片岩粒を含む広口壺であり、豊後地域の大野川流域からの搬入品と見られる。時間的には、同地域における後期前葉に比定される。2914 の長頸壺は胴部が球形化しており、弥生後期前半中段階に位置付けられる。

甕 (2918 ~ 2927) は弥生後期前半古段階から前半中段階に位置付けられるもので、2923、2924 は後期前半中段階以降に登場する拡張口縁をもたないくの字状口縁の甕である。2925 は弥生後期前半中段階、2923 は同新段階に比定される。2928 は壺・甕折衷的な形態をもつが、甕として報告する。2922 の甕は形態から弥生後期後半古段階に下る。2943 の器台は口縁端部上面に平坦面があり、脚部片の可能性はある。

2929 は完形の中形鉢であり、弥生後期前半古段階に比定される。2941 の高杯は、所謂柱状脚で、近畿地方の河内地域を中心に見られるものに類似するが、厚手であることや、柱状部の丈が短く、脚端部内面の一部にケズリが見られること等相違点も多い。高松平野の上天神遺跡出土資料をはじめとし

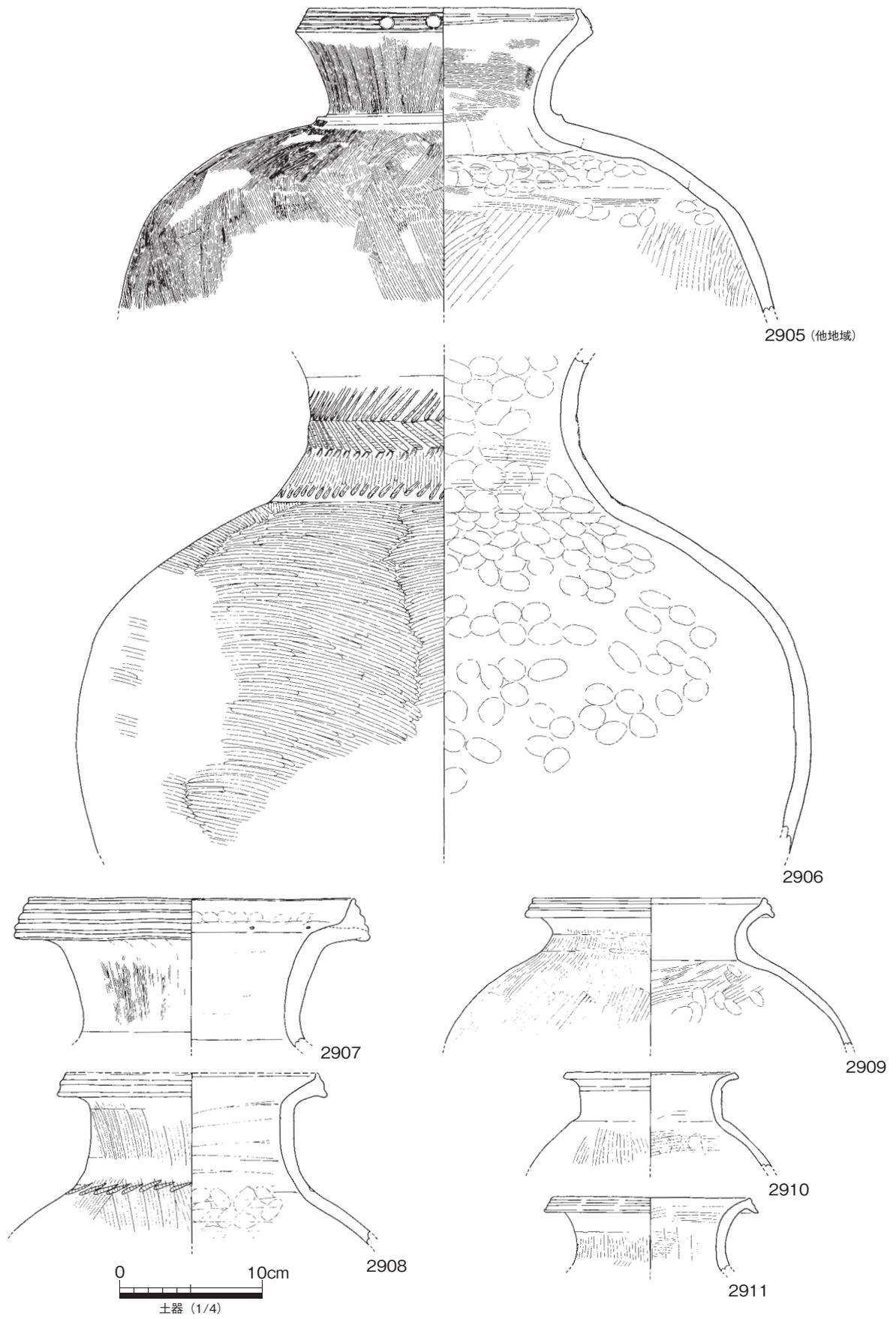


図 352 SR02 上層溝下層 B ブロック番号取り上げ出土遺物 (1)

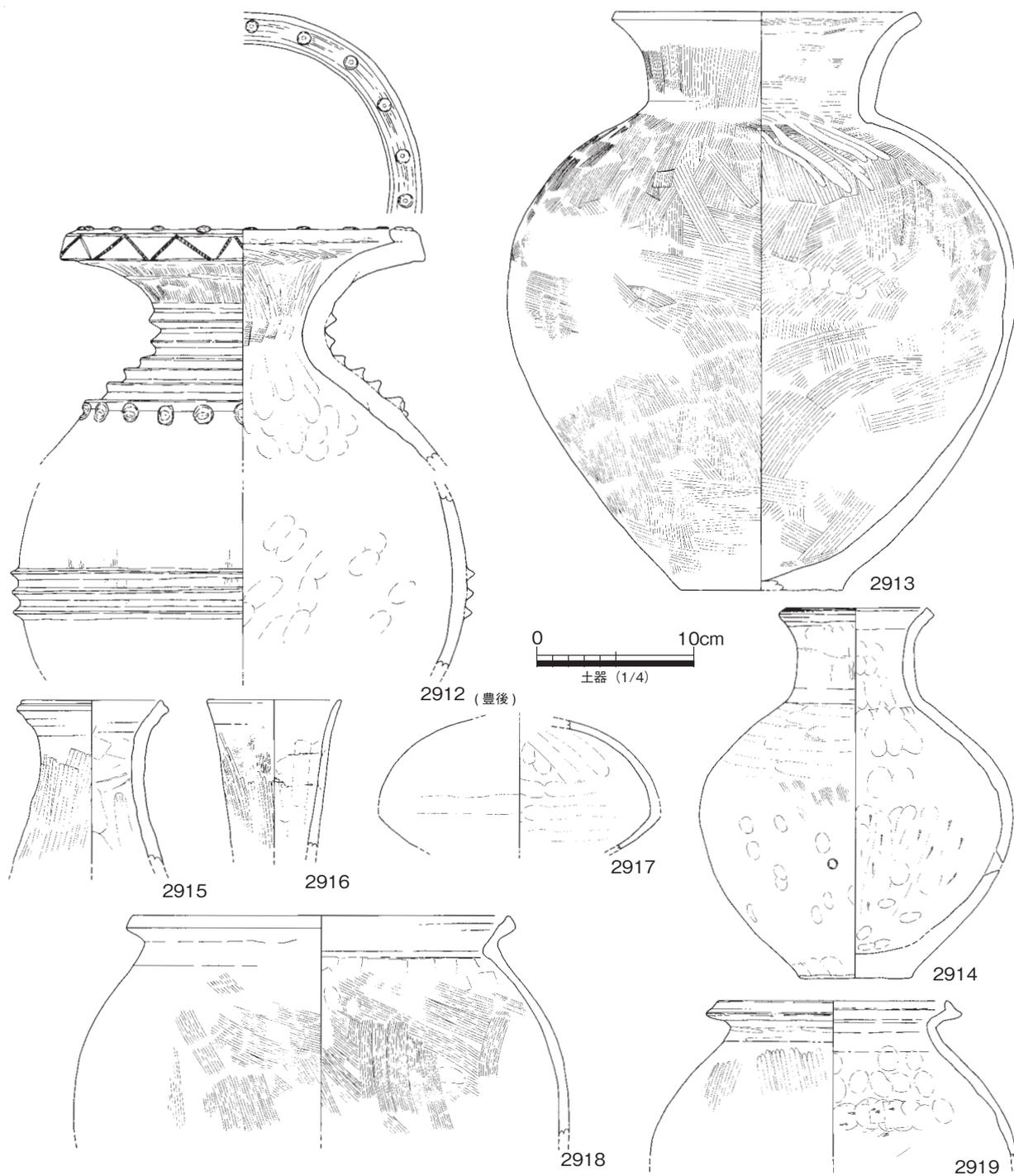


図 353 SR02 上層溝下層 B ブロック番号取り上げ出土遺物 (2)

て、装飾高杯の脚部の可能性があるが、ここでは近畿地方を視野に入れた搬入・模倣土器と捉えておく。2956 の大形鉢は、内面を中心に朱と見られる赤色顔料が付着している。口縁部は粘土貼り付けによって面取をし、破片下方の器壁がやや厚くなっていることから大形甕を半裁し鉢に転用した可能性が高い。大形品であることや端部形態が、弥生後期前半古段階に見られる甕半裁形の朱精製土器である把手付片口鉢と異なっており、他の類例に乏しい。

小形器台状の支脚 (2952 ~ 2955) は、弥生後期前半中段階に出現する形態をもつ。2957 は壺底部片を利用した紡錘車であり、底部外面からの穿孔途中で放置されていることから、未成品と考える。壺底部形態は弥生中期後半新段階のものである。(信里)

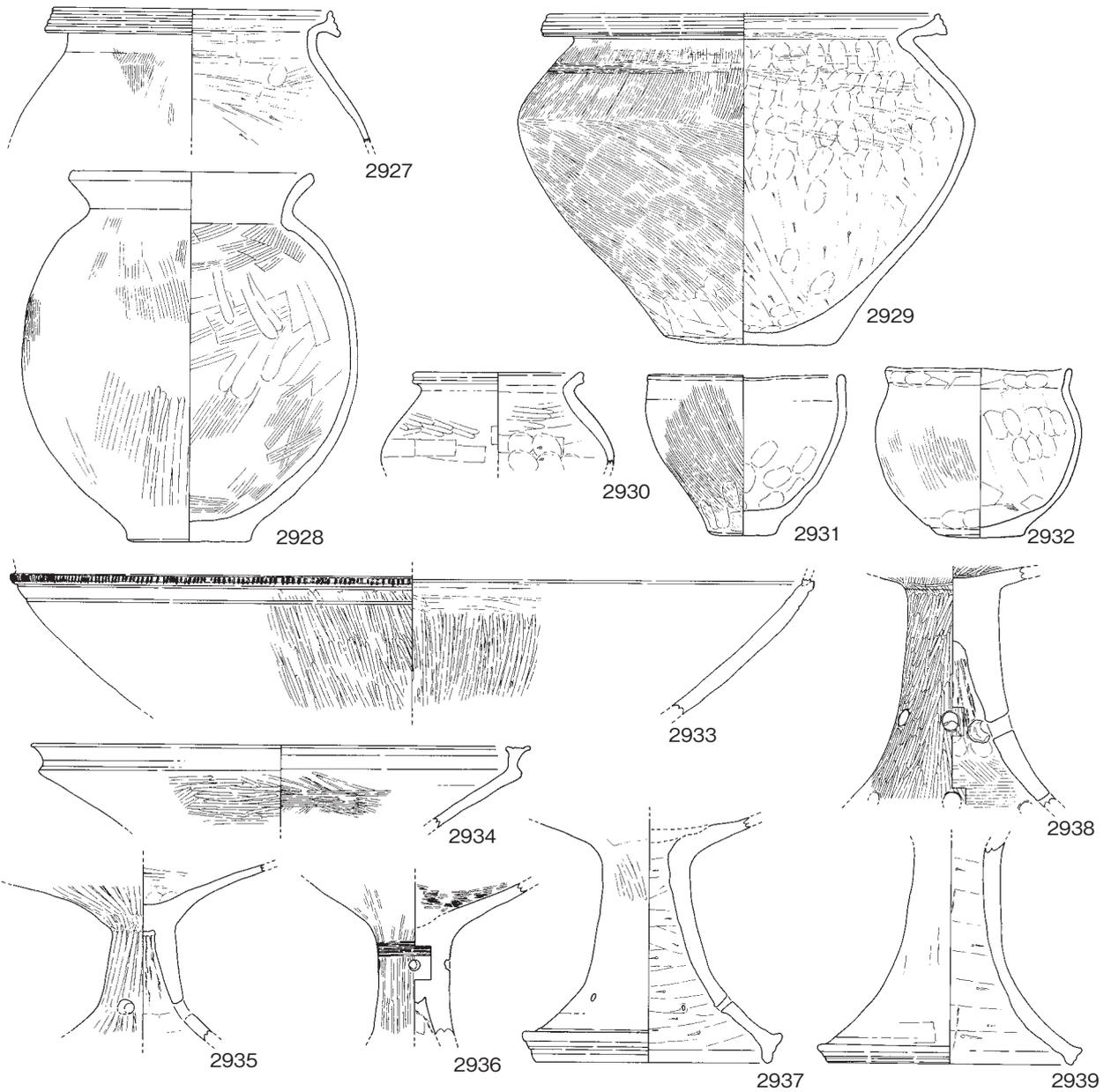
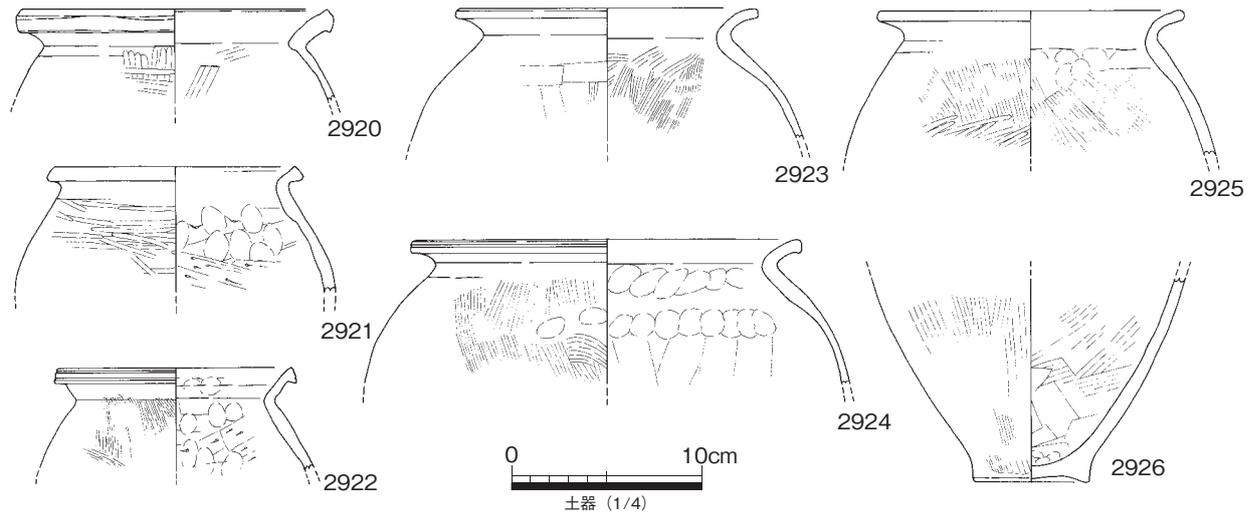


図 354 SR02 上層溝下層 B ブロック番号取り上げ出土遺物 (3)

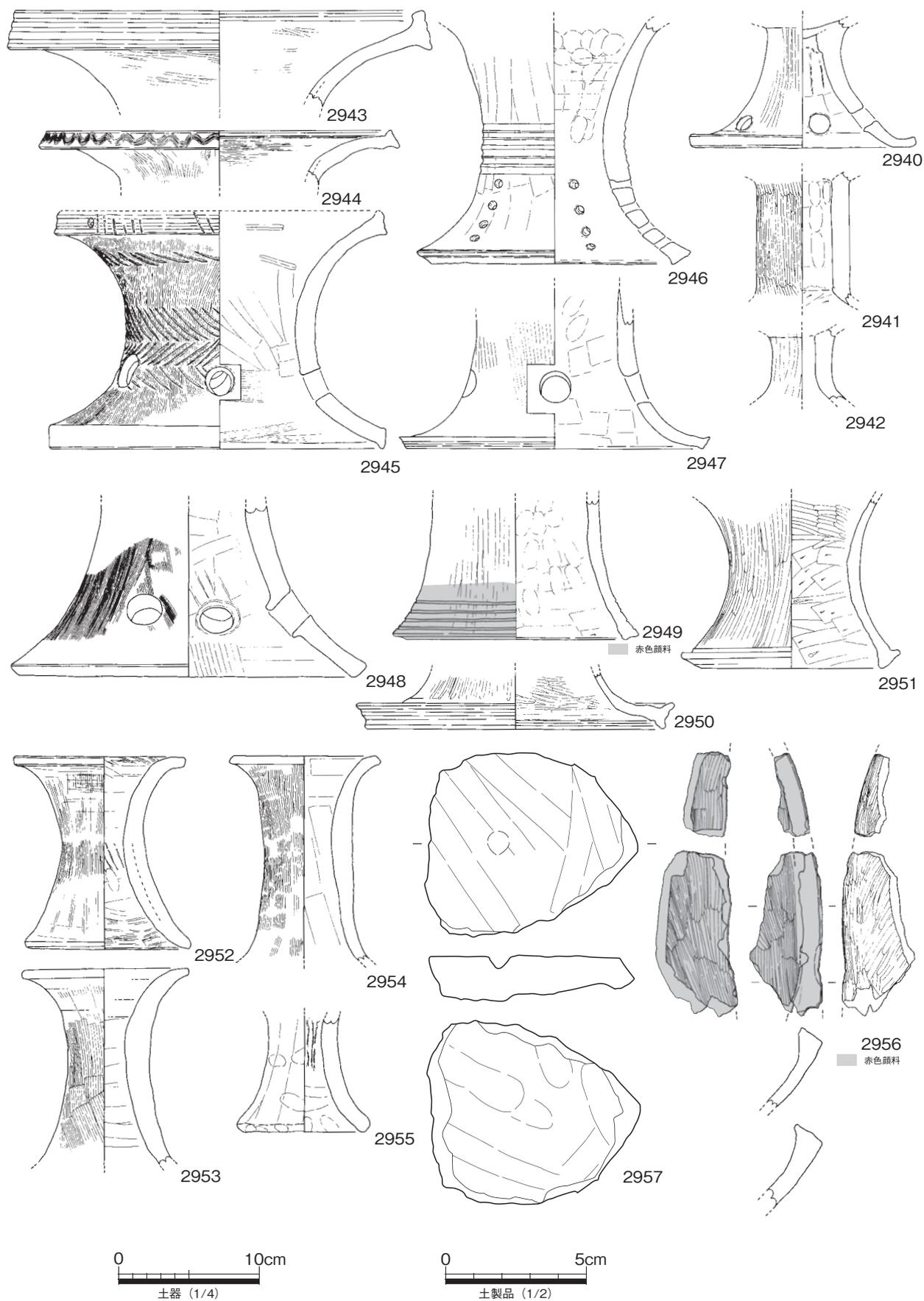


図 355 SR02 上層溝下層 B ブロック番号取り上げ出土遺物 (4)

SR02 上層溝下層出土遺物 (図 356・357)

土器 出土土器には、壺(2958.2959)、甕(2960.2961)、鉢(2962～2965)、高杯(2966～2969.2971)、回転台形土器(2977)、支脚(2972～2976)がある。土器群の時間的位置付けは、弥生後期前半中段階から同新段階の時間幅の中で捉えることができ、吉備・安芸等からの搬入土器を含むものとなっている。

2962の大形鉢は、鈍く折り曲げられる口縁部と肩部外面に貝殻腹縁による列点紋を描くもので、安芸地域からの搬入品と見られる。時間的な位置付けは、伊藤氏の後期前葉の後期Ⅰ-2様式に比定される。2966の高杯は外側のみに拡張する口縁端部に淡灰白色の胎土をもつ。形態から吉備地域からの搬入土器と見られ、鬼川市Ⅰ式に比定される。2967は全体にベンガラと見られる赤色顔料の塗布が認められ、胎土中に角閃石を多く含むほぼ完形の高杯であり、鬼川市Ⅰ式新、あるいは後期Ⅴ-2様式に比定される。2970は器台の可能性が高い。2968は脚部内面を除き全面にベンガラと見られる彩色を施す完形の高杯であり、胎土中に角閃石を多く含む。形態・胎土から備中地域の鬼川市Ⅲ式に比定される。(信里)

石器 2978は砂岩製磨石である。表裏面ともに使用面を残す。周縁は被熱により破断する。2979は安山岩製砥石である。断面が扁平な二等辺三角形を呈し、一側縁にのみ顕著な使用痕が残る。長軸方向の線状痕が顕著で、上端付近には斜方向の短い刃潰し痕が残る。(森下)

SR02 上層溝下層出土遺物 (図 358～365)

土器 出土土器・土製品には、壺(2980～3020.3041)、甕(3021～3040.3042～3050)、鉢(3051～3060.3072～3074)、台付鉢(3061～3071)、高杯(3075～3093)、器台(3094～3100)、支脚(3101～3105)、蓋(3106)、分銅形土製品(3108)、小形土器(3107)がある。土器群は一部に弥生後期前半古段階のものを含むものの、大半は後期前半中段階から新段階の所産と推定することができる。また、吉備・土佐・安芸・東北部九州からの搬入土器を多く含み、併行関係を推定する際の良好な資料群と評価することができる。

2980の広口壺は、頸部にヘラ描き施紋される突帯を施し、大きく外反する口縁端部に凹線紋帯と縦位の棒状浮紋を施す。胴長の器形を想定することができ、胎土は乳白色を発色する。突帯や形態の特徴から、伊予地域等の西部瀬戸内南岸からの搬入品である可能性が高い。2981は垂下する口縁部外面に凹線紋と連続する円形浮紋を施す大形壺である。形態や施紋、胎土中に粗粒の角閃石を多く含むことから、河内地域からの搬入品と考える。河内地域の西ノ辻Ⅰ式、あるいは後期Ⅴ-3様式に比定される。2982は垂下する口縁部に凹線紋と円形浮紋を配する大形壺の口縁部である。また、胎土中に角閃石は含まれない。明確な地域の特定は困難であるが、播磨東部から西摂地域にかけての搬入品の可能性が高い。時間的には、同地域の後期前葉の土器様式に帰属するものと考えられる。2983、2984は頸部に複数の沈線紋を施す長頸壺であり、形態から備中地域からの搬入品と考える。時期的には、鬼川市Ⅰ式・後期Ⅴ-1～Ⅴ-2様式に比定される。

2988の広口壺は、粘土貼り付けによって口縁部を成形し、頸部外面に不規則な櫛描・ヘラ描き施紋、口縁部内面に円形浮紋及びヘラ描き沈線を行う。胎土は赤褐色を呈するもので、摩滅した砂粒は見られないものの土佐地域からの搬入土器と考えられる。同地域に類似品を見出し難いが、後期初頭から前葉に比定される。

2997、2998、3000は記号紋が見られる長頸壺であり、2997は櫛描原体による列点、2998はヘラ描き、3000は縦位の棒状浮紋によって記号紋を表現する。3001の長頸壺は薄手で内面に指頭圧痕を明瞭に留

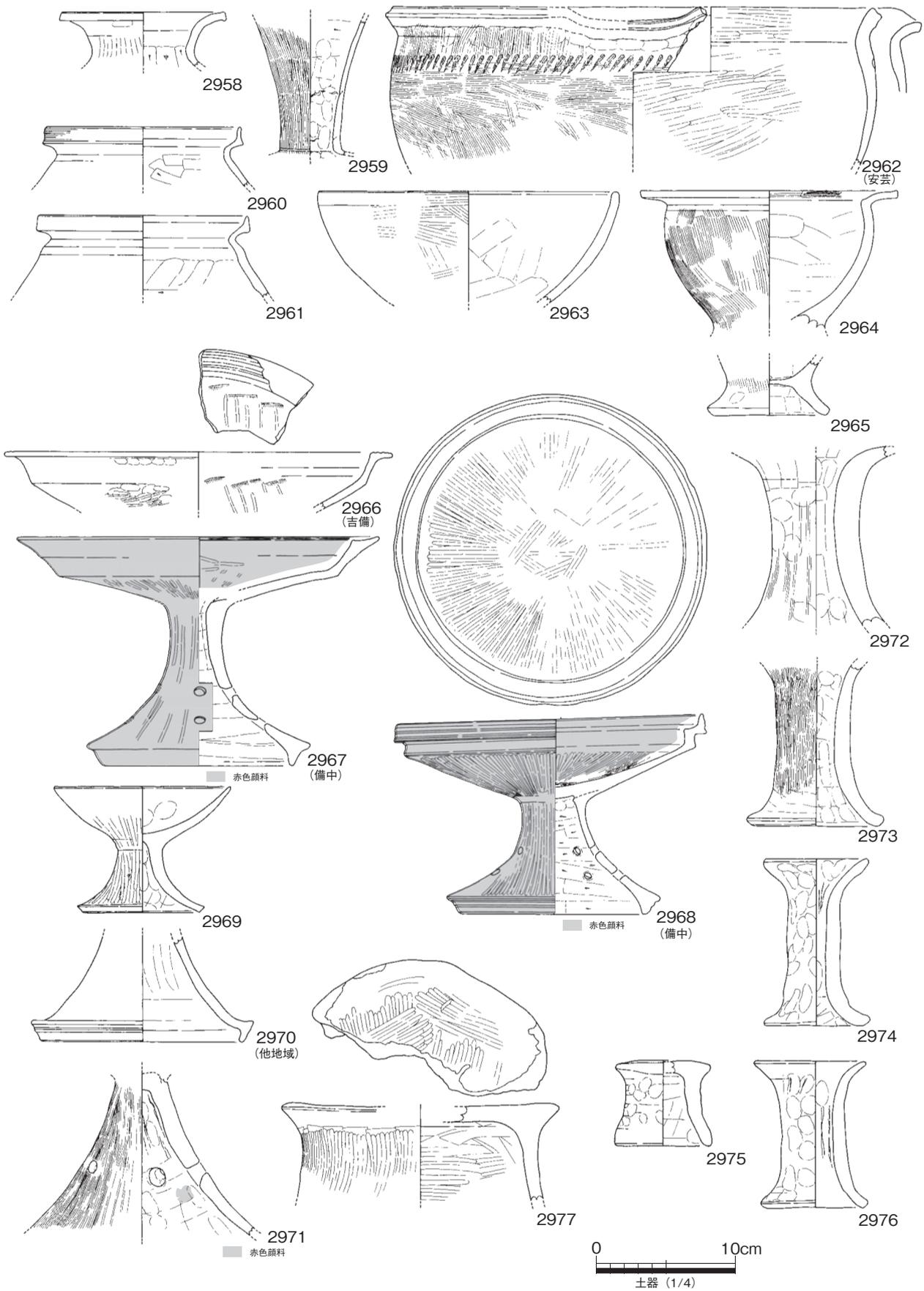


図 356 SR02 上層溝下層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (1)

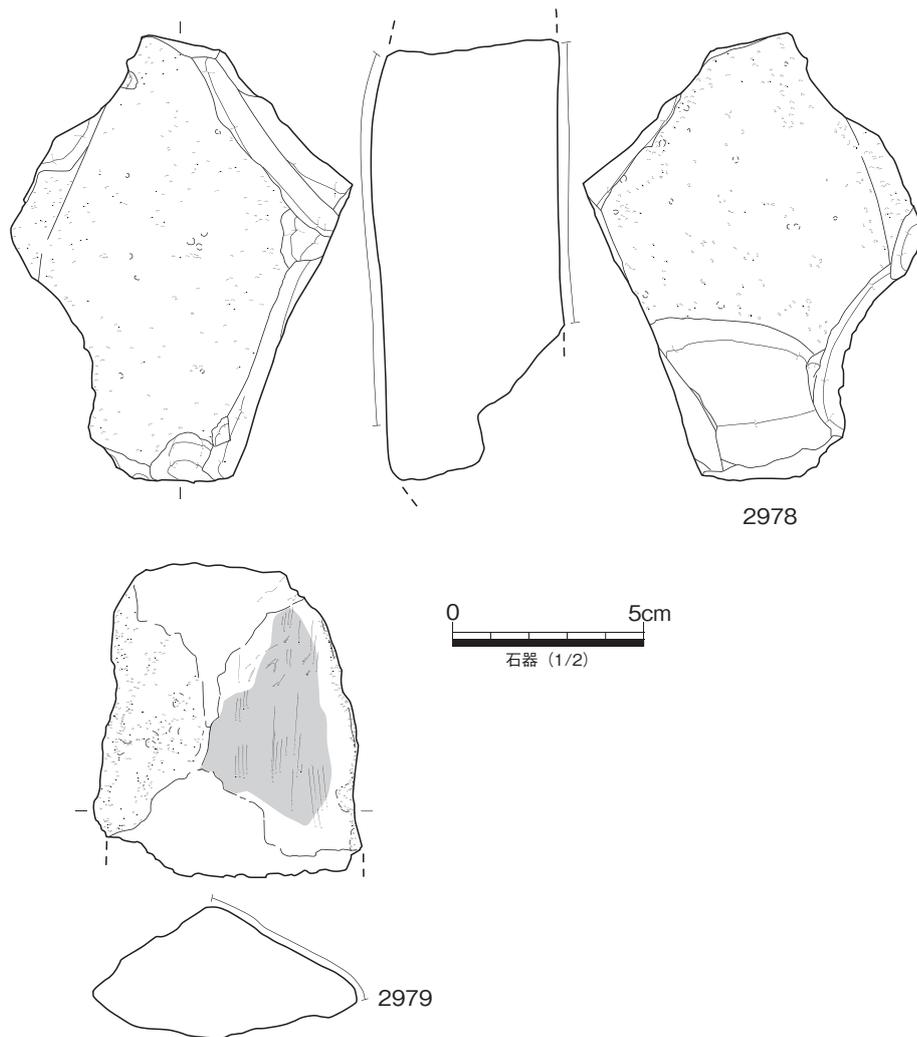


図 357 SR02 上層溝下層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (2)

め、胎土中に角閃石を多く含む高松平野の香東川下流域産土器である。下川津Ⅰ式、又はそれに若干遡る時期の所産と見られる。3009の無頸壺は、角閃石を多く含み灰白色を呈する胎土をもつ。形態・胎土の点から搬入土器と考える。無頸壺という簡素な器形のため、地域の特定が困難であるが、26次調査で出土した豊前地域と推定される鋤先口縁をもつ壺に極めて類似した胎土であることから、豊前などの東北部九州地域からの搬入を推定しておきたい。

3010は頸部に縦位の竹管紋による記号紋の表現を行い、ベンガラと見られる赤色顔料を塗布する。3011は胴部最大径付近に2条の貼り付け突帯を施し、外面の全面にベンガラと見られる赤色顔料を塗布する壺であり、胎土中に角閃石を多く含む。形態・胎土の特徴から、備中地域からの搬入品と考える。時期的には、類似品が見出し難いが、鬼川市Ⅱ式以前に同様の壺は含まれないことから見て、後期後葉の鬼川市Ⅲ式・後期Ⅴ-5様式に比定される。3012は吉備系の細頸壺の胴部片、胎土は在地品と変わらない。3013の短頸壺は、反りのある肩部の形態に違和感があり、淡灰白色の胎土をもつことから、吉備地域からの搬入品と考える。時期的には、鬼川市Ⅰ式の可能性が高い。3041は球形を帯びた胴部に突面底に類似した底部をもつ壺であり、胎土中に角閃石を含む。この胎土は旧練兵場遺跡26次調査で出土した豊前からの搬入品の壺に類似するもので、底部形態を含めて考えると東北部九州地域からの搬入品と推定できる。

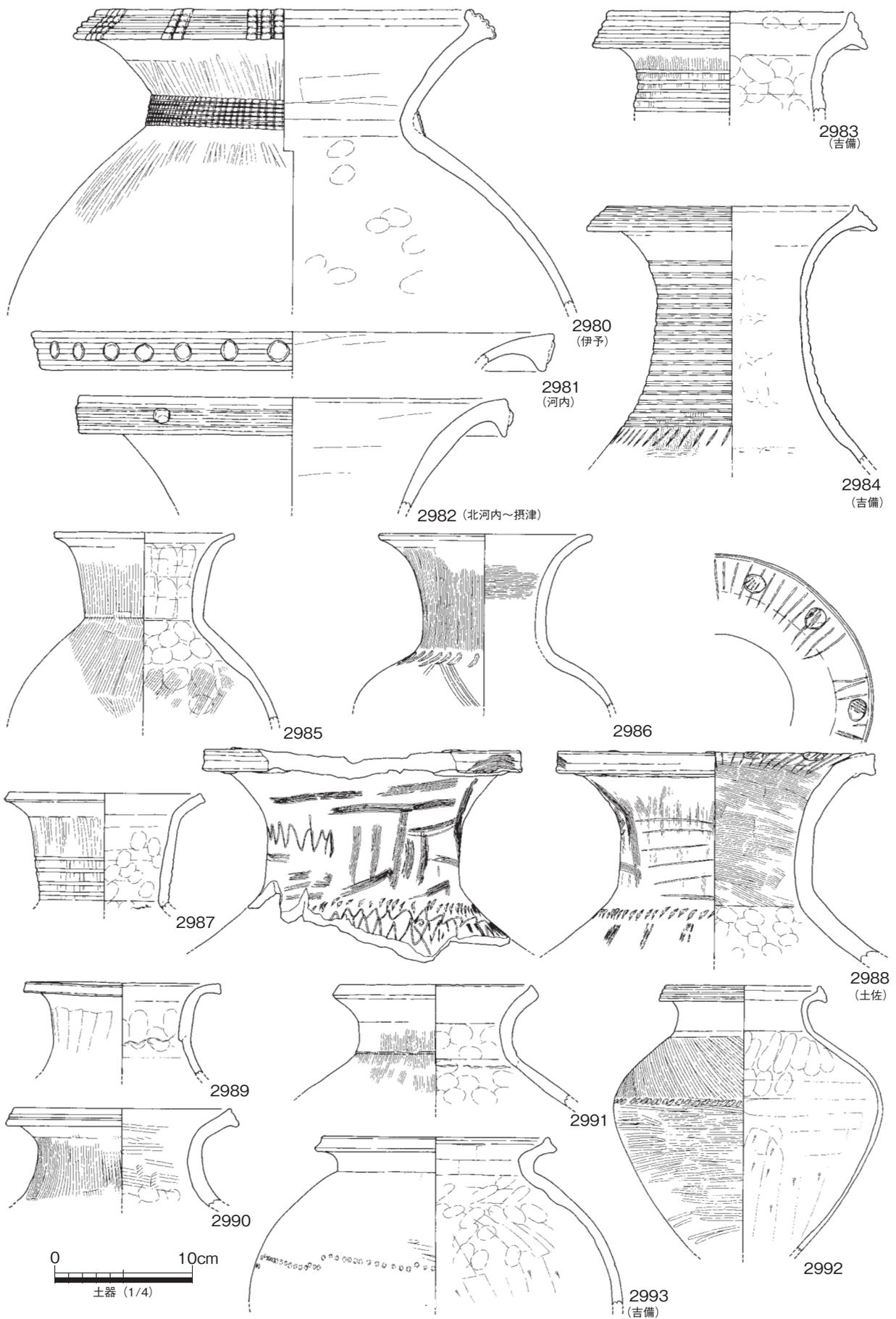


図 358 SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物 (1)

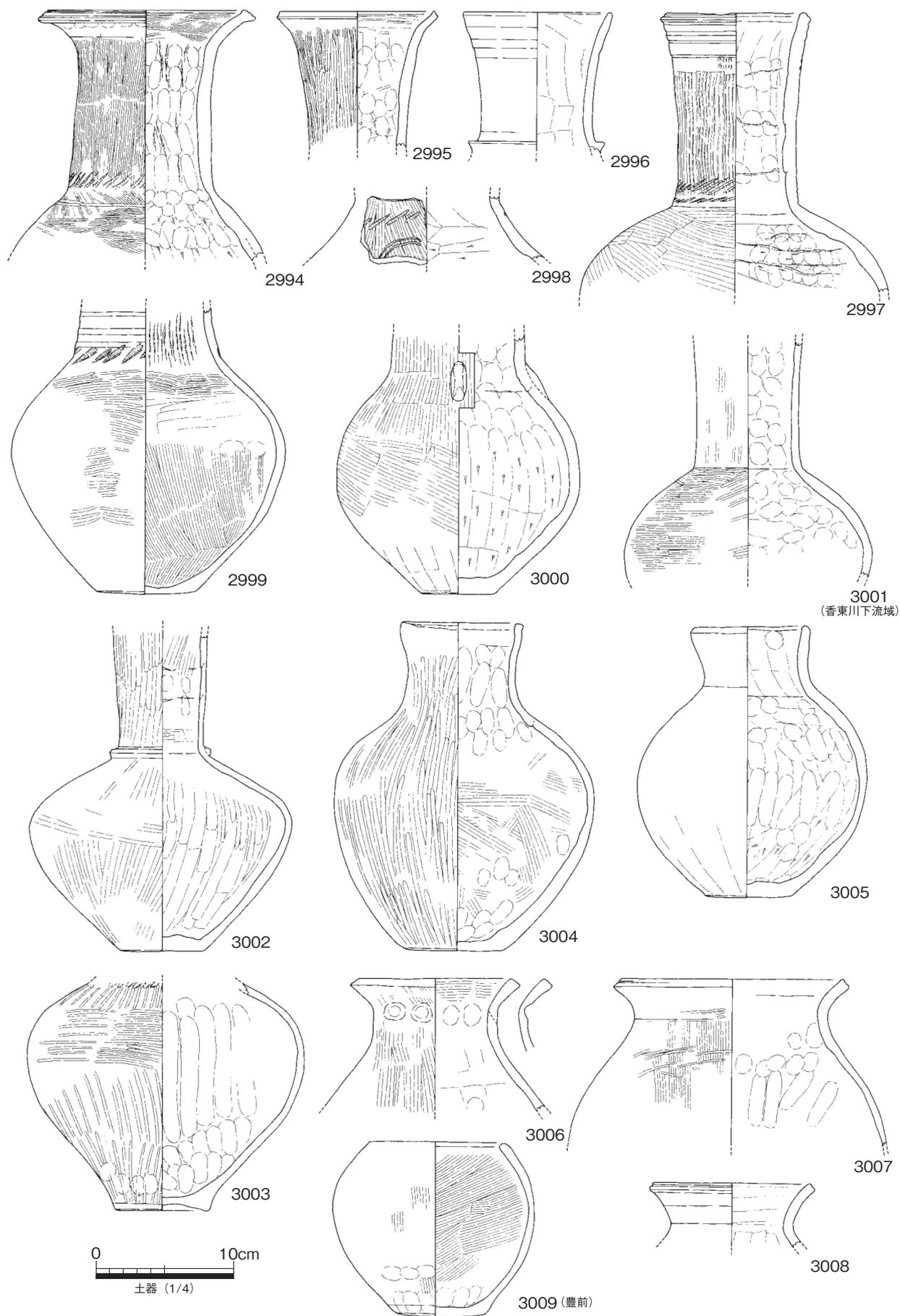


図 359 SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物 (2)

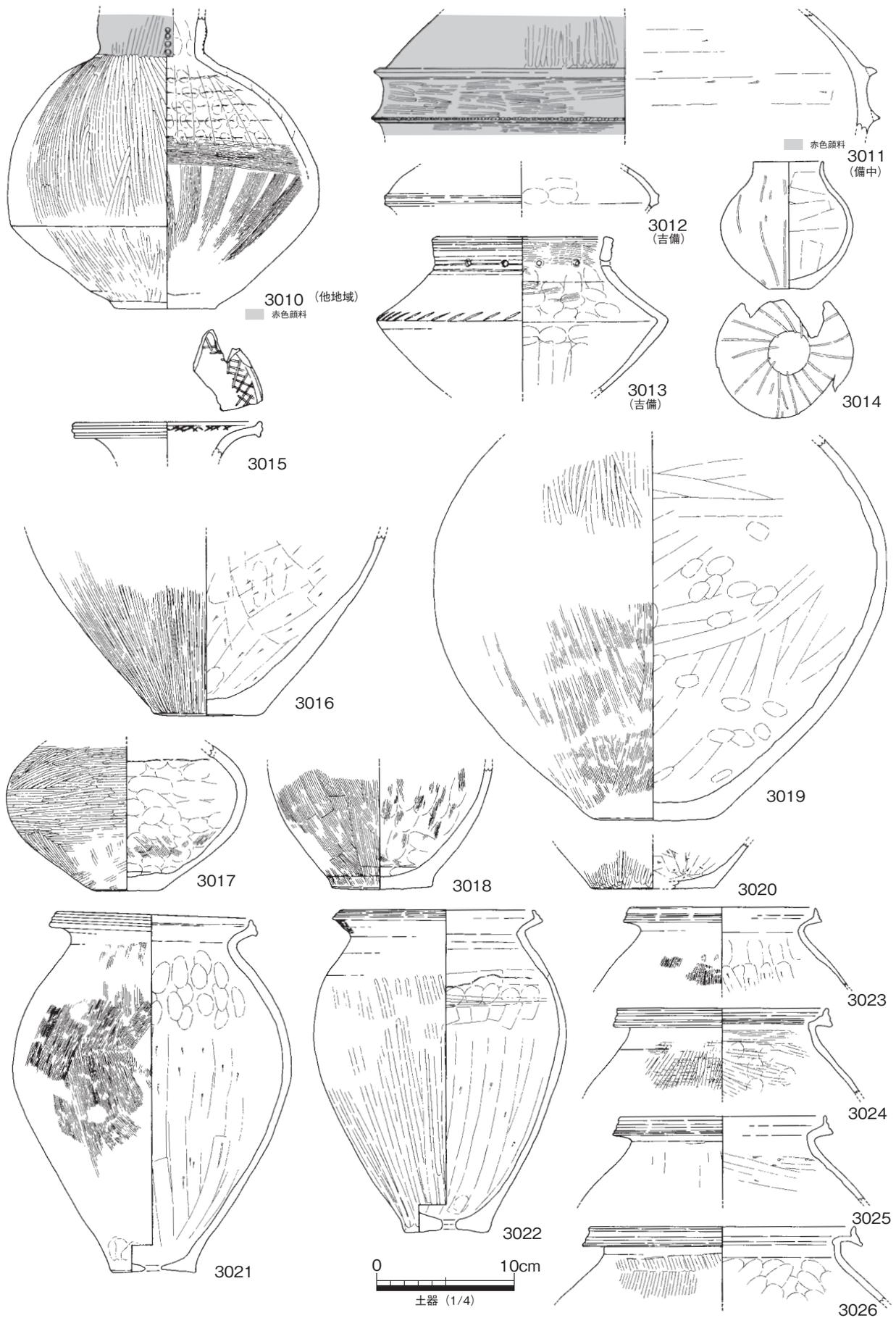


図 360 SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物 (3)

小形甕あるいは鉢と見られる 3034 は、肩部の上位に列点紋を施す。口縁部形態や胎土は在地品と違和感がないが、列点紋の属性に安芸地域からの影響が想定される。3046 は胎土中に粗粒の雲母片と摩滅のある砂粒をやや多く含む甕である。口縁部形態は在地品と区別ができないが、胎土の点で違和感があることから、他地域からの搬入品とする。具体的な地域の特定はできない。

3061 の台付鉢は、外面及び脚部内面にベンガラと見られる赤色顔料の塗布が認められる。胎土中に雲母、角閃石をやや多く含む備中地域からの搬入品と考える。類似品の確認はできないが、口縁部の形態から鬼川市Ⅱに相当する時期に帰属するものと見られる。3062 は外面にベンガラと見られる赤色顔料の塗布が見られる台付鉢である。赤色顔料や形態から備中地域からの搬入品と見られ、鬼川市Ⅱ式、後期Ⅴ-2 様式に位置付けられるものとする。

3078、3079、3088 の高杯は外側のみに拡張する口縁部形態や脚部の施紋状況から吉備系と考えられ、鬼川市Ⅰ式に比定される。3094～3100 の器台は、弥生後期前半古段階から新段階のものを含み、3100 が最も新しい形態をもつ。

3105 は二股状の突起をもつ支脚であり、中空の柱状部をもつ。3108 は分銅形土製品であり、ヘラと見られる原体による列点で加飾する。3109 は一部に赤色化が認められる焼土塊であり、胎土は精製である。(信里)

石器 3110 は風化が進んだサヌカイト製の打製石鏃である。縄文期の混在品と考える。3111 は砂岩製の磨石である。側縁に研磨痕、腹面に敲打痕を残す。(森下)

SR02 上層溝下層出土遺物 (図 366・367)

土器 出土土器・土製品には、壺(3112～3118)、甕(3119～3121.3125)、高杯(3122)、鉢(3123.3124)、紡錘車(3127)がある。土器群は弥生後期前半古段階から後期後半古段階の時間幅で捉えられ、吉備地域からの搬入・模倣土器を含む資料とすることができる。

3112 の長頸壺は、弥生後期前半古段階の特徴を留める完形品で、胴部下方に内面からの打ち欠き穿孔が見られる。3115 の頸胴部境には円形浮紋を施し、記号紋表現とする。3117 は吉備系と考えられる。胎土は在地品と遜色がないもので、模倣土器の可能性が高い。3118 は吉備地域からの搬入品と見られる壺で、法量から広口壺の胴部片と推定される。時間的には、同地域における鬼川市Ⅰ式に比定される。3125 の甕は口縁部形態から、弥生後期後半古段階に下る資料と見られる。3122 の高杯は、河川下位層からの巻き上げに伴う遺物であり、弥生中期後半新段階に位置付けられる。3127 の紡錘車は一部を欠損するものの、転用品ではなく穿孔部の断面が厚く、周縁部を薄く仕上げる。(信里)

石器 3128～3131 はサヌカイト製打製石鏃である。3128 は側縁の基部側が窄まり、矮小な凹基を作出するが、調整加工は粗く未製品の可能性もある。3129 は凸基式鏃の基部が折損する。3130、3131 は平基式である。3132 は砂岩製の叩石である。腹面に顕著な敲打痕を残す。(森下)

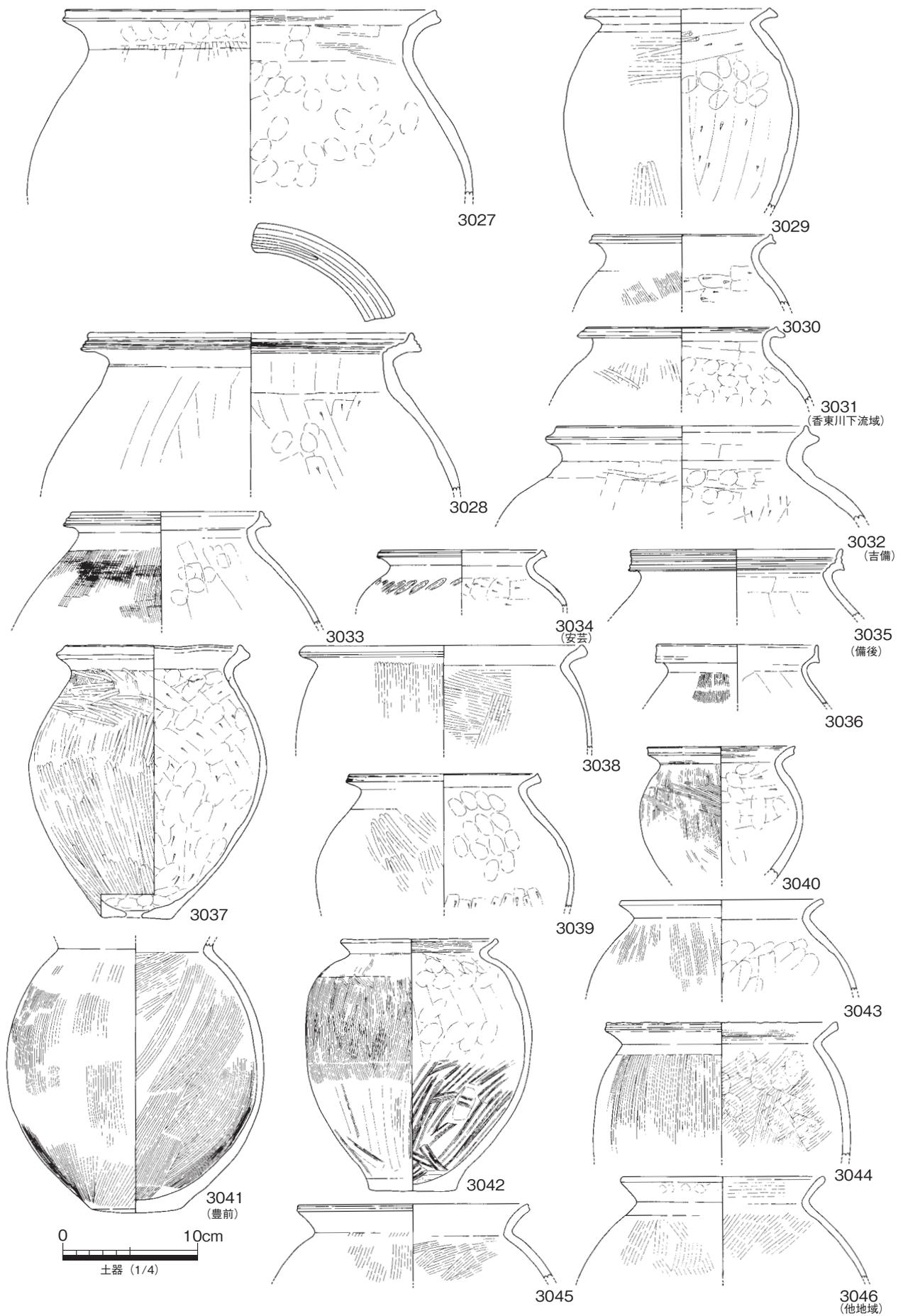


図 361 SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物 (4)

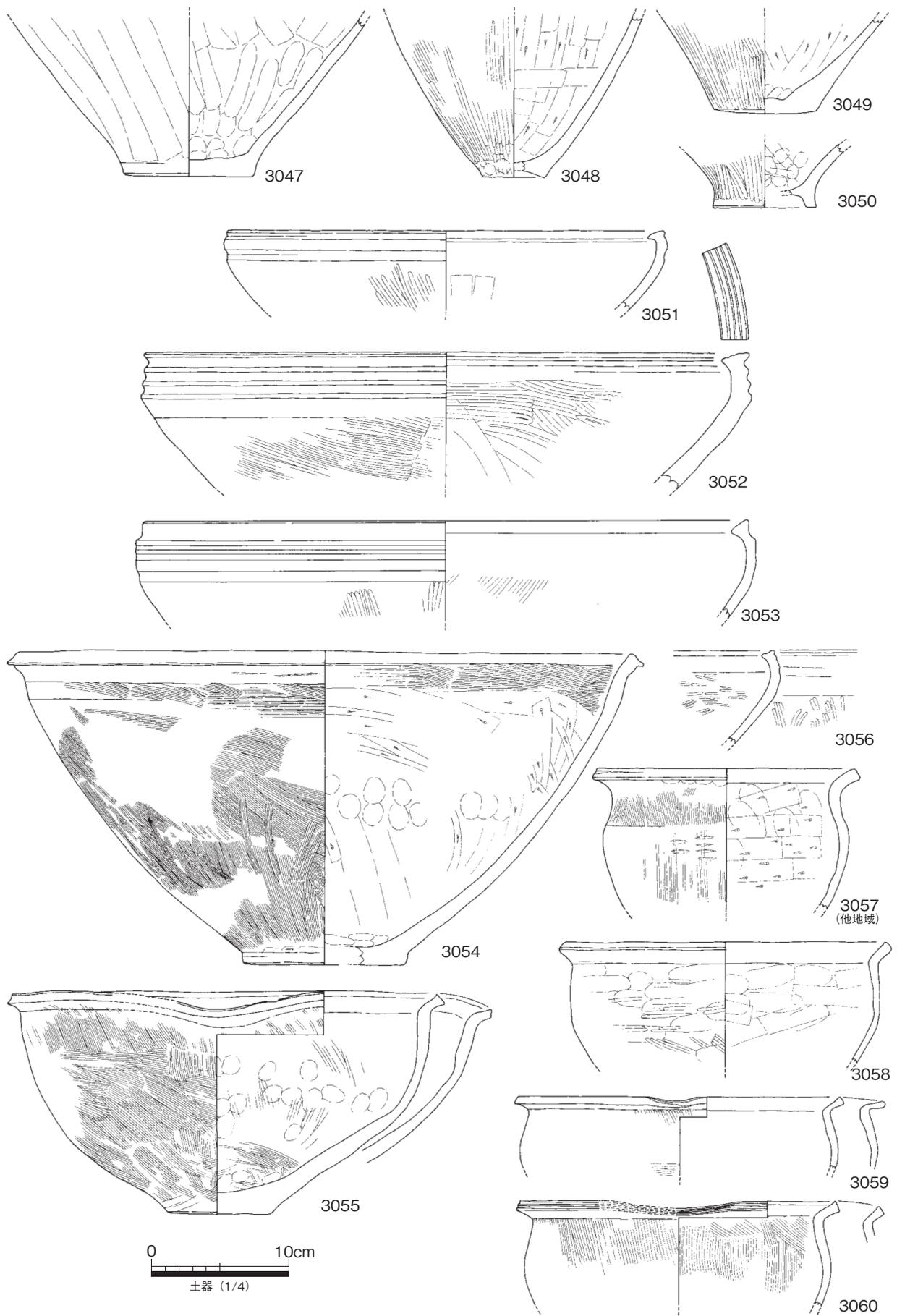


図 362 SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物 (5)

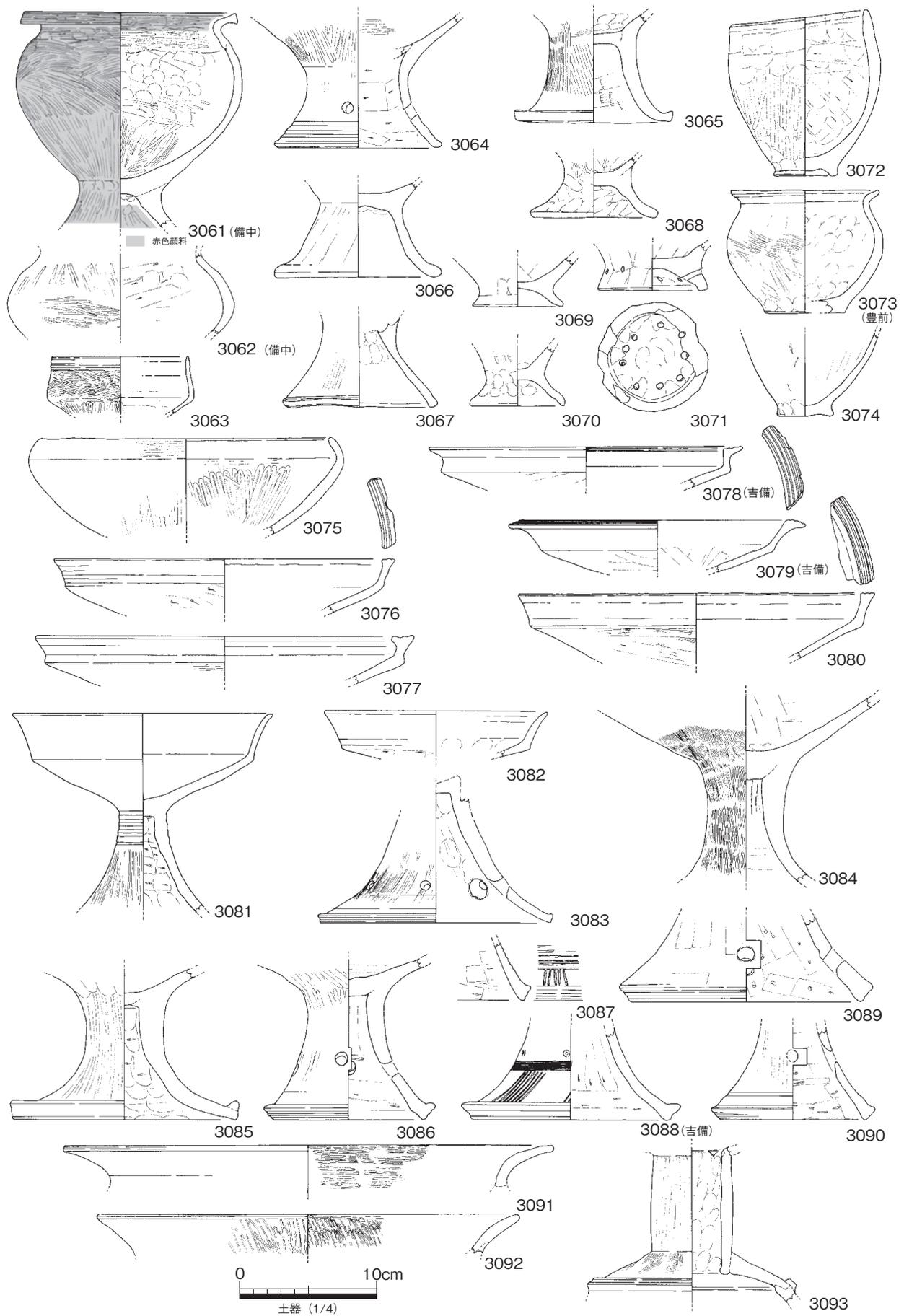


図 363 SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物 (6)

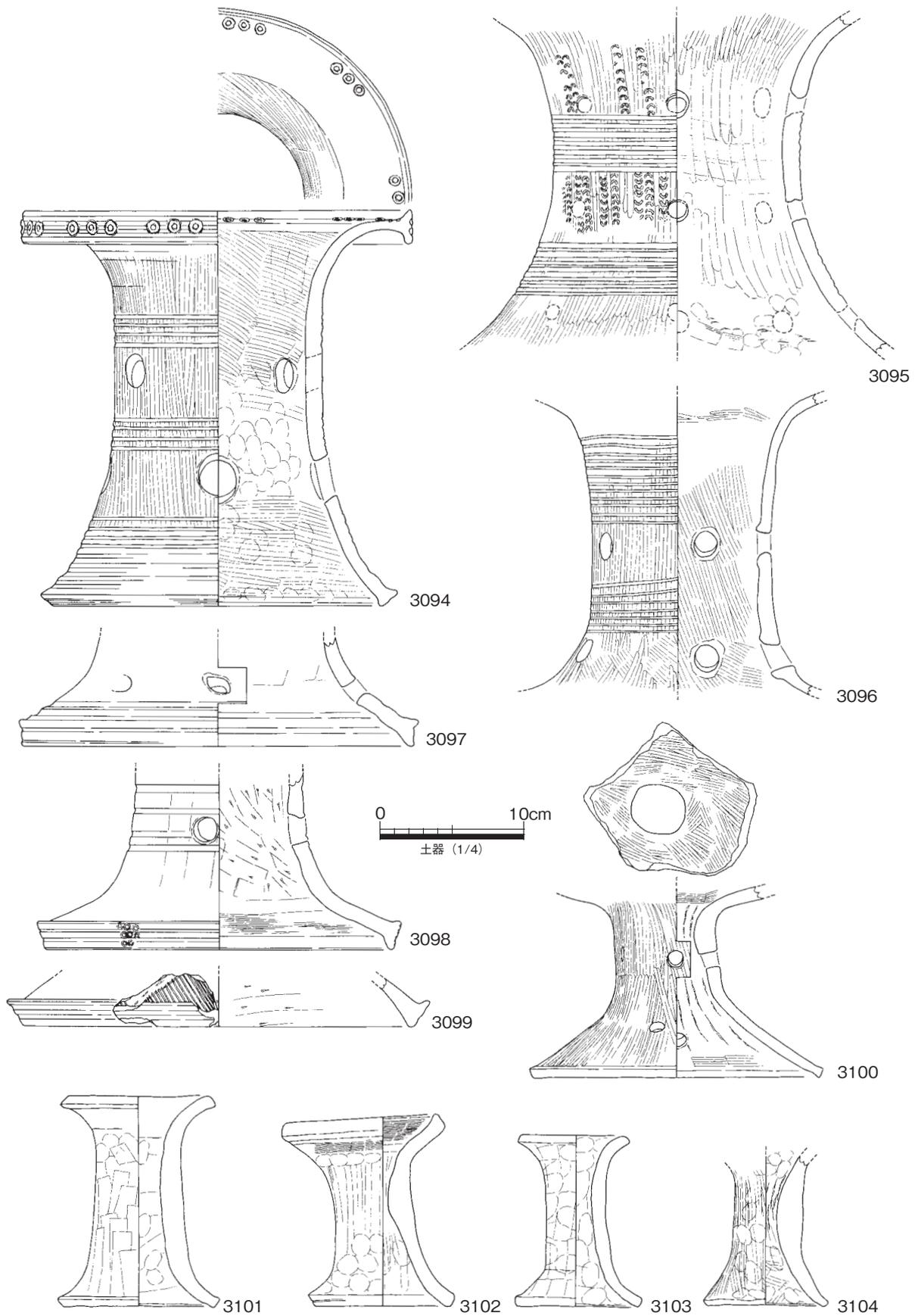


図 364 SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物 (7)

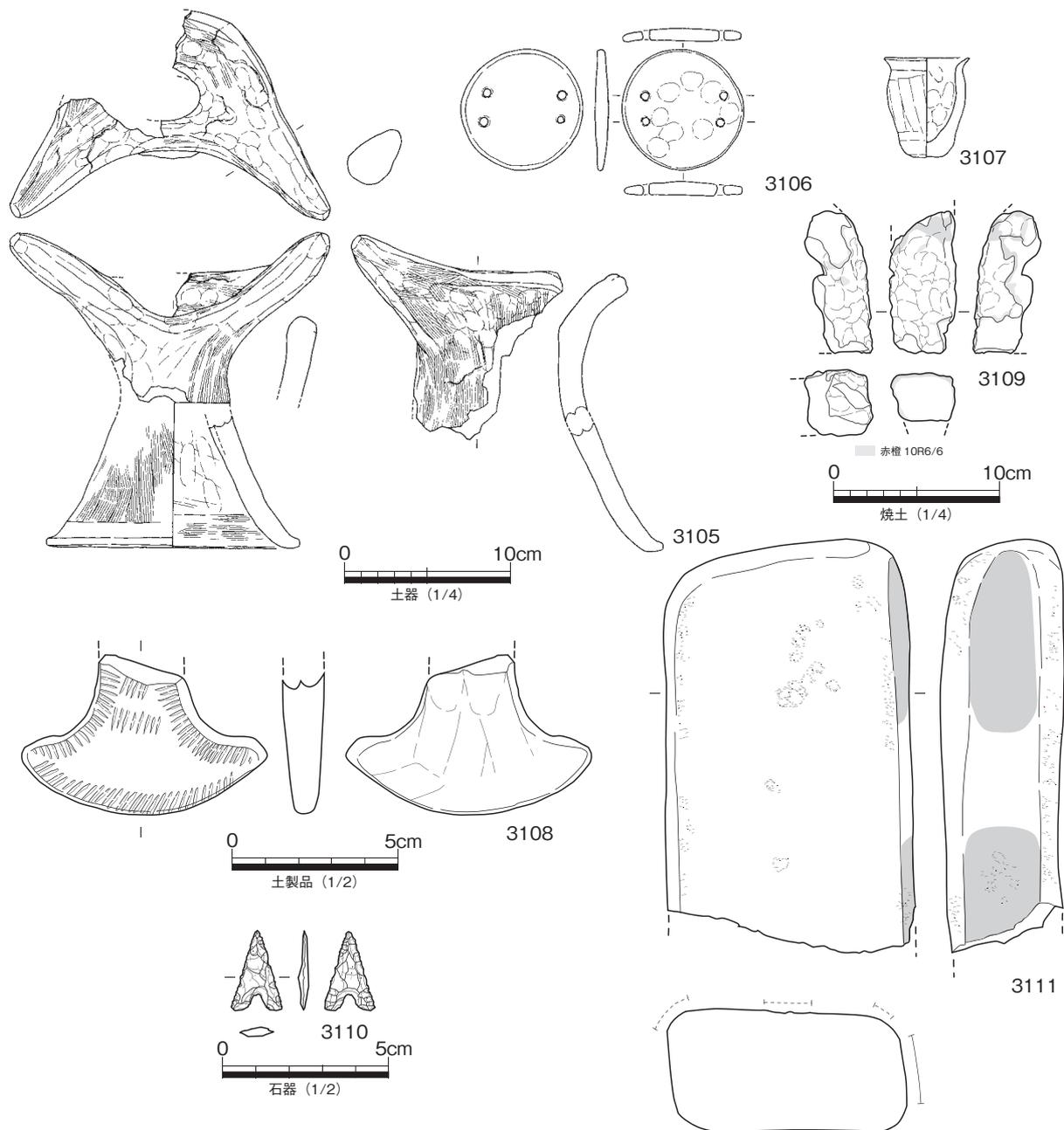


図 365 SR02 上層溝下層 L・J ブロック番号取り上げ出土遺物 (8)

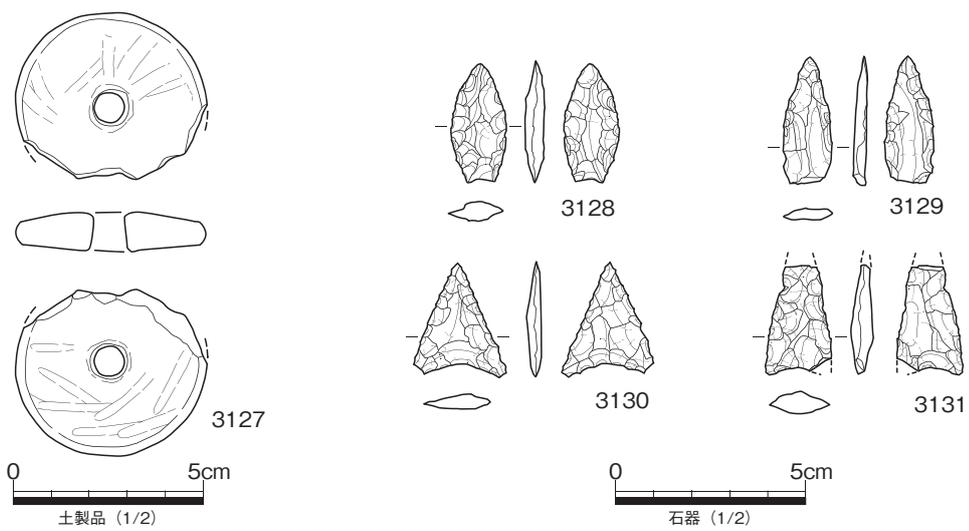
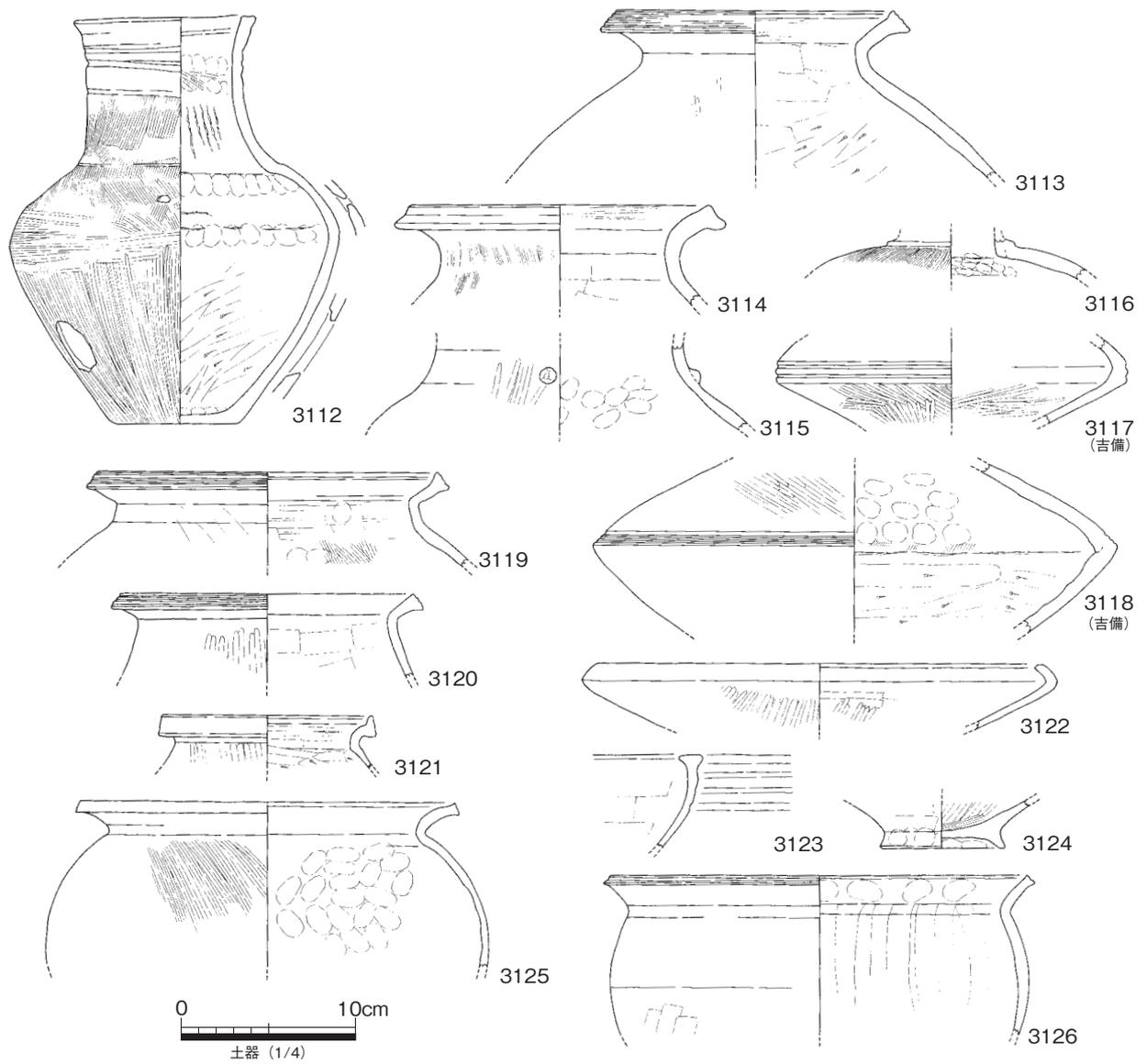


図 366 SR02 上層溝下層 B ブロック出土遺物 (1)

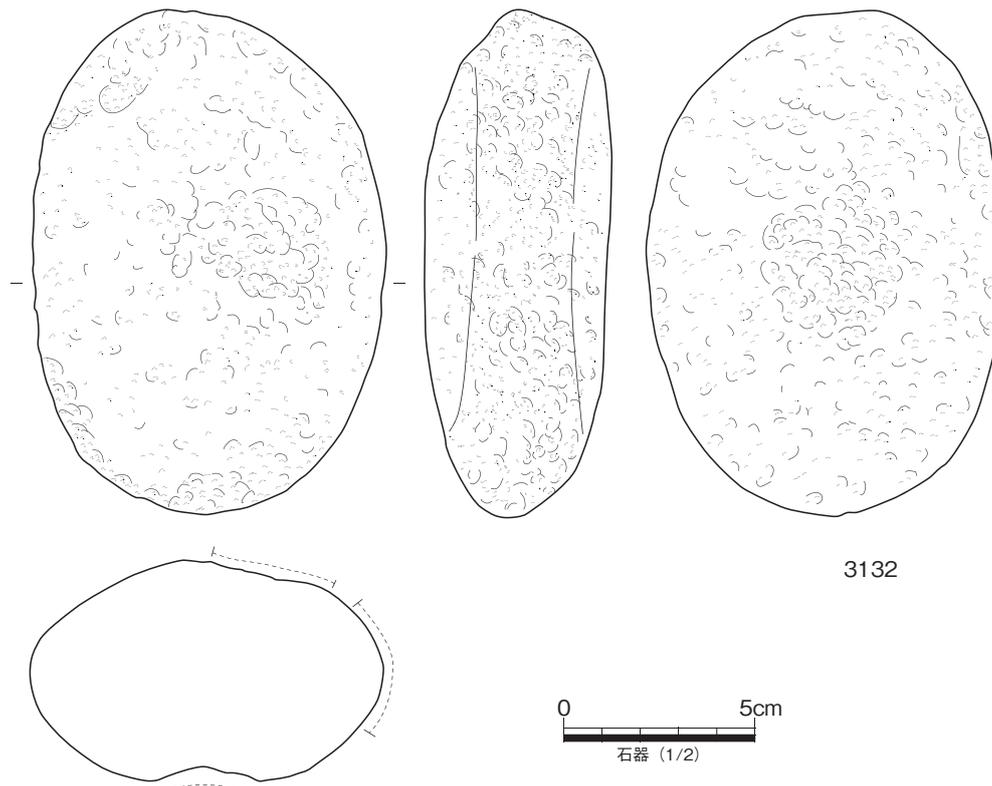


図 367 SR02 上層溝下層 B ブロック出土遺物 (2)

SR02 上層溝下層出土遺物 (図 368・369)

土器 出土土器・土製品には、壺 (3133～3136.3139～3141)、甕 (3137.3138.3142～3145)、鉢 (3146)、台付鉢 (3149.3150)、高杯 (3147.3148)、器台 (3151)、蓋 (3153)、支脚 (3152) が見られる。これらの土器群は、一部に中期後半の土器を含むものの、弥生後期前半期のものが主体であり、一定量の吉備、阿波等の他地域からの搬入・模倣土器が含まれる。

3134 の大形壺は、頸部の絞まりがあまり見られず、外面に横位の沈線とヘラ描きによる列点紋を羽状に描くもので、施紋状況と器形が在地品に見られないことから、搬入・模倣土器の可能性はある。3140 の長頸壺は、竹管紋を横位で列状に施すことにより、記号紋の表現を行う。3141 の長頸壺は、頸部外面に多条の沈線を施す。

3148 の高杯は、口縁部の形態から吉備系と見られ、鬼川市 I 式に比定される。3150 の台付鉢は、片岩粒を含む赤褐色の胎土をもつ阿波地域からの搬入品である。3151 の器台は脚端部の形態と、柱状部外面の凹線紋帯から、他地域からの搬入品と考える。具体的な地域の特定ができないが、吉備地方を含めた山陽地方が想定される。(信里)

焼土 3154 は焼土である。外面に緩やかなカーブをもつ調整面があり、内面には直径約 1cm の棒状圧痕が残る。外面は橙色、内面は赤色に変化する。

石器 3155 は粘板岩製の磨製石庖丁である。図の上端が側縁に、右側が刃部となる。破損面が大部分であるが、残存する面は丁寧な研磨が施される。3156 はサヌカイト製楔状石核である。3157 は結晶片岩製柱状片刃石斧である。(森下)

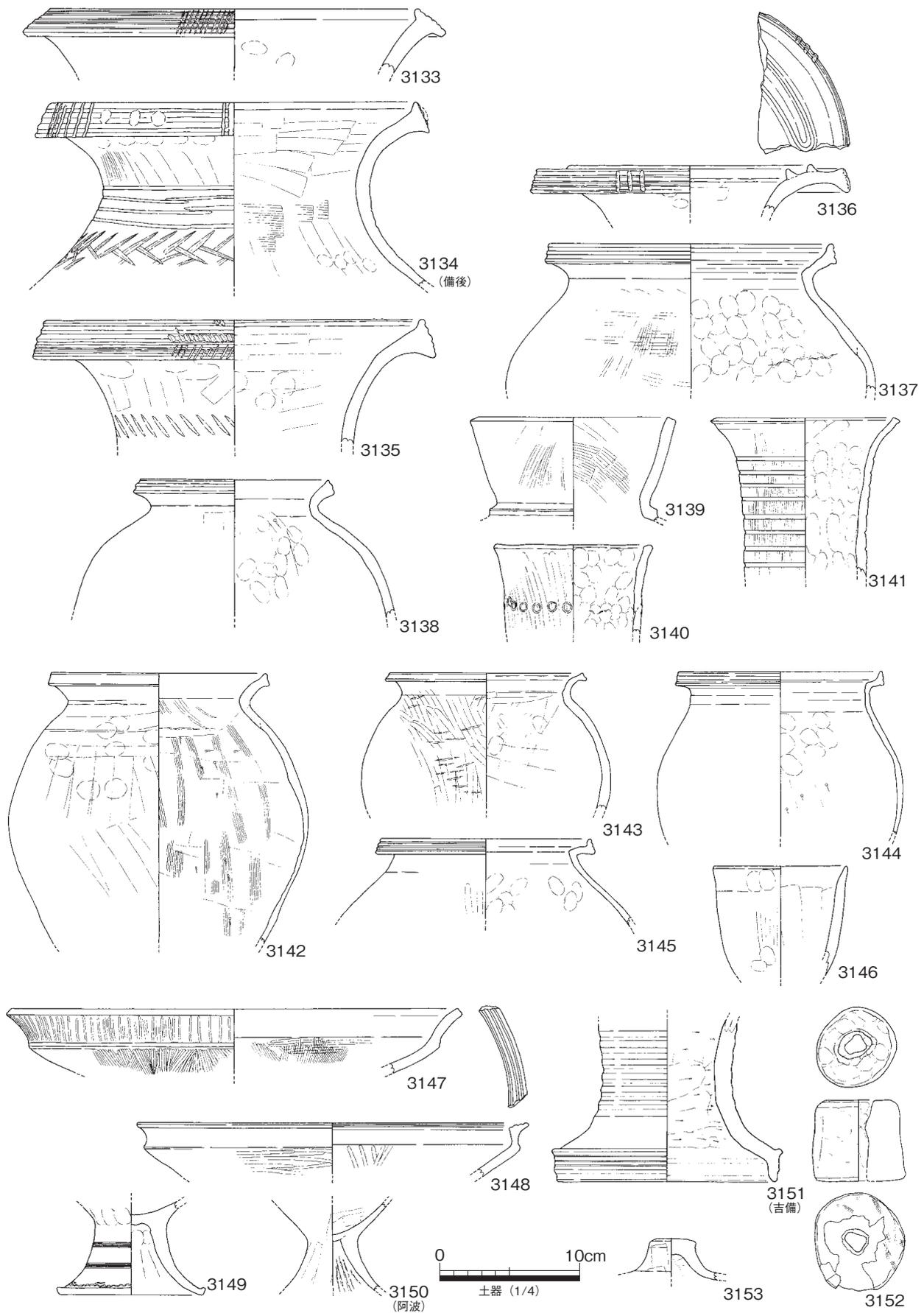


図 368 SR02 上層溝下層 F ブロック出土遺物 (1)

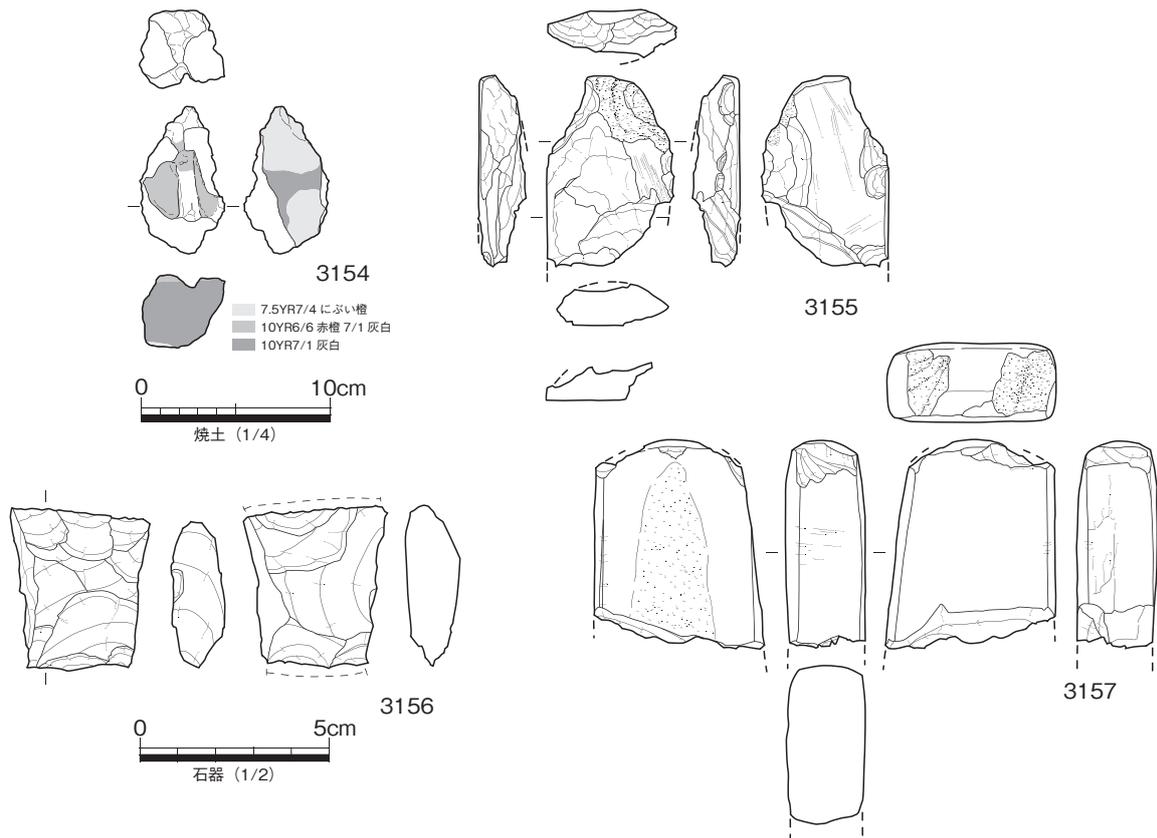


図 369 SR02 上層溝下層 F ブロック出土遺物 (2)

SR02 上層溝下層出土遺物 (図 370 ~ 372)

土器 出土土器・土製品には、壺 (3158 ~ 3175.3197)、甕 (3176 ~ 3196)、鉢 (3198 ~ 3204)、高杯 (3205 ~ 3222)、器台 (3223 ~ 3225)、支脚 (3226 ~ 3231)、小形土器 (3232)、加工円盤 (3233.3234) がある。土器群の時間的な位置付けは、弥生後期前半古段階から新段階のものが主体であり、吉備・土佐等の搬入・模倣土器が伴う。

3159 の広口壺は、粘土貼り付けによって成形された口縁部をもつ。粘土貼り付けの口縁部の成形は土佐地域に多く見られるものであるが、形態が若干異なっており、模倣土器の可能性が考えられる。3168 は上下に大きく拡張される口縁端部の形態から、備後地域の短頸の広口壺の可能性が高い。3172 は頸部が締まらず口縁部が緩やかに外反する壺であり、形態から土佐地域の後期初頭の資料に類似している。3174、3175 は吉備系の細頸壺の胴部片である。3197 の無頸壺は多孔を穿つもので、本遺跡を含め周辺遺跡に類例を見ない。

3184 は上方のみ拡張される口縁部をもち、胴部中位に列点紋を施す甕である。時期的には後期前半期の所産と思われるが、当該期の在地品には甕胴部外面の列点が認められないことや、口縁部形態から吉備地域からの搬入・模倣土器の可能性を指摘しておく。3183 は弥生中期後半の甕であり、下位からの巻き上げと見られる。3186 は形態が高松平野の香東川下流域産土器に類似するが、胎土は異なっている。

3201 の鉢は、扁平な器形や施紋の特徴から備後地域からの影響が看取されるが、口縁部形態が異なることから模倣土器の可能性がある。3202 は胴部下方に土器焼成に伴う破裂痕が見られる。3200 の鉢は、縦位に浮紋状の粘土貼り付けを行う。3212、3213 の高杯脚部は、柱状部外面に櫛描施紋を行うもので、

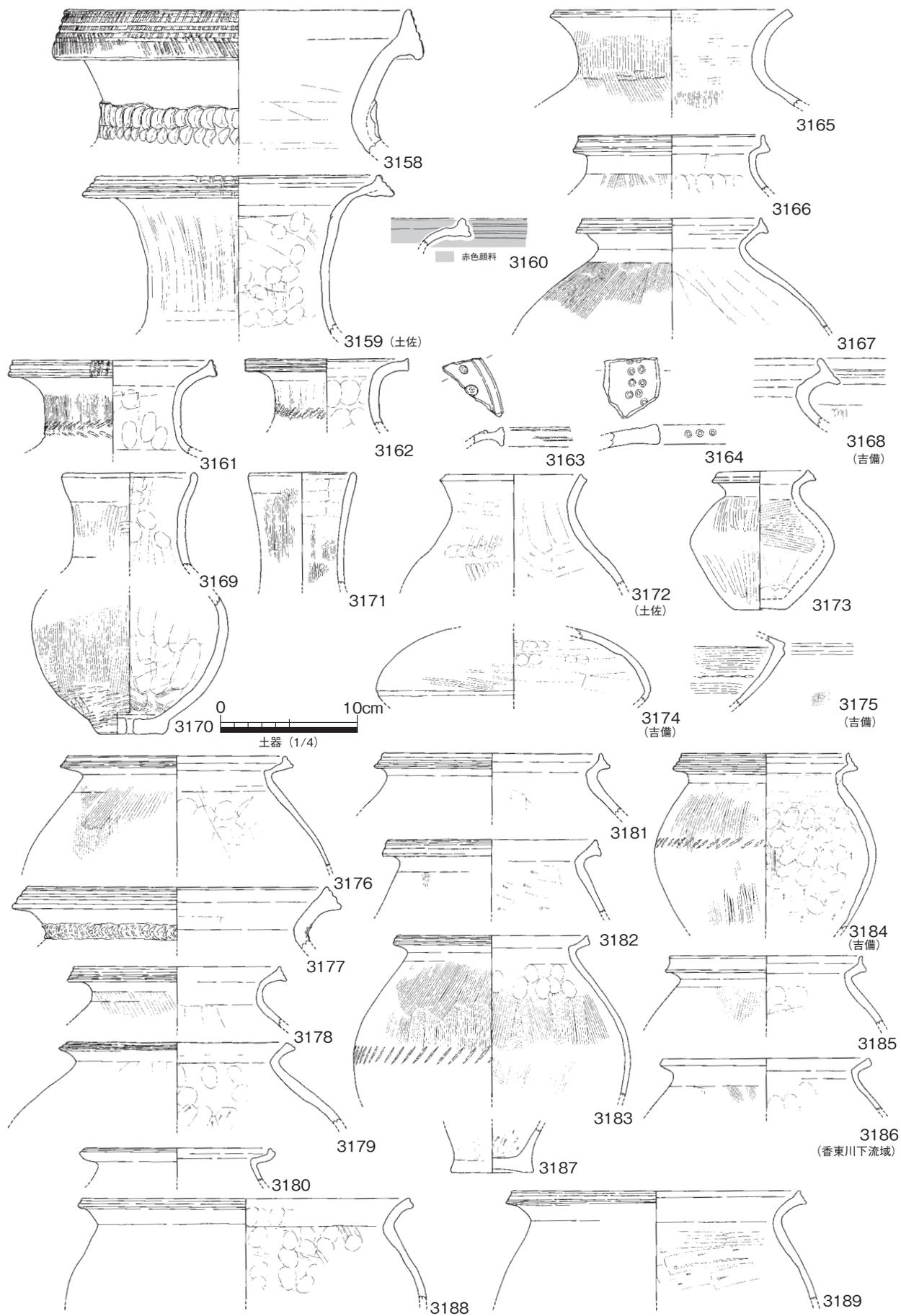


図 370 SR02 上層溝下層 L・J ブロック出土遺物 (1)

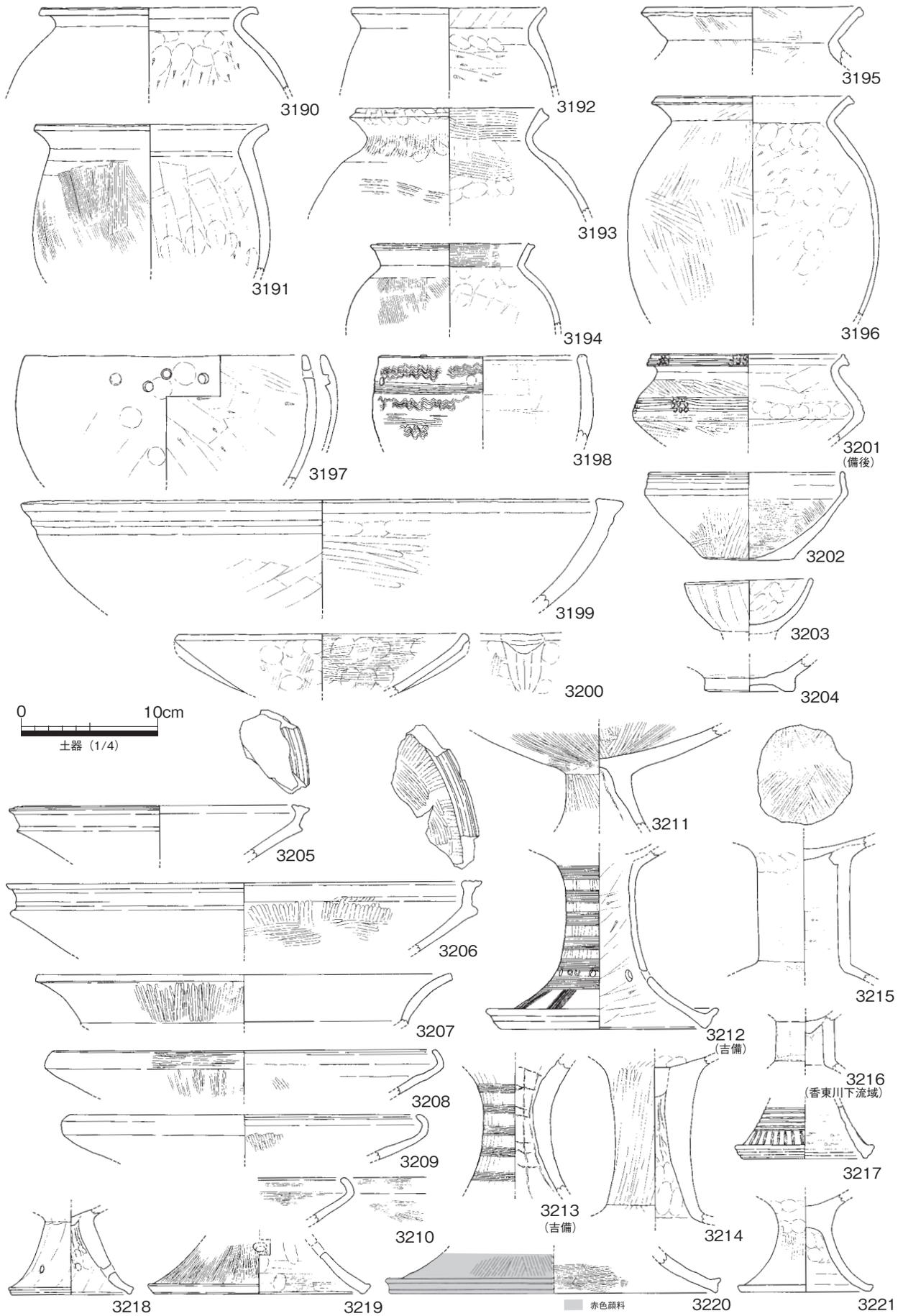


図 371 SR02 上層溝下層 L・J ブロック出土遺物 (2)

吉備地域に特徴的な属性を備える。鬼川市 I 式に比定される。3220 の器台脚部は、外面にベンガラと見られる赤色顔料の塗布が確認できる。

3224 の器台は、内外面の全面に彩色を行うもので、顔料はベンガラと見られる。在地品と異なる白色系の胎土をもつことから、他地域からの搬入品の可能性がある。

3226 の支脚は、口縁部を U 字に切欠を入れるものであり、本地域の通有品と異なる。同様の支脚は、伊予・豊前・豊後等豊後水道に面した西部瀬戸内に多く分布するものであるが、本層位の中心となる後期前半期の時期に限って見ると、豊前地方からの搬入・模倣土器と考えることができる。3233、3234 の土器片加工の円盤は、紡錘車転用途上の未成品と見られる。(信里)

石器 3235 はサヌカイト製打製石鎌である。基部形状が左右不均等であるが、側縁から先端にかけての調整加工は丁寧に施される。3236 は結晶片岩製磨製石庖丁である。節理顕著な石材を使用する。3237、3238 はサヌカイト製打製石庖丁である。3237 は表裏面が強く摩滅する。3238 は軽度な摩滅が刃部付近に見られる。(森下)

SR02 上層溝下層出土遺物 (図 373・374)

土器 出土土器には、壺 (3239.3241 ~ 3244.3246 ~ 3250.3260)、甕 (3245.3251 ~ 3257)、鉢 (3258.3259.3261.3262)、高杯 (3263 ~ 3269)、台付鉢 (3270.3272)、器台 (3273 ~ 3275)、支脚 (3276 ~ 3278) が見られる。土器群全体の様相は、下位からの巻き上げに伴う弥生中期後半の遺物を除き、弥生後期前半中段階から同新段階の時間幅をもつものであり、阿波・備後等からの搬入・模倣土器を伴う。

3239 は上方に拡張する口縁部に 3 個一対の円形浮紋を貼り付ける。形態・施紋等から他地域からの搬入品の可能性が高い。3247 は細頸壺の胴部片と見られ、鋸歯紋と見られる紋様が確認できる。3248 は複合口縁壺の口縁部であり、形態から西部瀬戸内地域からの搬入・模倣土器と見られる。3249 の胴部片は、算盤玉状の器形をもつもので、鉢の可能性もある。形態的な特徴から、備後地域からの搬入・模倣土器と考える。3260 の壺は胴長の胴部に明瞭な平底をもつ壺であり、胎土中に角閃石粒を含むもので、豊前地方と推定した土器群と同様の胎土をもつ。搬入品の可能性が高いと考えるが、地域の断定に至らない。

3245 の甕は、備後地域からの搬入品と見られ、同地域の後期初頭に位置付けられるものとする。3255 は胎土中に片岩粒を含む阿波地域からの搬入品である。3267 の高杯脚部は胎土中に角閃石を多く含む高松平野の香東川下流域産である。3269 の高杯脚部片は、備後からの搬入品と見られる。

3243 の器台には白色粘土が付着している。3279 は分銅形土製品で、側面の刺突は形骸化しており貫通しない。(信里)

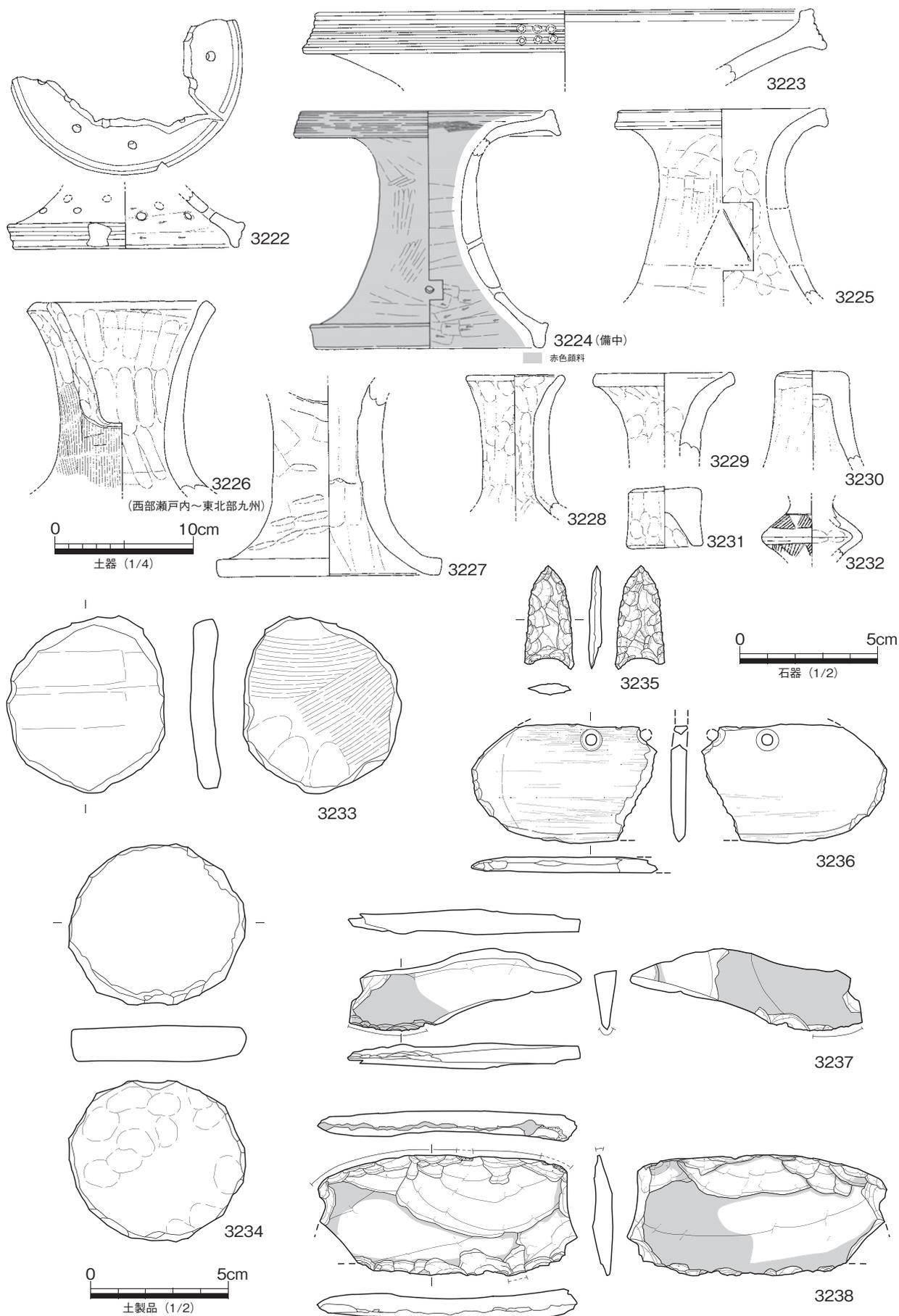


図 372 SR02 上層溝下層 L・J ブロック出土遺物 (3)

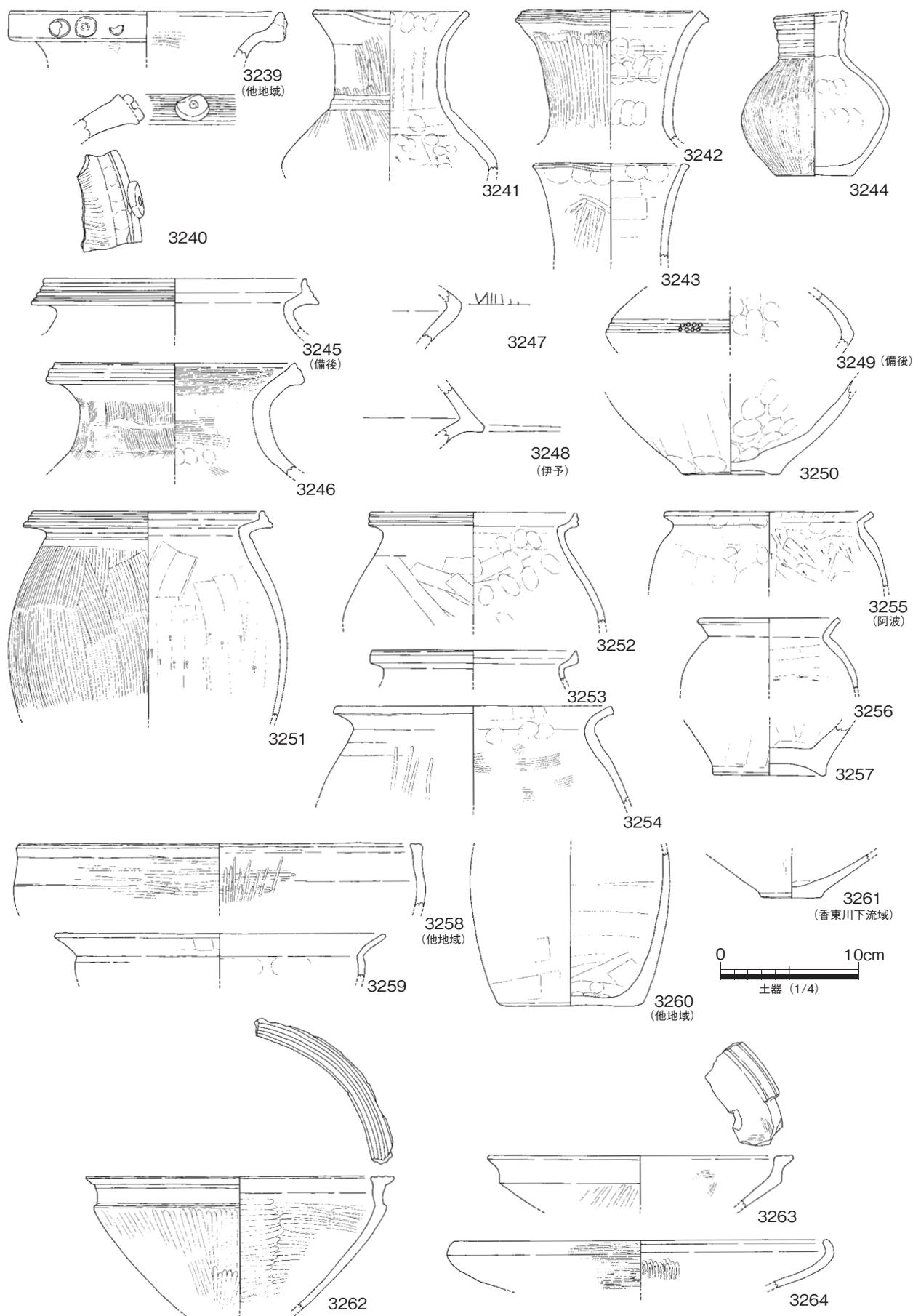


図 373 SR02 上層溝下層 W ブロック出土遺物 (1)

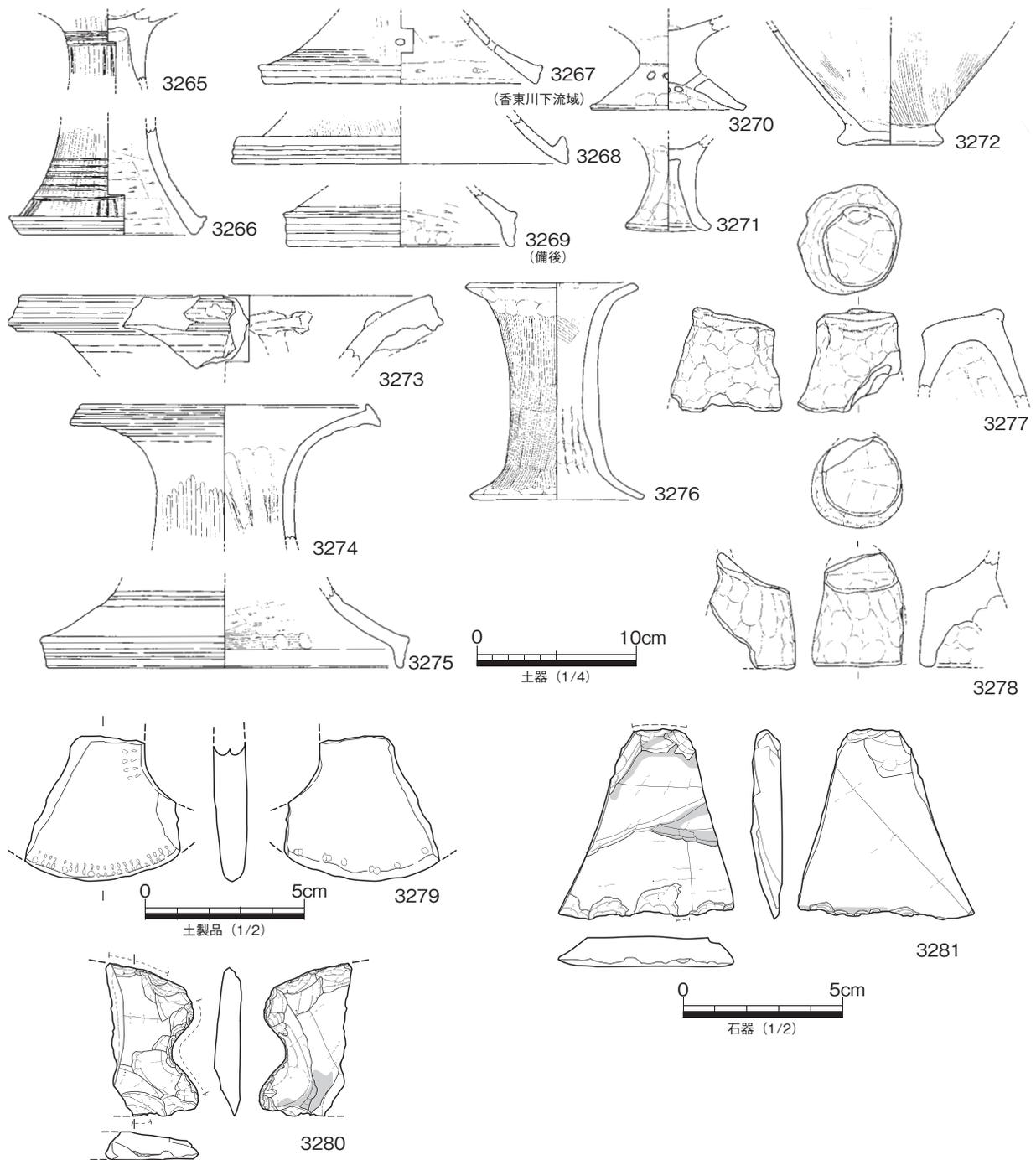


図 374 SR02 上層溝下層 W ブロック出土遺物 (2)

石器 3280、3281 はサヌカイト製打製石庖丁である。いずれも楔形石核に転用する。素材面には軽度の磨滅が認められる。(森下)

SR02 上層溝下層出土遺物 (図 376 ~ 378)

土器 出土土器・土製品には、壺 (3282 ~ 3292.3294.3295.3308)、甕 (3293.3296 ~ 3307)、高杯 (3309 ~ 3312.3315 ~ 3319.3321)、器台 (3320.3323)、支脚 (3322) が見られる。これらの土器群は、弥生後期前半中段階から後期後半新段階のものが主体であり、他地域からの搬入品は少数に留まる。

3282 の大形壺は上方に拡張する口縁部をもつもので、口縁端部形態が異なるものの、備後地域を意

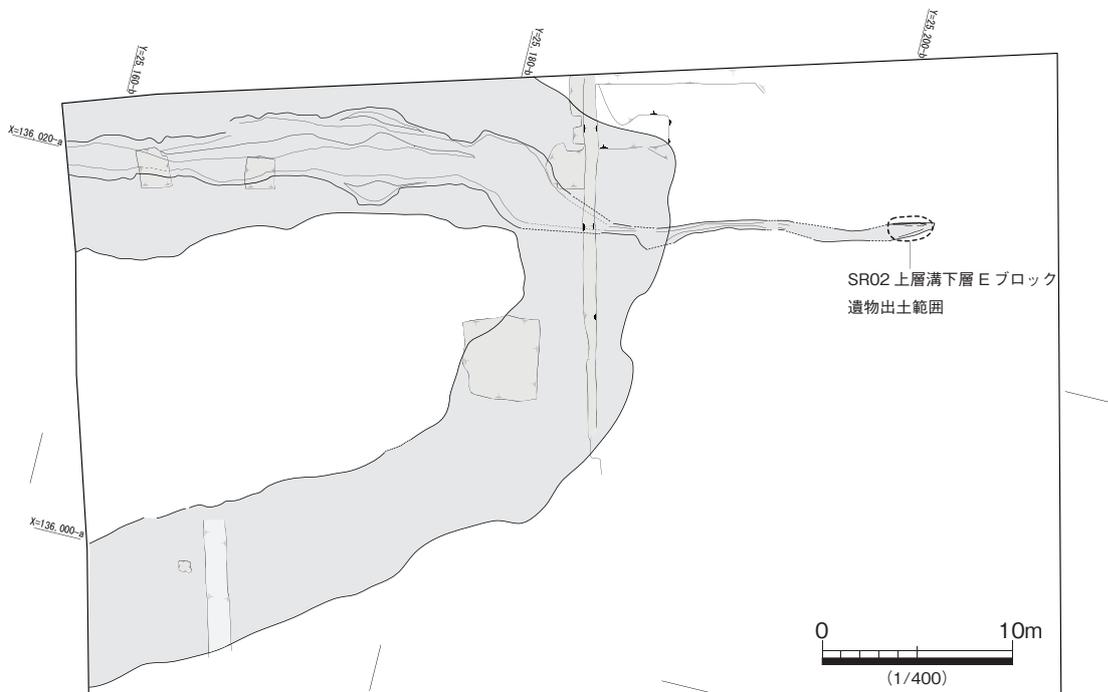
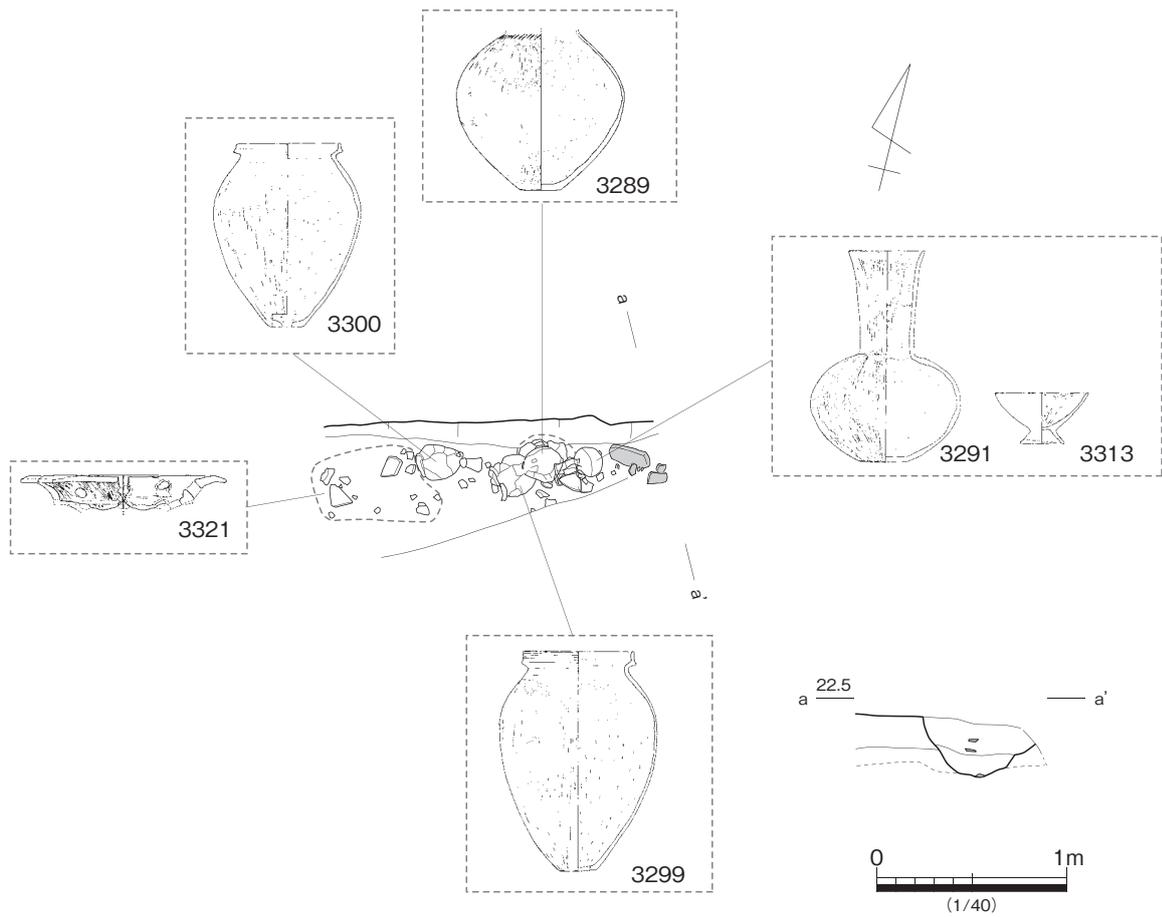


図 375 SR02 上層溝下層 E ブロック平・断面 遺物出土状況

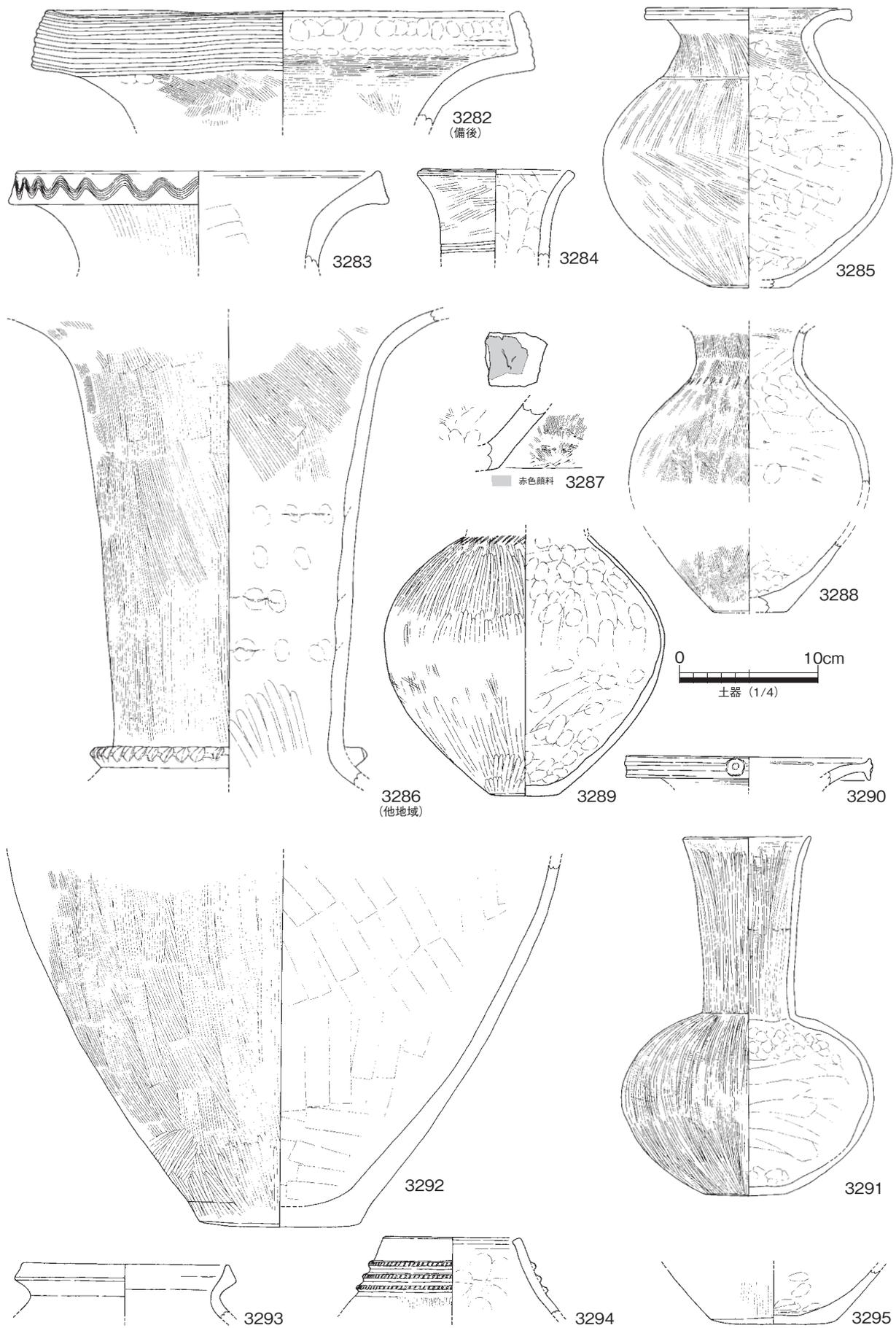


図 376 SR02 上層溝下層 E ブロック出土遺物 (1)

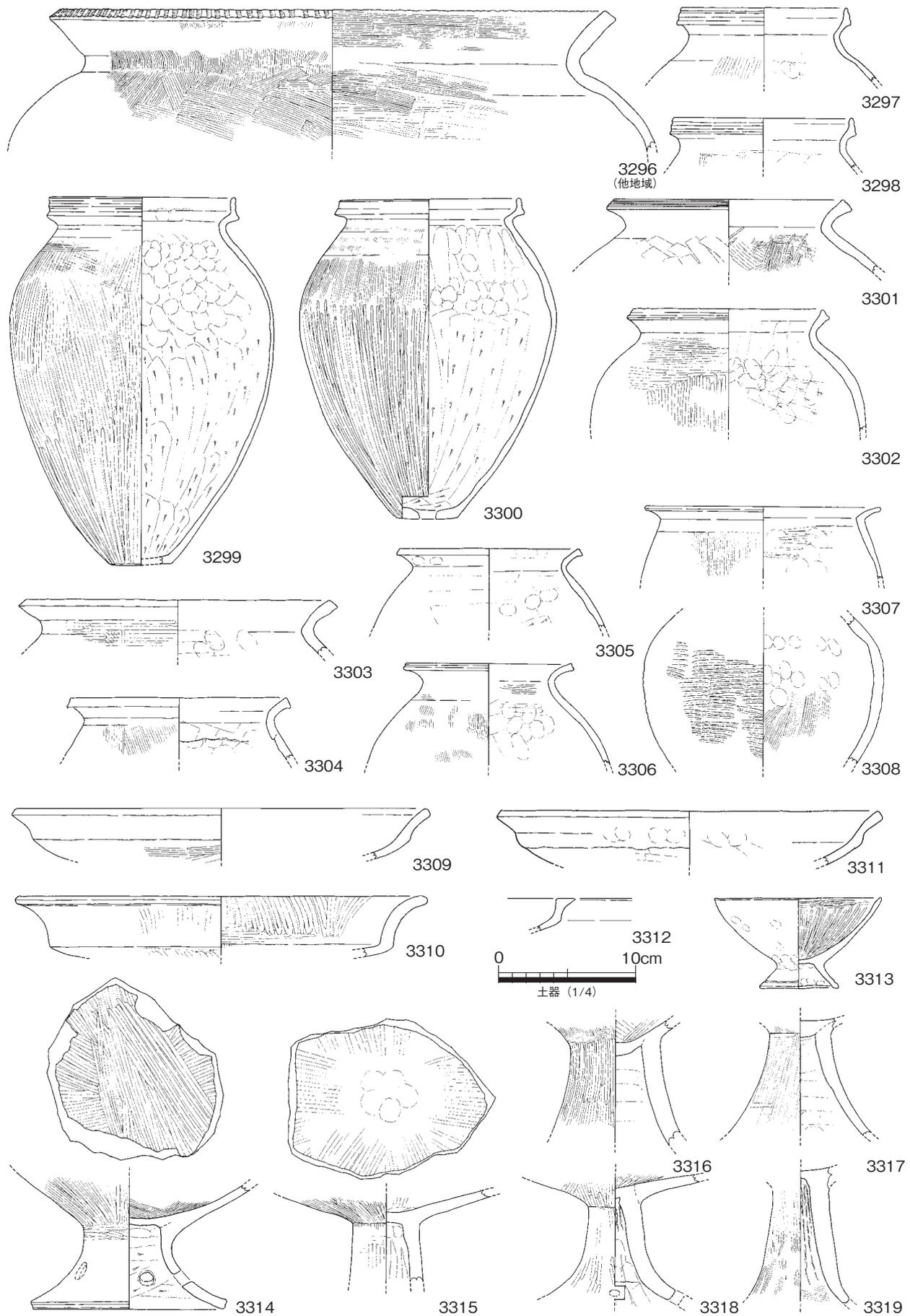


図 377 SR02 上層溝下層 E ブロック出土遺物 (2)

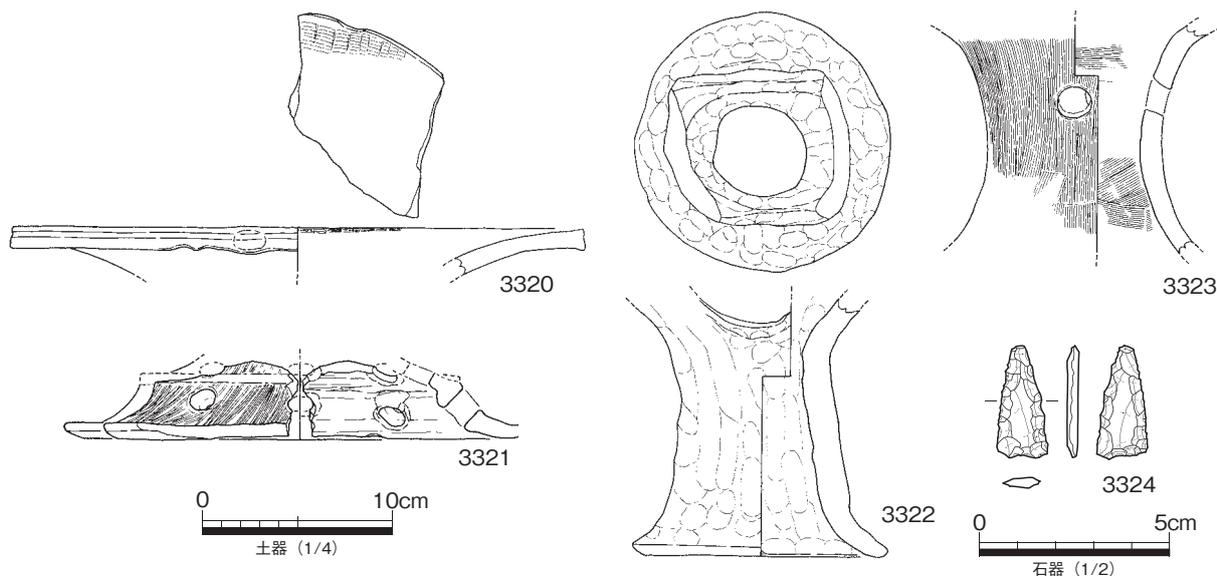


図 378 SR02 上層溝下層 E ブロック出土遺物 (3)

識した模倣土器と見られる。3287 の壺あるいは鉢底部の内面には、水銀朱と考えられる赤色顔料が付着している。

3296 は大形品であり、肩が張った胴部から緩く外反する口縁端部にハケ原体による刻目を施す。形態から搬入土器の可能性が高いが、地域の特定には至らない。3299、3300 の甕は口縁部を上方にのみ拡張する甕の完形品であり、3300 が弥生後期前半新段階、3299 が後期後半古段階に位置付けられる。

3321 は装飾高杯の脚部片であり、縦位に並ぶ透かし孔が確認できる。(信里)

石器 3324 はサヌカイト製打製石鏃である。先端及び基部の加工が粗雑で左右が不均等な形状であることから、未製品と推定される。(森下)

SR02 上層溝下層出土遺物 (図 379・380)

土器 出土土器・土製品には、壺 (3325 ~ 3334)、甕 (3336 ~ 3340)、鉢 (3341.3343.3344)、台付鉢 (3342.3345)、高杯 (3346 ~ 3350)、器台 (3353.3354)、回転台形土器 (3355) が見られる。出土土器は、弥生中期後半新段階から後期後半古段階までの時間幅をもつ。

3333 の壺は、肩部に縦位の棒状浮紋を施し、記号表現とする。3338 の甕は、弥生後期後半古段階に下る。3346 ~ 3350 の口縁部が内側に屈曲する高杯は、弥生中期後半新段階の所産であり、下位層からの巻き上げと見られる。3351 の高杯脚部片は、高松平野の香東川下流域産である。

3356 は下方折り曲げが見られる鉄片であり、側縁のラインは錆によって不明確となる。(信里)

石器 3357 はサヌカイト製打製石庖丁である。楔形石核に転用される。素材面に軽度の磨滅が認められる。(森下)

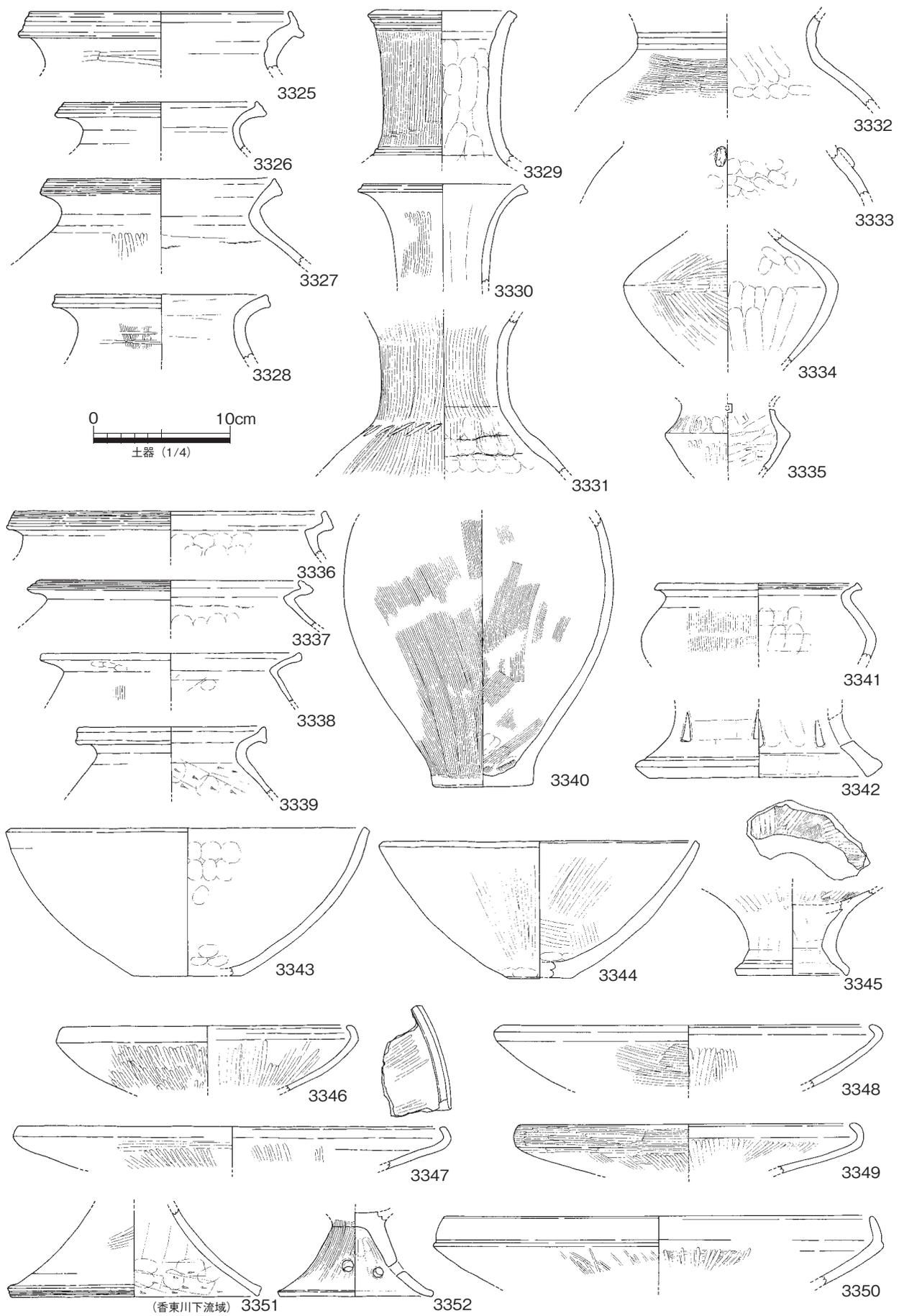


図 379 SR02 上層溝下層一括取り上げ出土遺物 (1)

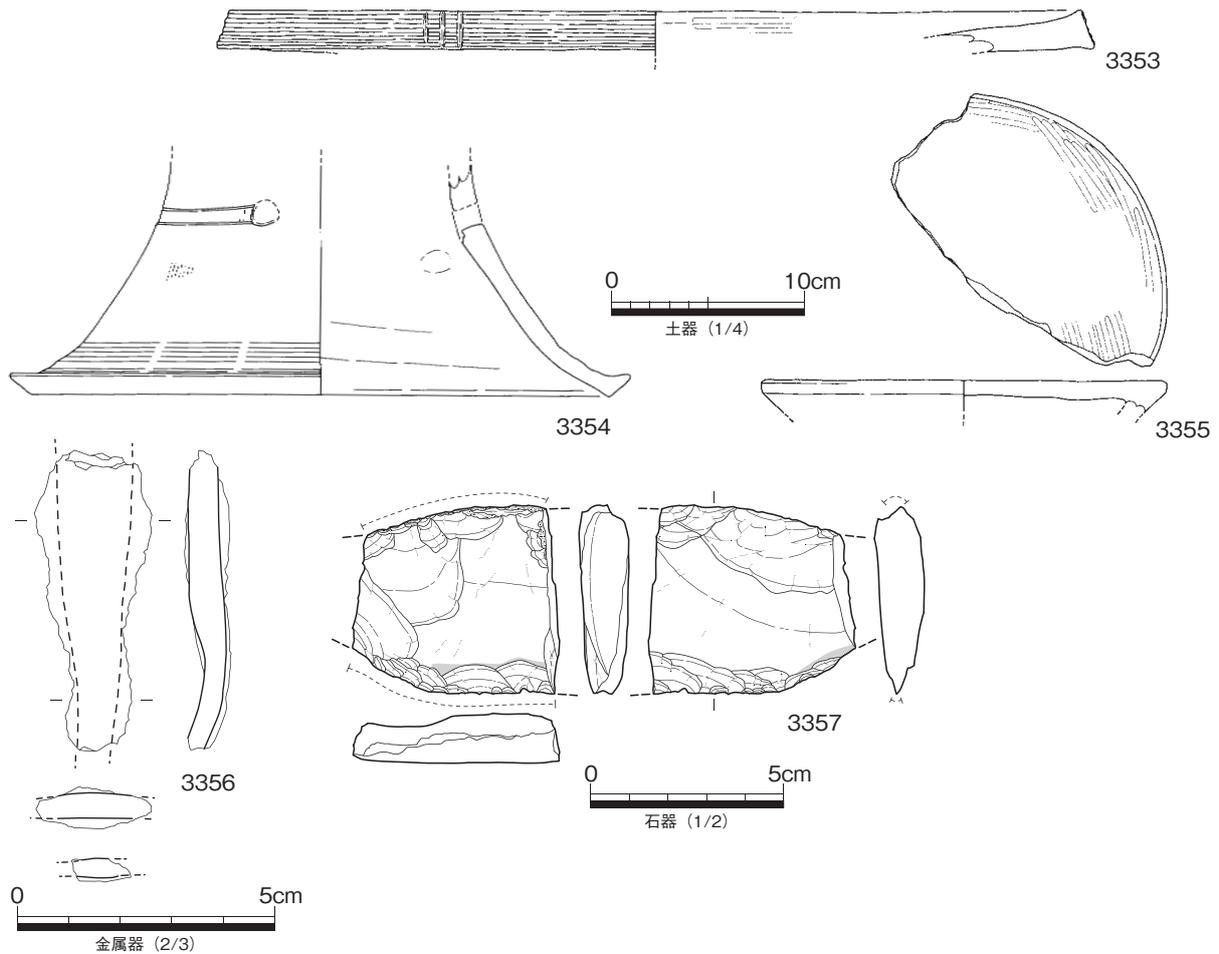


図 380 SR02 上層溝下層一括取り上げ出土遺物 (2)

SR02 上層溝上層出土遺物 (図 381)

土器 出土遺物・土製品には、壺 (3358 ~ 3363)、甕 (3364 ~ 3368)、器台 (3369)、高杯 (3370)、鉢 (3371)、分銅形土製品 (3372) が見られる。これらの土器群は、弥生後期前半期を主体としながらも、中期後半や終末期等のものが混在した様相を示す。また、数点の他地域からの搬入土器が確認できる。

3358 は口縁部内面に円形浮紋を多数配置する広口壺であり、弥生中期後半新段階の所産と見られる。3360 は口縁部が短く屈曲する広口壺であり、弥生後期前半中段階に特徴的な型式である。3367 の完形に復元される甕は、口縁部を上方にのみ拡張する甕の祖形となるもので、弥生後期前半中段階に帰属する。3372 は分銅形土製品であり、櫛描直線紋と櫛描原体による列点紋で加飾する。(信里)

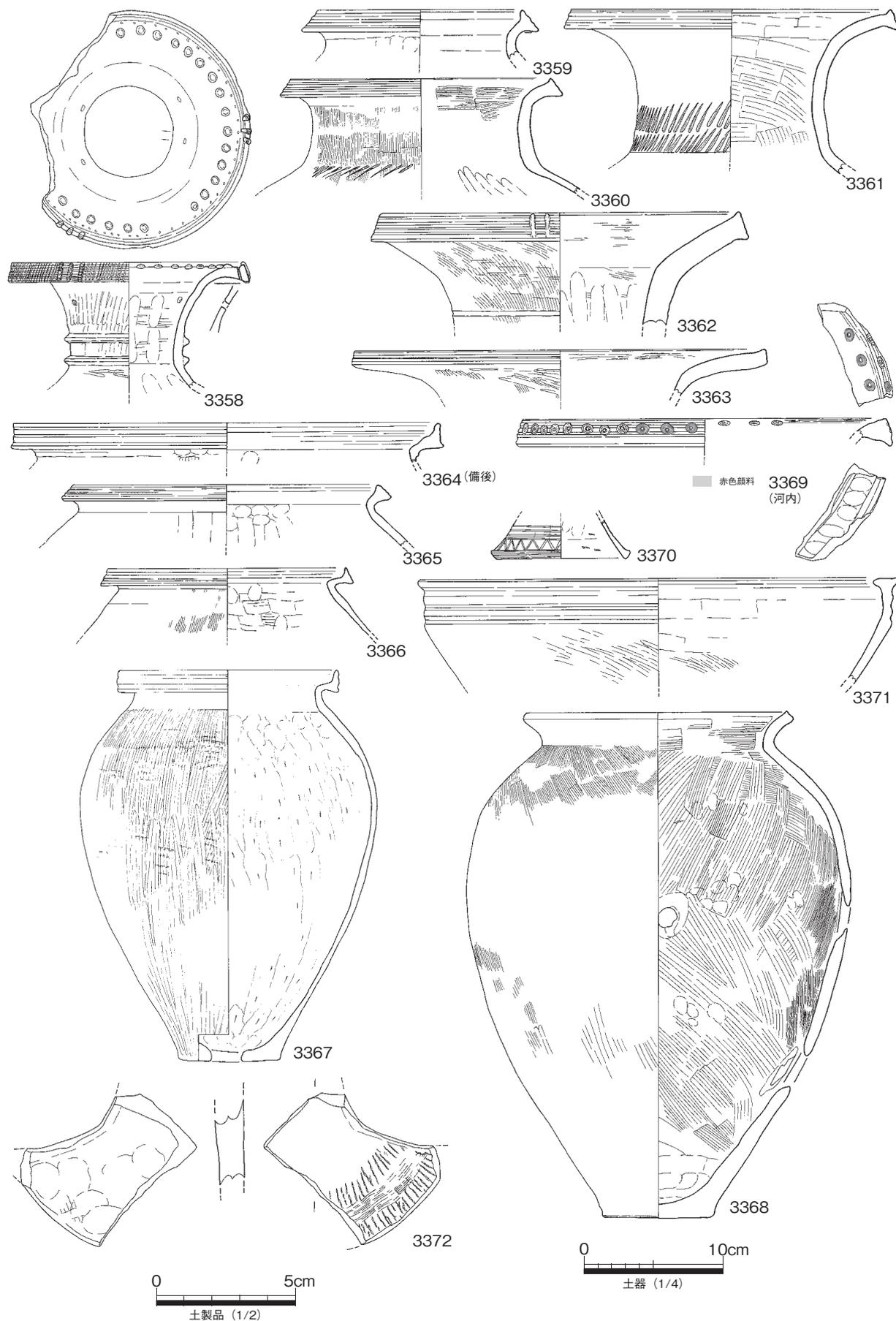


図 381 SR02 上層溝上層 B・N ブロックアゼ出土遺物

SR02 上層溝上層出土遺物 (図 382 ~ 386)

土器 出土土器・土製品には、壺 (3373 ~ 3392.3395 ~ 3412)、甕 (3393.3394.3413 ~ 3455)、高杯 (3456 ~ 3476)、台付鉢 (3477.3478)、鉢 (3479 ~ 3486)、器台 (3487 ~ 3491)、支脚 (3492 ~ 3497)、小形土器 (3498)、焼土塊 (3499.3500) が見られる。土器の時間的な様相は、弥生中期後半から古墳時代初頭に至る広範囲の時間幅が看取され、少数の他地域からの搬入・模倣土器が伴う。

3377 の短頸広口壺は、口縁部形態から備後地域からの搬入品と見られ、同地域の V -1 ~ V -2 様式に比定される。3387 は頸部に複数の沈線を施す長頸壺であり、形態や施紋の特徴から吉備地域の影響が想定できるが、頸胴部境に貼り付け突帯を施す特徴から鬼川市Ⅱ ~ Ⅲ式に比定される。3399 の広口壺は、口縁部内面を肥厚するもので、北部九州地域の鋤先状口縁に類似する。確定はできないが、在地品と異なった胎土をもつことや、26 次調査で豊前地域からの搬入土器を確認していること等から、搬入元として東北部九州地域が想定される。3400 は口縁端部を上方に摘み出す壺であり、形態・胎土ともに搬入土器と見られるが、搬入元の地域の特定には至らない。3403 は外面にベンガラと見られる赤色顔料が塗布されているもので、角閃石を含む胎土は備中地域の搬入土器に類似している。3404 は、外面に記号紋をもつ壺胴部片である。3405 は外面に櫛描による下向きの重弧紋を施す壺であり、本地域で見られない紋様をもつことから、他地域からの搬入土器と考える。

3394 の甕は古式土師器と見られ、古墳時代前期まで下る。3426 の甕は、備後地域からの搬入土器と見られ、同地域の V -3 様式に比定される。3428、3429 の甕は、高松平野の香東川下流域産であるが、3429 の胎土中には角閃石があまり目立たない。

3460 は台付鉢の口縁部で、胎土中に角閃石を多く含む。胎土・形態から備中地域からの搬入品と見られ、同地域のオノ町Ⅱ式に比定される。3458 は形態から備中地域からの搬入品と見られ、内外面には、ベンガラと見られる赤色顔料が塗布されている。3459 は吉備地域からの搬入品で鬼川市Ⅰ式に比定される。3464 の高杯脚部は、外面にベンガラを塗布し、胎土中に角閃石を多く含む備中地域からの搬入品である。3465、3473 の高杯脚部は、外面に櫛描直線紋を施紋しており、施紋や形態の属性から吉備地域の模倣土器と考える。3467 の高杯は、高松平野の香東川下流域産であり、形態から下川津Ⅰ式と見られる。3472 の高杯は、外面に斜格子紋を基調とした紋様が施される。

3499、3500 は部分的に熱変箇所が見られる焼土塊である。(信里)

石器 3501 ~ 3503 は非サヌカイト石材の打製 (半磨製) 石庖丁である。3501 は結晶片岩製で側縁に浅い敲打による抉りを施す。器面は表裏とも磨滅する。3502 は硬質の流紋岩を素材とする半磨製品である。刃部は敲打による再調整が行われており、研磨による本来の刃部はほとんど見られないが、一部に使用痕と考えられる磨滅が認められる。左右側縁は敲打により抉りを施す。3503 は安山岩製を素材とする打製品である。身幅に対して高さがある形状である。刃部にも顕著な敲打が認められることから未製品の可能性もある。

3504 は柱状片刃石斧を転用したと思われる結晶片岩製の叩石である。主に側縁に横方向の線状敲打痕が認められる。(森下)

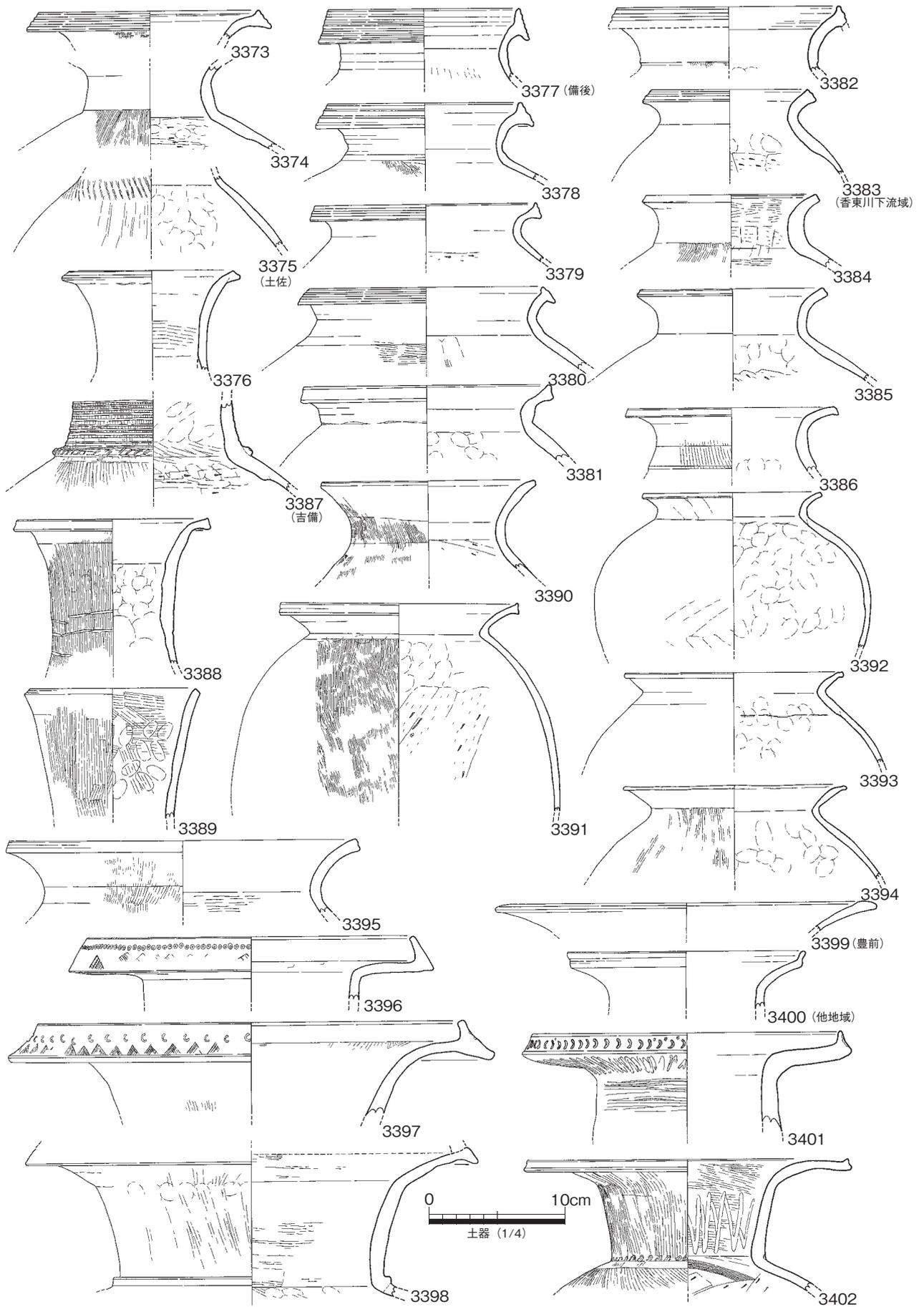


図 382 SR02 上層溝上層 L・J ブロック出土遺物 (1)

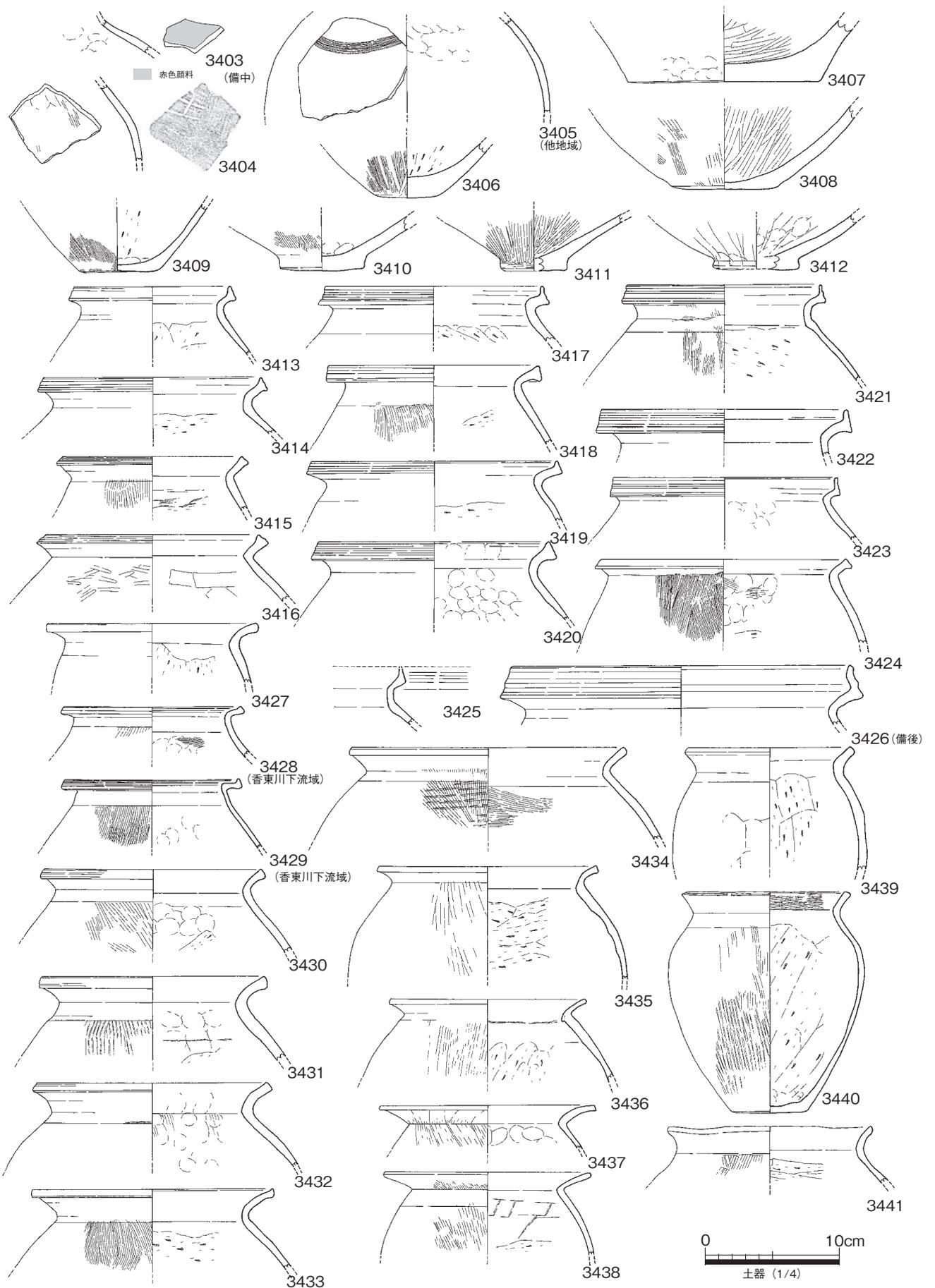


図 383 SR02 上層溝上層 L・J ブロック出土遺物 (2)

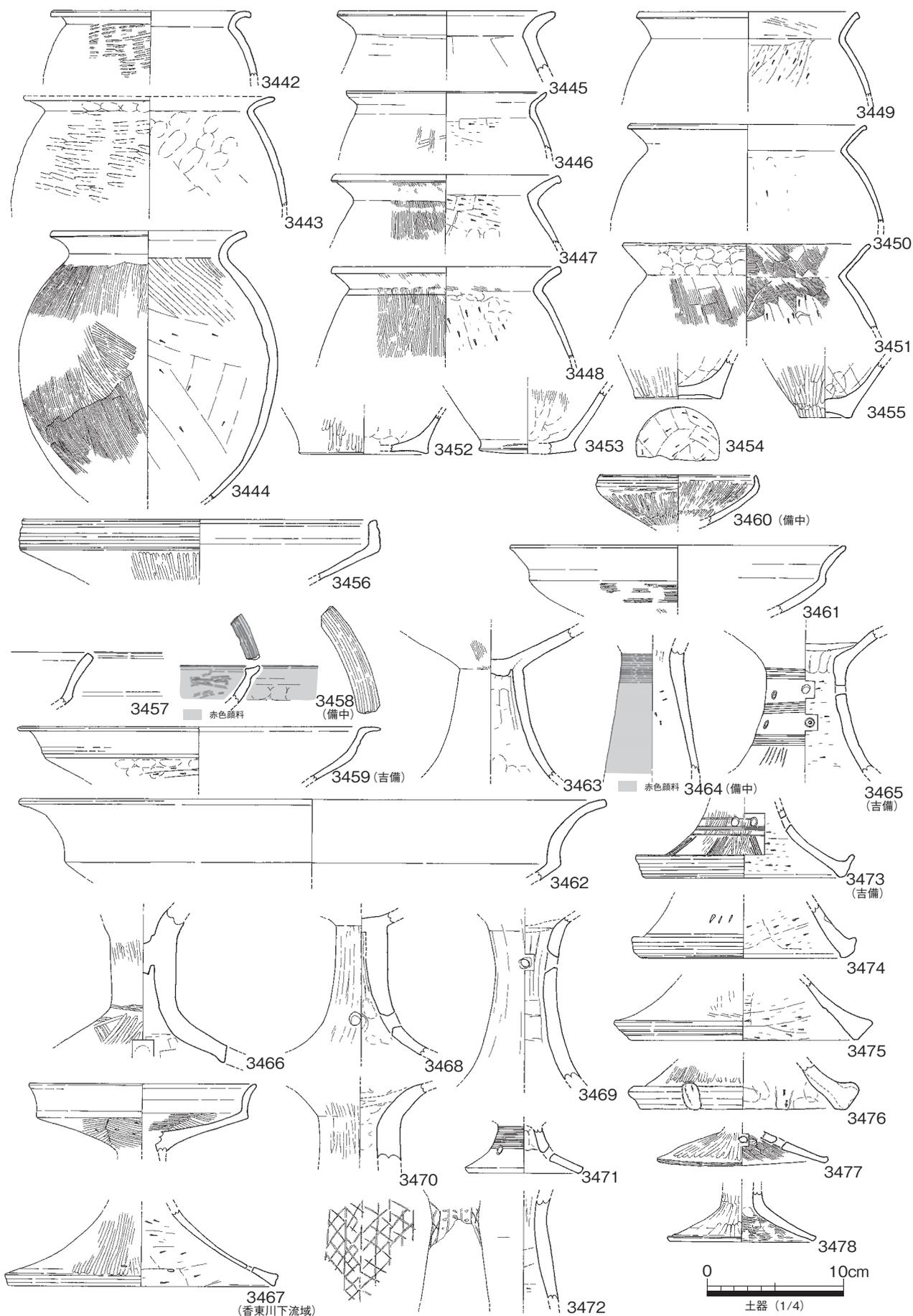


図 384 SR02 上層溝上層 L・J ブロック出土遺物 (3)

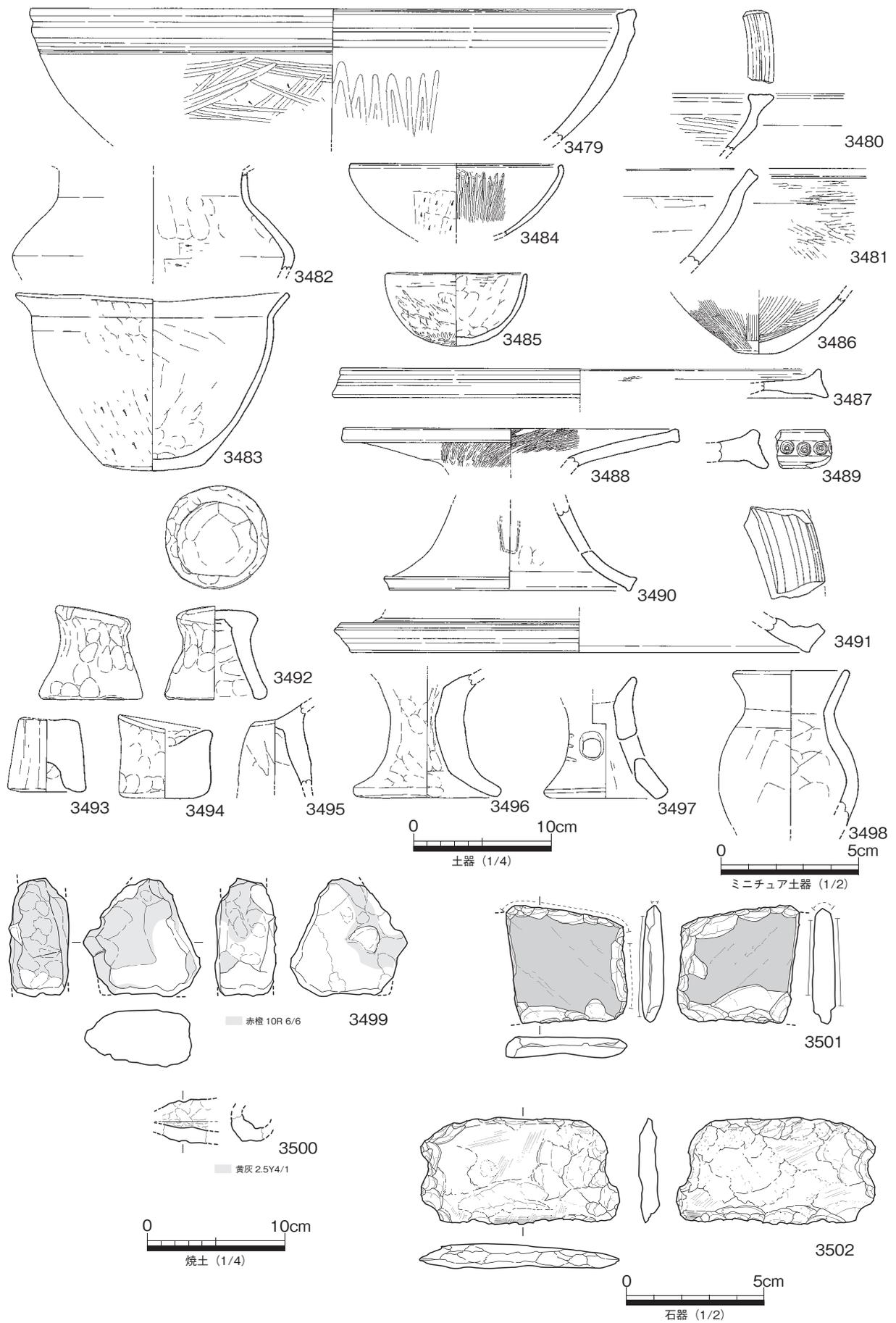


図 385 SR02 上層溝上層 L・J ブロック出土遺物 (4)

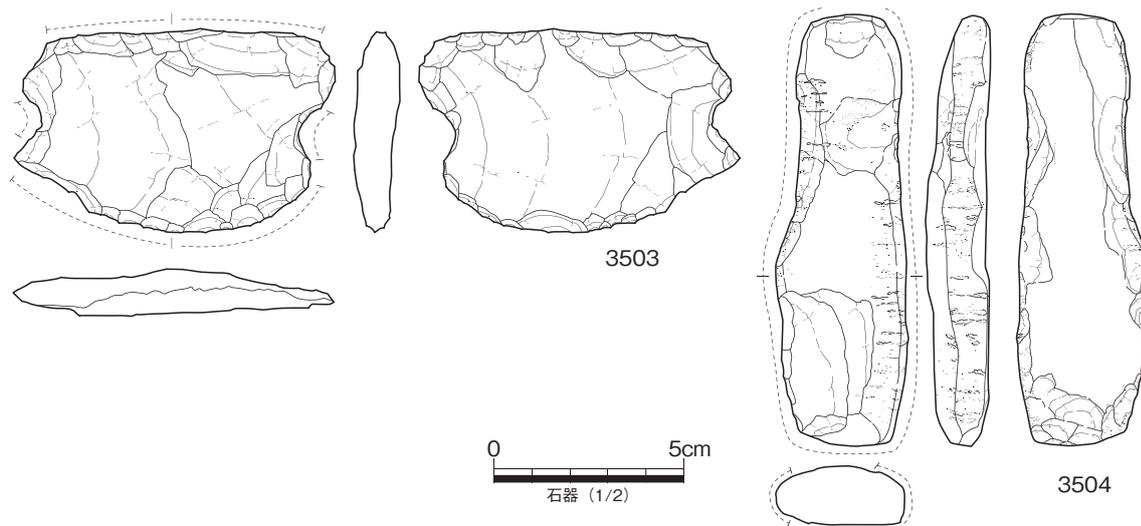


図 386 SR02 上層溝上層 L・J ブロック出土遺物 (5)

SR02 上層溝上層出土遺物 (図 387 ~ 390)

土器 出土土器・土製品には、壺 (3505 ~ 3520)、甕 (3522 ~ 3535)、水差 (3536.3537)、高杯 (3538 ~ 3552)、器台 (3521.3553 ~ 3556)、鉢 (3557 ~ 3564)、支脚 (3565 ~ 3572)、紡錘車 (3574) がある。

3507 の壺は外面にベンガラと見られる赤色顔料の塗布が認められ、胎土中に角閃石を多く含む。細頸壺の肩部片と思われ、胎土や彩色の状況から、備後地域からの搬入品と見られる。3519 は長頸壺の肩部片と見られ、外面に竹管による列点を施し、記号紋の表現とする。3519 の複合口縁壺は、長門・周防地域の後期前葉のものに類似した形態を採る。胎土から見ても搬入土器の可能性が高い。3520 は壺の胴部外面に断面方形の突帯を施すもので、豊前など東北部九州からの搬入土器と考える。3542 の高杯脚は、高松平野の香東川下流域産である。3553 の器台は、口縁部外面と内面に櫛描波状紋を施す。器台に波状紋を施紋する特徴は吉備地域に多く見られることから、同地域からの搬入・模倣土器と考える。

3564 は内面に水銀朱の付着が確認できる個体であり、朱精製容器である把手付片口鉢の把手と考えられる。3574 は厚みのある紡錘車の完形品である。3575 は板状を呈する焼土塊であり、断面形がやや湾曲する。(信里)

石器 3576 ~ 3579 はサヌカイト製打製石鏃である。3576 は薄い横長剥片の周縁に調整加工を施すものである。基部は折損する。3577、3578 は素材面に摩滅が認められる。3579 は小型品で風化は進行していない。3580 は両極打撃により剥離した剥片を素材として両側縁に加工を施したサヌカイト製石器で、打製石錐とした。下端部は折損する。3581 はサヌカイト製スクレイパーである。両極打撃により剥離した剥片を素材とし、図の下縁に粗い調整加工を施す。3582 ~ 3584 はサヌカイト製打製石庖丁である。いずれも長さ 10cm 以下の小型品で、3582、3584 は自然面を残す。3584 は折損面にも顕著な摩滅痕が残る。3585 は灰色を呈する流紋岩の剥片を素材とする打製石庖丁である。側縁に抉りを施す。裏面は本体から剥離した面である。3586 は砂岩製台石である。被熱のため赤化する。軽度の敲打痕や研磨痕が残る。3587 は安山岩製の叩き石である。横方向の線状敲打痕が残る。3588 は流紋岩製の砥石である。表面及び側面に砥面が残る。側面は断面形が窪む砥面である。(森下)

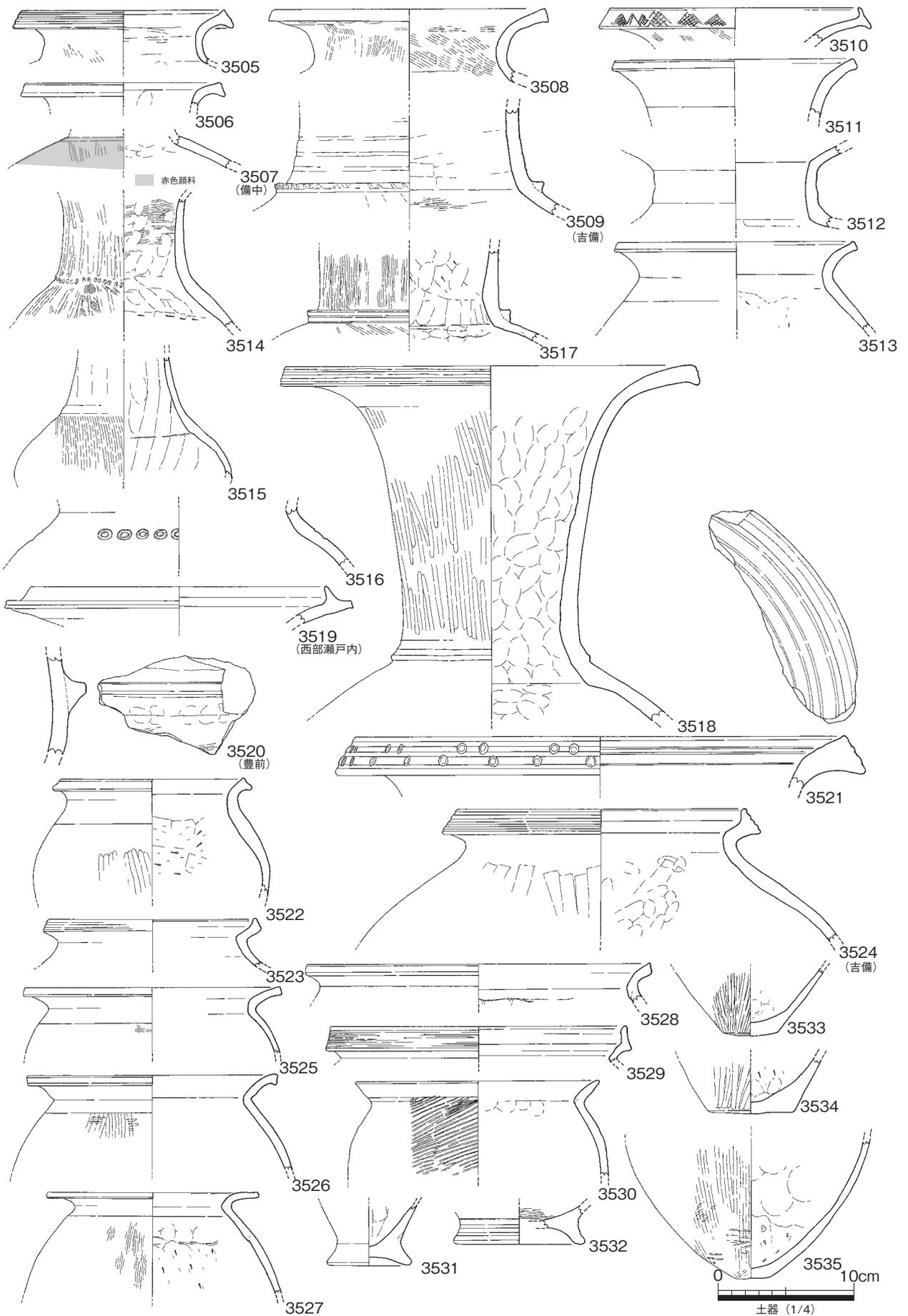


図 387 SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物 (1)

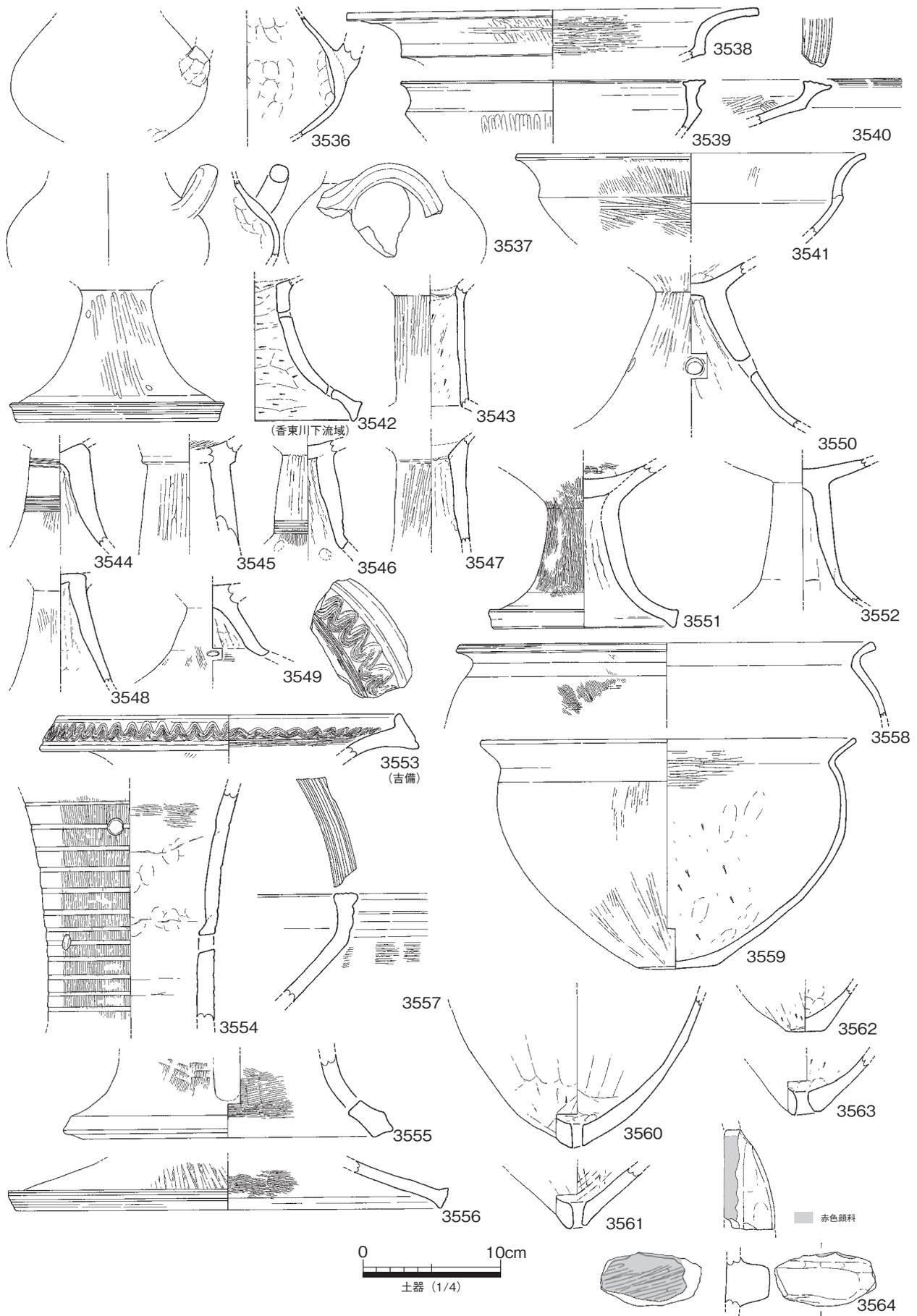


図 388 SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物 (2)

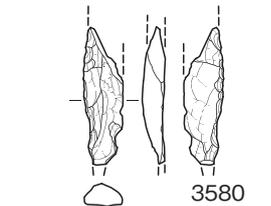
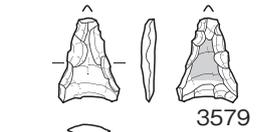
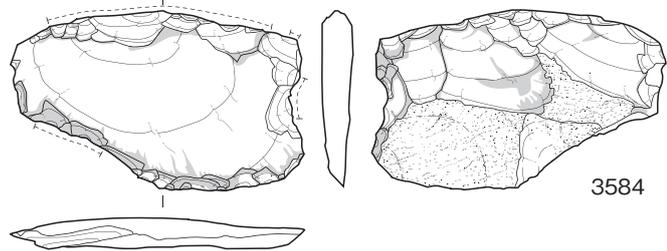
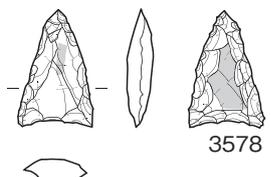
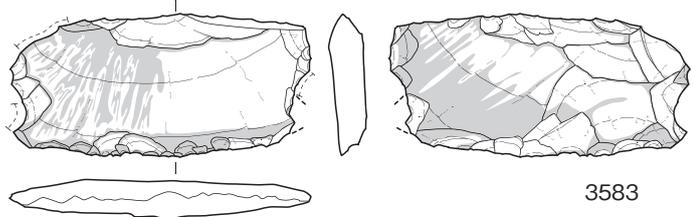
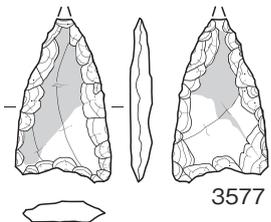
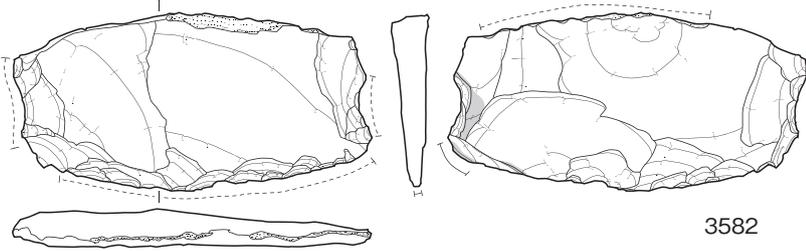
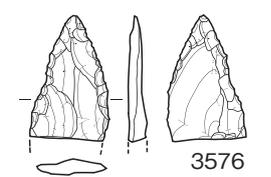
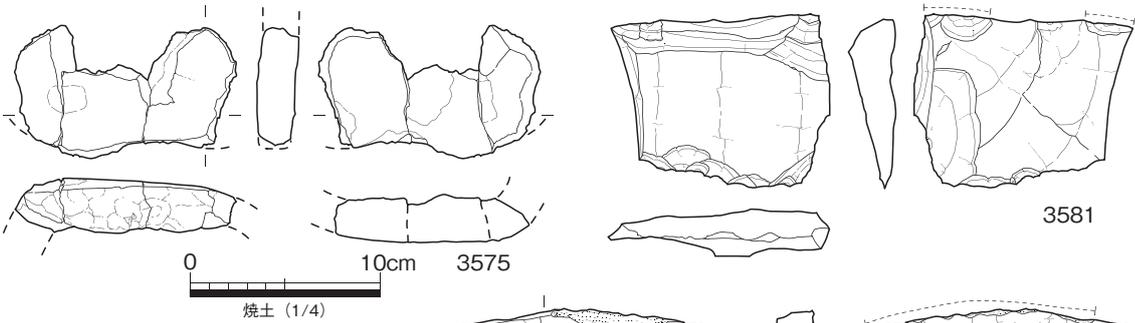
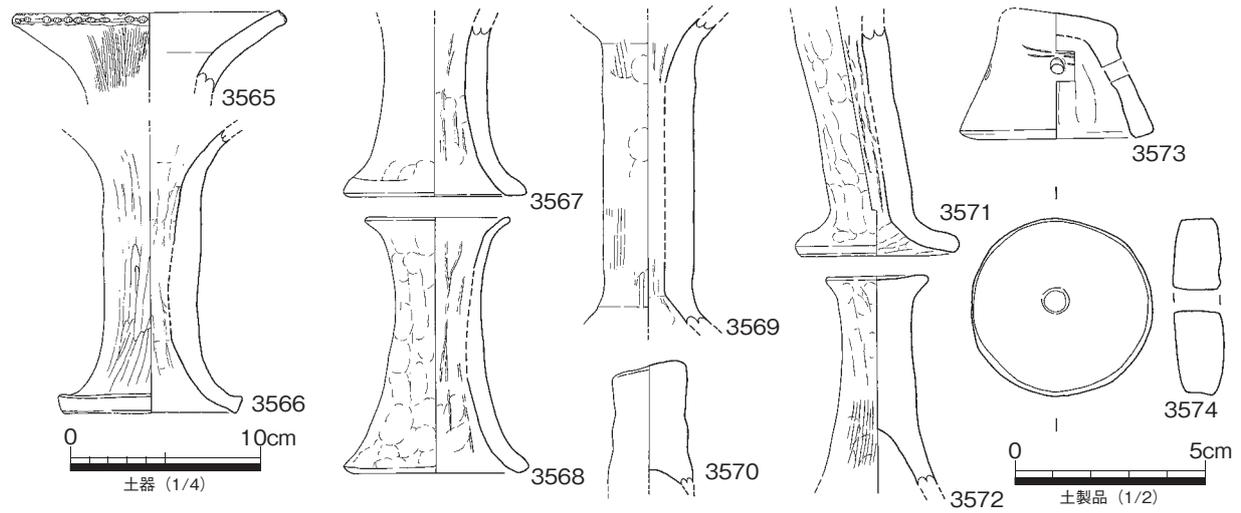


図 389 SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物 (3)

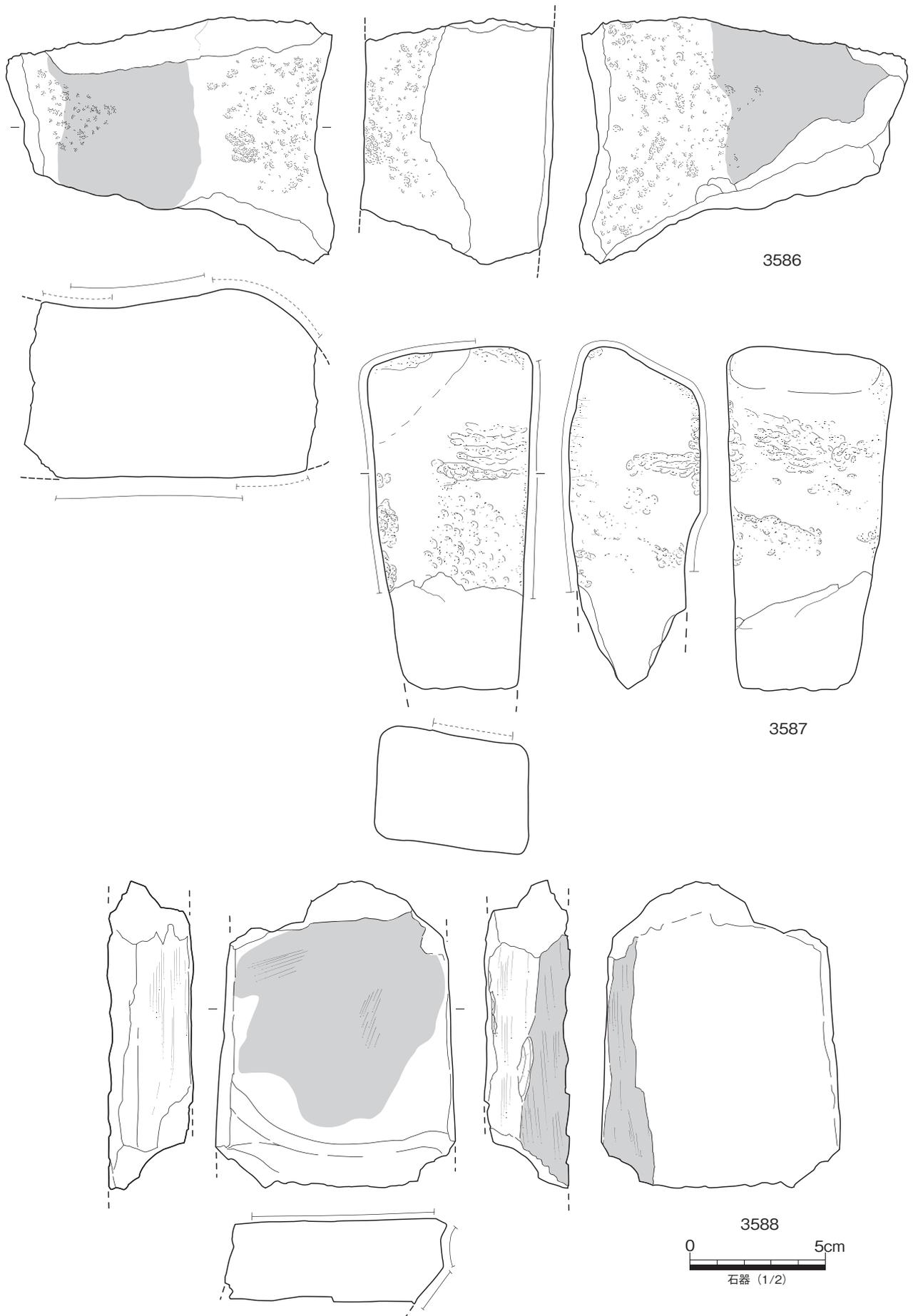


図 390 SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物 (4)

SR02 上層溝上層出土遺物 (図 391・392)

土器 出土土器・土製品には、壺(3589～3598)、甕(3599～3604)、高杯(3605～3615)、器台(3616～3619)、支脚(3620～3622)がある。これらの土器群は、弥生後期前半古段階から後期後半新段階の時間幅をもち、少数の他地域からの搬入・模倣土器を伴う。

3589の広口壺は、口縁部外面及び内面に半裁竹管の列点紋を施すもので、他地域からの搬入土器と見られる。搬出元の地域の特定は困難である。3593の複合口縁壺は、形態から、西部瀬戸内からの搬入品と考える。3597、3598の壺は、直立気味の頸部に刻目をもつ突帯を施すもので、伊予を含めた西部瀬戸内地域からの搬入・模倣土器と見られる。3599の甕は、口縁部を粘土貼り付けによって成形しており、土佐地域からの影響が看取される。胎土は在地品と変わらないもので、模倣土器と考える。

3606、3609～3611は、形態から装飾高杯と考える。3615の高杯脚部は、外面にベンガラと見られる彩色と、角閃石を多く含む胎土をもち、備中地域からの搬入土器と考える。

3623は断面がやや湾曲する板状を呈する焼土塊である。(信里)

石器 3624は砂岩製の叩き石である。小口部にわずかな敲打痕が残る。(森下)

SR02 上層溝上層出土遺物 (図 393)

土器 出土土器・土製品には、壺(3625～3630)、甕(3631～3637.3639)、器台(3640.3641)、高杯(3642.3643)、鉢(3638.3644.3646)、支脚(3647～3651)、把手(3652)が見られる。

3629の広口壺は、胎土中に片岩粒を含む阿波地域からの搬入品である。3631の甕は内傾する拡張された口縁部をもつもので、形態的に備後地域に類似するが、拡張が短いことから同地域の模倣土器と考える。3655は甕の胴部内面に水銀朱と見られる赤色顔料が付着している。器壁が厚く大形品と見られるが、甕半裁による3644の鉢は内外面をベンガラによって彩色を施し、胎土中に多く角閃石を含むもので、備中地域からの搬入品と見られる。低脚の台付鉢になると考えられる。3645の鉢は、短く屈曲する口縁部をもつもので、安芸地域の後期初頭の資料に散見される形態をもつ。同地域からの搬入土器と推察される。3652の把手は、水差形土器に伴うと考えた場合、調整が粗雑であることから、直口壺の肩部に施される把手の可能性が高い。(信里)

SR02 上層溝上層出土遺物 (図 394)

土器 3653の広口壺は、垂下口縁をもち河内地域の形態に類似するが、胎土中に角閃石は含まれていない。河内地域の模倣品かその周辺の近畿地方からの搬入品の可能性が指摘できる。3654は口縁部を上下に拡張する広口壺であり、類似する形態が見出し難いが、対岸の備後から安芸地域の模倣土器と考えられる。3656、3657は上方に拡張する口縁部外面に擬凹線紋を施す甕であり、弥生後期後半古段階に位置付けられる。3655は後期前半期の長頸壺である。3659の甕は、胴部外面にハケ原体による羽状の列点を施すもので、施紋の特徴から安芸地域からの搬入品と考える。(信里)

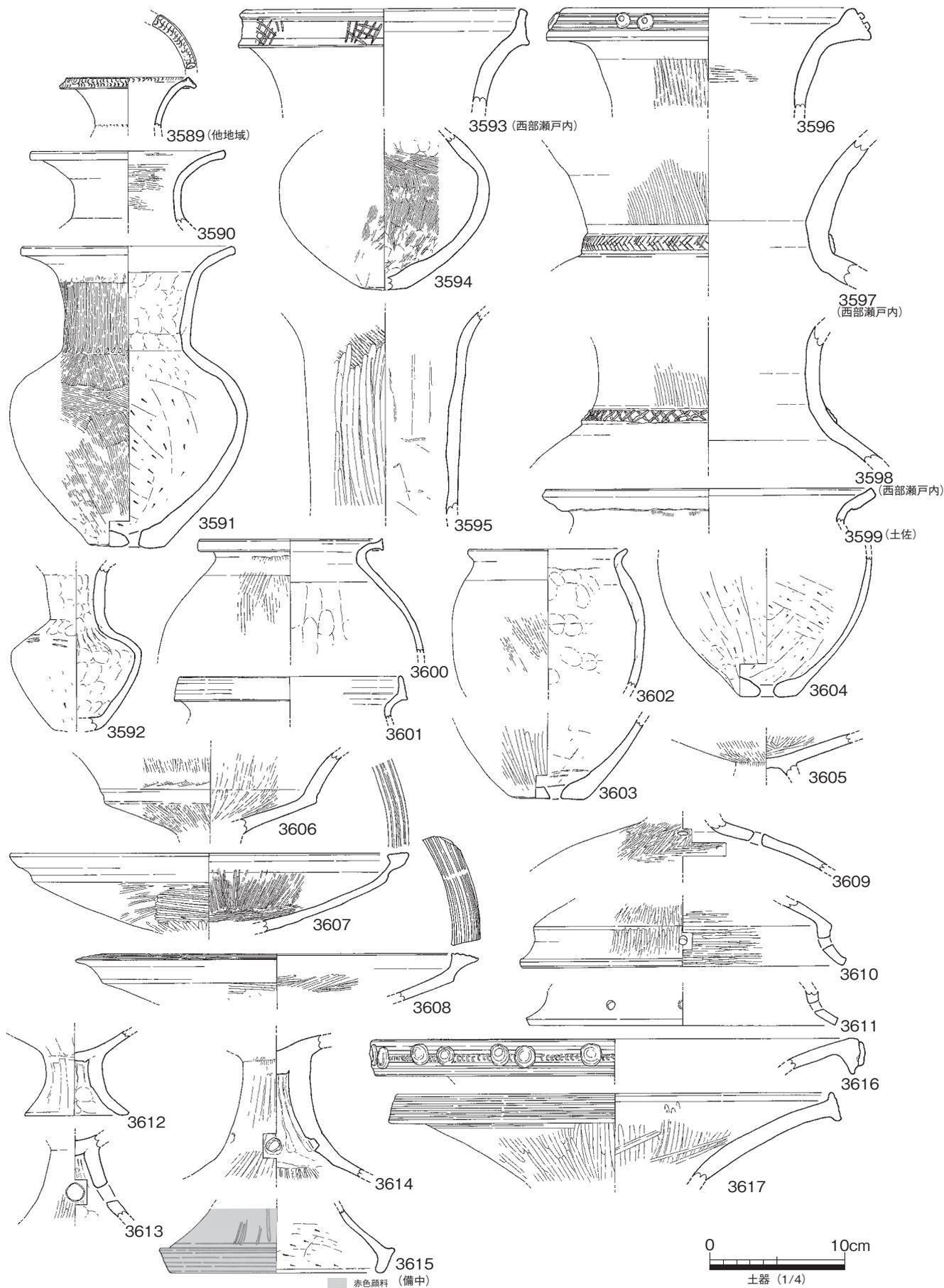


図 391 SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物 (5)

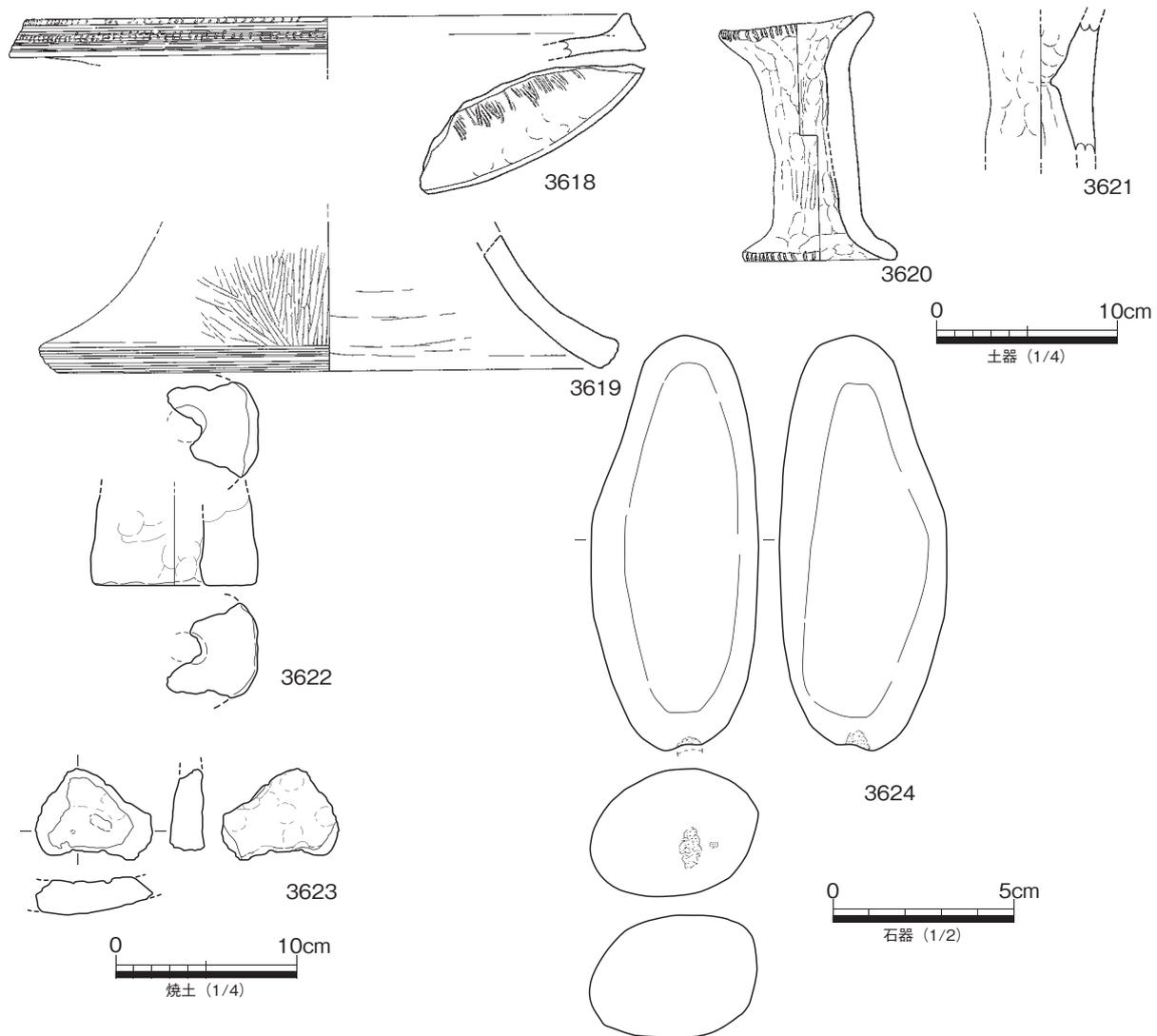


図 392 SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物 (6)

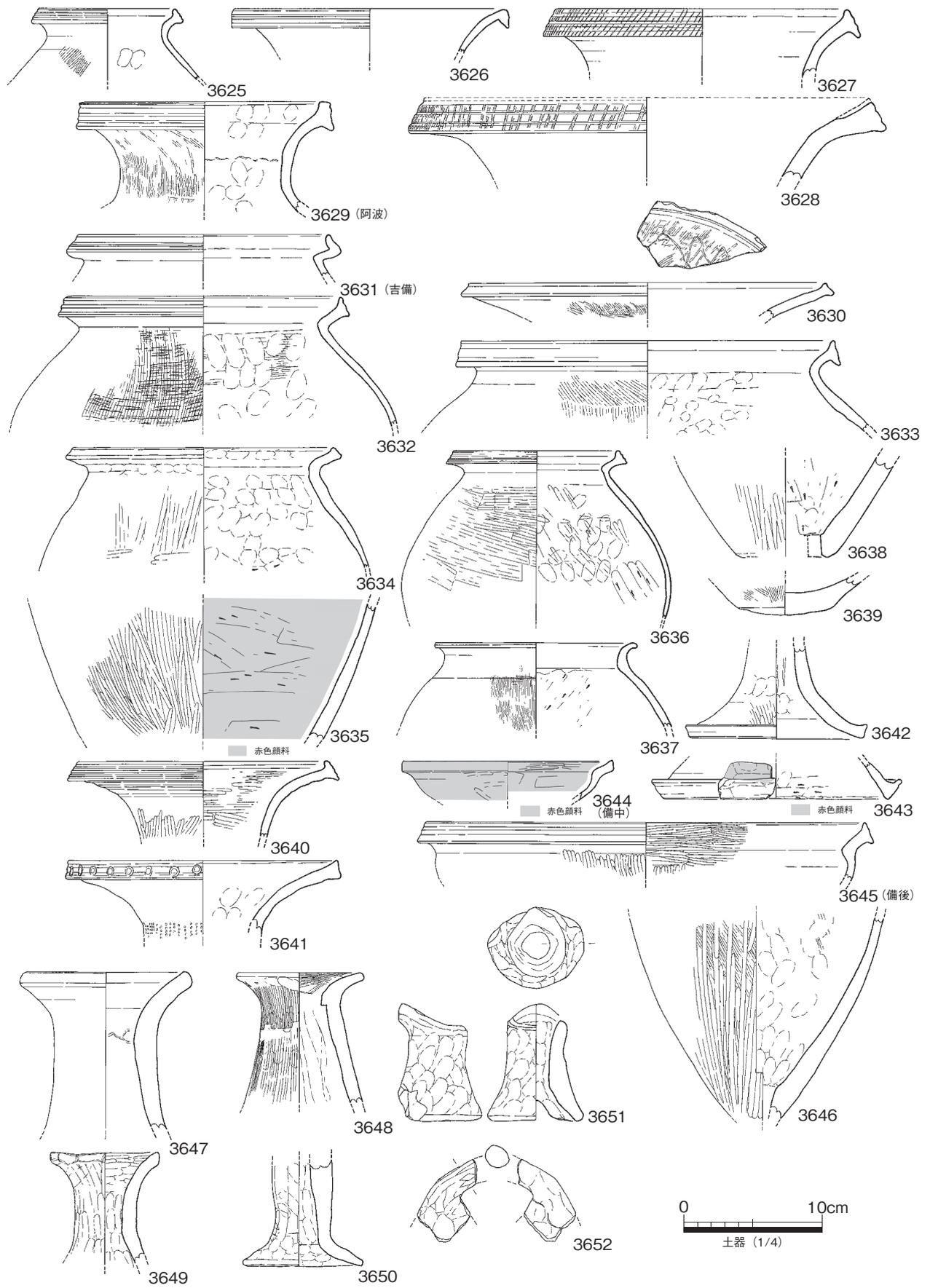


図 393 SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物 (7)

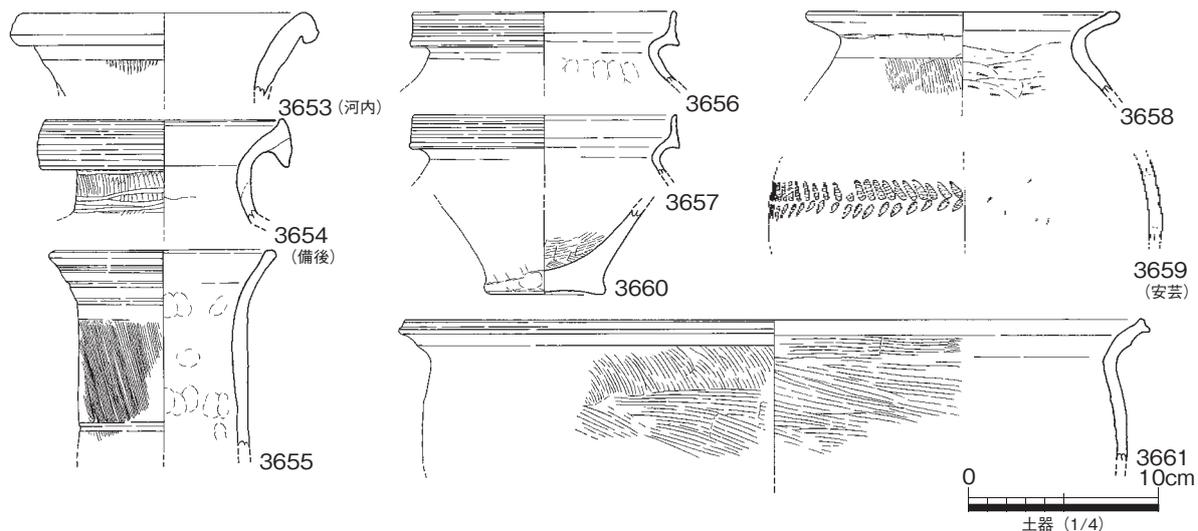


図 394 SR02 上層溝上層一括取り上げ出土遺物 (8)

(5) SR02 上層

SR02 上層溝上層の堆積により、幅広い河川域の中央部分は緩やかで底面が平坦な低地帯へと移行したものと考えられる。その低地帯には、上層溝をさらに凌ぐ大量の土器が投棄された。遺物出土量は 28 リットル入りコンテナで 371 箱分に相当する。これらの土器は互いに密接して出土しており、埋土を土壌として確認できる断面は限られるが、暗茶褐色系粘質シルトが河川域全体を覆っており、これにより SR02 がほぼ完全に埋没したことになる。

出土遺物は第 396 図に示したように遺存状態が良好なものが多く、出土遺物を記録して取り上げたものも多い。報告する遺物の出土位置については、下表にまとめた。

挿図番号	遺物番号	遺構名・層位	調査区	ブロック名	出土位置記録	遺構挿図番号
図 397・398	3662～3706	SR02 上層	E 区	A ブロック	なし	—
図 399～405	3707～3874	SR02 上層	E 区	B ブロック	なし	—
図 406～408	3875～3925	SR02 上層	E 区	B ブロック	あり	図 396
図 409・410	3926～3962	SR02 上層	E 区	C ブロック	一部あり	図 396
図 411	3963～3969	SR02 上層	E 区	C ブロック	あり	図 396
図 409	3940・3943	SR02 上層	E 区	D ブロック	なし	—
図 412～414	3970～4043	SR02 上層	E 区	E ブロック	なし	—
図 415～428	4044～4357	SR02 上層	E 区	F ブロック	一部あり	図 396
図 429～435	4358～4461	SR02 上層	E 区	F ブロック	あり	図 396
図 436～440	4462～4577	SR02 上層	E 区	G ブロック	一部あり	図 396
図 441	4578～4590	SR02 上層	E 区	G ブロック	あり	図 396
図 442・443	4591～4628	SR02 上層	E 区	I ブロック	なし	—
図 444～448	4629～4749	SR02 上層	E 区	J ブロック	一部あり	図 396
図 449～452	4750～4818	SR02 上層	E 区	J ブロック	あり	図 396
図 453～456	4819～4895	SR02 上層	E 区	K ブロック	あり	図 396
図 457～462	4896～5066	SR02 上層	E 区	L ブロック	一部あり	図 396
図 463	5067～5093	SR02 上層	E 区	L ブロック	あり	図 396
図 464	5094～5105	SR02 上層	E 区	M ブロック	なし	—
図 465～468	5106～5181	SR02 上層	E 区	N ブロック	なし	—
図 469～472	5182～5264	SR02 上層	E 区	O ブロック	なし	—
図 473～475	5265～5333	SR02 上層	E 区	P ブロック	なし	—
図 476～481	5334～5480	SR02 上層・層位不明	B・E 区	—	なし	—

表 18 SR02 上層出土遺物報告区分

E区北壁断面

- 1 盛土
- 2 灰黄色砂質シルト
- 3 淡灰褐色砂質シルト (古代包含層)
- 4 茶褐色粘質シルト (弥生後期包含層)
- 5 灰茶色砂質シルト (SR02 中層)
- 6 暗灰黄色砂質シルト (Fe 沈着層)
- 7 暗灰色粘質シルト
- 8 灰黑色粘質シルト (ベタ黒)
- 9 淡灰~暗茶色泥炭質 (縄文晩期包含層)

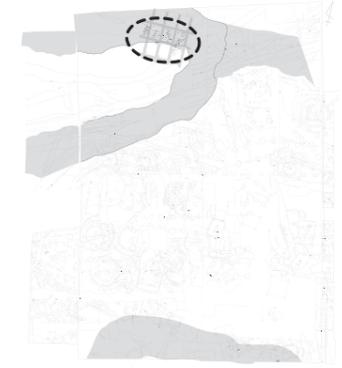


図 395 SR02 上層平・断面 遺物出土状況 E区北壁断面

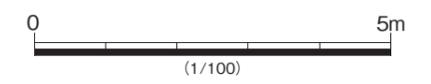




図 396 SR02 上層 遺物出土状況

SR02 上層出土遺物 (図 397.398)

出土土器・土製品には、壺(3662～3672)、甕(3673～3678)、高杯(3680～3686)、鉢(3679.3688～3698)、支脚(3699)がある。これらの土器群は、弥生後期前半古段階から後期後半新段階までの時間幅で捉えられ、伊予・備後地域等の搬入品を伴う。在地土器にかなりの時間幅が認められるため、搬入土器と在地土器の時間的な定点を把握することは難しい。

3671は壺胴部の小片であり、外面に櫛描原体よる簾状紋と列点紋が見られる。紋様の属性から見て、土佐地域からの搬入品と考えられる。3672の大形複合口縁壺は、形態・胎土から見て、伊予地域からの搬入品であり、伊予中部V-2様式に比定される。3684の高杯脚部は、外面に縦位の沈線を施し、胎土中に微量の角閃石を含む。施紋の属性や脚端部の形態から、吉備地域の搬入・模倣土器と考える。3688の鉢は、肩部の張った器形をもち、上方に大きく拡張する口縁部をもつ。形態から備後地域のV-2様式頃に比定される搬入・模倣土器と考える。3693は、大形鉢の胴部片と見られ、内面に水銀朱の付着が確認できる。(信里)

玉 3700はやや大型のガラス小玉である。色調はスカイブルーを呈し、直径5.0mm、高さ4.5mm、孔径1.5mmを測る。上下端は丸く仕上げるが、平面形、側面形ともに歪んだ形状を残すことから、良品とは言えない。器体内に縦方向に延びる気泡が残る。

石器 3701～3703はサヌカイト製打製石鏃である。3701は背面に古い剥離面残す剥片の周縁に細かな調整加工を施すものである。基部及び先端部は折損する。先端部は調整加工時に失敗して折損した可能性が高い。3702も剥片の周縁のみ調整加工を施すものである。左右の形状が不均整であり、未製品と考えられる。3703は先端、逆棘ともに尖っており、完成品と考えられる。小型品であるが風化は進んでおらず、弥生時代に所属するものと考えられる。

3704はハリ質安山岩製の剥片である。背面に自然面を残すことから、20cm程の自然礫から初期段階に剥離したものと推定できる。

3705はサヌカイト製打製石庖丁である。側縁に自然面を残し、板状素材の横幅一杯を取り込んで剥離した横長剥片を素材とするが、側縁の一方が抉り部を境に上下で幅が異なり、段を形成していることから、素材剥片剥離時に失敗した剥片を使用した可能性が高い。刃部や器面に顕著な磨滅痕を残す。

3706は流紋岩または凝灰岩を素材とした石錘である。平面は楕円形で、側縁を面取りし、幅2～3mmの紐掛溝を施す。溝は擦切り技法で施されており、サヌカイト製や結晶片岩製の切断具等で施したものと推定できる。(森下)

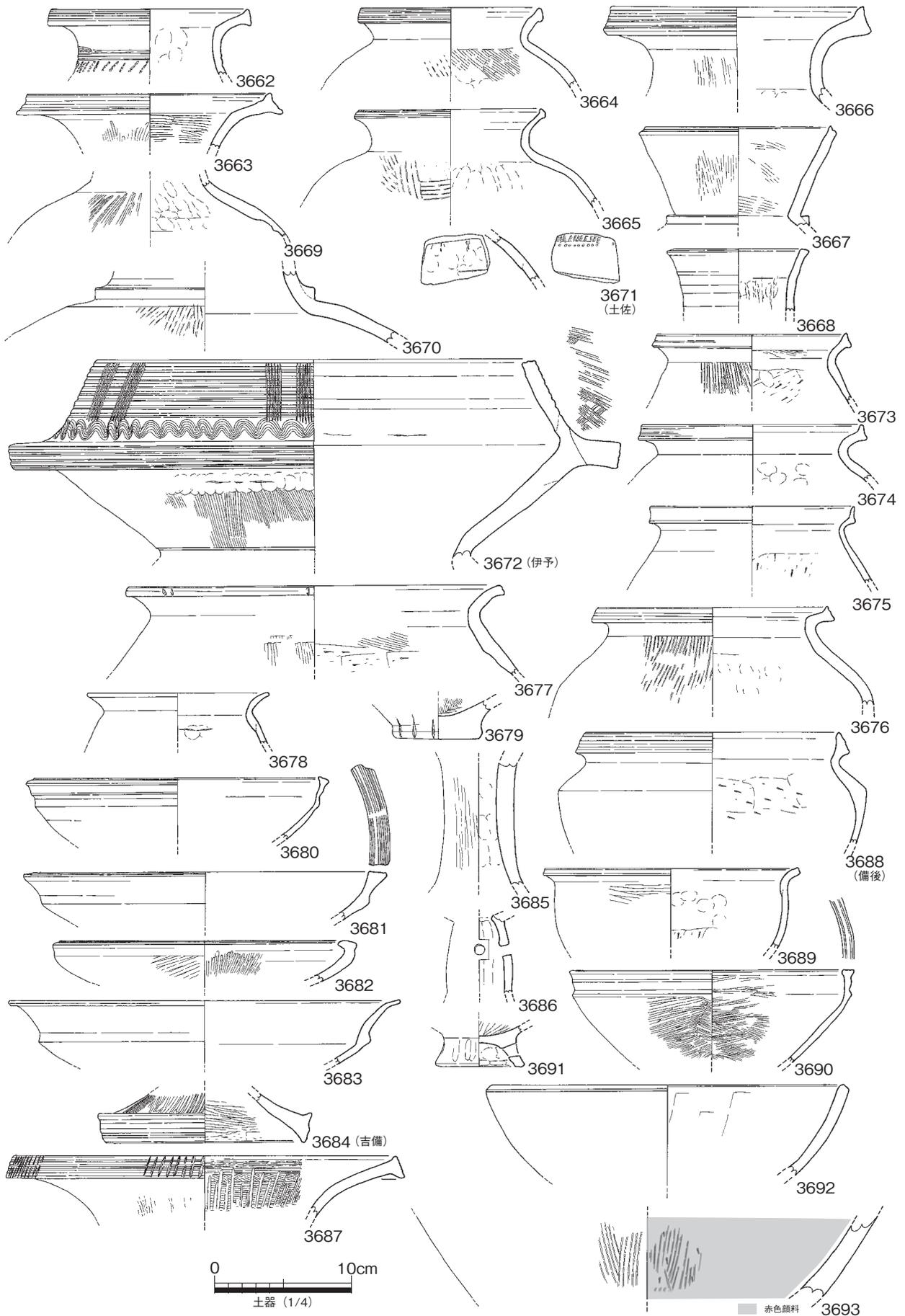


図 397 SR02 上層 A ブロック出土遺物 (1)

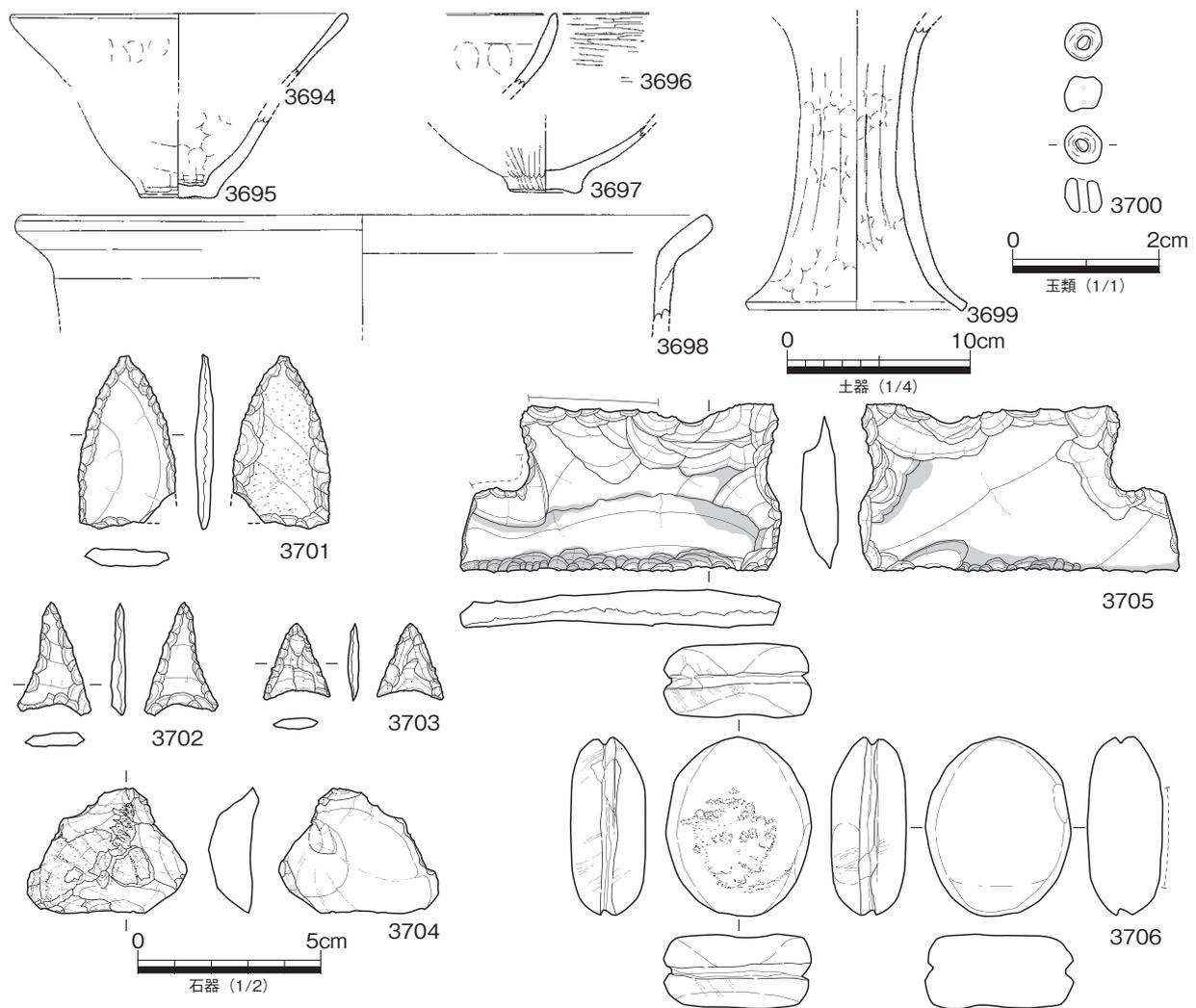


図 398 SR02 上層 A ブロック出土遺物 (2)

SR02 上層出土遺物 (図 399 ~ 405)

土器 出土土器・土製品には、壺 (3707 ~ 3755.3816)、甕 (3756 ~ 3790)、高杯 (3791 ~ 3805)、器台 (3806 ~ 3813)、鉢 (3814 ~ 3815.3817 ~ 3844)、製塩土器 (3845.3846)、支脚 (3848 ~ 3863)、手づくね土器 (3865)、円盤状土製品 (3864)、焼土塊 (3866.3867) が見られる。これらの土器の帰属時期は、弥生中期後半から古墳時代初頭にかけての時間幅を示し、量的には弥生終末期から古墳初頭の土器が多数を占める。また、内面に水銀朱の付着が認められる個体が多く、備中・備後・土佐・阿波等の搬入土器も散見される。

3717、3719 は細頸壺の肩部から胴部片と見られ、外面をベンガラで彩色を行う。胎土中に角閃石は目立たないが、赤色顔料と形態から備中地域からの搬入品と見られる。3719 は鬼川市Ⅱ～Ⅲ式に比定される。3720 ~ 3722 も同様の吉備系の細頸壺と考えられる。3731 の壺あるいは甕は、口縁部形態から伊予地域の V -2 様式に比定される。3732 は肩部の張る短頸壺と見られ、備後地域の V -2 様式に散見されるものであり、搬入品の可能性が高い。3733 の複合口縁壺は、外面に小条の凹線紋と頸部が締まる形態をもつもので、備後地域の V -3 様式に類例が見られる。3734 の複合口縁壺は類似品を見出し難いが、備後を含めた複合口縁壺の主要分布圏である西部瀬戸内からの搬入・模倣土器と想定される。3735 は土佐型の壺あるいは甕であり、同地域からの搬入品であり後期前葉頃の所産と見られる。

3738 の複合口縁壺は、口縁の反転部に刻目を施すもので、在地品と異なる形態をもつ。口縁部の立

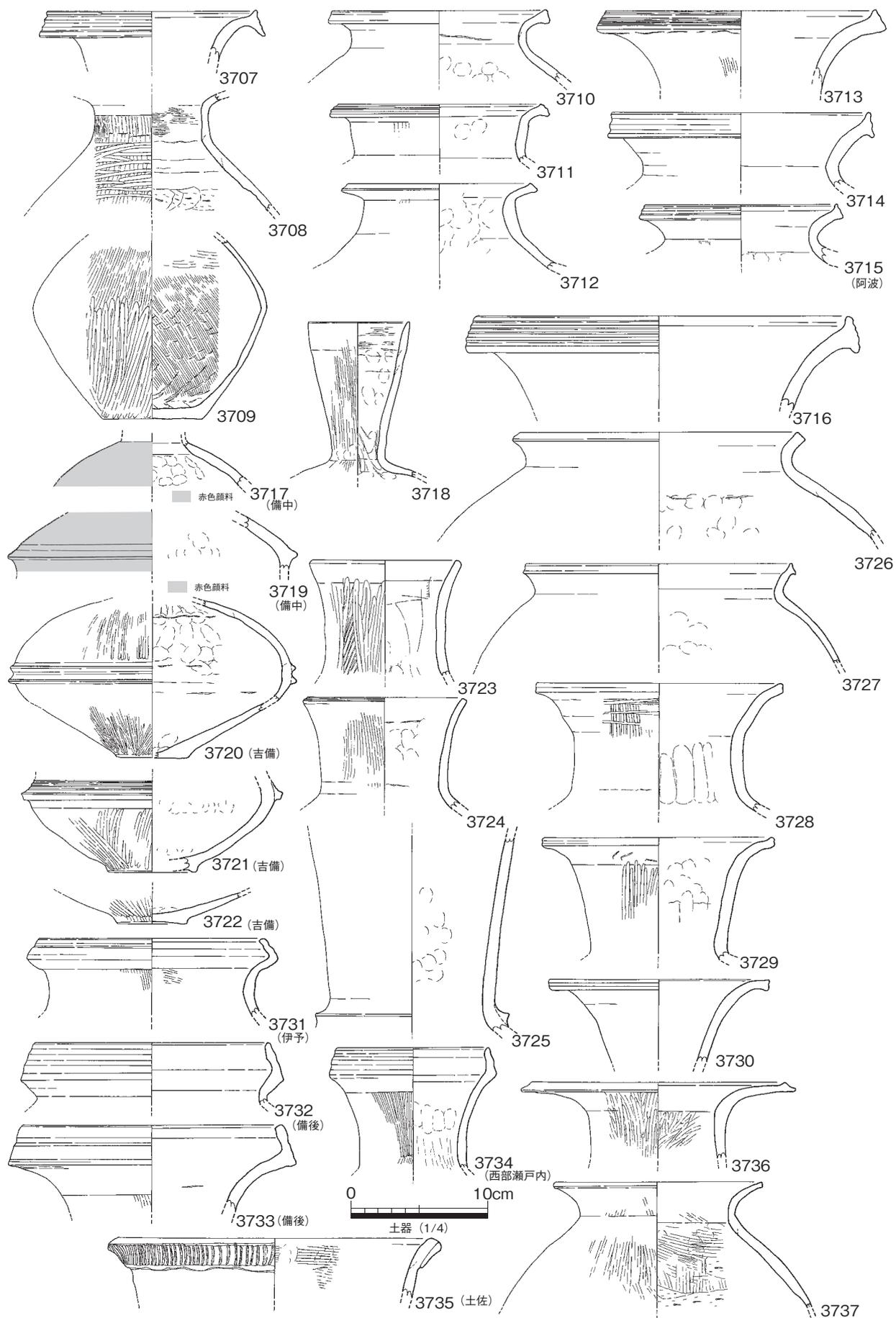


図 399 SR02 上層 B ブロック出土遺物 (1)

ち上がりが短いことが相違点として残るが、豊後地域等西部瀬戸内からの搬入・模倣土器と考える。3739は装飾高杯の脚部片である可能性もある。3740の複合口縁壺も類似品に乏しいが、複合口縁壺の主要分布圏である西部瀬戸内からの搬入・模倣土器として提示したい。3741は後期初頭の高杯の口縁の可能性も残るが、高杯と考えた場合、杯部と口縁部境の屈曲部の形態に違和感があり、壺としてレイアウトした。他地域からの搬入品の可能性もある。3743、3744、3746は外面に記号紋が施される個体であり、3743、3746は同一個体と考えられる破片をそれぞれ2点に分けて図示した。3745は分析は行っていないが、ベンガラと見られる赤色顔料が付着している。3754、3755は内面に水銀朱の付着が見られる底部片であり、形態から後期前半古段階から中段階にかけての所産と見られる。

3776の甕は、上方に拡張する口頸部境を外側に拡張するもので、備後地域からの搬入品と考えられる。備後地域のV-3様式に比定される。3777は肩の張った胴部に上方に拡張する口縁部をもつ甕であり、胎土中に角閃石をやや多く含む。形態、胎土から備中地域からの搬入品と見られ、同地域の鬼川市Ⅲ式に比定される。3789の甕底部片は、胎土中に片岩粒を含むことから、阿波地域からの搬入土器と見られる。3791の直立する口縁部をもつ高杯は、内外面にベンガラで彩色を施す。角閃石を多く含む胎土をもち、高松平野の香東川下流域産である。3792の高杯は形態から、吉備地域からの搬入・模倣土器と考えられ鬼川市Ⅰ式に比定される。

3807の器台口縁部は、口縁下端に刻目を施し、内外面にベンガラで彩色を施す。胎土中に角閃石を多く含み、備中地域からの搬入品と見られ鬼川市Ⅰ～Ⅱ式に比定される。3814の鉢は拡張口縁をもち、備後から安芸地域にかけての属性を備えるが、口縁部の屈曲度合い等に相違点があり、模倣土器と考える。

3825の台付鉢の内面には、ベンガラと見られる赤色顔料が付着している。3841～3844は内面に水銀朱の付着が認められるもので、3841は把手付片口鉢の把手部と考えられる。3845、3846は円盤充填技法を認めることから、備讃Ⅳa式の製塩土器の脚部と見られる。3847は小形の台付鉢と見られる口縁部下に把手状の粘土貼り付けを見る。

3848～3863は支脚である。3864は円盤状の土製品で、2枚の粘土板を接合するもので、機能は不明である。3866は複数の熱変部が見られる焼土塊である。(信里)

石器 3868はサヌカイト製打製石鏃である。長さ2.2cmの小型品だが、磨滅は進行していない。3869は安山岩製の打製石庖丁である。刃部付近に顕著な磨滅痕が残る。3870はサヌカイトの板状素材から石理に沿って両極打撃により剥離した自然面付着剥片の末端に、主要剥離面からのみ調整加工を施したスクレイパーである。刃部には石庖丁のような顕著な磨滅は見られない。3871はサヌカイト剥片周縁に表裏両面から調整加工を施したスクレイパーである。3872は背面が少全面となる剥片の一部に抉りを施したサヌカイト製スクレイパーである。3873は横型のサヌカイト製石匙である。他のサヌカイト製石器と比べ、明らかに風化が進行しており、縄文期の混在品と考える。3874は安山岩製の磨石である。扁平な円礫の周縁に線状の敲打痕が残る、表裏面は光沢を帯びる程の研磨が施される。(森下)

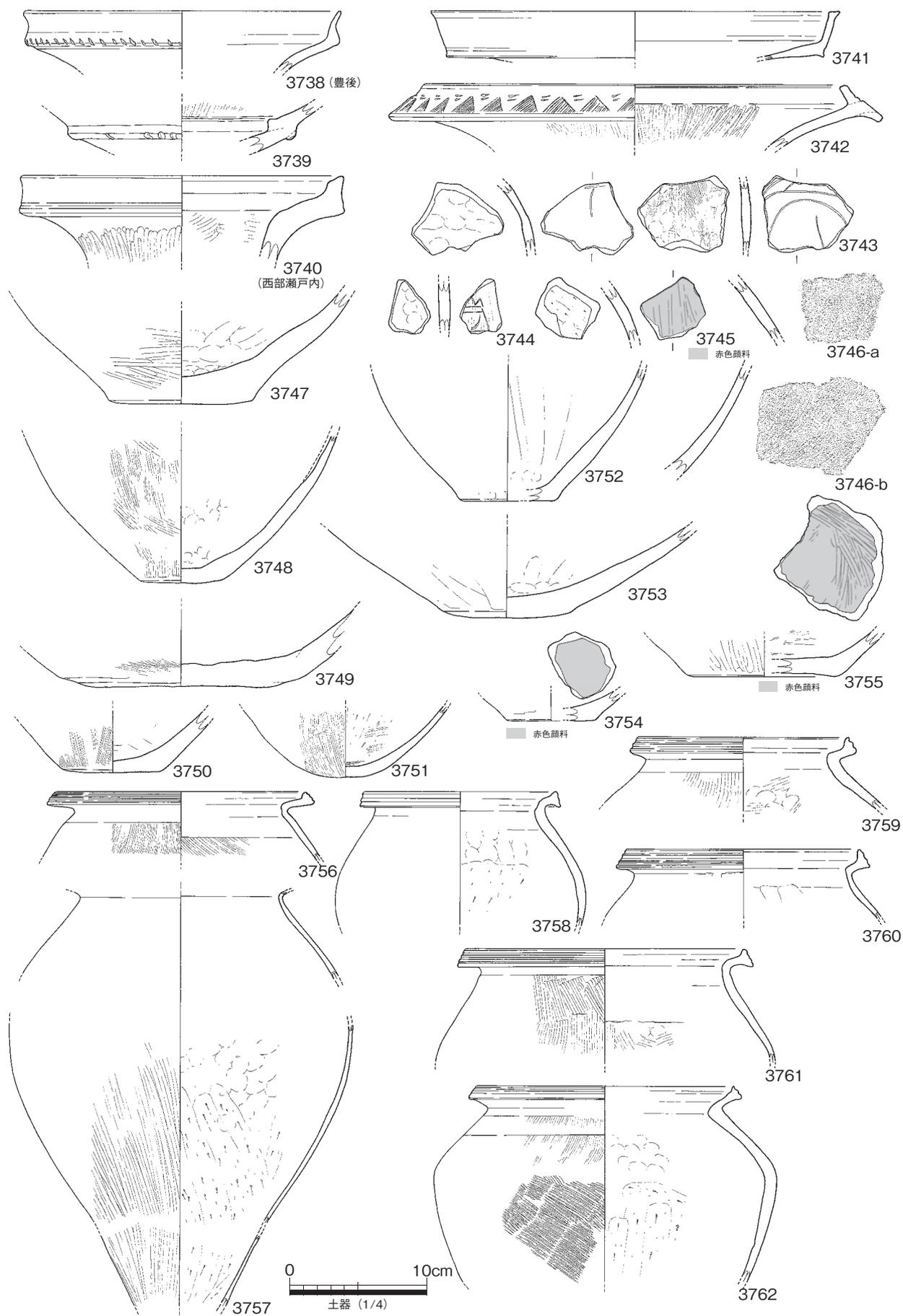


図 400 SR02 上層 B ブロック出土遺物 (2)

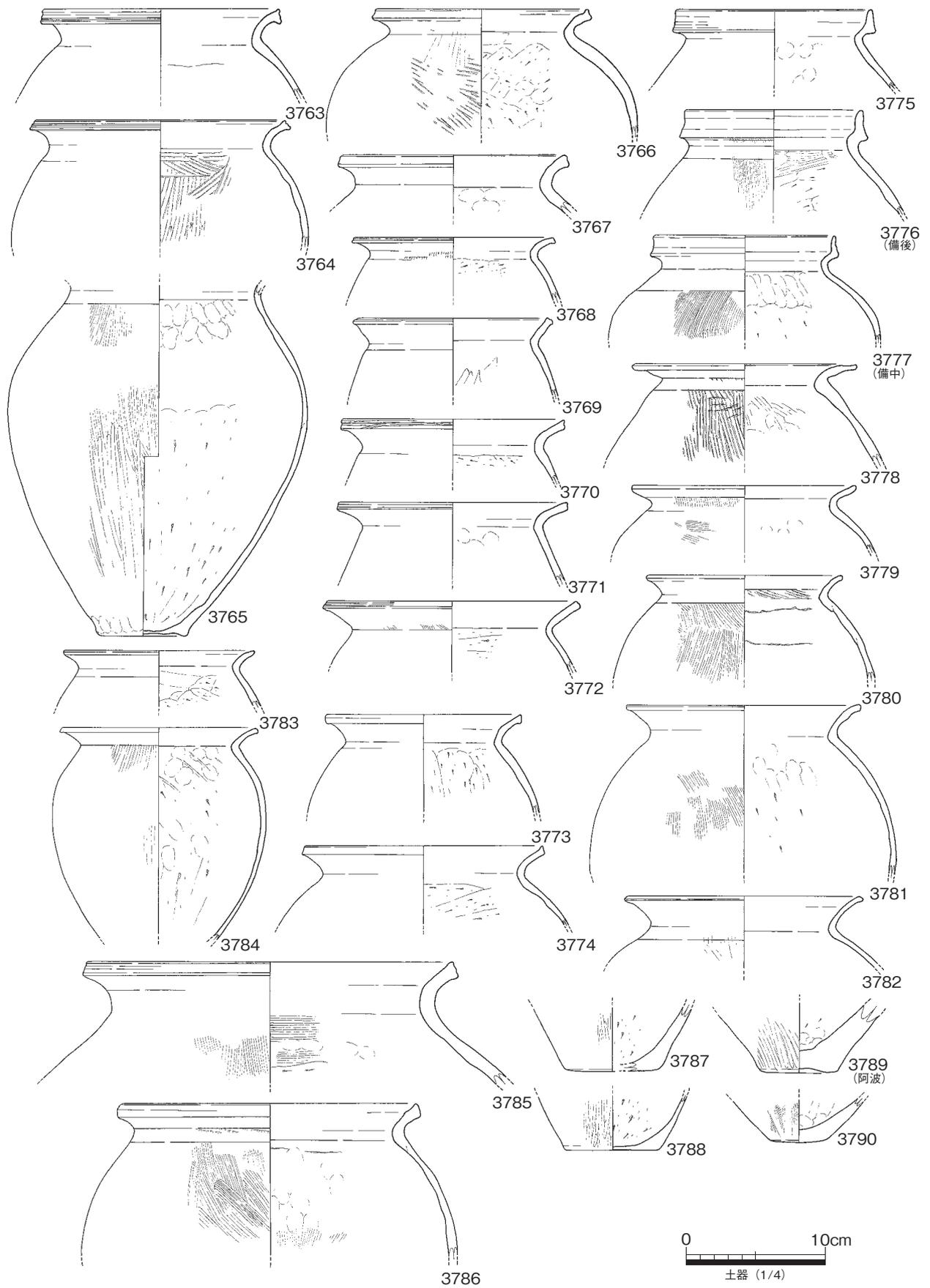


図 401 SR02 上層 B ブロック出土遺物 (3)

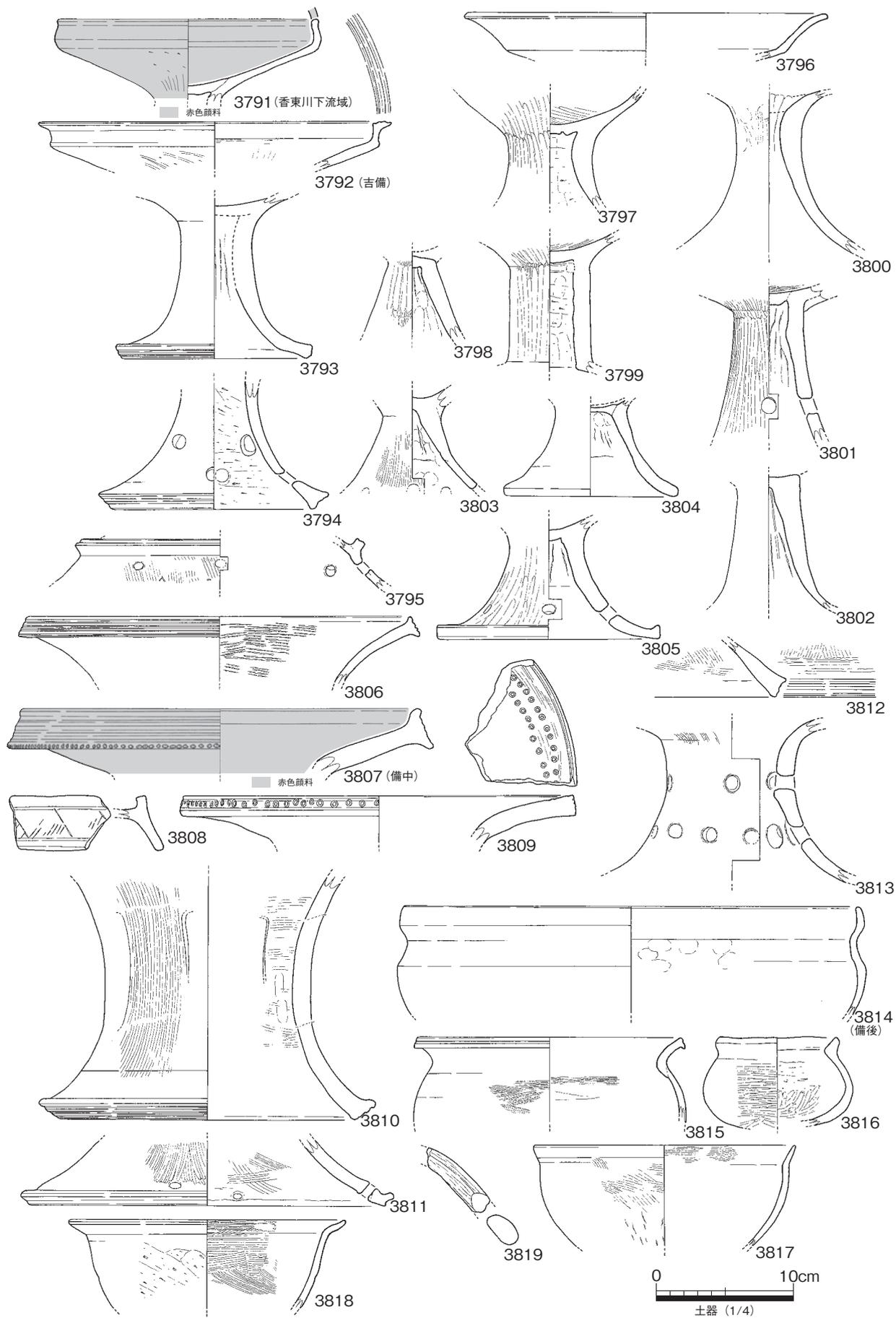


図 402 SR02 上層 B ブロック出土遺物 (4)

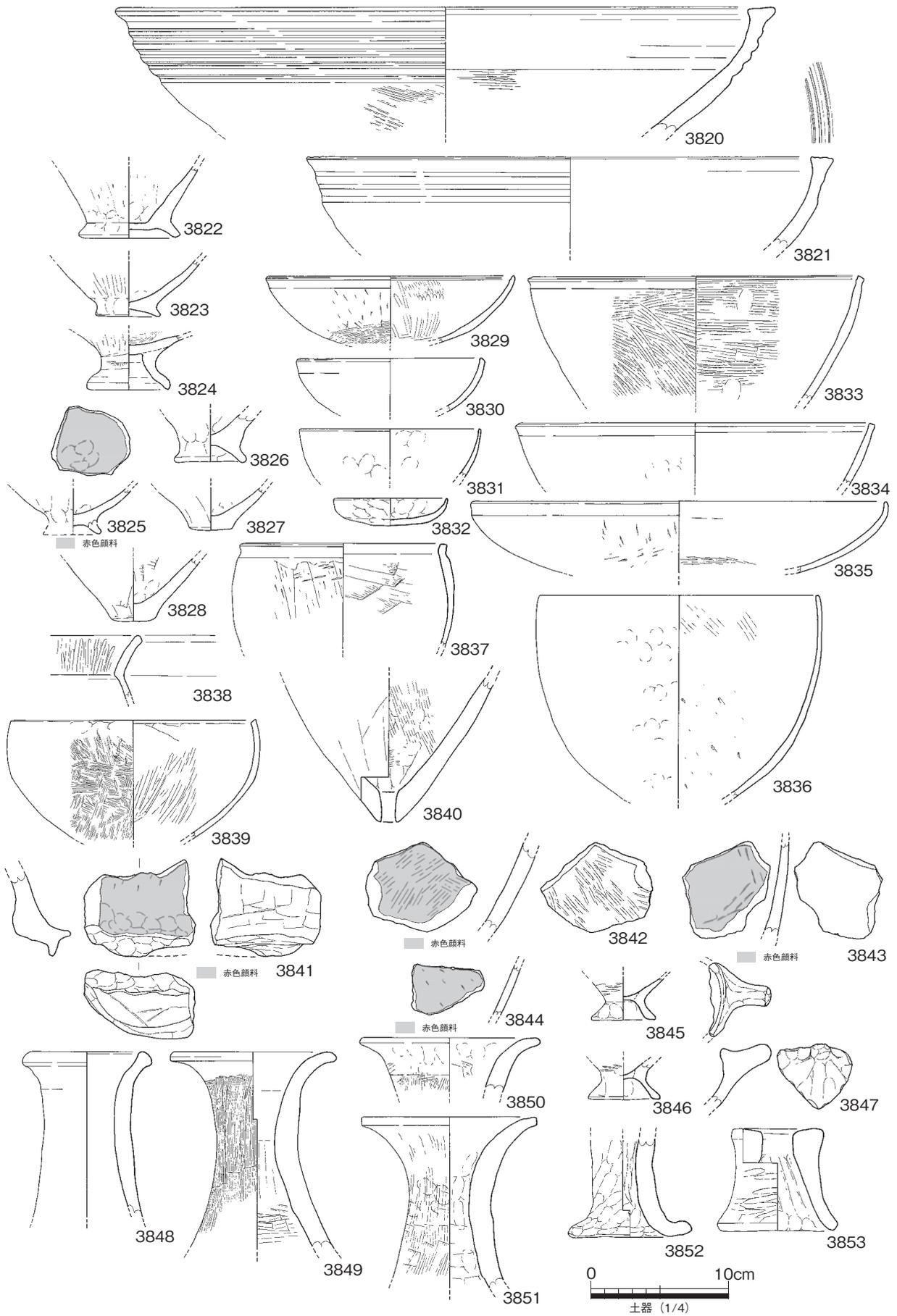


図 403 SR02 上層 B ブロック出土遺物 (5)

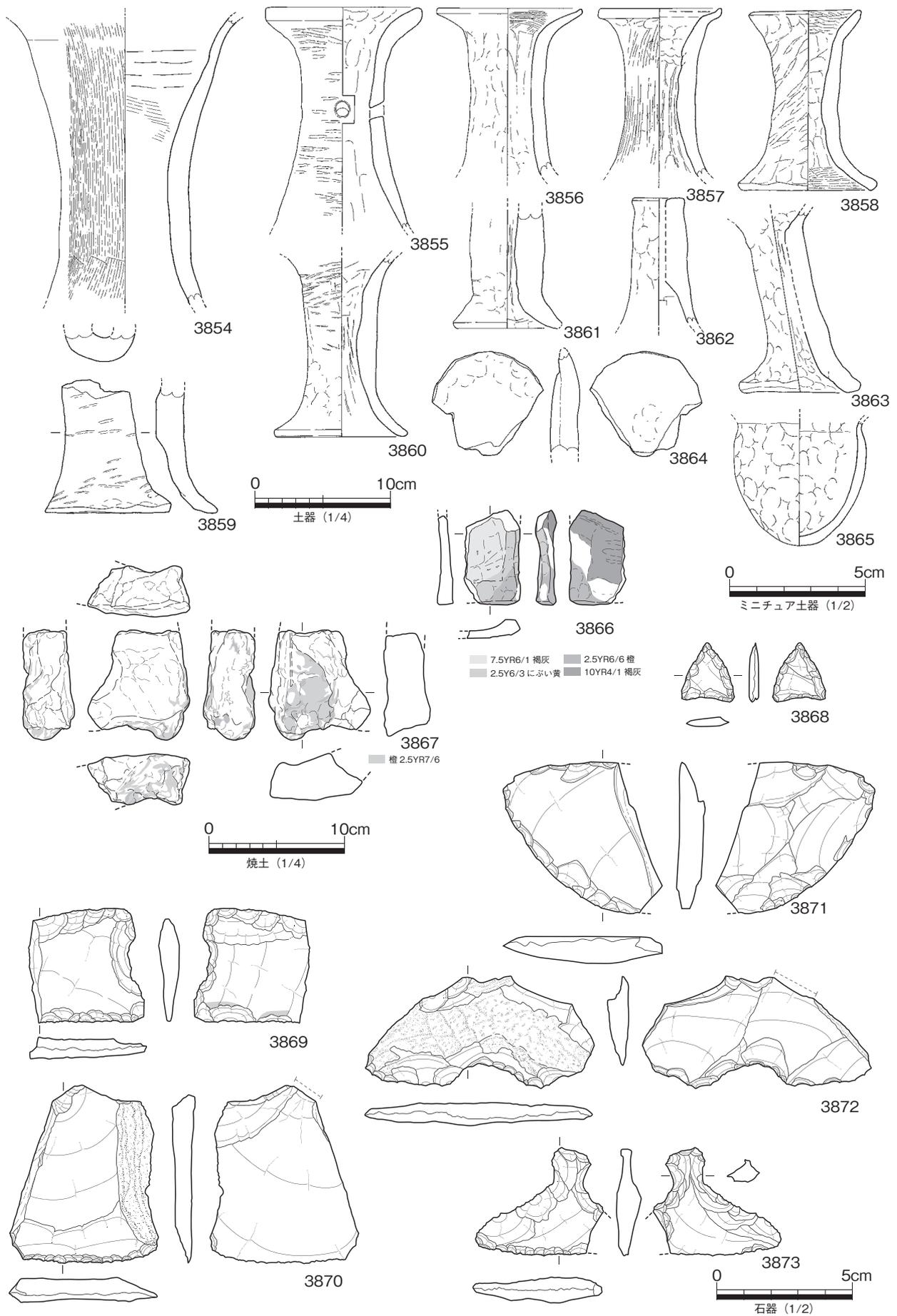


図 404 SR02 上層 B ブロック出土遺物 (6)

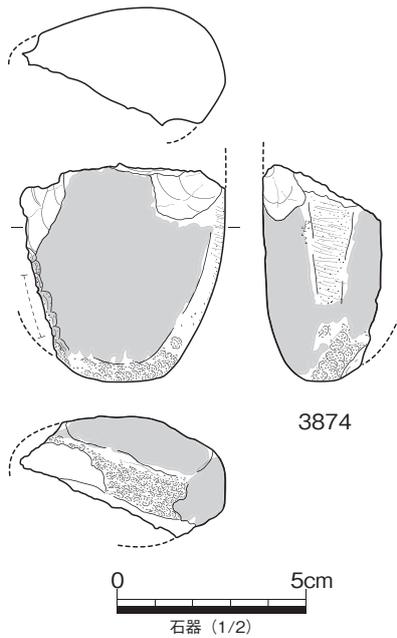


図 405 SR02 上層 B ブロック
出土遺物 (7)

SR02 上層出土遺物出土遺物 (図 406 ~ 408)

土器 出土土器・土製品には、壺 (3875 ~ 3892)、甕 (3893 ~ 3902)、高杯 (3912)、鉢 (3903 ~ 3911.3913 ~ 3919)、支脚 (3920.3921)、手づくね土器 (3922) が見られる。出土土器は、弥生後期前半新段階から古墳前期までを含む時間幅で捉えられる。

3875 の広口壺は、口縁部形態や頸部の沈線紋帯等に吉備地域の影響を見る。時間的な位置付けは、鬼川市 I 式に比定される。3883、3884 の複合口縁壺は、類例に乏しいが、安芸地域等西部瀬戸内地域からの搬入品と推測される。3885 は在地品の複合口縁壺であり、後期後半の出現期のもものと見られる。3887 は中型品の長頸壺である。本地域でレギュラーパーセントを占めるものではないが、東予地域の八堂山遺跡 1 号溝等に類例がある。

3895 の甕は球形化の著しい胴部をもち、形骸化した平底を留めるが、時間的には古墳初頭まで下る。3912 は外面に絞痕が見られず、内面をミガキ締める調整や、下部の擬口縁の状況から、高杯と考えられ、古墳初頭まで下る。(信里)

石器 3923 はサヌカイト製打製石鏃である。風化は進行せず、黒色を呈し、左右が歪な形状を呈すことから、未製品と考える。3924 はサヌカイト製の擦切切断具である。平面形は台形を呈し、厚みのある剥片の周縁に敲打を施し形状を整えた後、周縁部を石材等に押し付けて刃部と平行方向の擦切りを行うことにより、溝形成や石材切断等に使用したものと考える。擦切り面は強く磨滅し、刃部と平行方向の細かな線状痕が残る。流紋岩製有溝石錘の溝成形や砥石製作における石材切断等、主に打製石器以外の石器製作に使用された工具である。また、サヌカイトの石材としての硬さを考えると、金属器の切断や細かい部分の研磨等にも使用された可能性がある。3925 は砂岩製の叩石である。主にあばた状の敲打痕が顕著に残る。(森下)

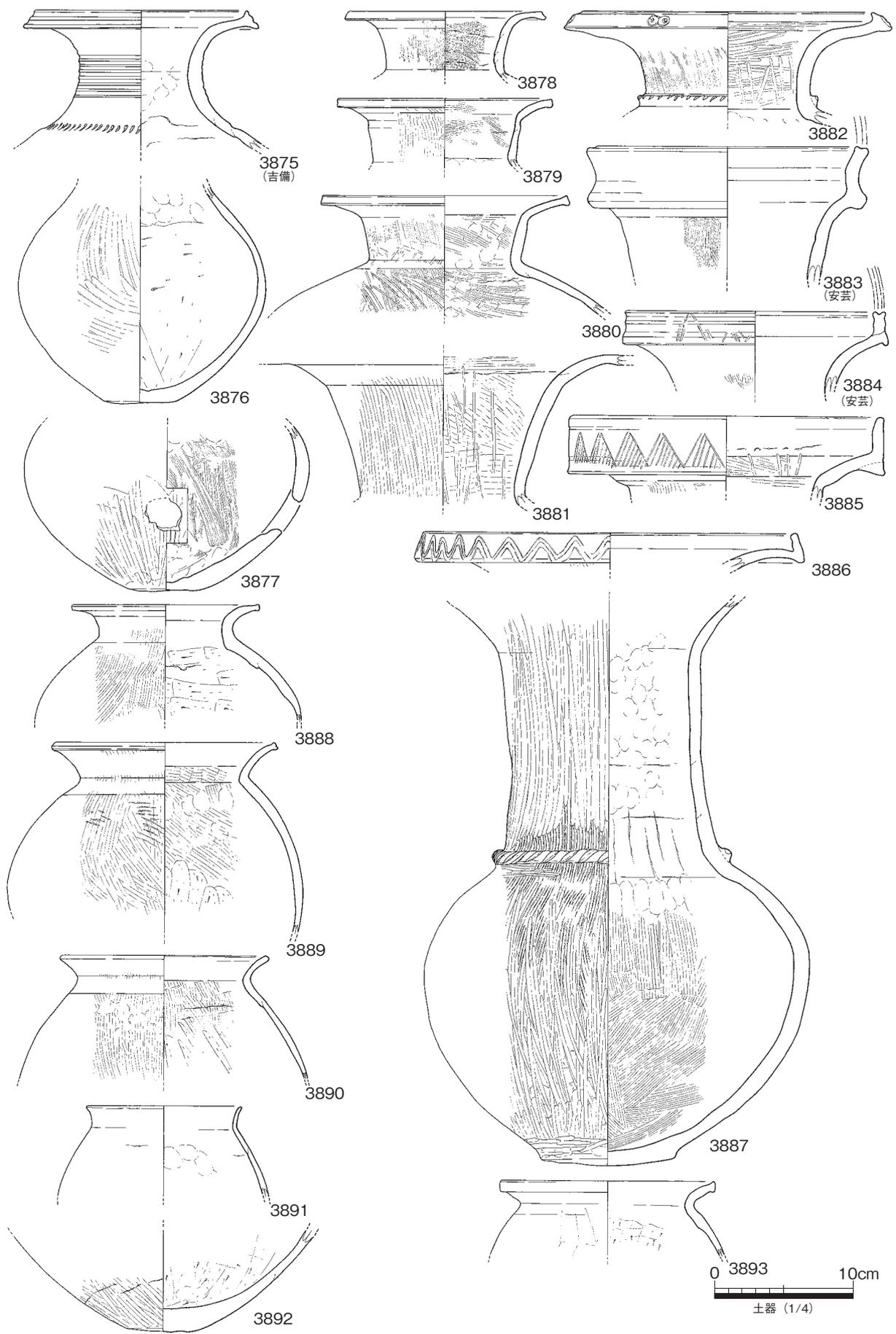


図 406 SR02 上層 B ブロック番号取り上げ出土遺物 (1)

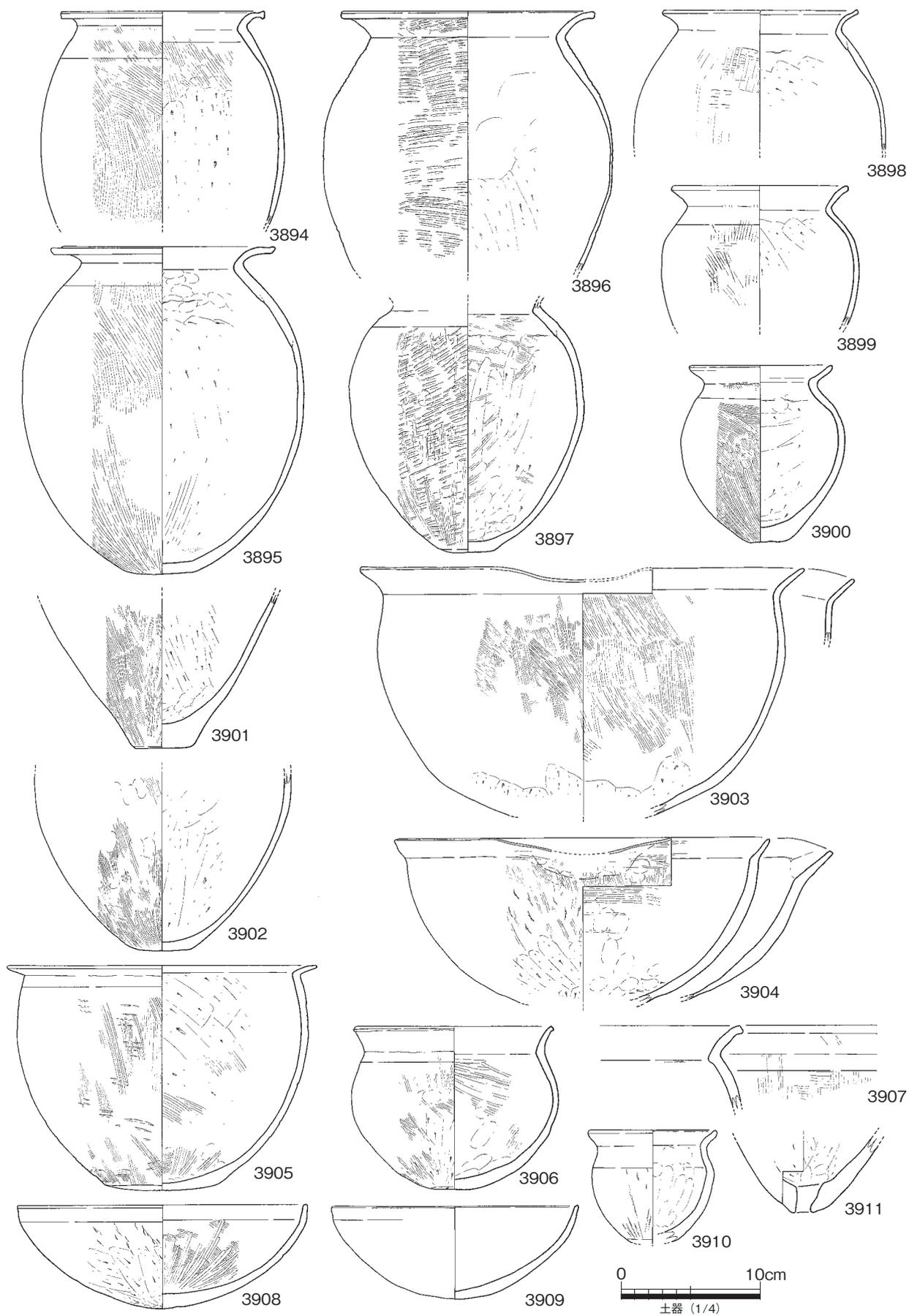


図 407 SR02 上層 B ブロック番号取り上げ出土遺物 (2)

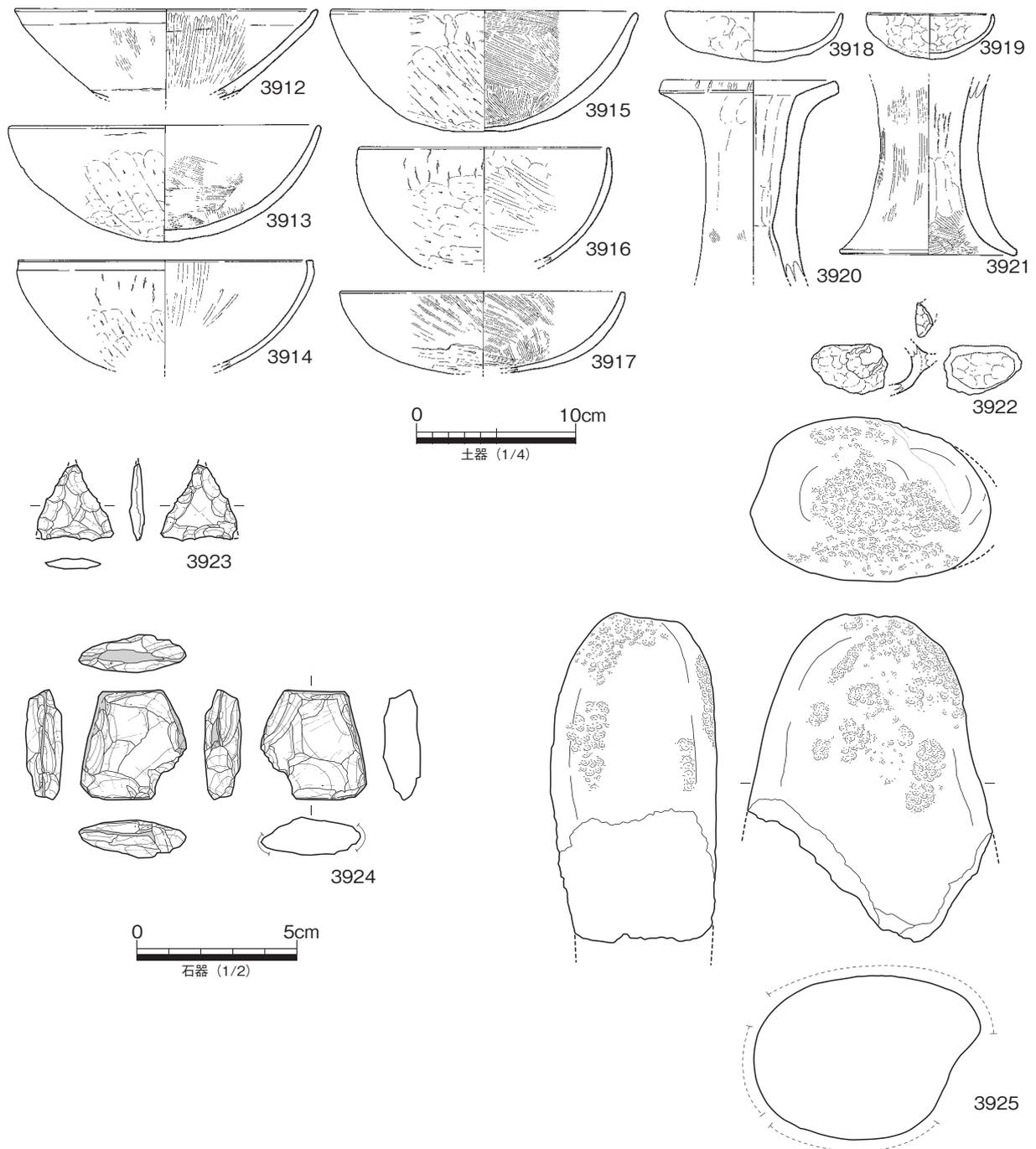


図 408 SR02 上層 B ブロック番号取り上げ出土遺物 (3)

SR02 上層出土遺物 (図 409・410)

土器 出土土器・土製品には、壺 (3926～3938.3945)、甕 (3939～3943)、高杯 (3944.3946.3947)、器台 (3948～3950)、鉢 (3951.3952)、製塩土器 (3953)、ミニチュア土器 (3959)、支脚 (3954～3958) が見られる。これらの土器群は、弥生後期前半古段階から古墳初頭までの時間幅をもつ。

3930 の口縁部が複合口縁状となる壺は、伊予中部からの搬入・模倣土器と考えられ、松山大学構内遺跡 2 次 SB07 出土資料に類例が見られる。3931 は備後地域の V-2 様式に類例が認められる。3932 は吉備系の細頸壺の胴部片であり、胎土中に少量の角閃石を含む。3933 の直口壺は、古墳前期まで下る可能性が高い。3936、3937 は外面に記号紋が認められる。3945 は複合口縁壺と見られ、外面に櫛描に

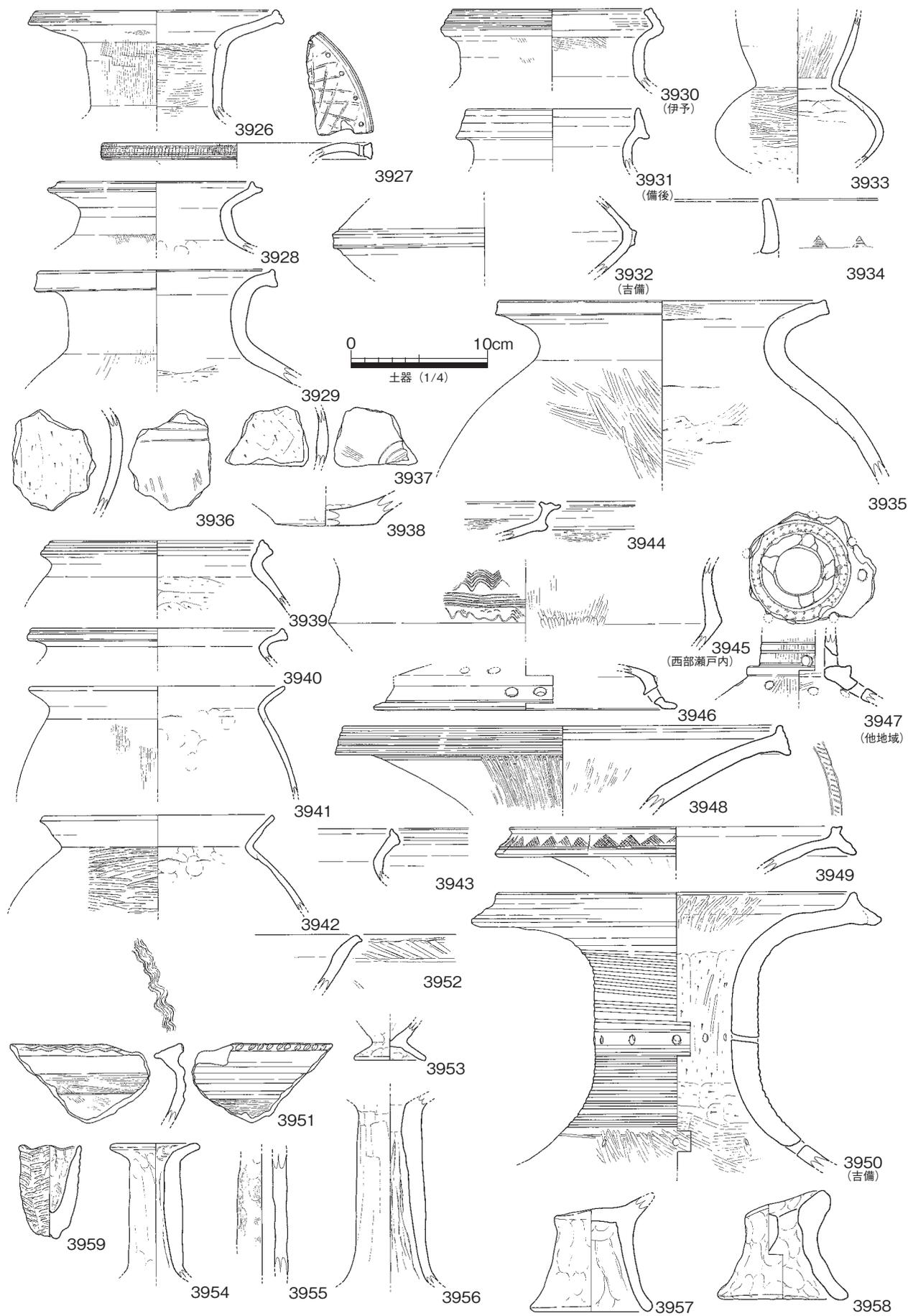


図 409 SR02 上層 C ブロック出土遺物 (1)

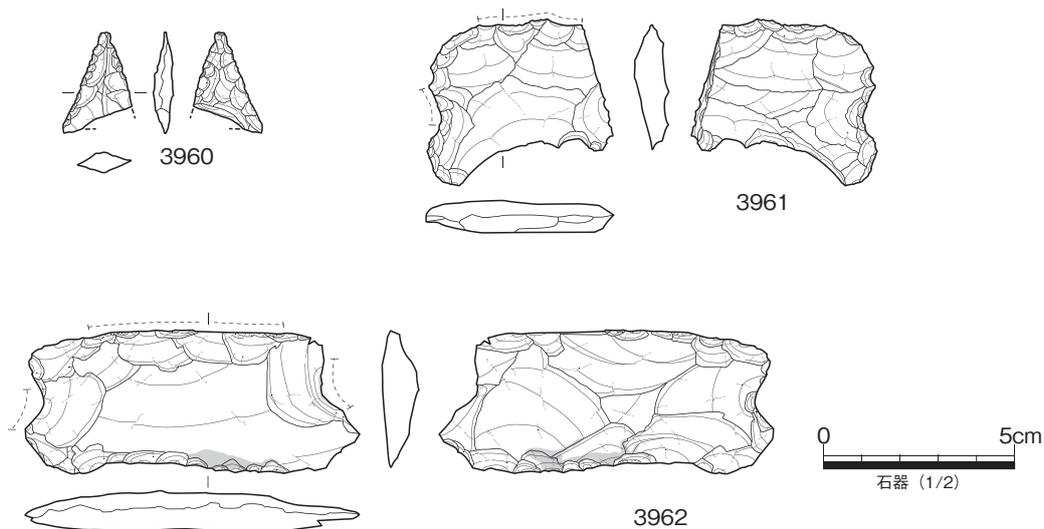


図 410 SR02 上層 C ブロック出土遺物 (2)

よる波状紋と直線紋を施す。西部瀬戸内地域からの搬入・模倣土器と考えられる。3947 は装飾高杯の脚部であり、柱状部との器形変化点に施した突帯上面に半裁竹管による列点紋を施す。紋様の属性から見て、搬入品の可能性も考えられる。3950 の器台は、口縁部形態と柱状部外面の全面に及ぶ沈線紋帯、透かし孔等に在地品に見られない属性が見られることから、他地域からの模倣土器の可能性もある。3953 は円盤充填の確認ができないが、備讃Ⅳ a 式の製塩土器と考える。(信里)

石器 3960 はサヌカイト製打製石鏃である。基部が折損し、先端部に事故と思われる深い剥離が施され、先端の仕上げが不十分な個体である。未製品と考える。3961 はサヌカイト製打製石庖丁である。上下縁に敲打が残ることから、楔状石核に転用されたものとする。3962 もサヌカイト製打製石庖丁である。刃部に僅かな磨滅が見られる。(森下)

SR02 上層出土遺物 (図 411)

土器 3963 は広口壺の口縁部である。3964 は形態や施紋の状況から見て、器台の口縁部と見られる。3968 は尖底の有孔鉢であり、成形・調整ともに粗雑な感を受ける。(信里)

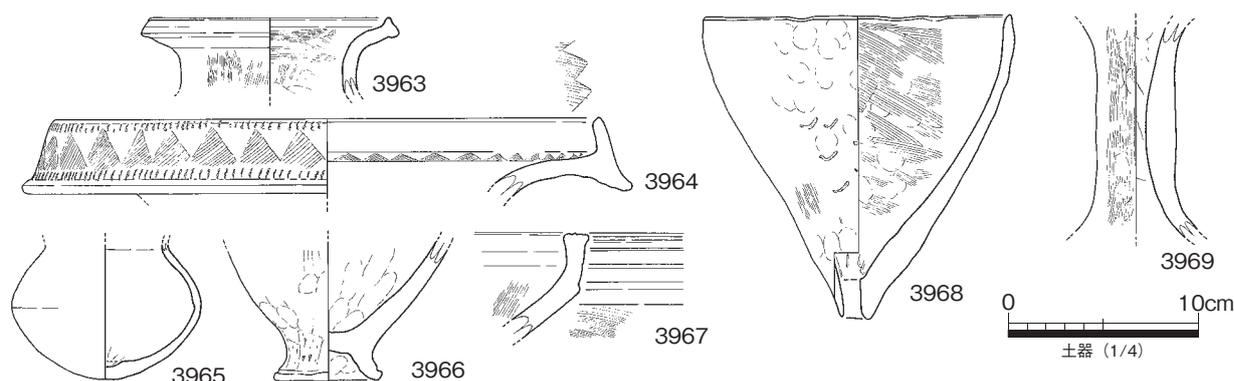


図 411 SR02 上層 C ブロック番号取り上げ出土遺物

SR02 上層出土遺物 (図 412 ~ 414)

土器 出土土器・土製品には、壺(3970～3985)、甕(3986～4005)、高杯(4006.4008～4010)、器台(4011.4012)、鉢(4007.4013～4033)、支脚(4034～4038)が見られる。

3980の複合口縁壺は、伊予中部地域からの搬入品と見られる。松山市桑原田中遺跡 SK1等に類例があり、同地域のV-3様式に比定される。3979は細頸壺の胴部片であり、縦位の棒状浮紋が見られ、吉備地域からの搬入・模倣土器と見られる。3981の複合口縁壺は、頸部に突帯の剥落痕が見られ、伊予中部地域からの搬入品である。同地域のV-3様式に比定される。3983、3984は在地の広口壺の口縁上部に粘土貼り付けを行い複合口縁とするものである。この形式は、終末期から古墳初頭に多く見られ、胎土中に雲母片を多く含むものが多い。

3987は、高松平野の香東川下流域産の甕であり、下川津I式に比定される。3989、3990の甕は備後地域からの搬入・模倣土器と見られる。3991は備後北部地域に見られる形態に類似する。

4000、4005の甕は、時間的に見て古墳初頭に下る可能性が高い。4026は焼成時の変形が著しい鉢であり、胴部外面に別個体と見られる小片が溶着する。4033は内面に水銀朱の付着が認められ、甕底部付近の破片の可能性はあるが、水銀朱が付着していることから見て、朱精製容器の甕半裁による把手付片口鉢の可能性が高い。(信里)

石器 4039はサヌカイト製打製石鏃の未製品である。一側縁にのみ細かな調整加工が残る。4040、4041はサヌカイト製打製石鏃である。4040は平基式の大形品で表裏素材面に磨滅が残る。4041は凸基式で先端は尖るが、基部は調整加工の失敗か薄く、下端部は折損する。

4042は上下縁に敲打が残ることから、楔状石核に転用されたものとする。4043は砂岩製叩石である。被熱で赤化・亀裂が入る。周縁に顕著な敲打痕が残る。(森下)

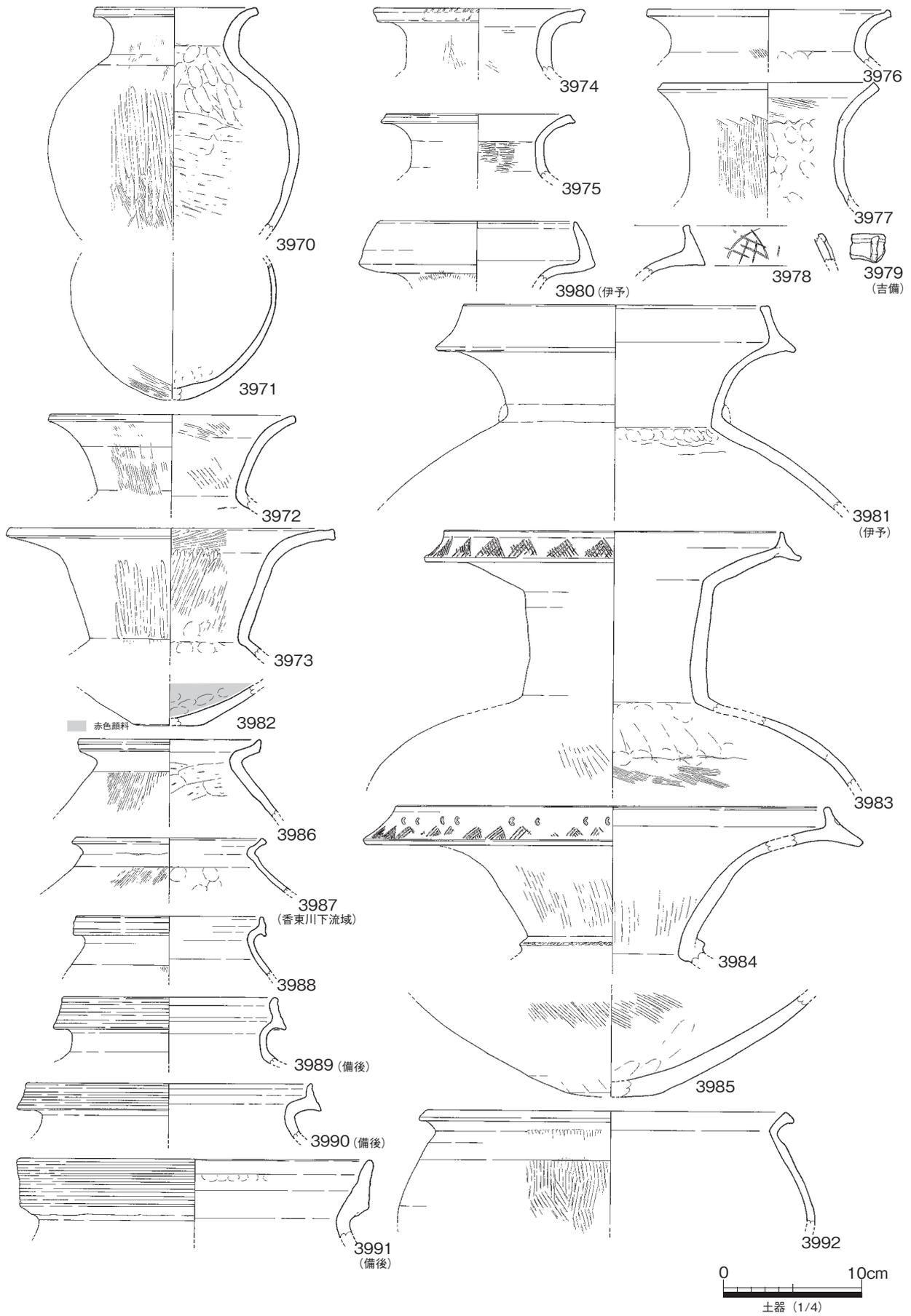


図 412 SR02 上層 E ブロック出土遺物 (1)

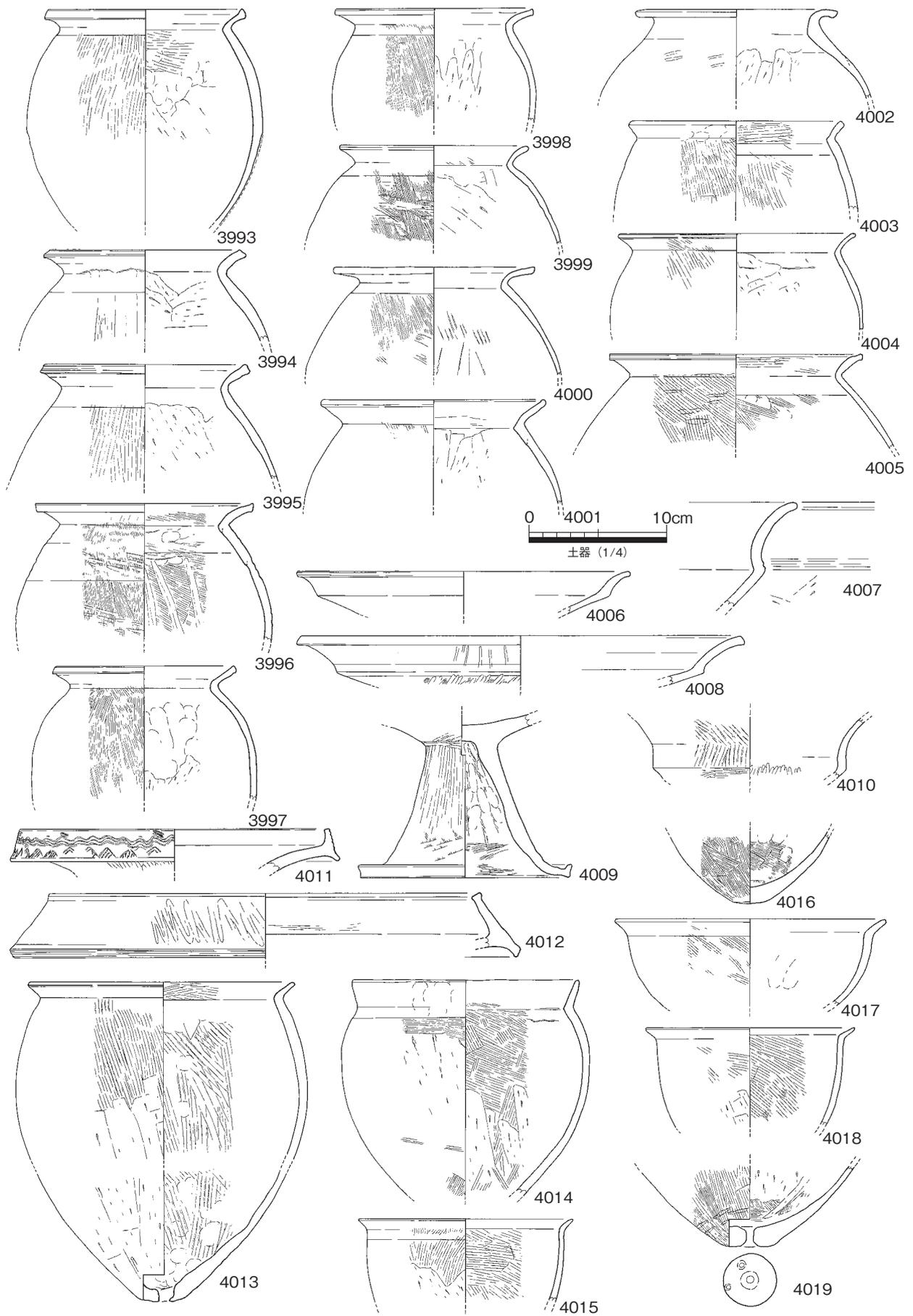


図 413 SR02 上層 E ブロック出土遺物 (2)

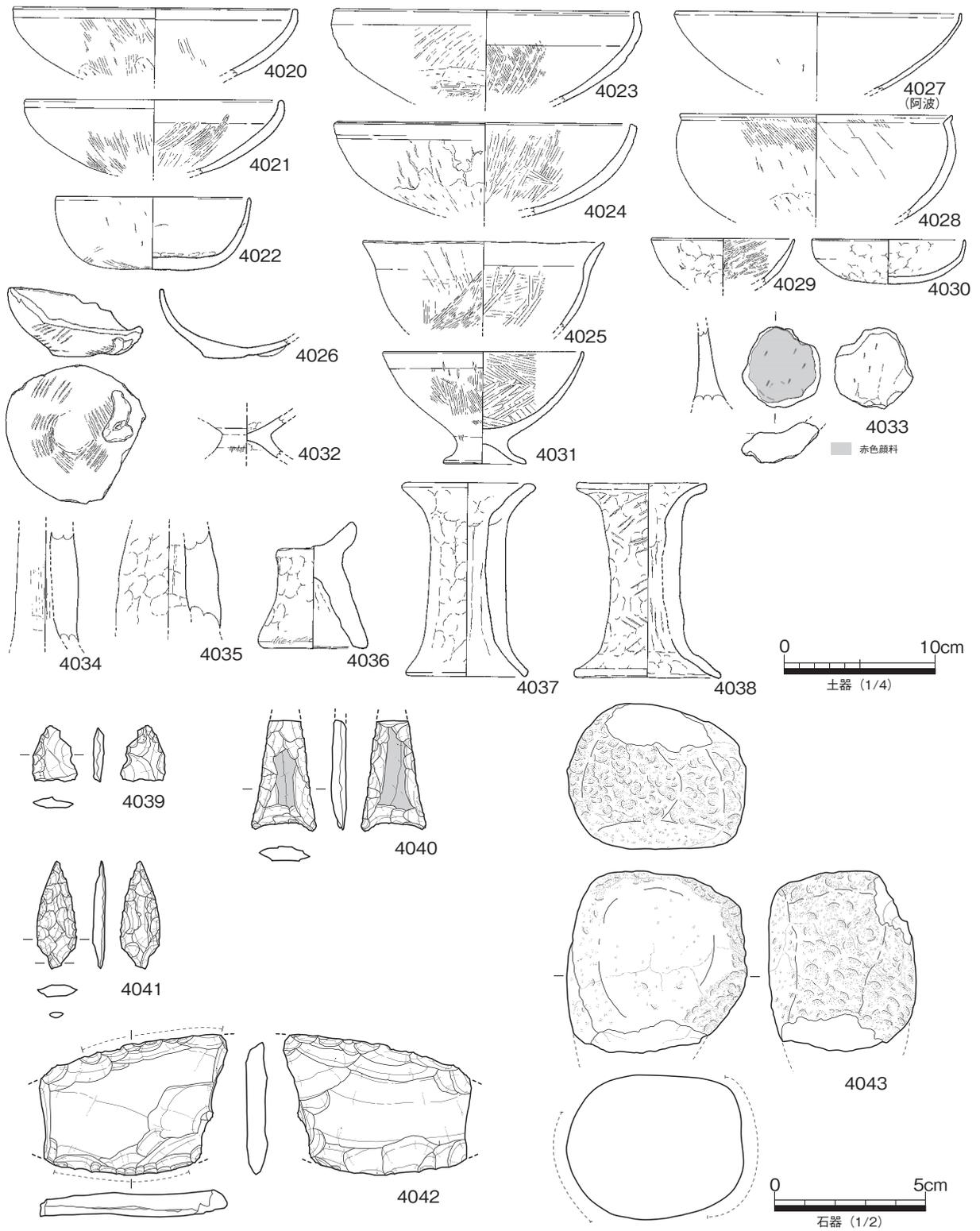


図 414 SR02 上層 E ブロック出土遺物 (3)

SR02 上層出土遺物 (図 415 ~ 428)

土器 本土器群は、番号を与えず層位的に取り上げた一群である。また、この本区画は、上層の中でも最も土器量が多い。出土土器・土製品には、壺(4044 ~ 4102)、甕(4105 ~ 4191)、鉢(4192 ~ 4197.4231 ~ 4316)、高杯(4198 ~ 4208)、器台(4209 ~ 4224)、台付鉢(4225 ~ 4230)、支脚(4326 ~ 4341)、ミニチュア土器(4344.4345)がある。出土土器は、弥生後期前半から古墳時代初頭の時間幅を示すが、残存率が高い個体の多くは、弥生終末期から古墳初頭に帰属するものが多い。また、伊予地域等の少数の他地域からの搬入品を含む。

4051 は、内外面をベンガラで彩色を施す備中地域の長頸壺であり、鬼川市Ⅱ式・V-2 様式に比定される。4073 の広口壺は、頸部外面に鋸歯紋が一定間隔で施される。4079 は形態及び施紋の状況から、他地域からの搬入土器の可能性が高い。4083、4084 は在地で組成する複合口縁壺で、4085 は口径の復元に不安が残るが、同様のものと考えられる。4087 は伊予中部地域からの搬入品と見られる複合口縁壺である。伊予中部V-3 様式に比定される。4088 の複合口縁壺は、在地で組成するものと形態的に異なるため、搬入品の可能性が高い。4086、4089 ~ 4092 は広口壺の口縁部に粘土帯を継ぎ足し複合口縁化するもので、弥生後期後半から終末期にかけて組成する在地品であり、雲母片を多く含む。4094 の直口壺は、古墳初頭まで下る。

4103 は弥生前期前半の甕であり、胴部外面に1 条の貼り付け突帯を付与する。4104 は砲弾形の胴部をもつ突帯紋系の甕であり、4103 と同様に弥生前期前半期に位置付けられる。4105 は胎土中に片岩粒を多く含む阿波地域からの搬入品である。4106 は高松平野の香東川下流域産の甕である。4109 は明瞭な突帯の底部をもつ甕であり、他地域からの搬入土器と見られるが、地域の特定には至らない。

4120、4124 は胴長の器形をもつ甕であり、形態的に古式土師器的な様相が強いものである。4145、4151 ~ 4153 は古墳前期に下る古式土師器と見られる。4167 は胴部最大径が上位にあり、平底を留める大型甕で、弥生終末期に多く見られるものである。4164、4167 は口縁部が反転位置が下位にあり、胴部の球形化が著しいことから、古墳初頭まで下る。4180 は胴長で口縁部が大きく外反するもので、在地に見られない形態をもつ。4183、4184 は古墳前期まで下る古式土師器と見られる。4208 は外へ踏ん張った形態をもつ高杯であり一見東海地域のものに類似するが、法量が小型であり、断定はできない。4219 の器台は外面に格子状のヘラ描きによる記号紋を施す。4221 は複合口縁壺の可能性があるが、紋様から器台と判断した。

4225 の台付鉢は、外面の櫛描施文の属性から、吉備系と考えられる。4234、4235 は形態から備後地域からの搬入・模倣土器と見られるが、4235 は胴部の張り口縁部の屈曲が弱く、模倣土器と考えられる。4244 は肩部に稜線をもつ鉢あるいは甕であり、口縁部が欠損しているが、土佐地域のものに類似している。

4247 は口縁部を包み込むように棒状浮文を施す鉢であり、異形品である。4254 ~ 4260 は口縁部が短く屈曲する鉢であり、弥生終末期から登場するものである。4254、4258 は古墳初頭まで下る。

焼土 4346 は焼土塊であり、一部に黒斑状を呈する箇所と、圧痕と考えられるネガ面が見られる。

金属器 4347 は柳葉式鉄鏃の身部片であり、現状で刃部はあまり明確ではない。(信里)

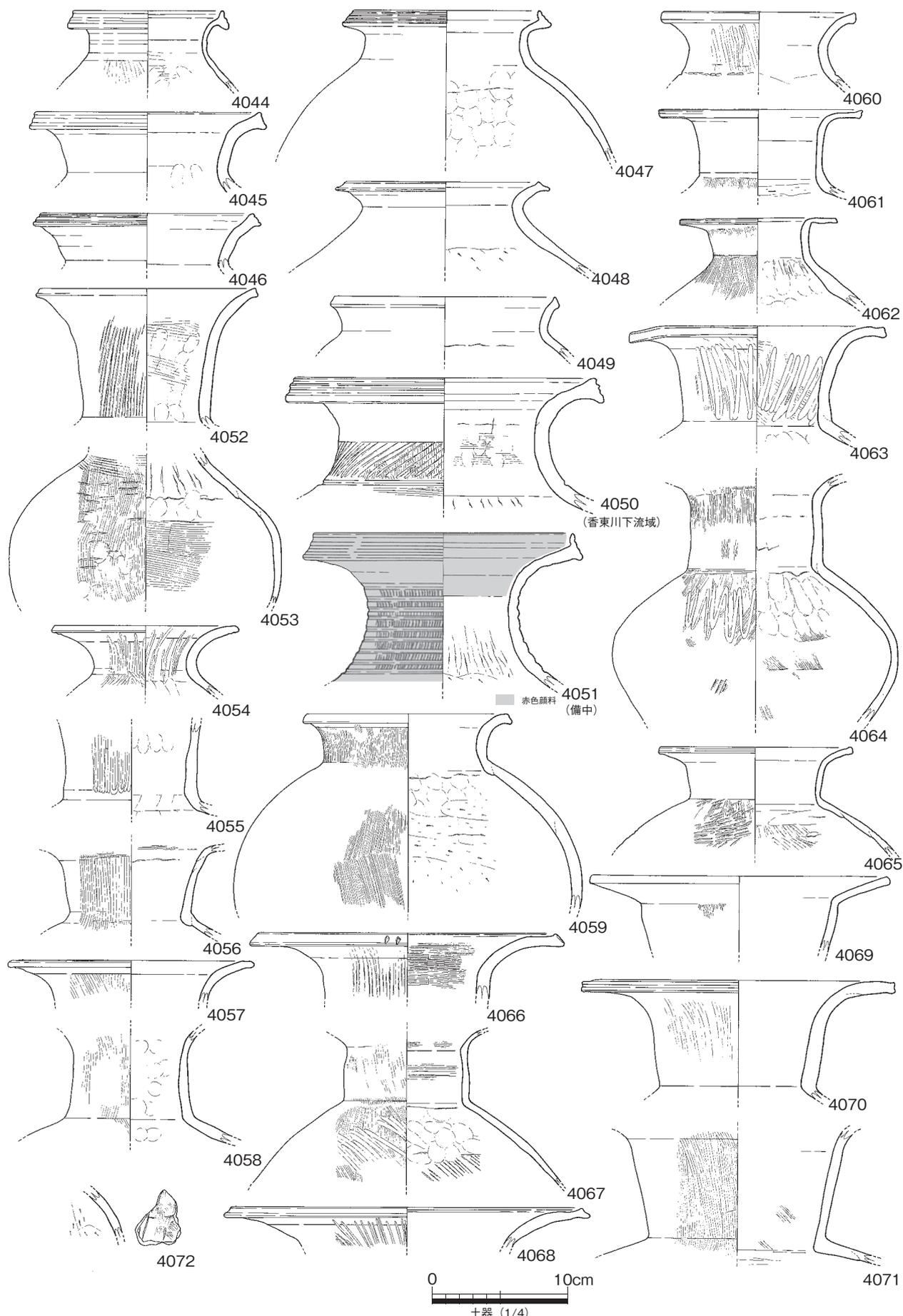


図 415 SR02 上層 F ブロック出土遺物 (1)

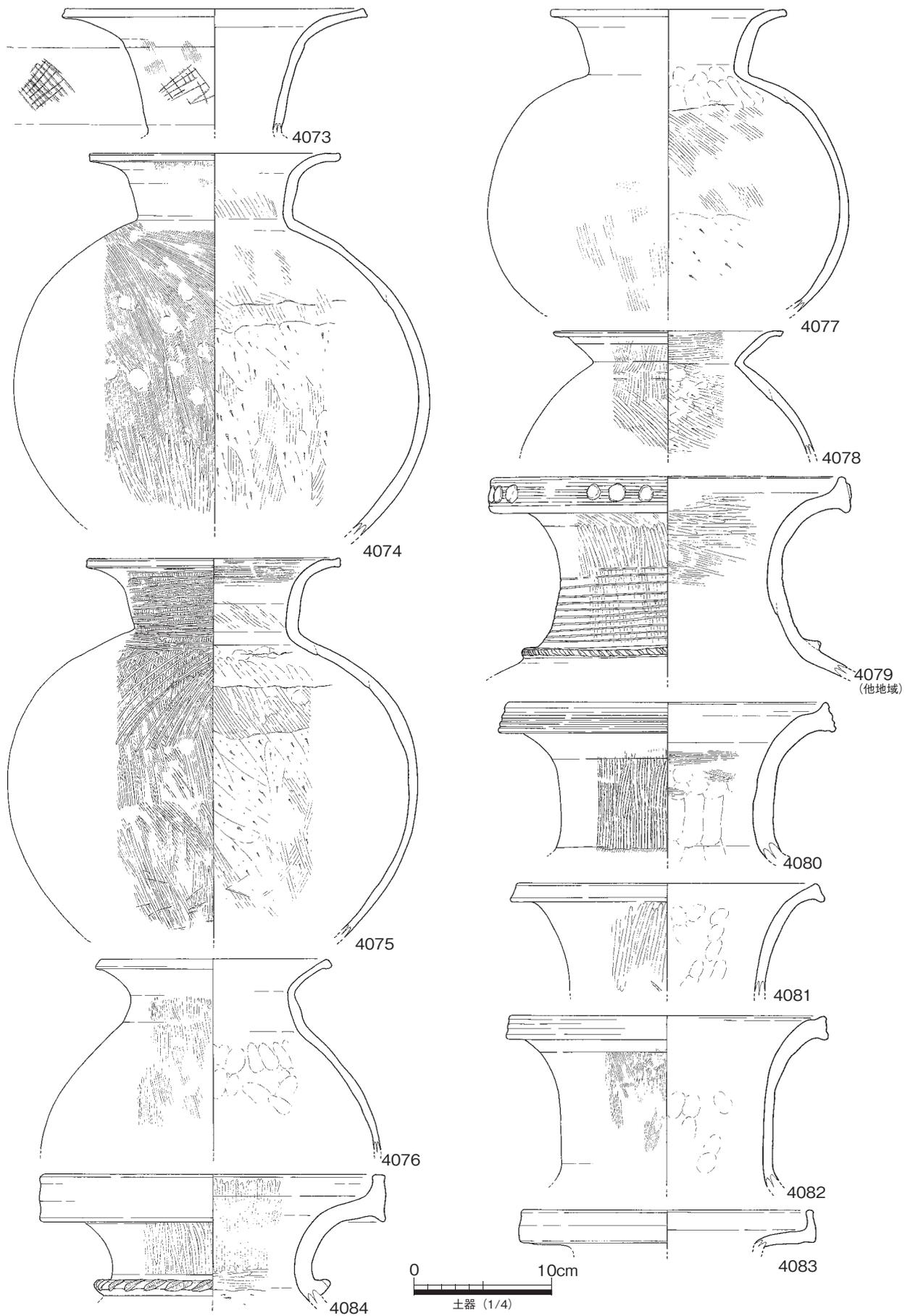


図 416 SR02 上層 F ブロック 出土遺物 (2)

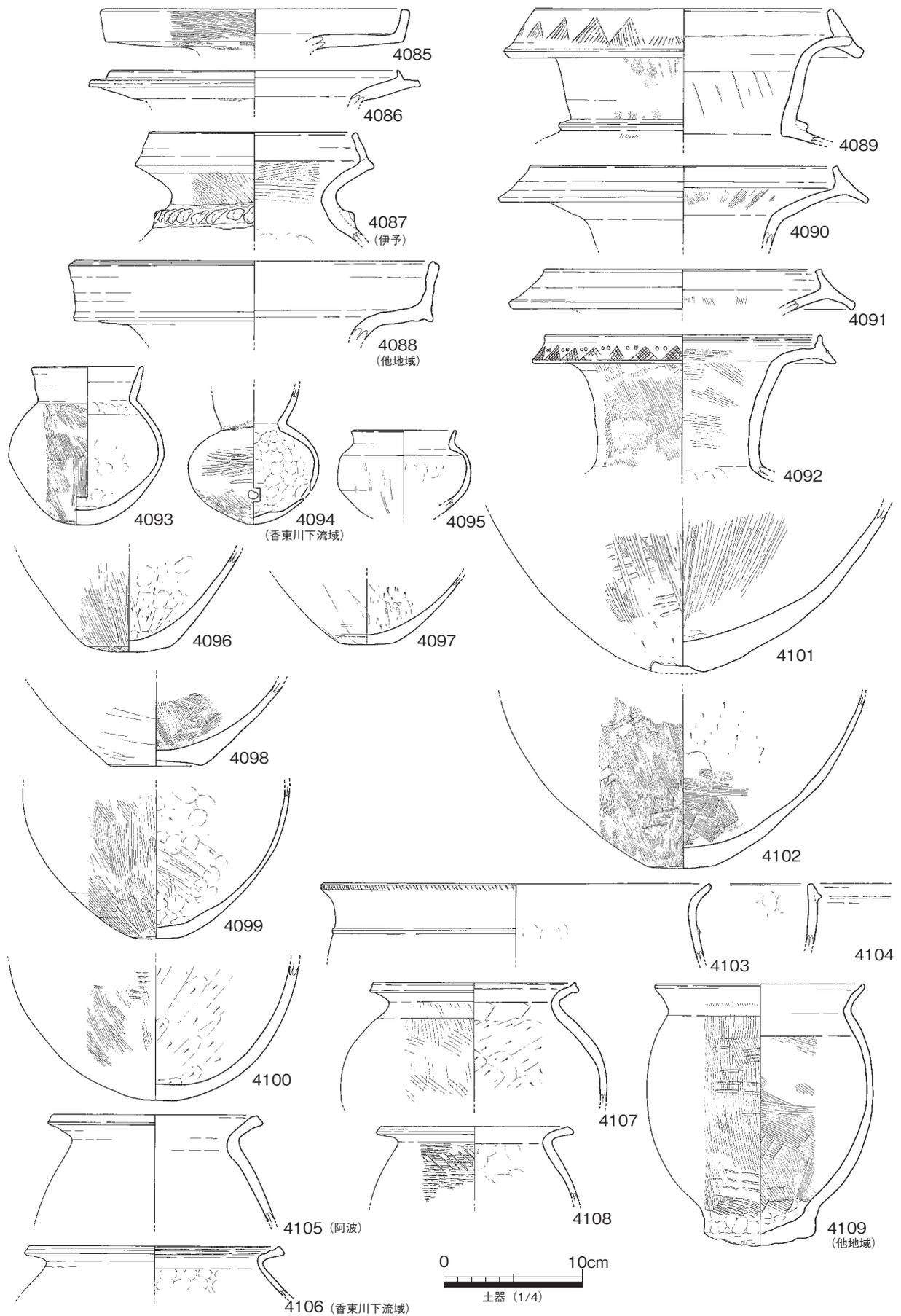


図 417 SR02 上層 F ブロック出土遺物 (3)

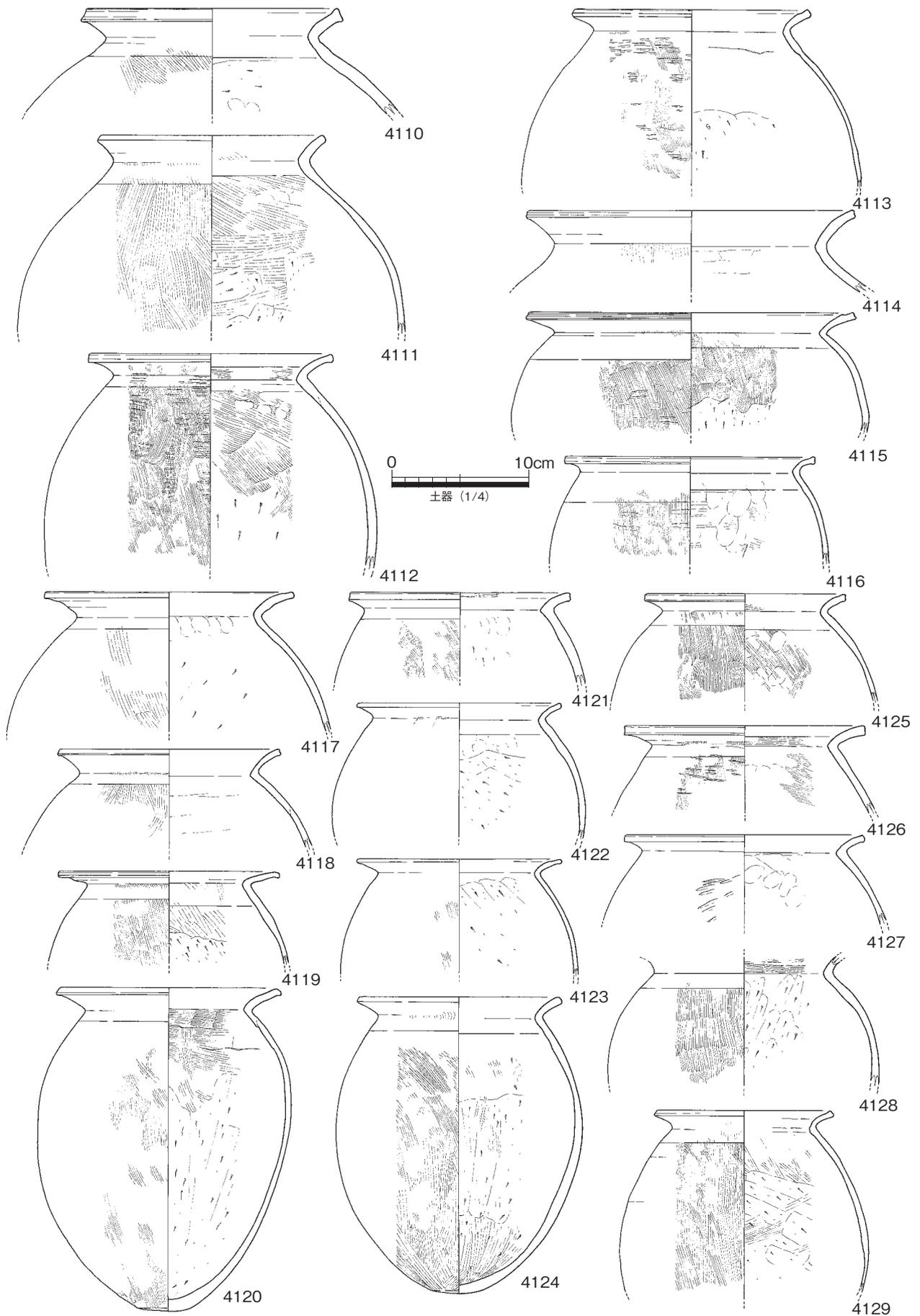


図 418 SR02 上層 F ブロック出土遺物 (4)

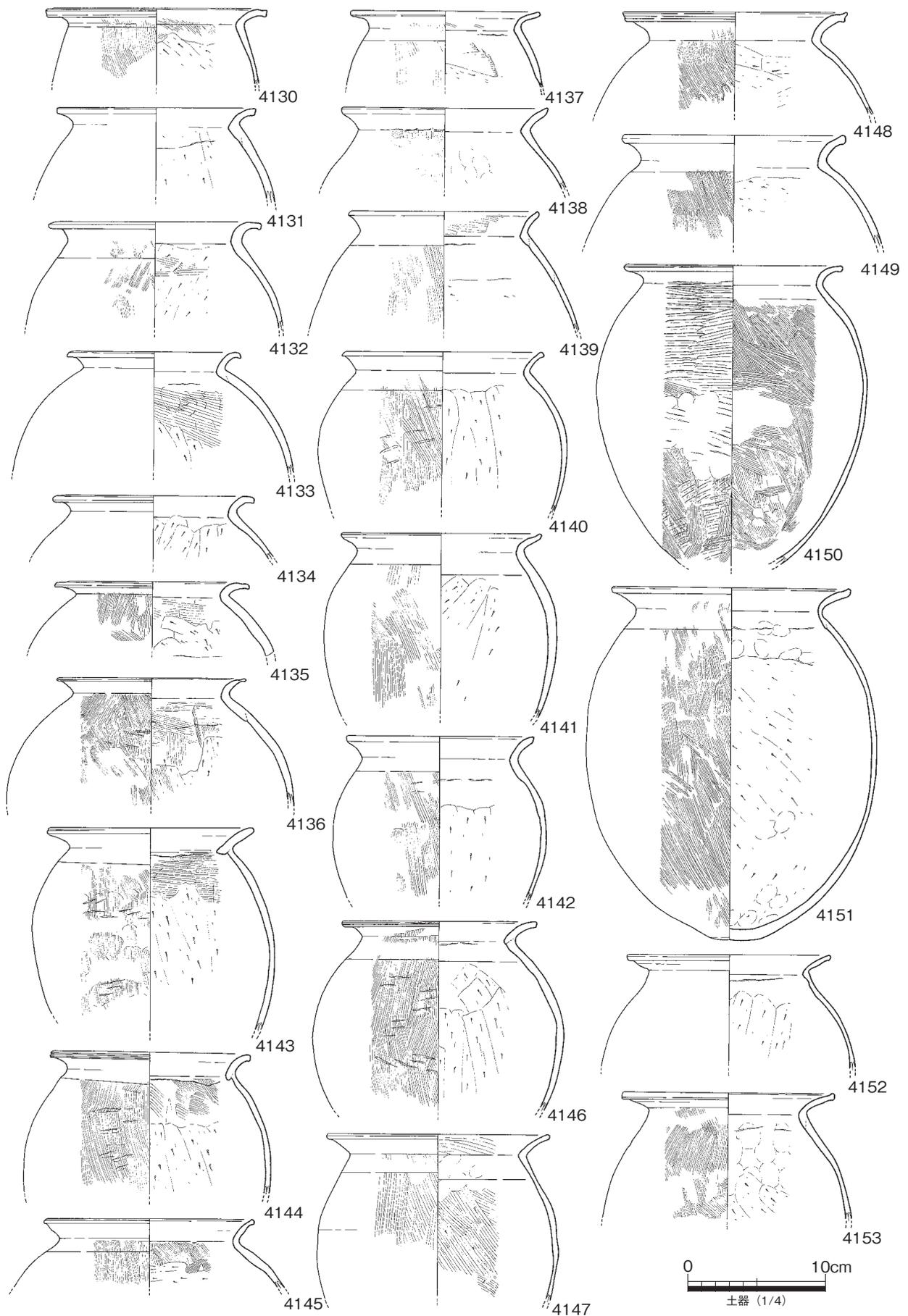


図 419 SR02 上層 F ブロック 出土遺物 (5)

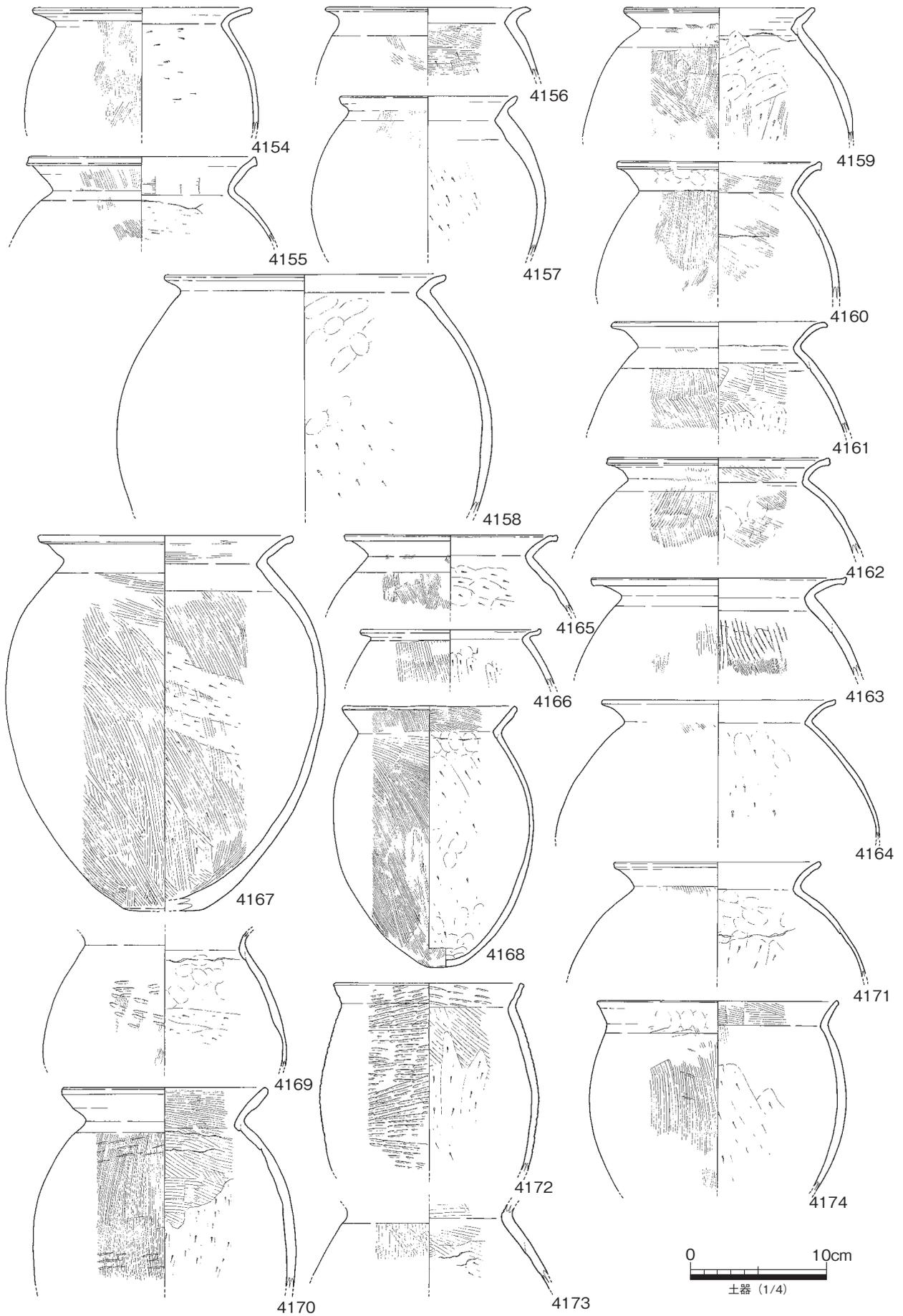


図 420 SR02 上層 F ブロック出土遺物 (6)

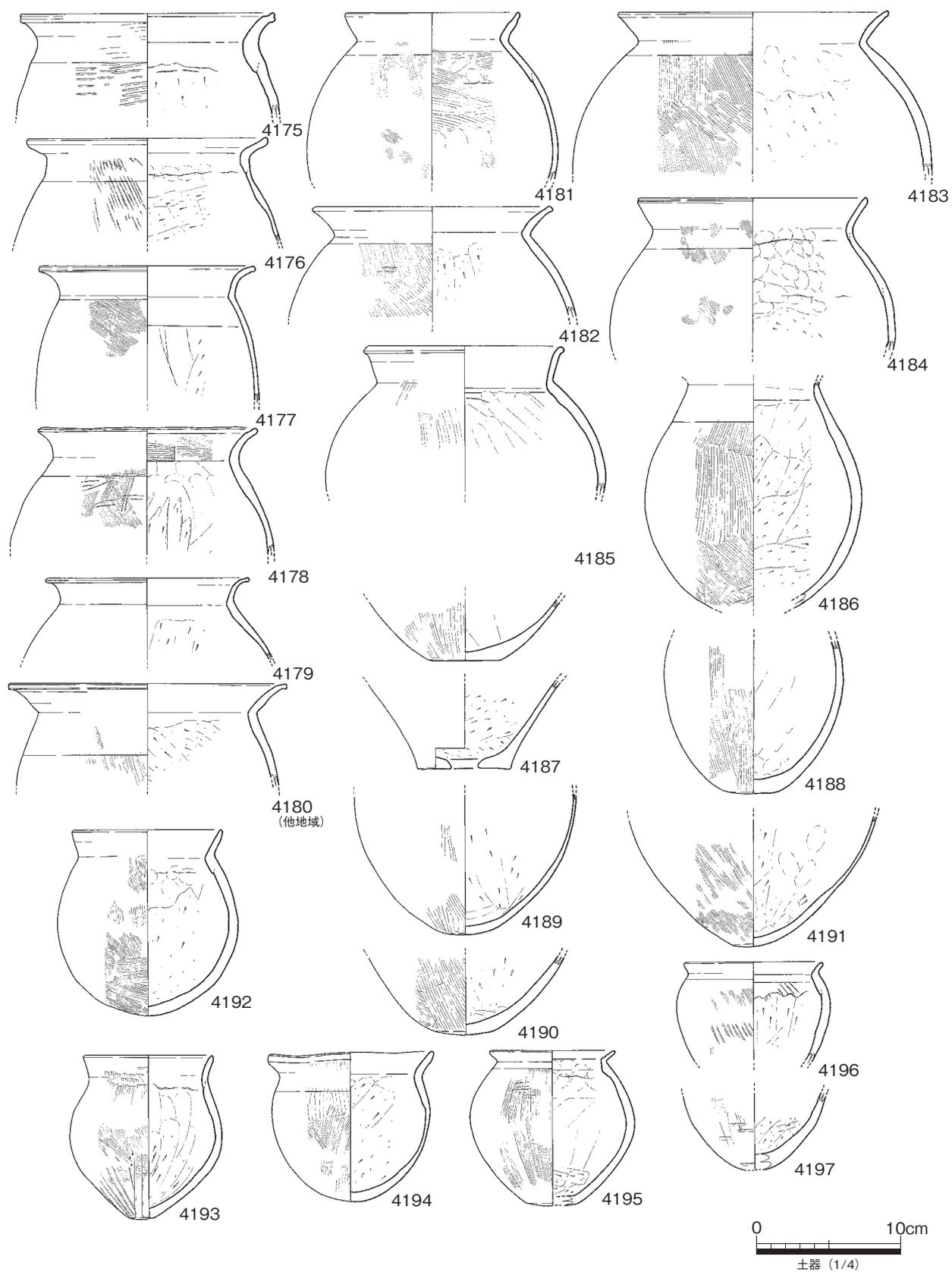


図 421 SR02 上層 F ブロック出土遺物 (7)

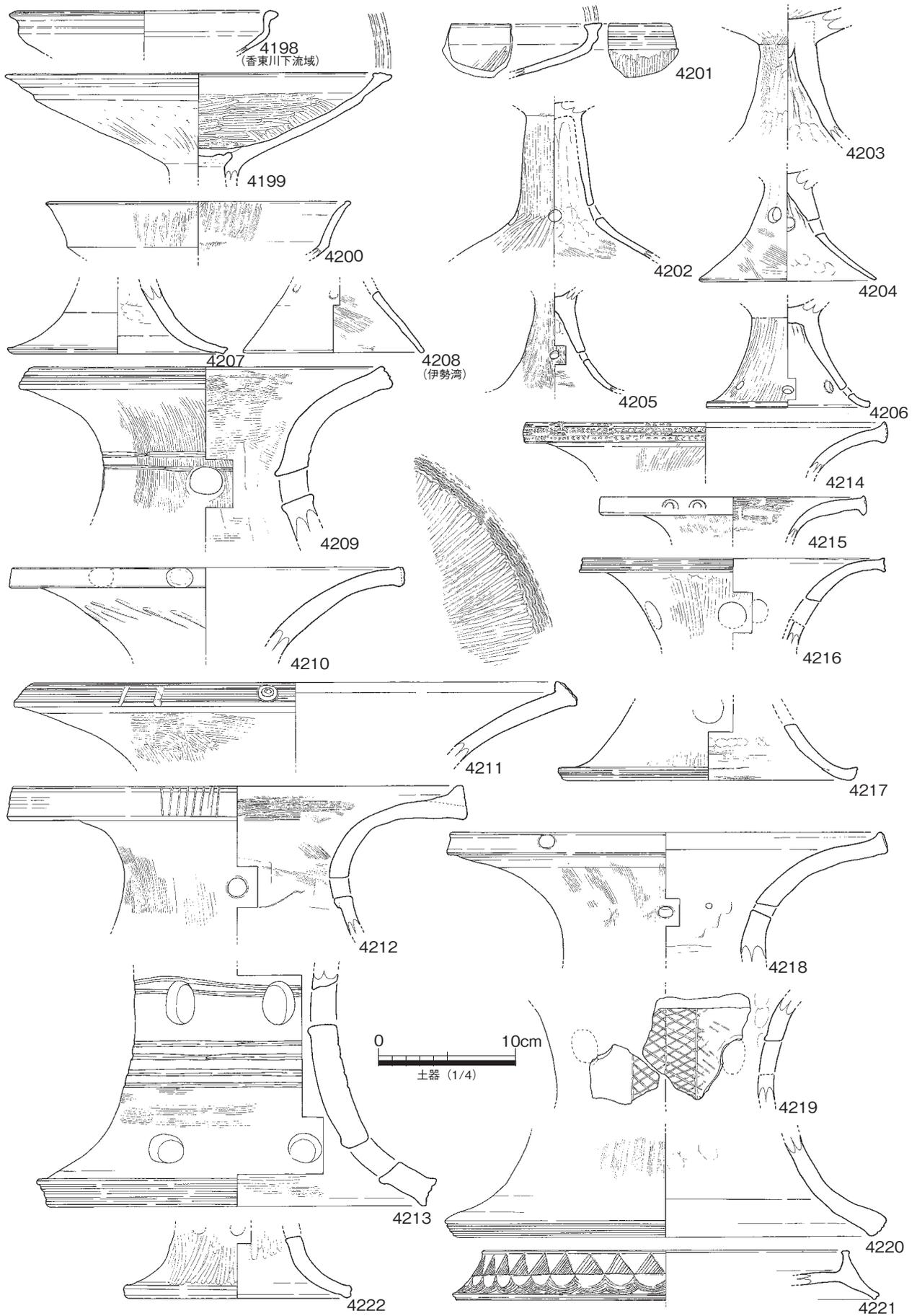


図 422 SR02 上層 F ブロック出土遺物 (8)

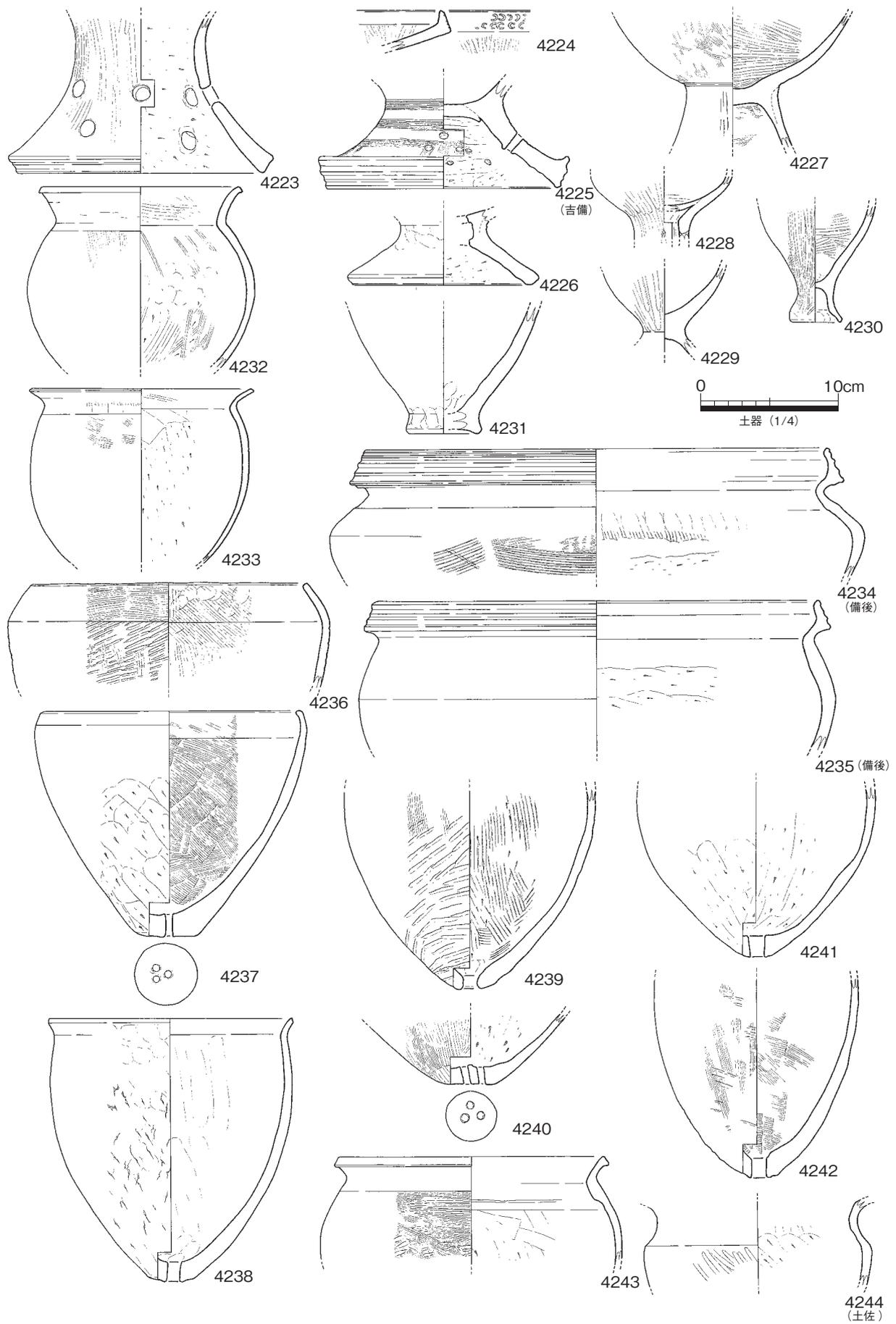


図 423 SR02 上層 F ブロック出土遺物 (9)

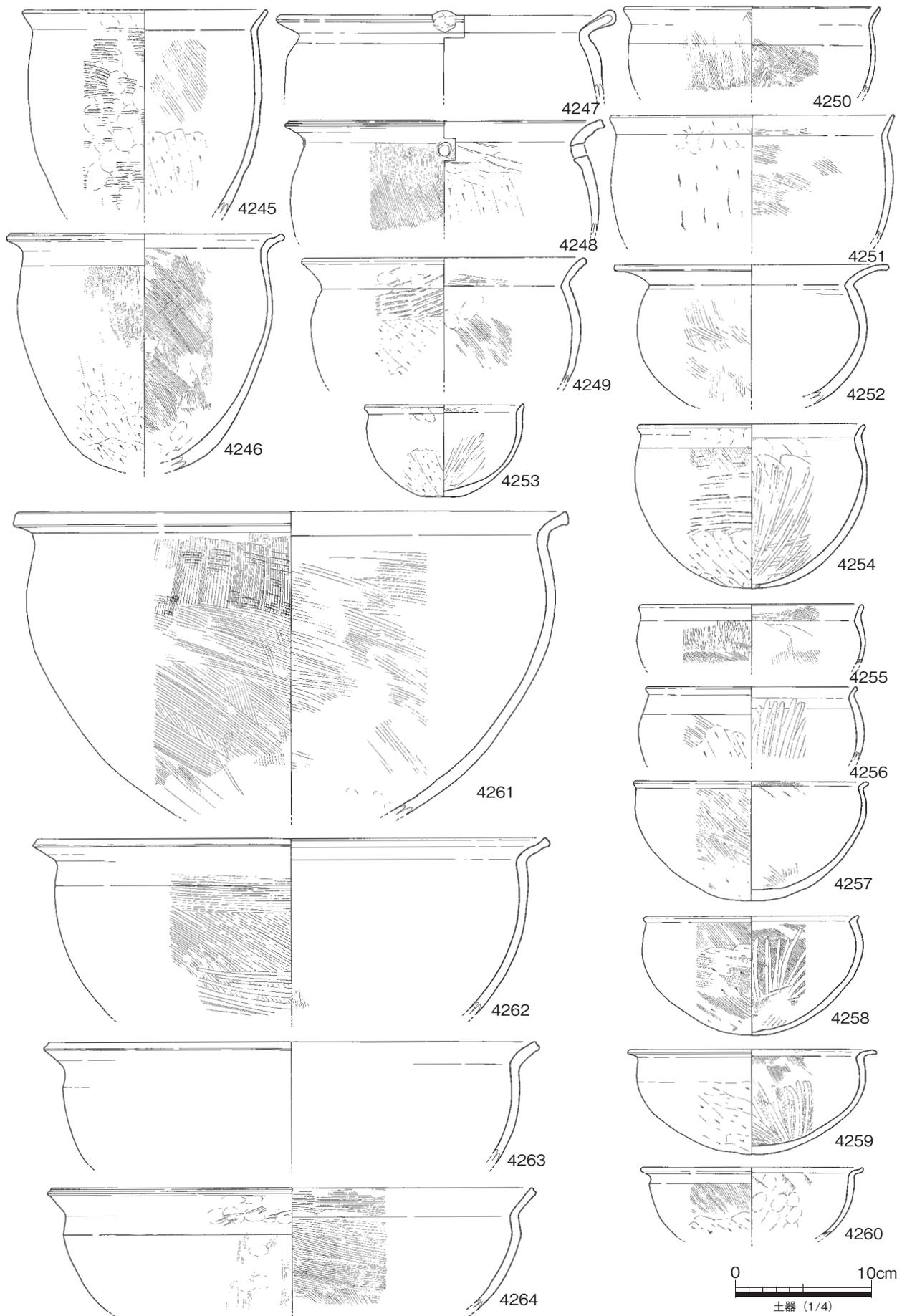


図 424 SR02 上層 F ブロック出土遺物 (10)

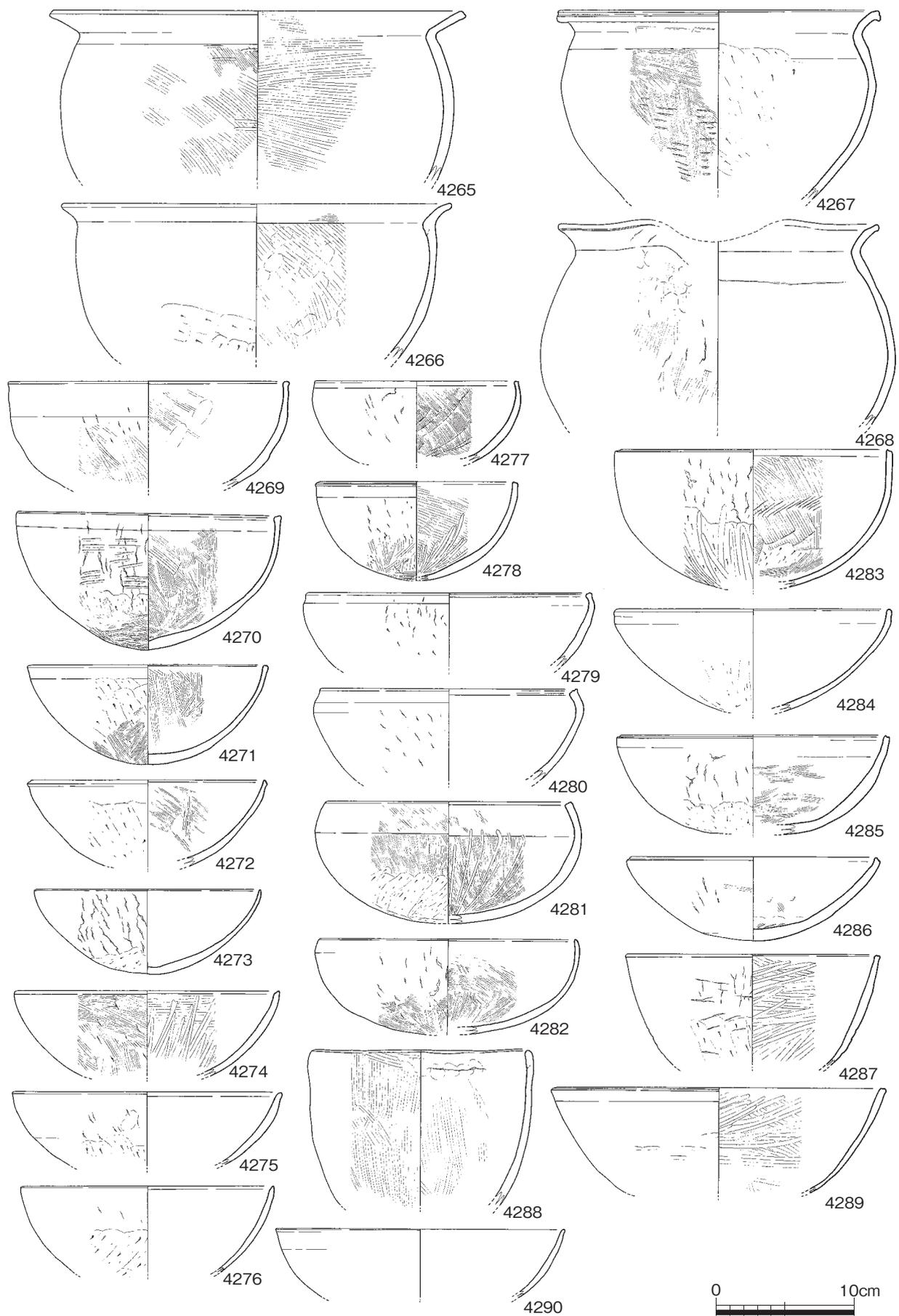


図 425 SR02 上層 F ブロック出土遺物 (11)

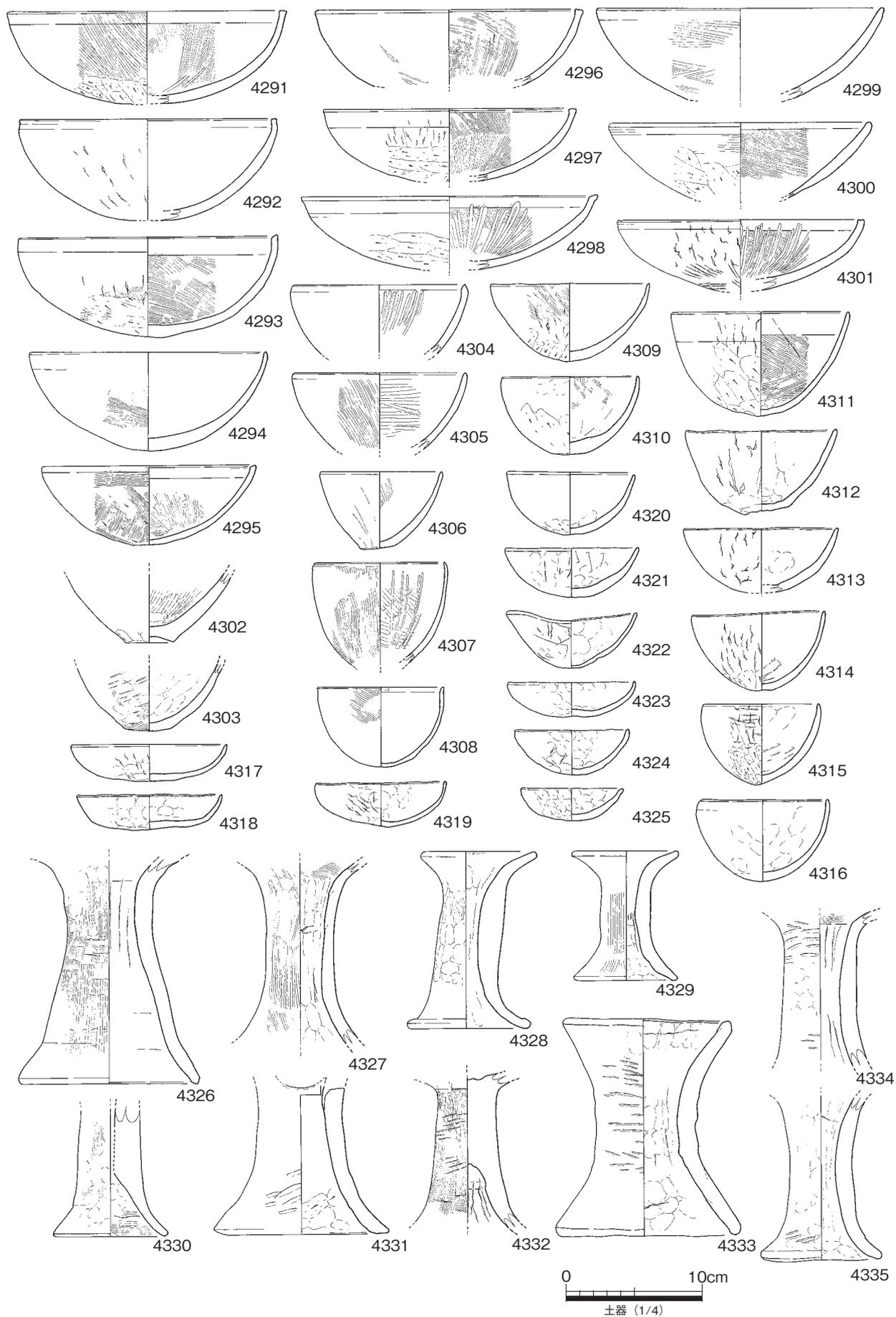


図 426 SR02 上層 F ブロック出土遺物 (12)

石器 4348 はサヌカイト製の石鏃未製品である。厚みのある剥片の周縁に粗い調整加工を施すもので、他のサヌカイト製石器と比べ風化が進行し、灰白色を呈す。縄文時代の混在品である可能性がある。4349 はサヌカイト製打製石鏃である。細身平基式で、側縁の一部に鋸歯状加工が施される。先端部は僅かに欠損する。4350 は抉りを備えたサヌカイト製打製石庖丁の折損片である。楔状石核に転用されており、両極打撃により折損したものである。元の石庖丁素材面には、軽度の磨滅が残る。4351 は結晶片岩製の磨製石庖丁である。灰色で結晶質の剥片を素材として刃部と背部を丁寧研磨して仕上げた個体である。表裏の器面の研磨は不十分で、剥離面の凹凸が残る。刃部に光沢を帯びた磨滅が残る。4352 は黒色頁岩製の磨製石庖丁である。刃部の断面は片刃に近いが、何度も研ぎ直しが施されるため、元の形状は不明である。基部は端整な面取りを行う。4353 は白色に風化したサヌカイト剥片の刃縁に片側から調整加工を施したスクレイパーである。縄文時代の混在品と考える。4354 はサヌカイト製スクレイパーの半折品である。図示はしていないが、全体的に軽度の磨滅が残る。

4355 は白色の縞目を有する深緑色の結晶片岩を素材とする柱状片刃石斧の折損品である。上端基部の一部と刃部側下半部が折損する。折損面には器軸に平行する方向の線状痕を伴う研磨が施される。器種再生のための研磨であれば、器軸と直行する研磨の方が効果的だが、長軸方向に研磨痕が見られることから、砥石として転用された可能性が高い。4356 は黒色頁岩製の砥石である。下端に向かって細くなる三角錐の形状を呈し、下端部に軽度の敲打痕、側面に強い研磨痕を残す。研磨の方向を示す微細な擦痕（線状痕）は側面では器軸に平行に、下端部では斜方向に顕著である。手持砥石と考える。4357 は砂岩製の叩石である。上端にあばた状、側縁に線状の敲打痕が残る。(森下)

SR02 上層出土遺物 (図 429 ~ 432)

土器 出土土器・土製品には、壺 (4358 ~ 4390)、甕 (4391 ~ 4420)、高杯 (4421)、台付鉢 (4422.4423)、鉢 (4424 ~ 4459)、支脚 (4460.4461) が見られる。

4370 の広口壺は弥生終末期に多く見られる形式であり、胎土中に雲母片を多く含む。4376 は外面にケズリ調整が見られることから、鉢の可能性もある。4377 ~ 4380 は甕と折衷的な形態をもつ広口壺であり、4379 の外面には焼成破裂痕が連続して見られる。4384 は高松平野の香東川下流域産の細頸壺で、下川津Ⅳ式・④段階に比定される。4385 の肩部外面には記号紋が見られる。4389 の複合口縁壺は伊予中部地域からの搬入品と見られ、同地域のⅤ-3 様式に比定される。

4406 は肩部外面に山形状の記号紋が見られる甕である。4403、4400、4412 は古墳初頭まで下る古式土師器と見られる。4421 の高杯は、口縁端部が短く屈曲する深い杯部をもつもので、古墳初頭に位置付けられる古式土師器である。(信里)

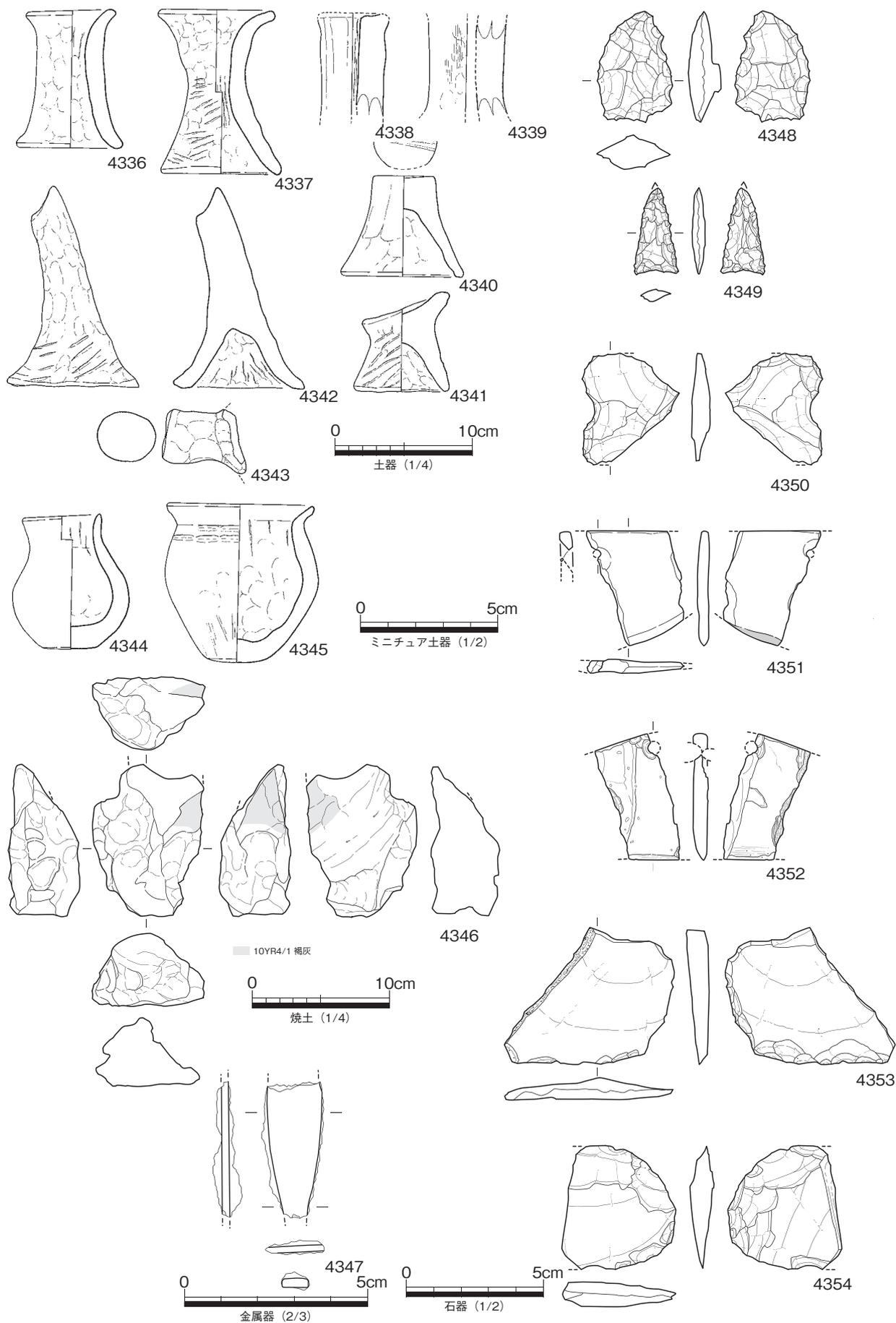


図 427 SR02 上層 F ブロック出土遺物 (13)

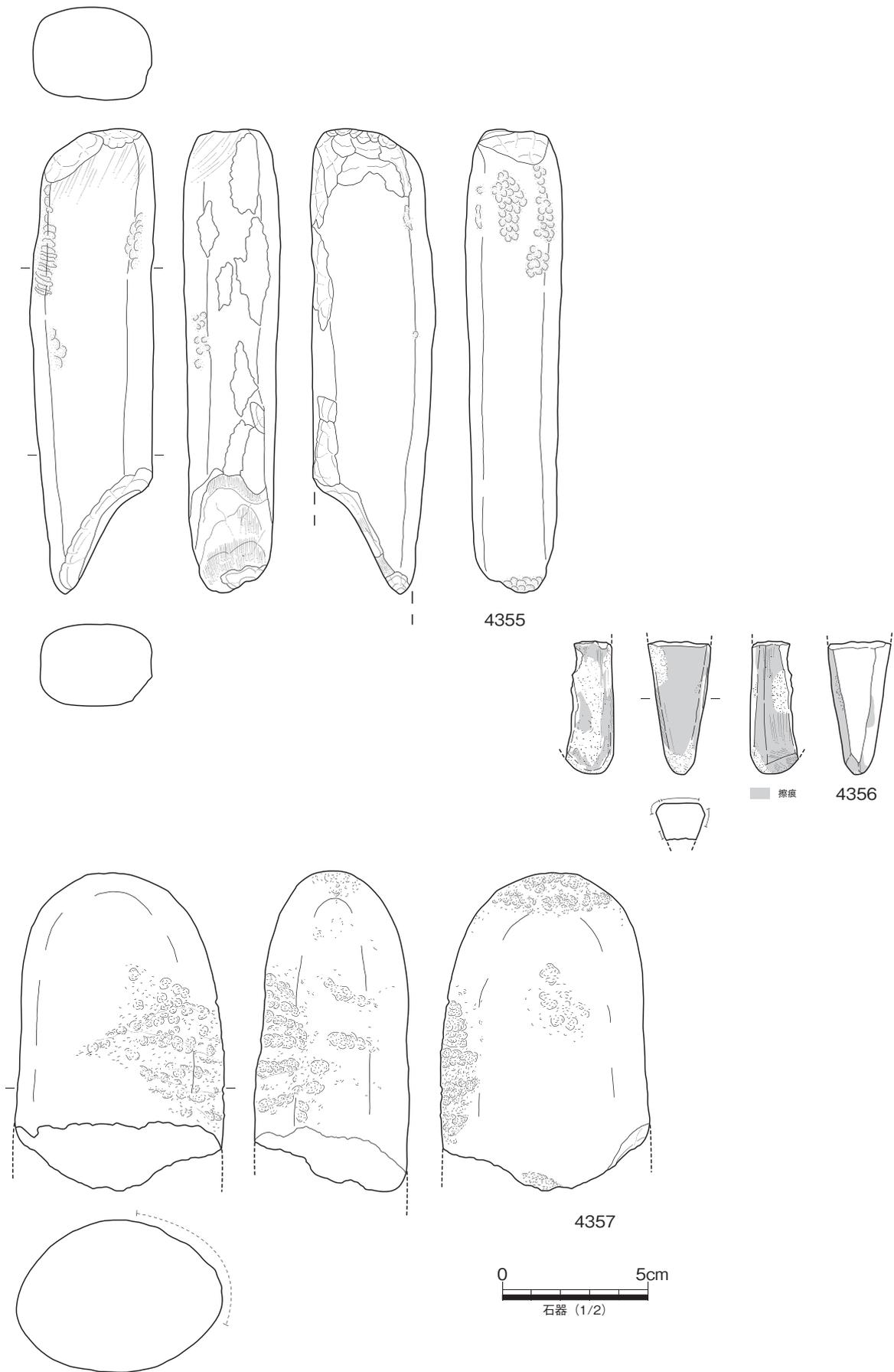


図 428 SR02 上層 F ブロック出土遺物 (14)

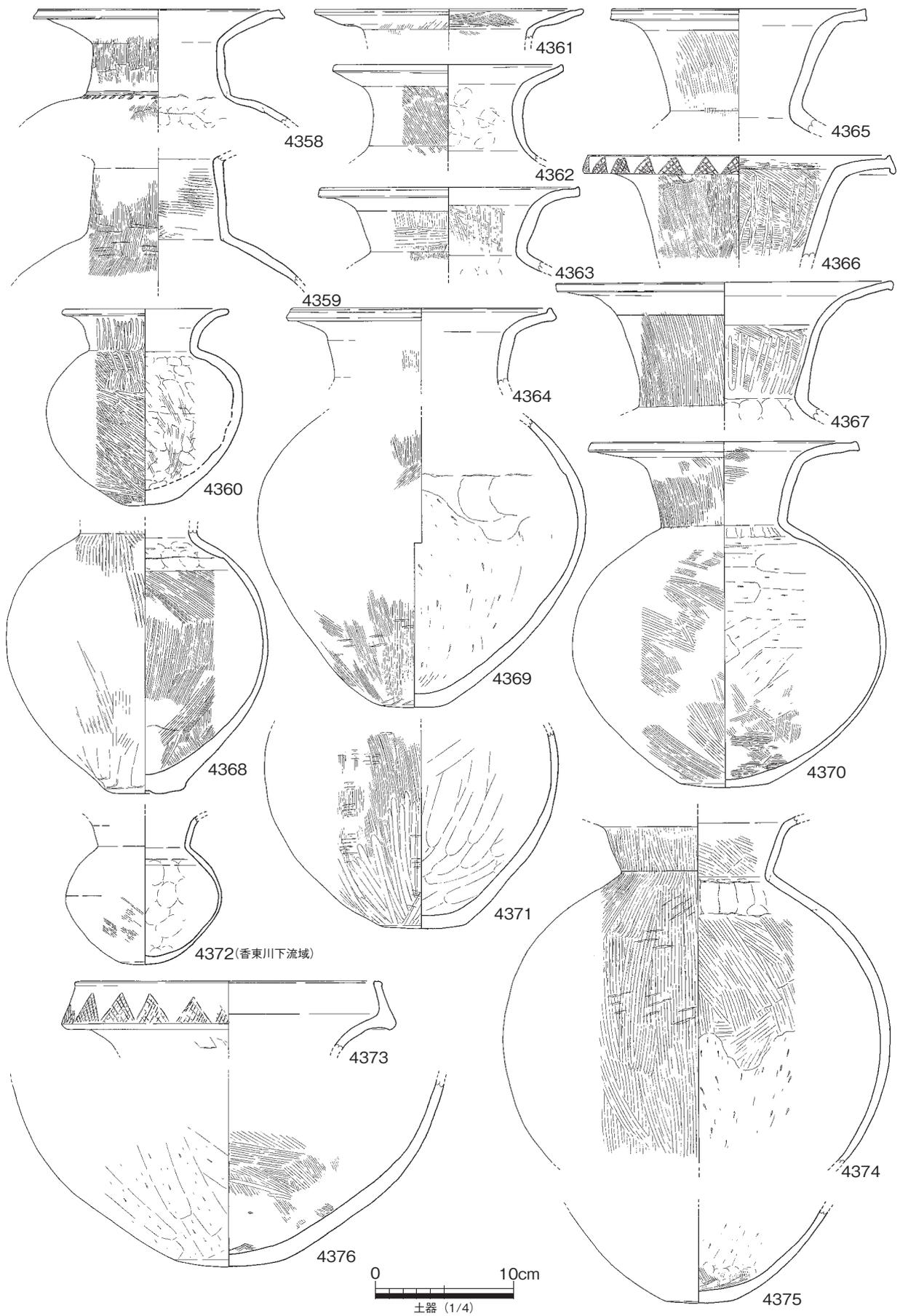


図 429 SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (1)

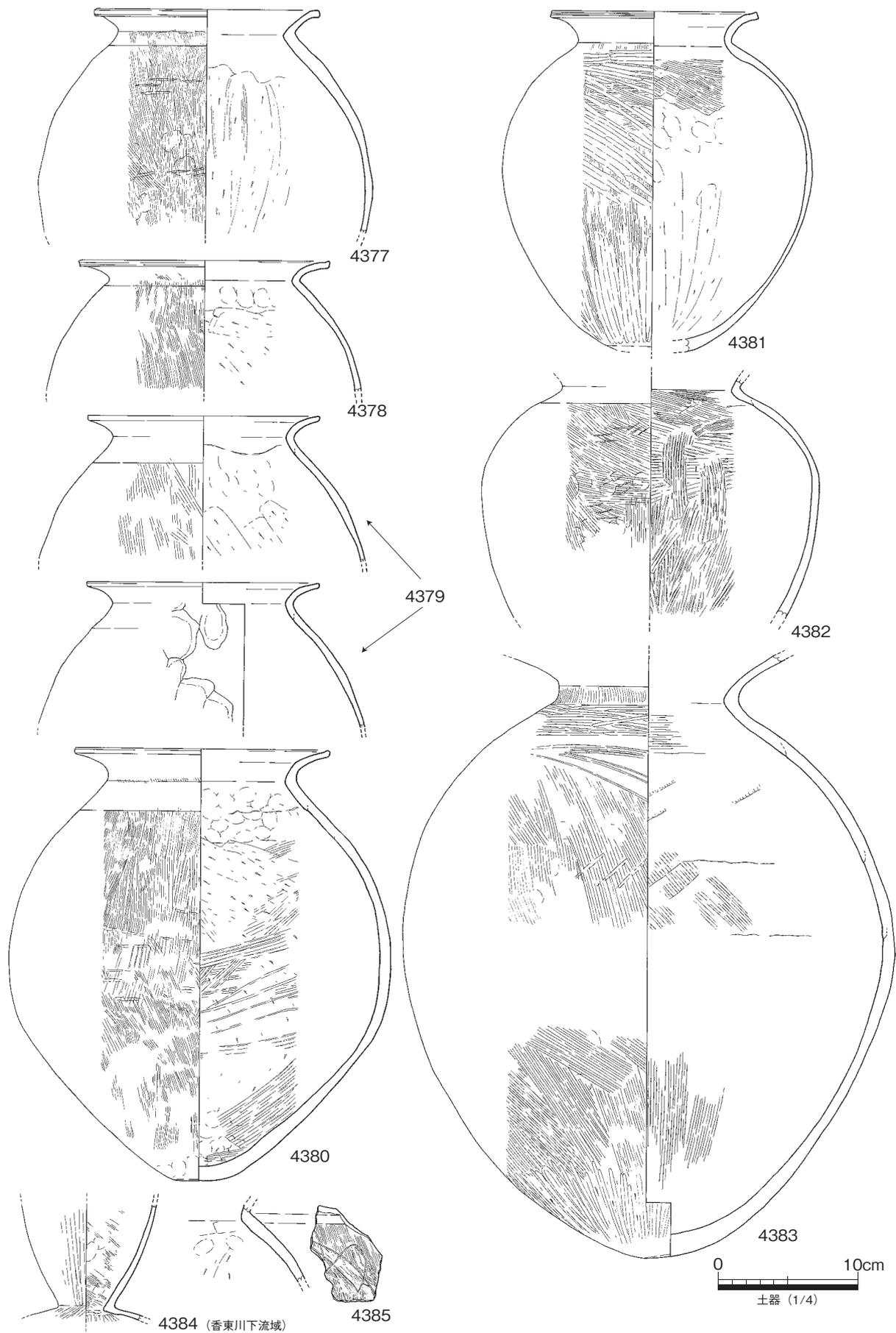


図 430 SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (2)

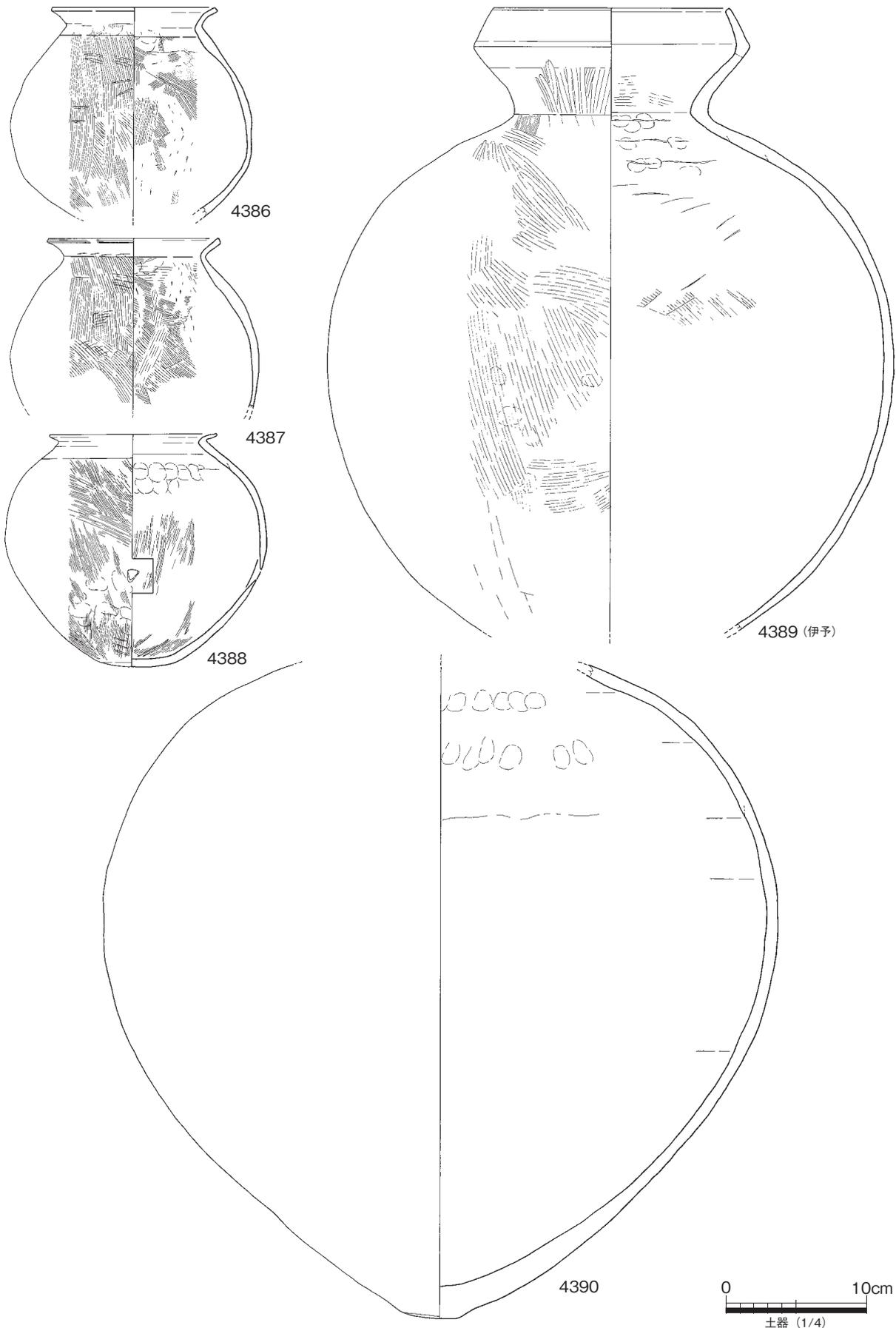


図 431 SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (3)

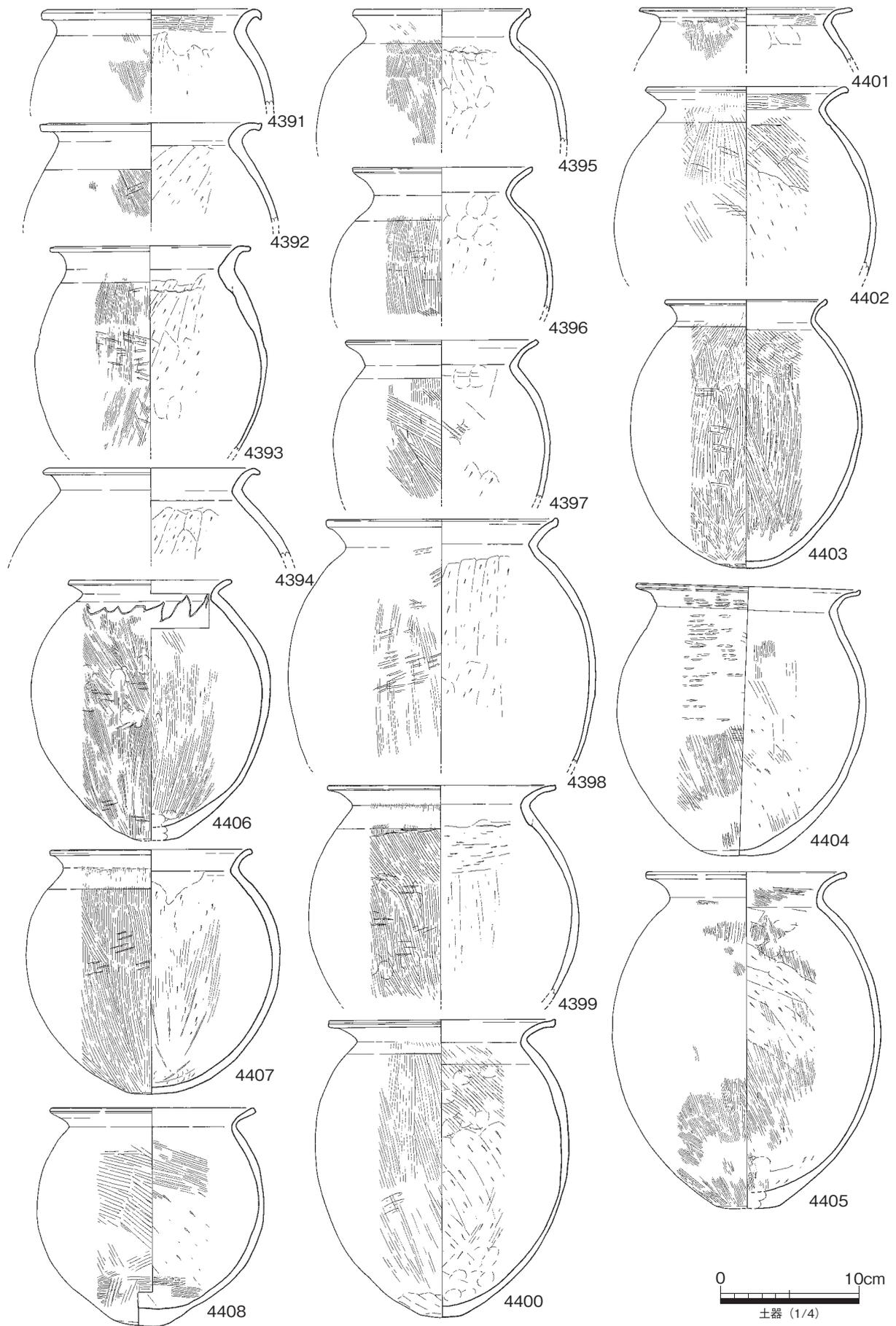


図 432 SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (4)

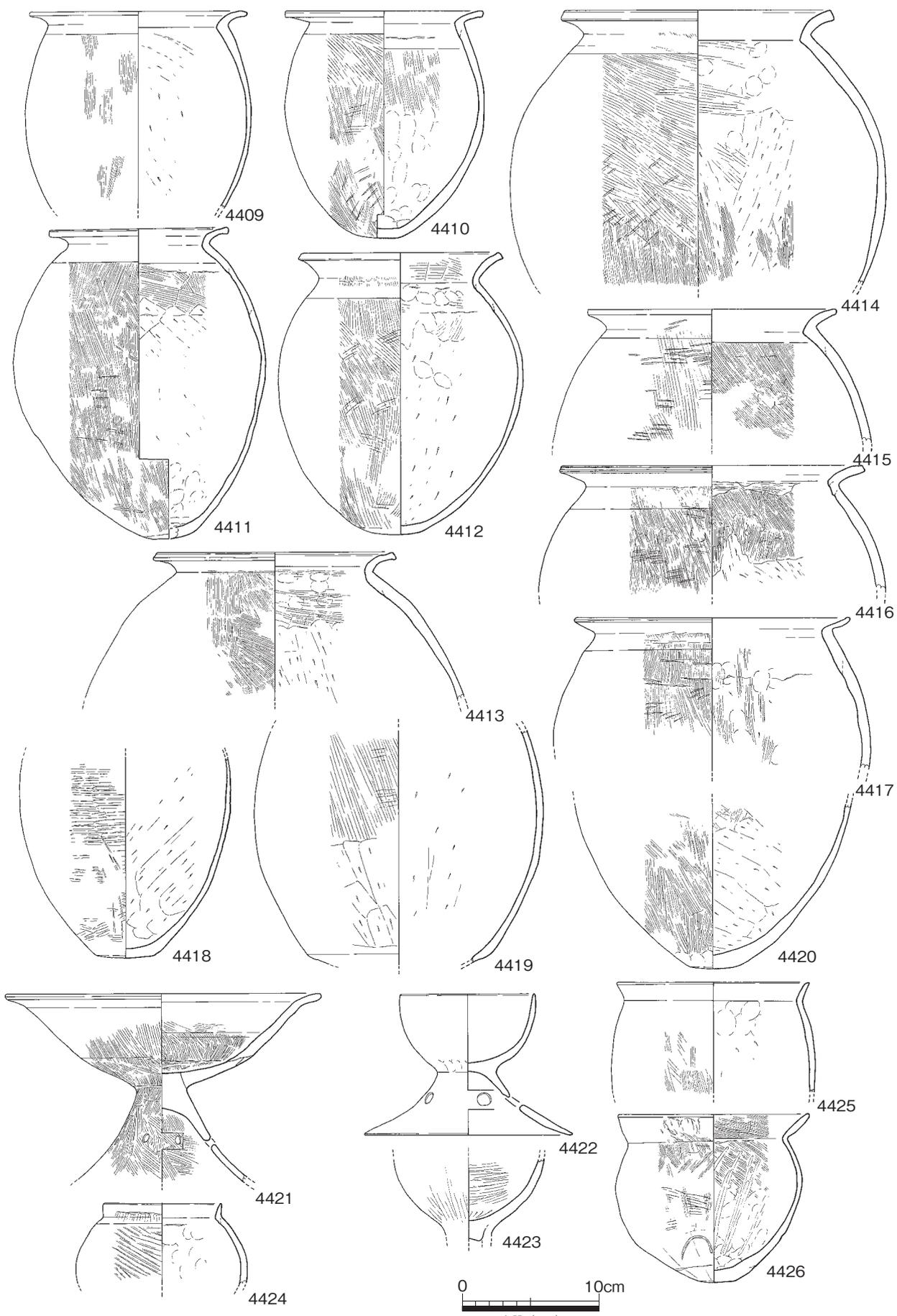


図 433 SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (5)

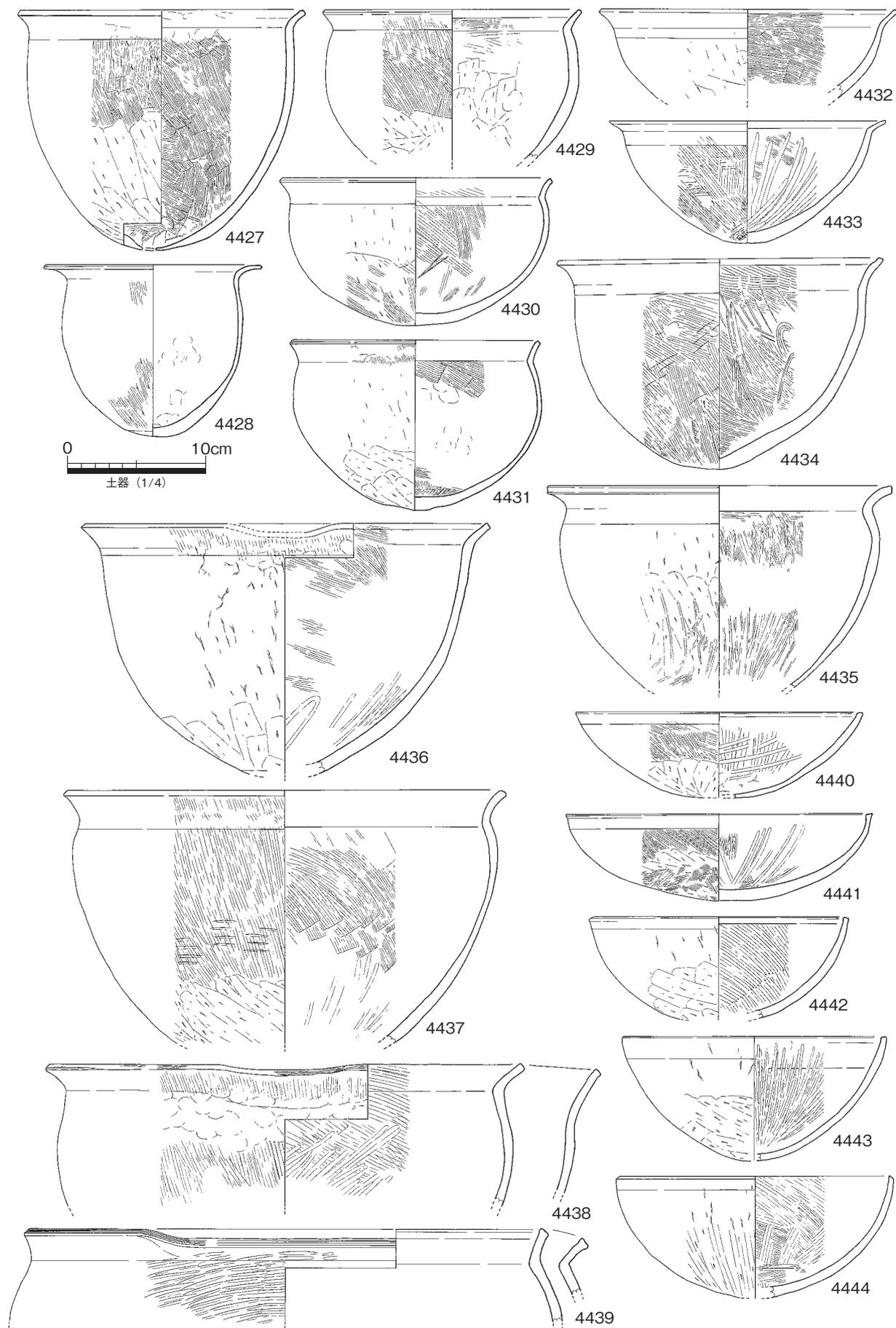


図 434 SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (6)

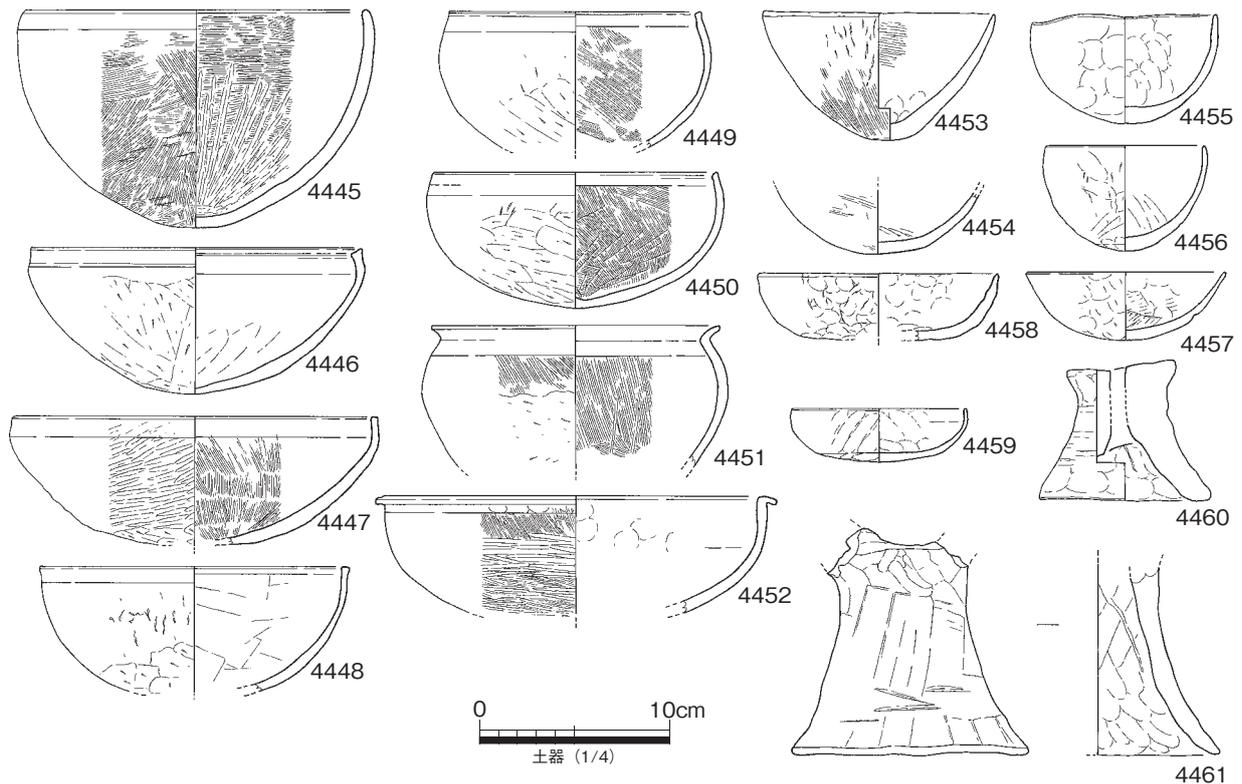


図 435 SR02 上層 F ブロック番号取り上げ出土遺物 (7)

SR02 上層出土遺物 (図 436 ~ 440)

土器 出土土器・土製品には、壺 (4462 ~ 4488)、甕 (4489 ~ 4520)、高杯 (4521 ~ 4526)、台付鉢 (4527. 4528.4541 ~ 4543)、器台 (4530.4531)、鉢 (4533 ~ 4540.4544 ~ 4560)、製塩土器 (4561)、支脚 (4562 ~ 4568.4570)、不明土製品 (4532.4569) がある。出土土器は弥生後期前半古段階から古墳初頭までの時間幅を示し、少数の他地域からの搬入品を含む。

4462 は、上方に拡張される口縁部外面に凹線文帯をもつ短頸壺であり、備後地域からの搬入品と見られる。4469 の広口壺の頸部外面には、V 字状の連続する記号紋が見られる。4475 は高松平野の香東川下流域産の長頸壺であり、下川津 I 式・①段階に比定される。4478 は高松平野の香東川下流域産の細頸壺であり、球形化が著しいことから、下川津 IV 式・④段階に位置付けられる。4477 は細頸壺の胴部片で、胴部最大径付近に横位の 1 条突帯と縦位の棒状浮文が確認できる。器形及び施文の特徴から、吉備系と見られる。4482 ~ 4486 は在地系の複合口縁壺。4487 の底部外面には、植物種の圧痕が付着している。

4496 は、受口状の口縁部をもつ甕の異形品。胎土は在地のものとの差異が見られないが、他地域の模倣土器の可能性も考えられる。4499 の甕は備中地域からの搬入品と見られ、鬼川市Ⅲ式に比定される。4516 は古墳前期に下ると見られる資料である。

4525 の高杯脚は、形態・胎土から備中地域からの搬入品と見られ、胎土は同じ備中地域からの搬入品である 4499、4533 と共通する。4531 は、口縁部の一部を欠損するものの、完形に復元される器台である。形態や施文の状況から吉備地域からの強い影響が指摘できるが、胎土は他の在地品と遜色がない。4533、4534 の鉢は備中地域からの搬入品であり、4534 は内外面をベンガラで彩色を行う。4535 の内面には底部を中心にしてほぼ全面にベンガラと見られる赤色顔料が付着している。4561 は製塩土器の脚

部片と見られ、備讃Ⅳ a 式に比定される。

4566 の支脚は、上部を U 字形に窪ませる。4569 は把手状の土製品である。通常の土器の把手とは違って、成形・調整ともに粗雑である。4571 の底部内面には、光沢をもった黒色の付着物が僅かに残存する。付着物の状況や小型品であること等から見て、漆である可能性が高い。(信里)

石器 4573 は深緑色を呈す結晶片岩製の扁平片刃石斧刃部片である。白縞は目立たない石材である。扁平片刃石斧としては厚みがあることから、柱状片刃石斧の折損品である可能性もある。4574 はサヌカイトの板状素材から節理に沿って剥離した剥片の刃部に浅い調整加工を施したスクレイパーである。側面は折損面に刃潰しのための敲打を施す。器面には軽度の磨滅が見られることから、打製石庖丁として使用された可能性がある。4575 は白色に風化した頁岩を素材とする磨製石庖丁である。厚みのある剥片の片面には丁寧な研磨を施すが、対面は剥離面の凹凸が残る程の軽度の研磨しか施さない。穿孔部の断面は途中で段を形成することから、太い作用部をもつ大型の礫石錐を使用した可能性が高い。4576 は砂岩製の叩石である。周縁部に顕著なあばた状の敲打痕を残す。敲打により折損する。4577 は扁平な安山岩の小型の板材を使用した砥石である。長軸に直交する線状痕が目立つ。器面中央部のみ使用する。(森下)

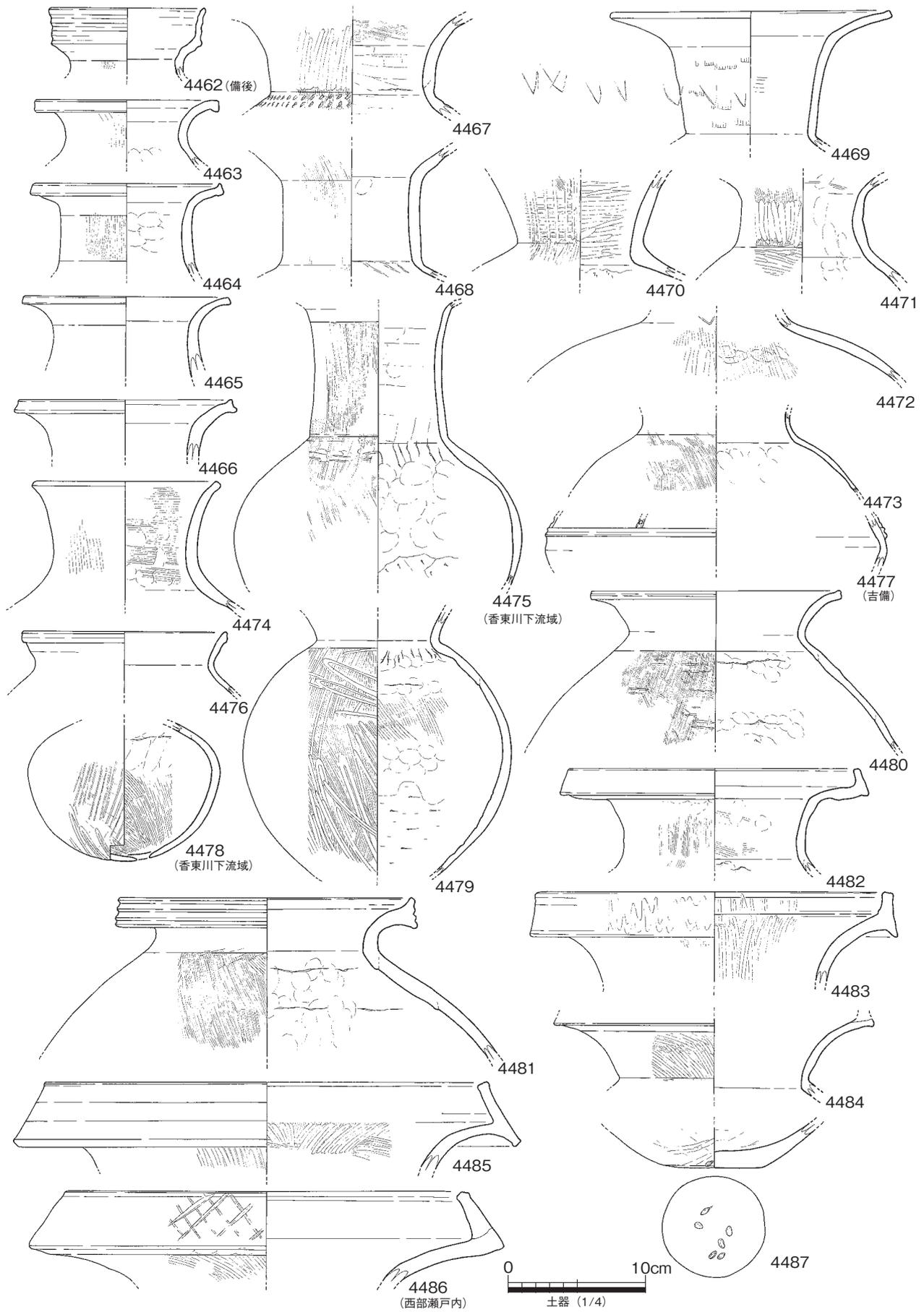


図 436 SR02 上層 G ブロック出土遺物 (1)

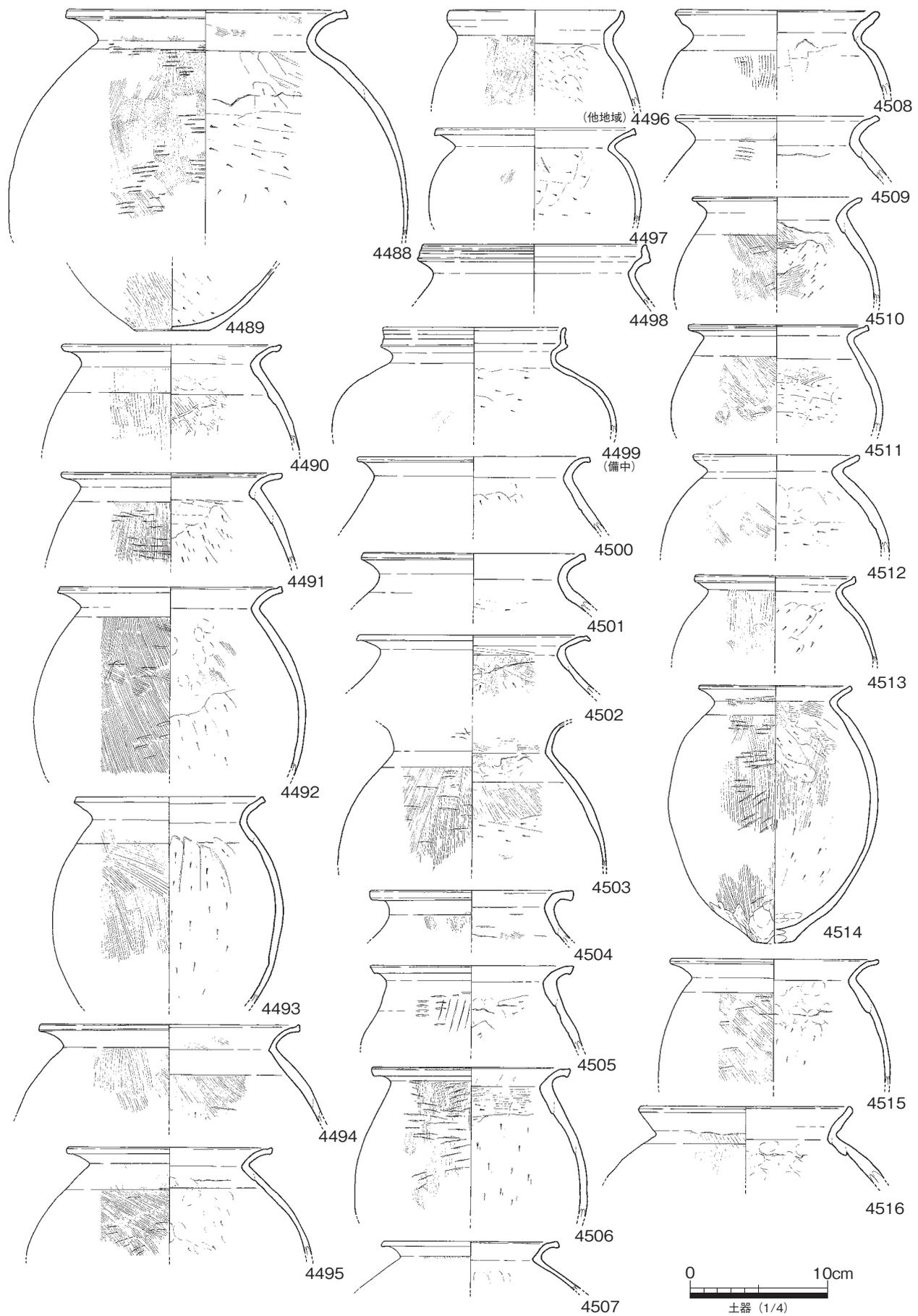


図 437 SR02 上層 G ブロック出土遺物 (2)

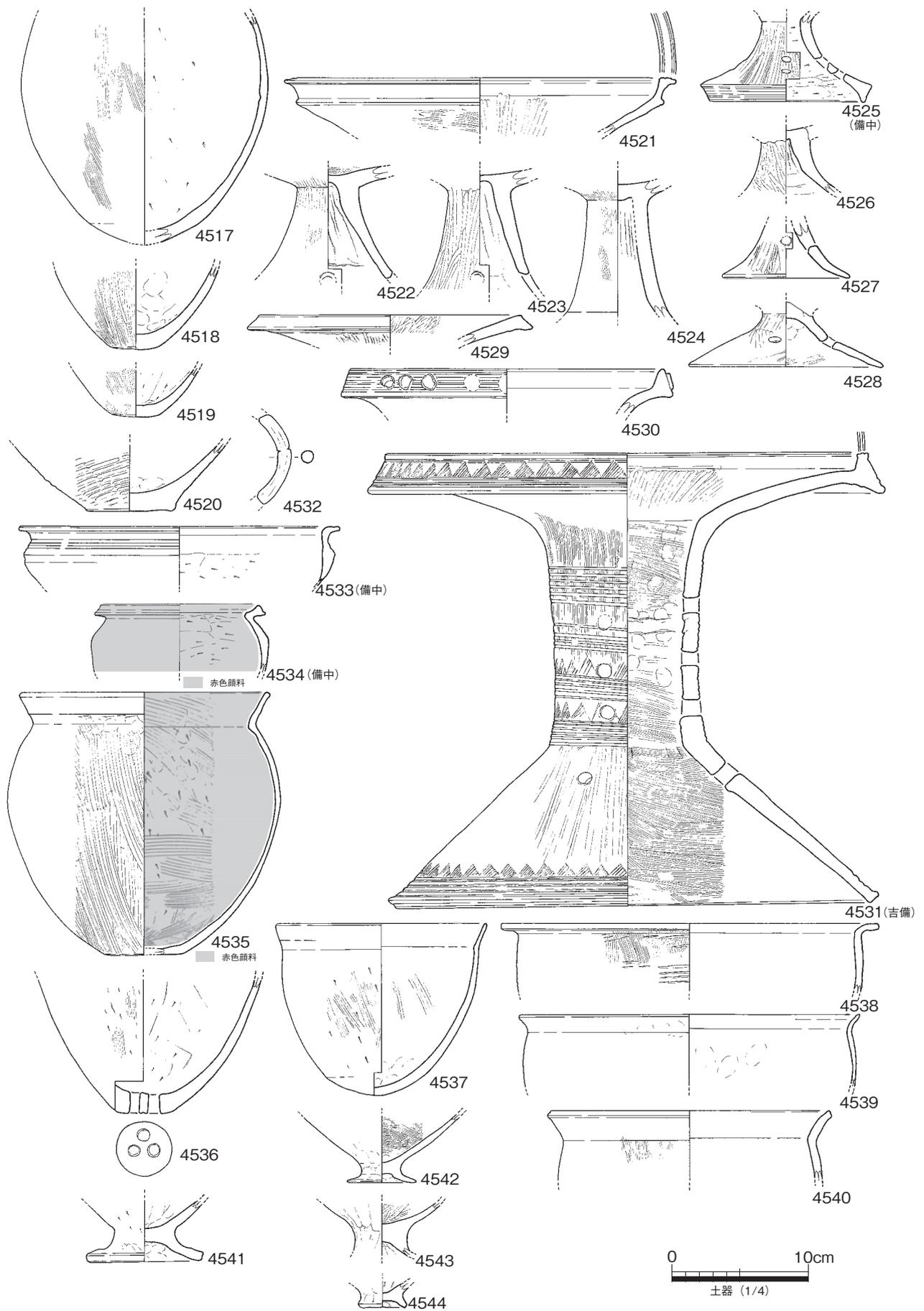


図 438 SR02 上層 G ブロック出土遺物 (3)

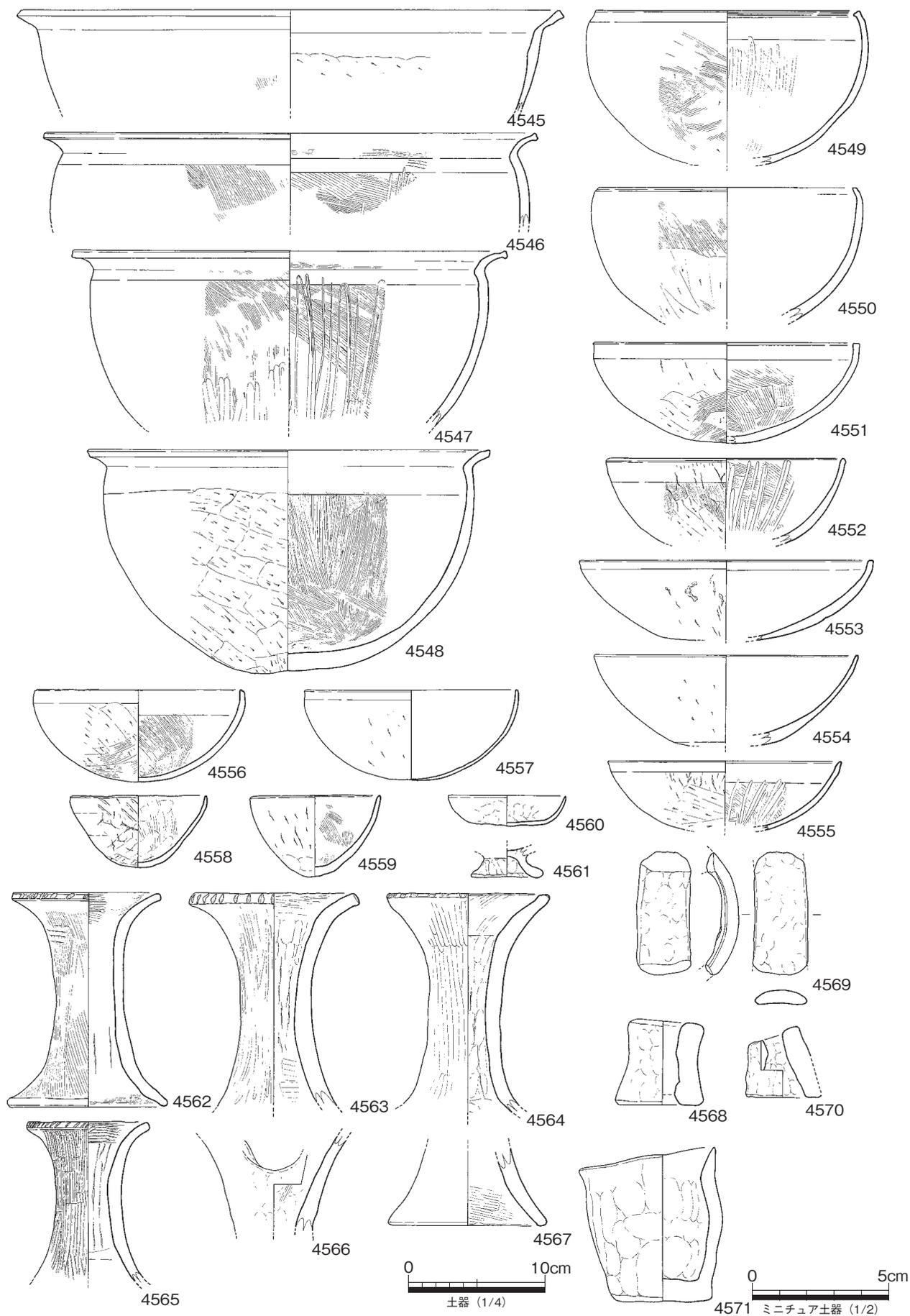


図 439 SR02 上層 G ブロック出土遺物 (4)

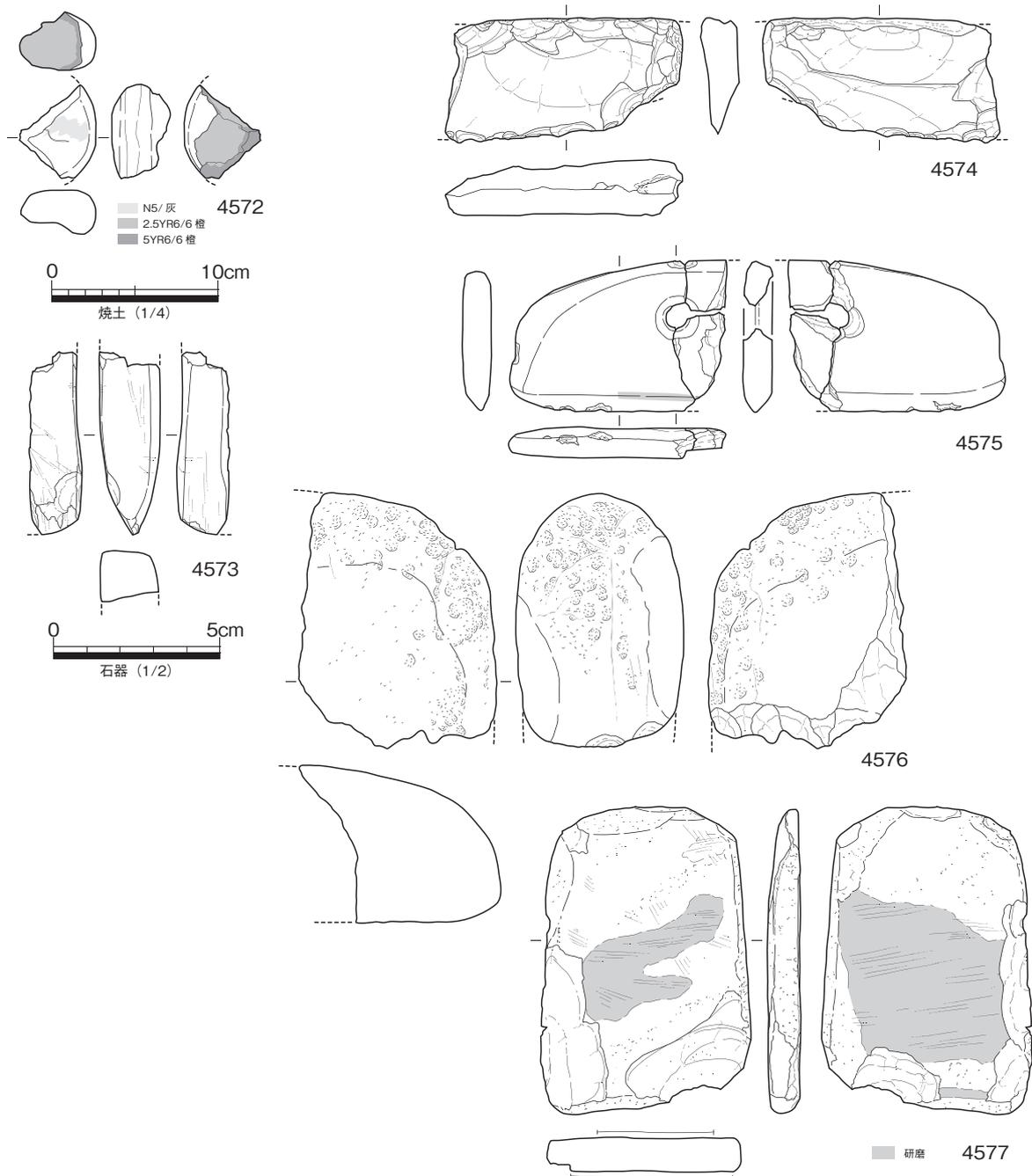


図 440 SR02 上層 G ブロック出土遺物 (5)

SR02 上層出土遺物 (図 441 ~ 443)

土器 出土土器には、壺 (4578 ~ 4581)、甕 (4582 ~ 4586)、台付鉢 (4587)、器台 (4589)、高杯 (4588.4590) が見られる。4578 の複合口縁壺は、拡張される口縁形態が備後から安芸地域にかけてのものに類似するが、口縁下端部の細部形態や頸部紋様の欠落等相違点が見られるため模倣土器と考える。4584 の甕は、古墳初頭の古式土師器と見られ、胴部外面に細い篋ミガキが確認できる。4589 は鋸歯紋と波状紋を中心に加飾される器台口縁である。(信里)

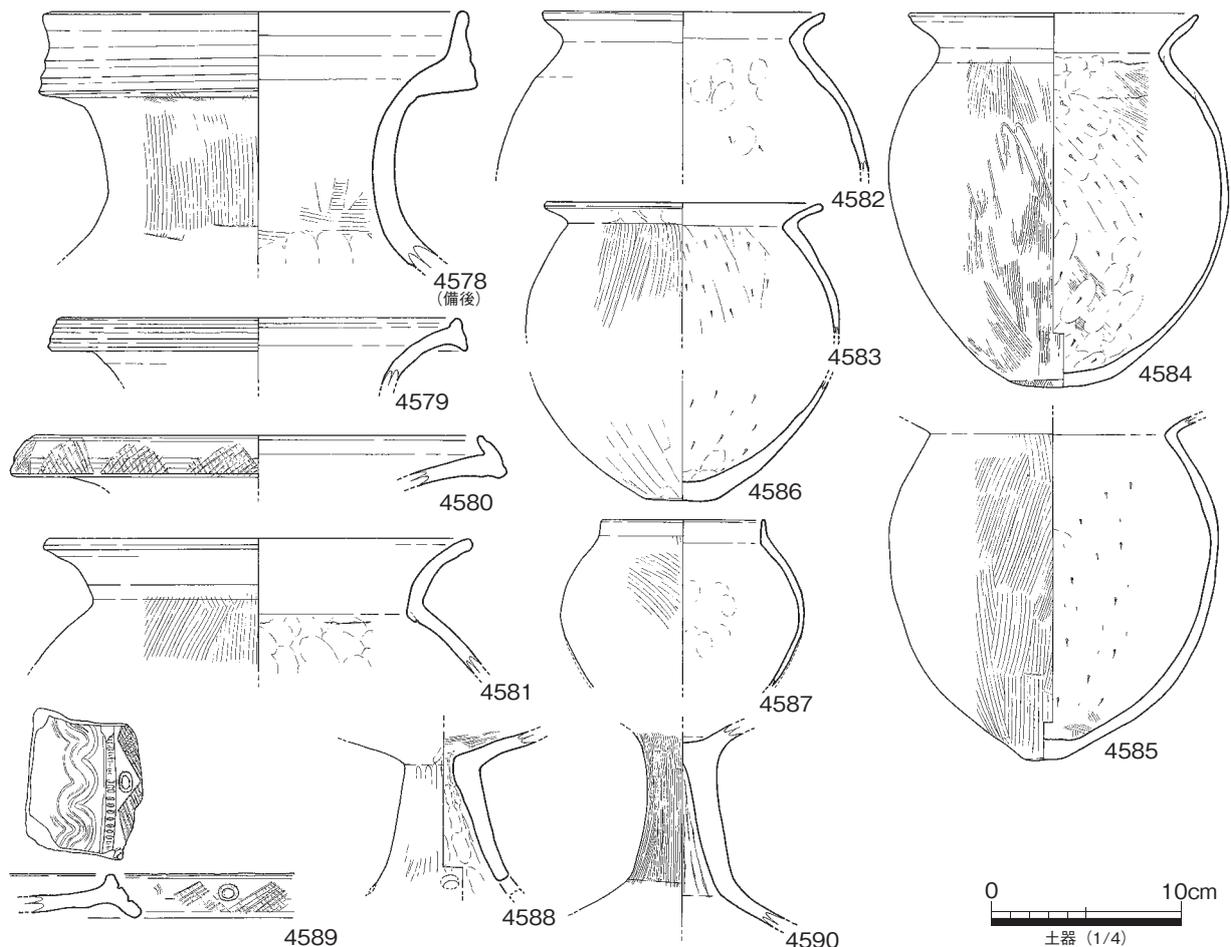


図 441 SR02 上層 G ブロック番号取り上げ出土遺物

SR02 上層出土遺物 (図 442・443)

土器 出土土器・土製品には、壺(4591～4597)、甕(4598～4609)、高杯(4610.4611)、器台(4612)、台付鉢(4613)、鉢(4614～4619)、支脚(4620～4623)が見られる。

4595の複合口縁壺は、伊予地域からの搬入品と見られる。4596の広口壺は、古墳初頭まで下る。4604は高松平野の香東川下流域産の系統に位置付けられる甕であるが、角閃石は含まれておらず古墳初頭に位置付けられる。4606は古墳前期まで下る土師器甕である。(信里)

石器 4624はサヌカイト製打製石鏃の未製品である。側縁の調整加工は丁寧に施されるが、基部及び先端部の加工が不十分である。4625、4626はサヌカイト製打製石錐である。4625は両極打撃により剥離した縦長の碎片の一端に、器軸と直交する方向の擦痕を伴う研磨痕が残る。不定形素材の打製石錐例である。4626はツマミ状に整形した基部を有し、幅広で薄身の作用部を作り出す。作用部下端は欠損する。4627は剥片周縁に浅い調整加工を施すサヌカイト製剥片である。スクレイパーとしたが、石鏃未製品の可能性もある。4628は左右に抉りを備える小形のサヌカイト製打製石庖丁である。器面全体に軽度の磨滅を残す。刃部は再加工が施され、使用に伴う強い磨滅痕は残らない。(森下)

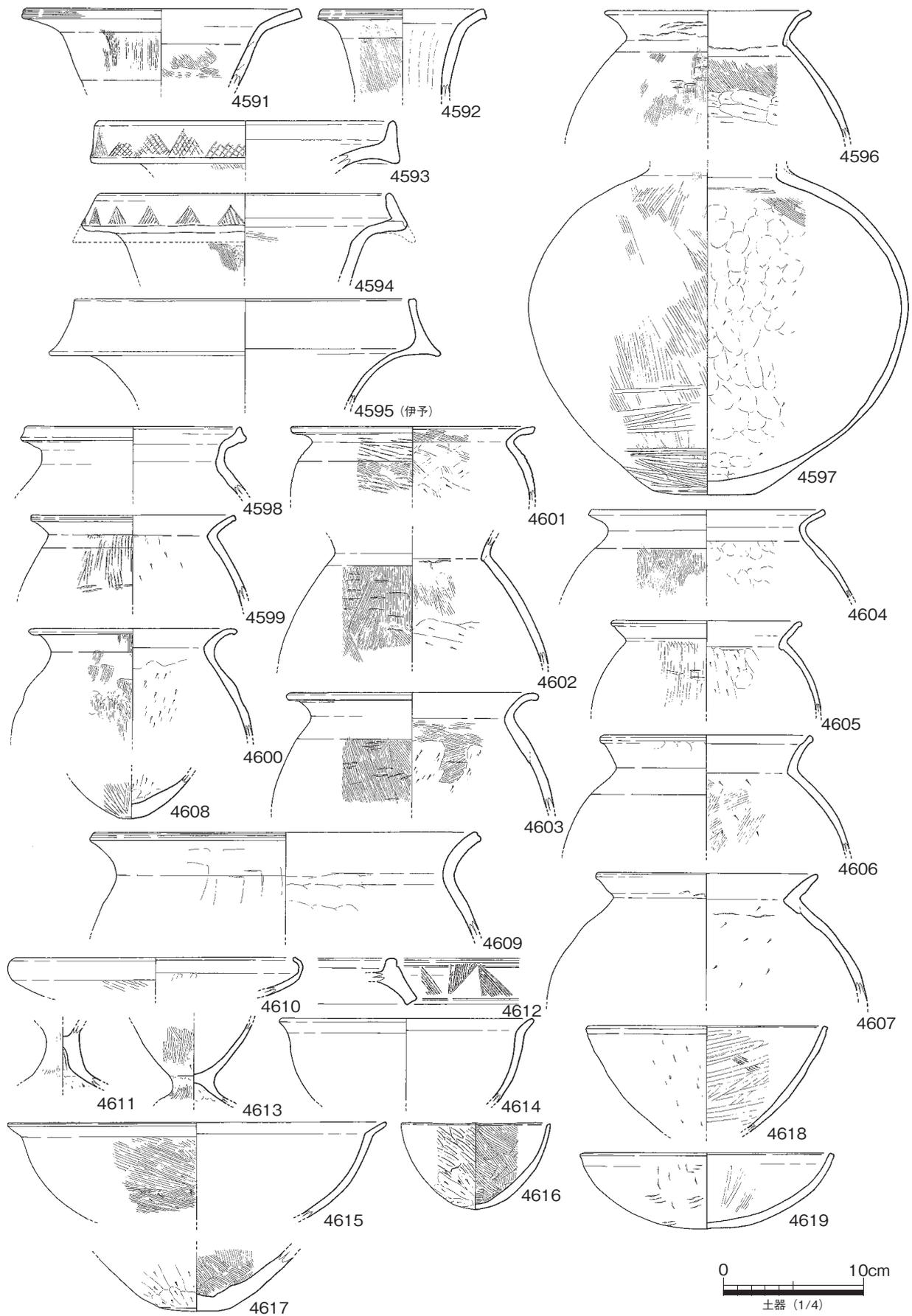


図 442 SR02 上層Iブロック出土遺物 (1)

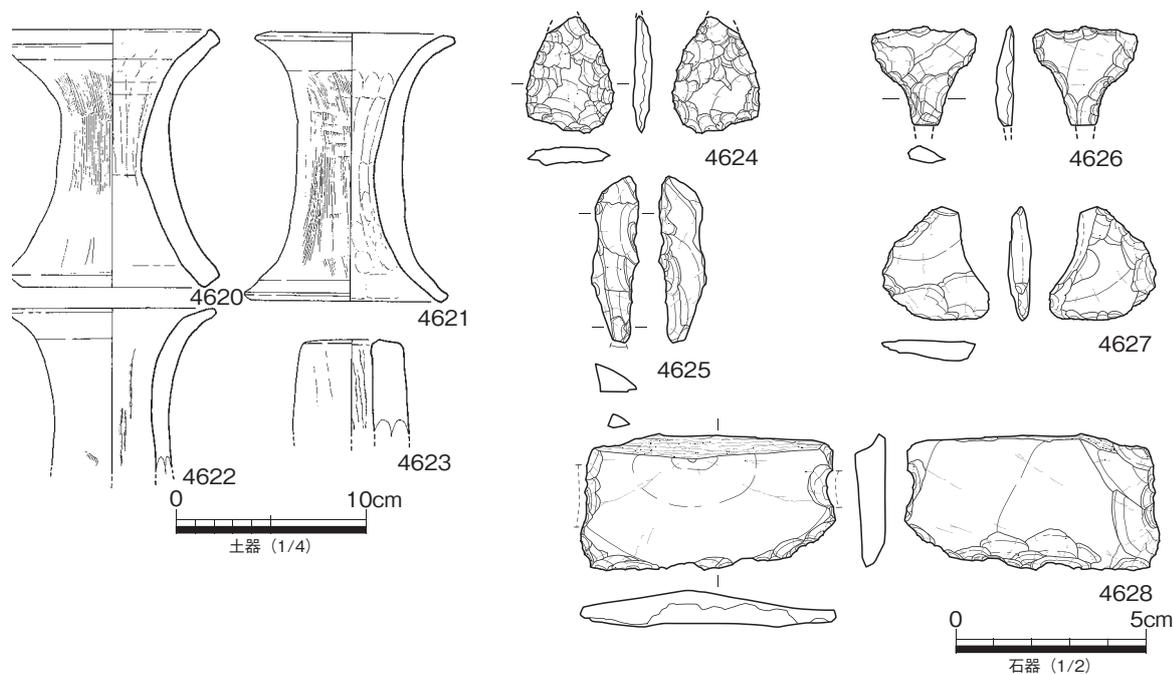


図 443 SR02 上層Iブロック出土遺物 (2)

SR02 上層出土遺物 (図 444 ~ 447)

土器 出土土器・土製品には、壺 (4629 ~ 4667)、甕 (4668 ~ 4699)、高杯 (4700 ~ 4714)、器台 (4715.4716)、台付鉢 (4717)、鉢 (4718.4719.4721 ~ 4746)、紡錘車 (4747.4748) が見られる。

広口壺 4632 は、凹線文帯をもつ口縁部に 3 個一対の棒状浮文を施し、頸部外面に列点紋を施すもので、器形、施文ともに他地域の属性をもつ。4633 は外面にベンガラによる彩色を行う長頸壺であり、備中地域の鬼川市 I ~ II 式頃に比定される搬入品である。4636 は頸部の貼り付け突帯上面に格子状の刻目を施す壺であり、施文手法から伊予地域等の西部瀬戸内からの搬入品と考えられる。4635、4643 ~ 4647 は在地の土器群に組成する複合口縁壺であり、胎土中に雲母片を多く含むものが多い。4655 は高松平野の香東川下流域産の細頸壺である。4661 の底部外面にはベンガラによる彩色が確認できる。

4698 は高松平野の香東川下流域産土器と共通する器形及び調整をもつが、胎土中に角閃石は含まれない。外面のミガキを失っていることや形態から、弥生終末期末葉に位置付けられる。4692 は口縁部や胴部形態から見て、古墳前期に下る。4699 の甕胴部片の外面にはベンガラによる彩色が確認でき、胎土から備中からの搬入品と見られる。4705 は柱状部に膨らみをもつ高杯脚部であり、装飾高杯と見られ、伊予地域からの搬入品の可能性がある。

4717 は浅黄橙色の色調の精製された胎土をもつ台付鉢であり、搬入品の可能性が高い。一見山陰系の低脚杯に類似するが、法量及び脚部形態が異なっており、搬入元となる地域を特定できない。4725 の大型鉢の穿孔の周囲に記号紋と見られるヘラ描きが確認できる。

4747、4748 は紡錘車と見られる土製品であり、断面形が半月状となる。(信里)

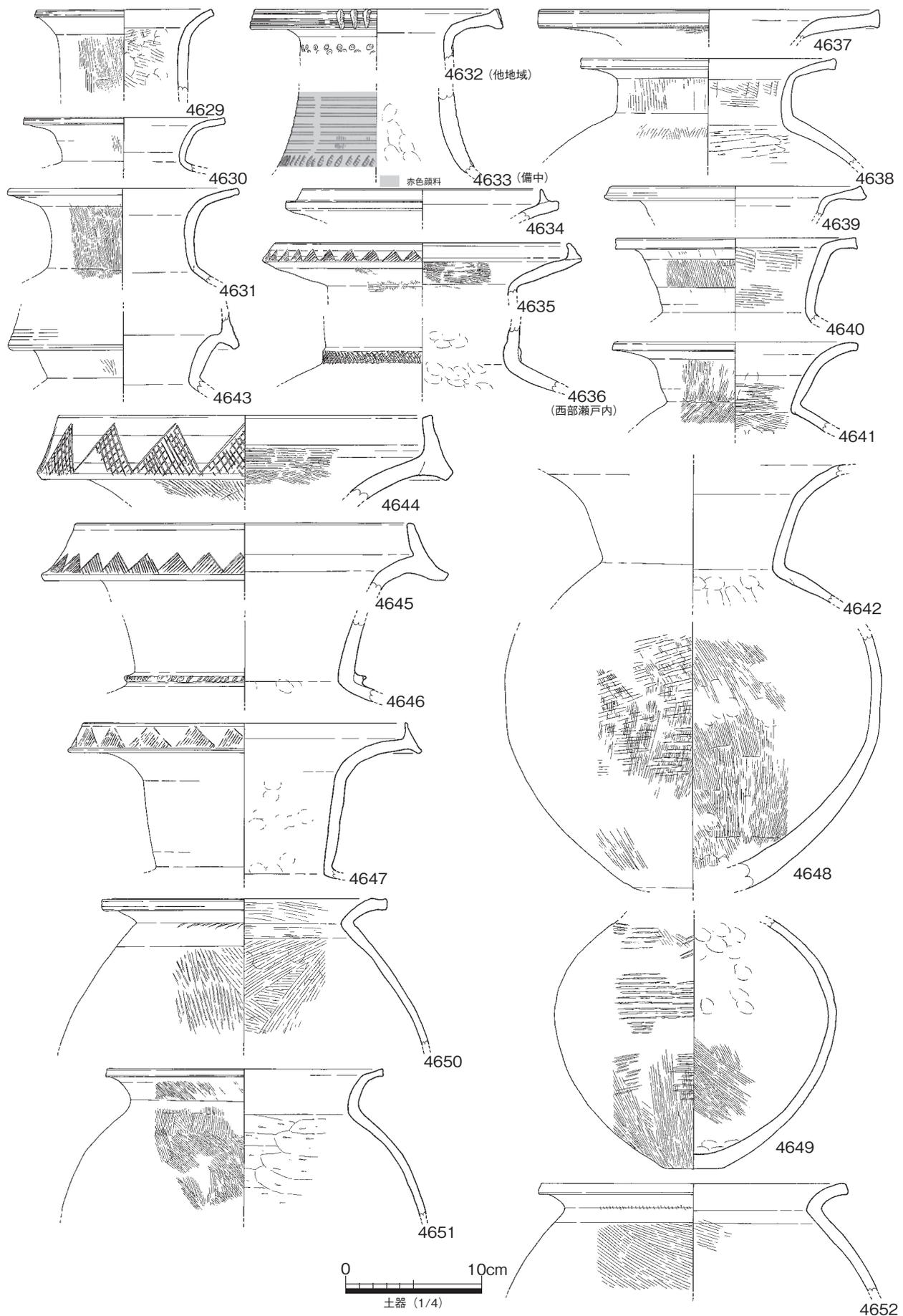


図 444 SR02 上層 J ブロック 出土遺物 (1)

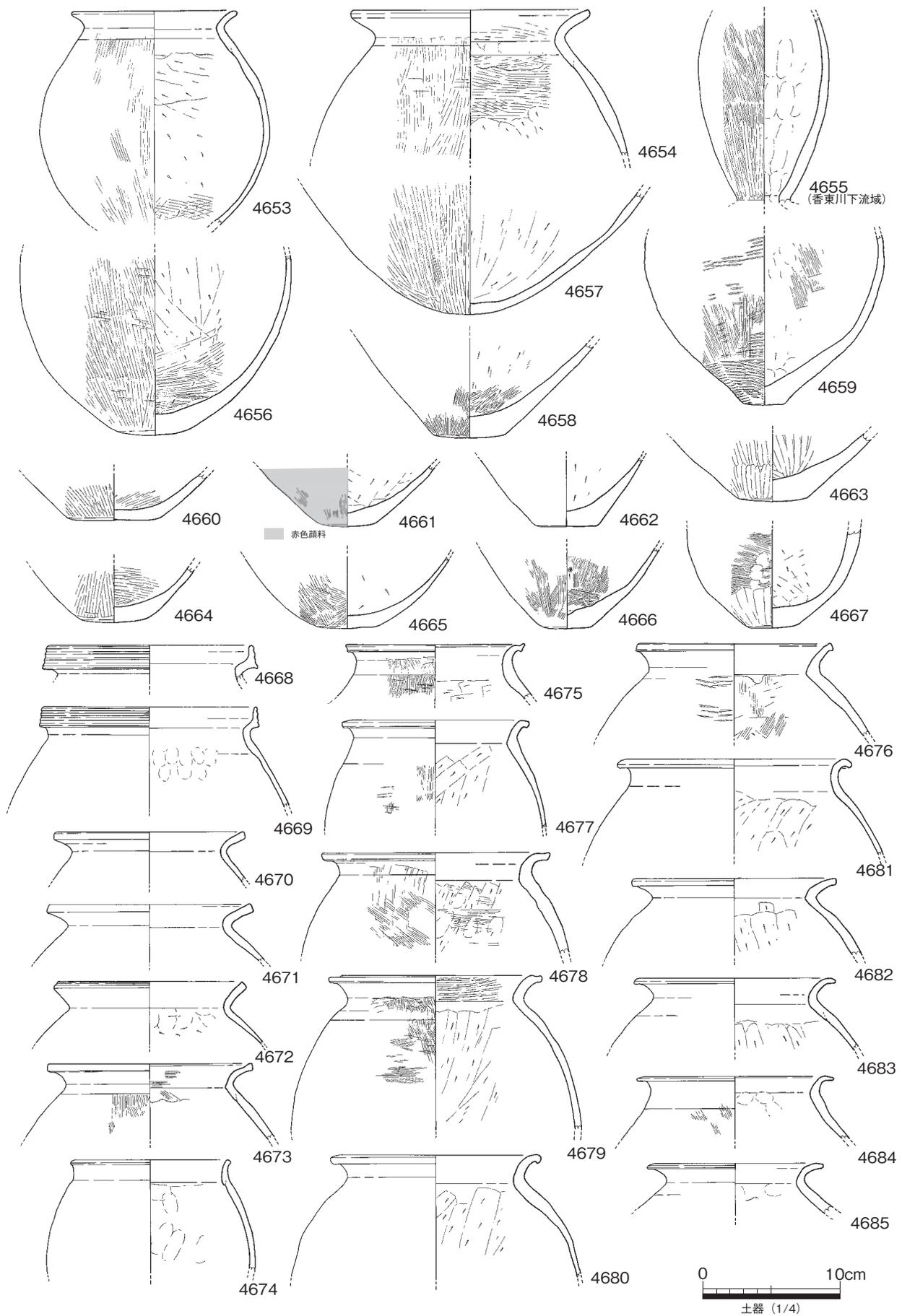


図 445 SR02 上層 J ブロック出土遺物 (2)

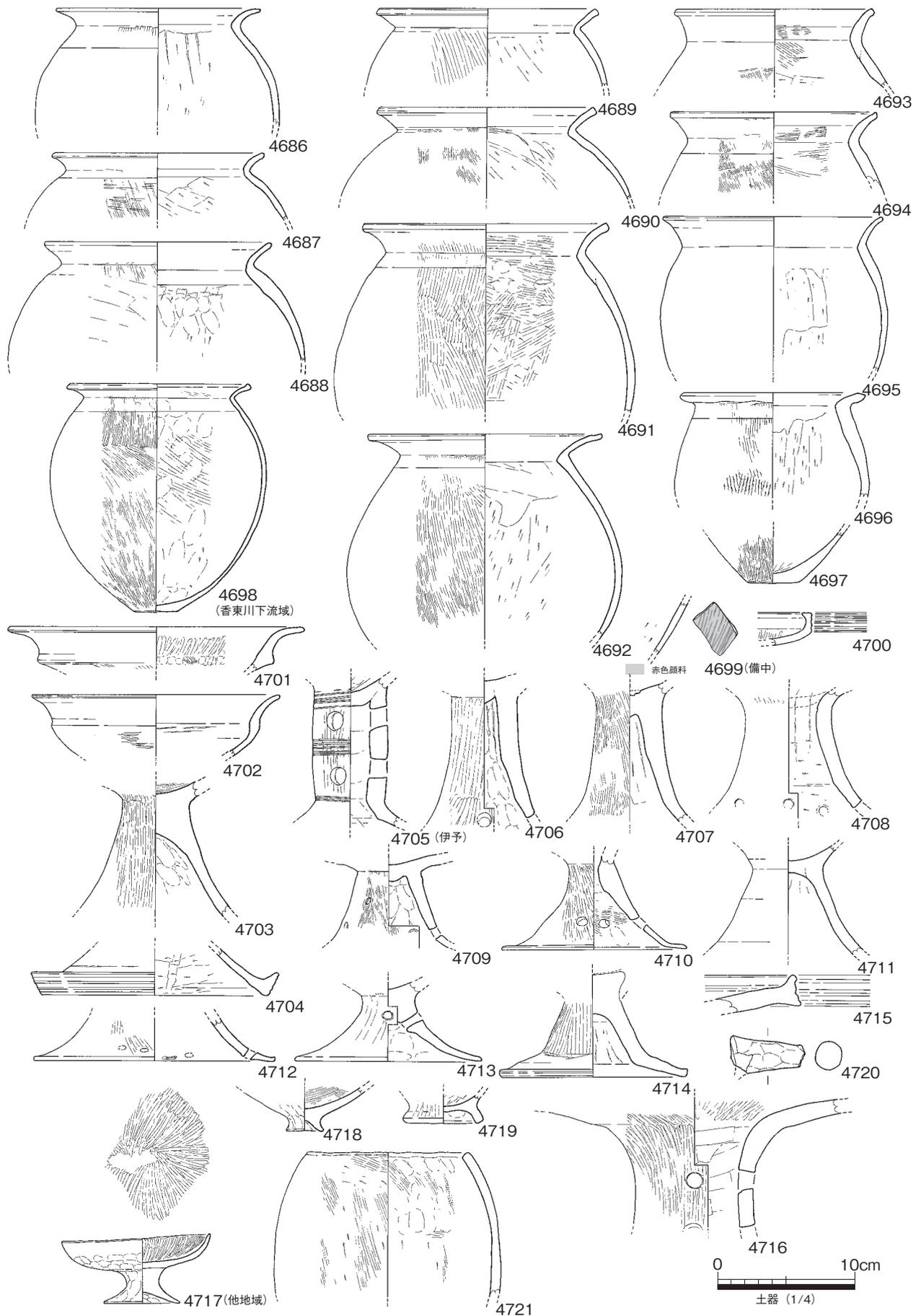


図 446 SR02 上層 J ブロック 出土遺物 (3)

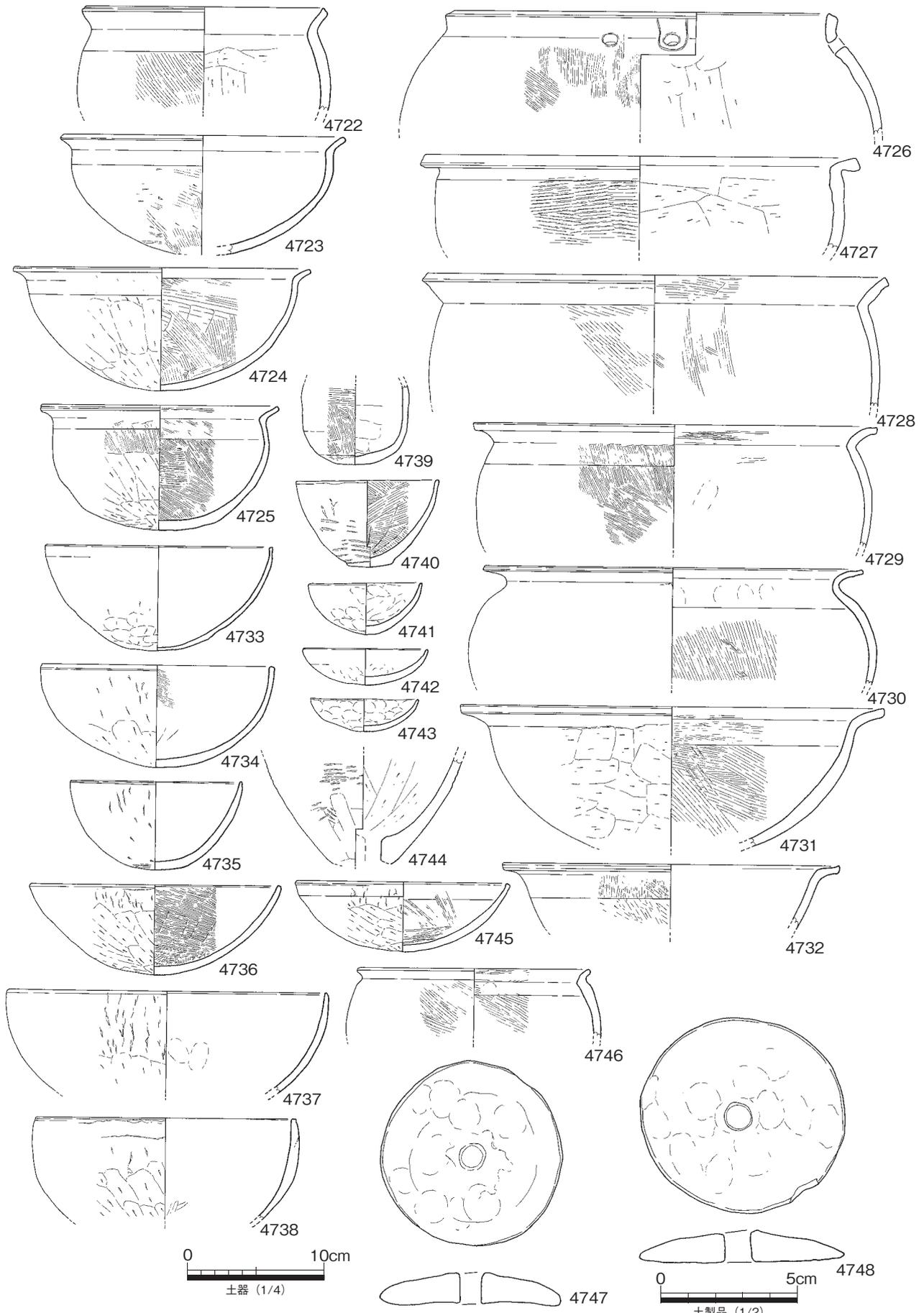


図 447 SR02 上層 J ブロック出土遺物 (4)

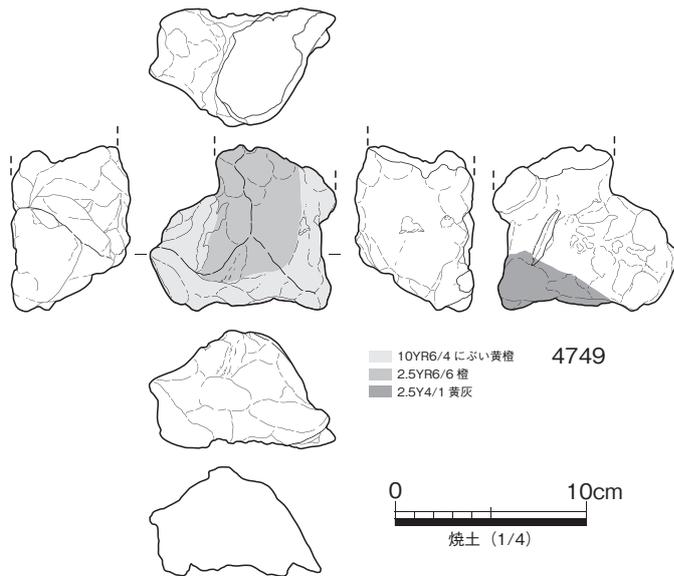


図 448 SR02 上層 J ブロック出土遺物 (5)

SR02 上層出土遺物 (図 449 ~ 452)

土器 出土土器には、壺 (4750 ~ 4758)、甕 (4759 ~ 4794)、高杯 (4795.4796)、台付鉢 (4797 ~ 4800)、鉢 (4801 ~ 4817) がある。出土土器は弥生後期後半期から古墳初頭の古式土師器を含むもので、他の区画と比較して、古式土師器が目立つ内容となっており、他地域からの少数の搬入品を含む。

4753 の広口壺は、胎土が赤褐色を呈し微量の片岩粒を含むものであり、阿波地域からの搬入品と見られる。胴部が完全に球形化しており、古墳初頭に比定される。4783、4785、4789 は形態から見て、古墳初頭から古墳前期に下る資料と見られる。4800 の台付鉢は、黄橙色の精製された胎土をもつもので、他地域からの搬入土器と見られる。また、本区画内に類似資料 (4717) が見られる。4795、4796 の高杯は、古墳初頭まで下るものと見られる。(信里)

石器 4818 はサヌカイト製打製石鏃である。凹基式で基部両端は鋭く尖る。側縁の調整加工は端整で、内彎する形状に仕上げる。弥生時代中期に特徴的な形態である。(森下)

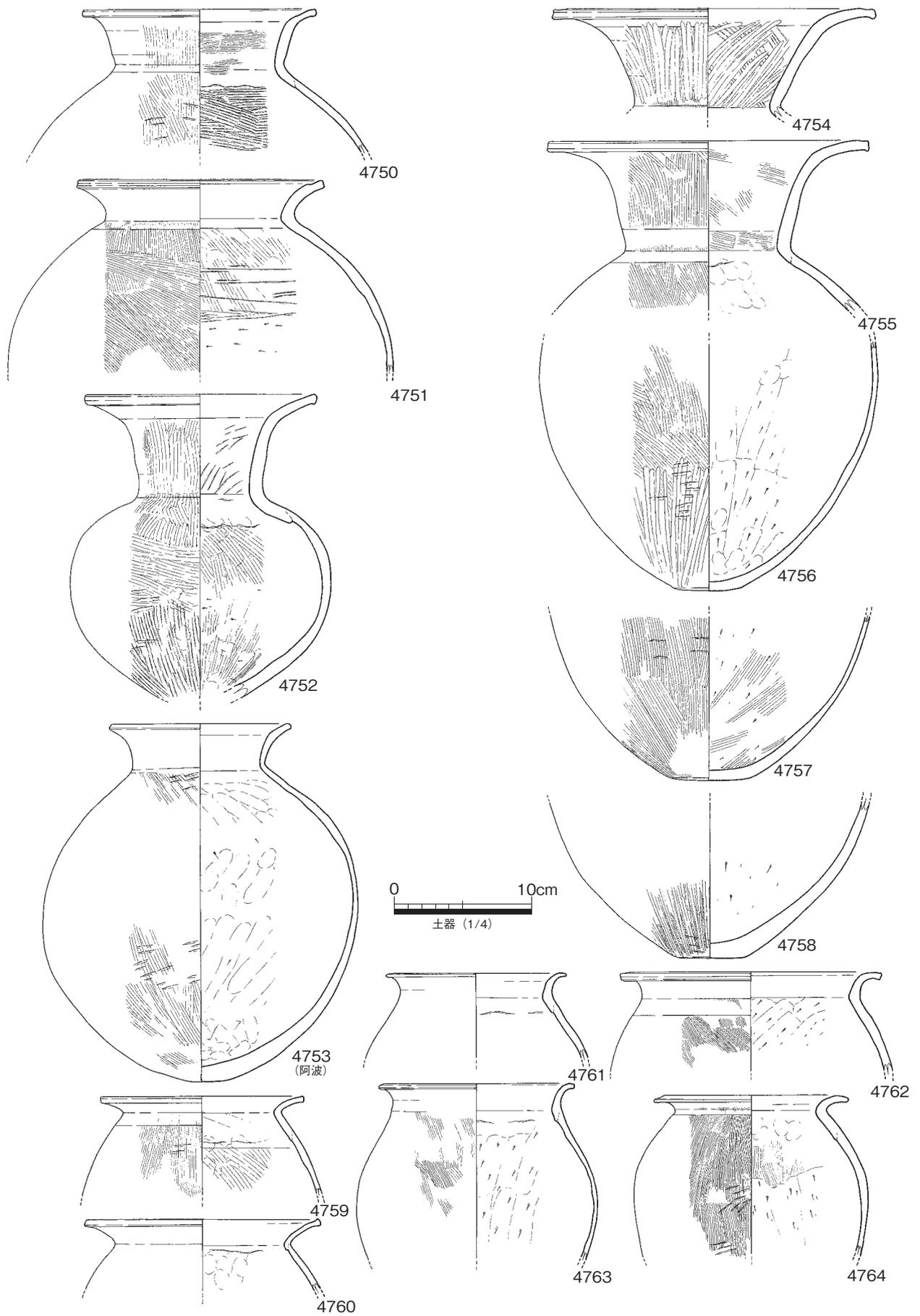


図 449 SR02 上層 J ブロック 番号取り上げ 出土遺物 (1)

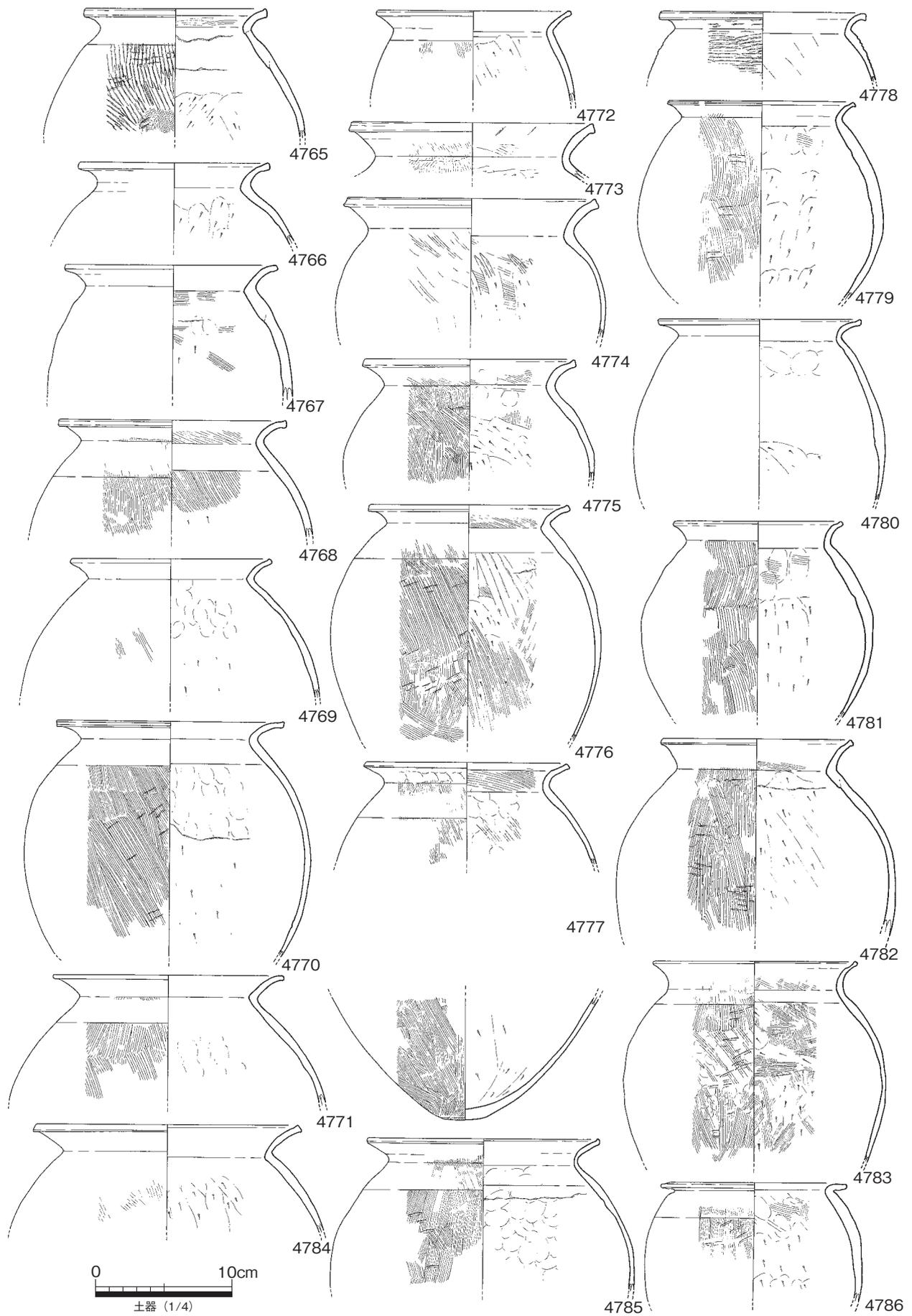


図 450 SR02 上層 J ブロック番号取り上げ出土遺物 (2)

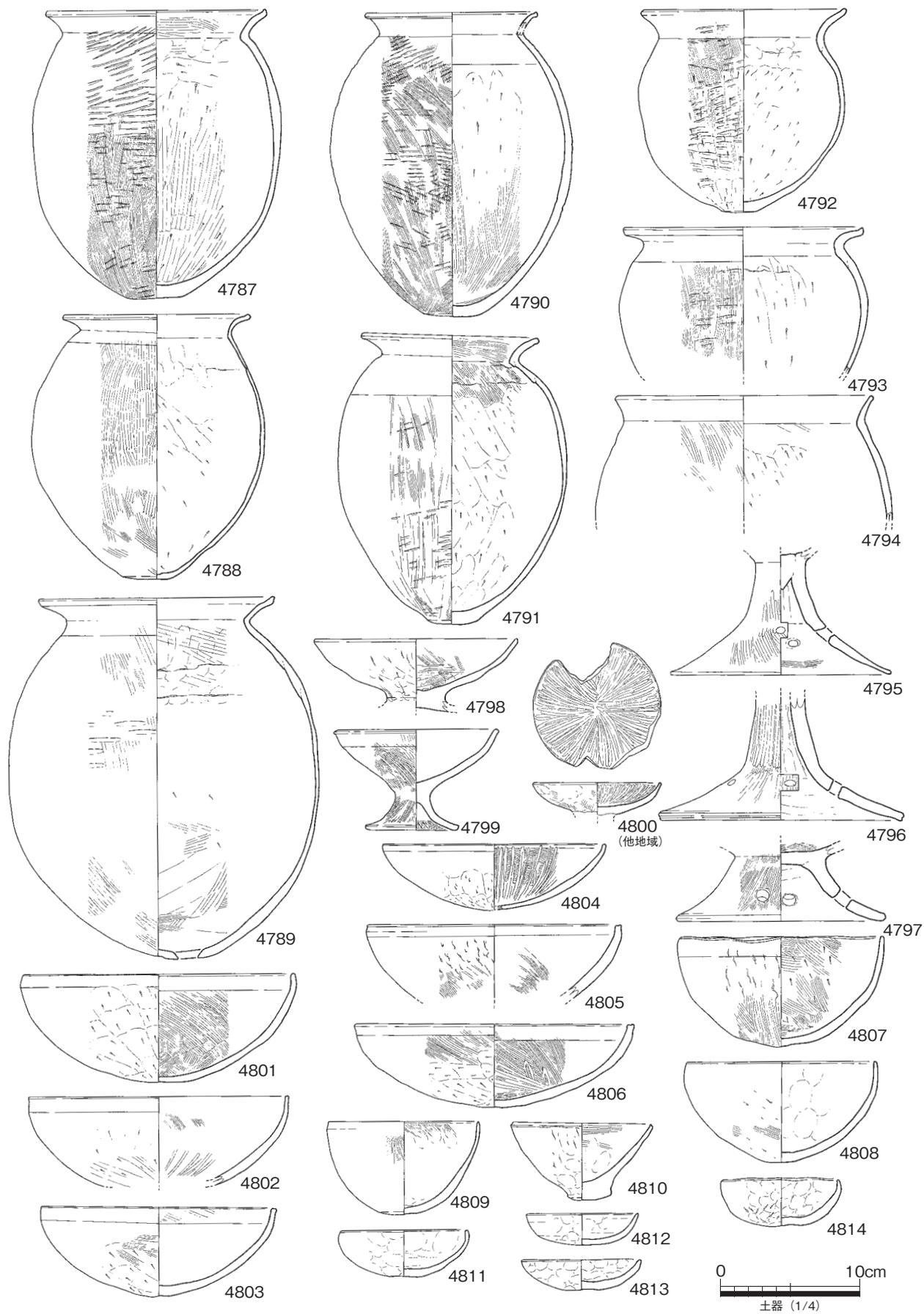


図 451 SR02 上層 J ブロック番号取り上げ出土遺物 (3)

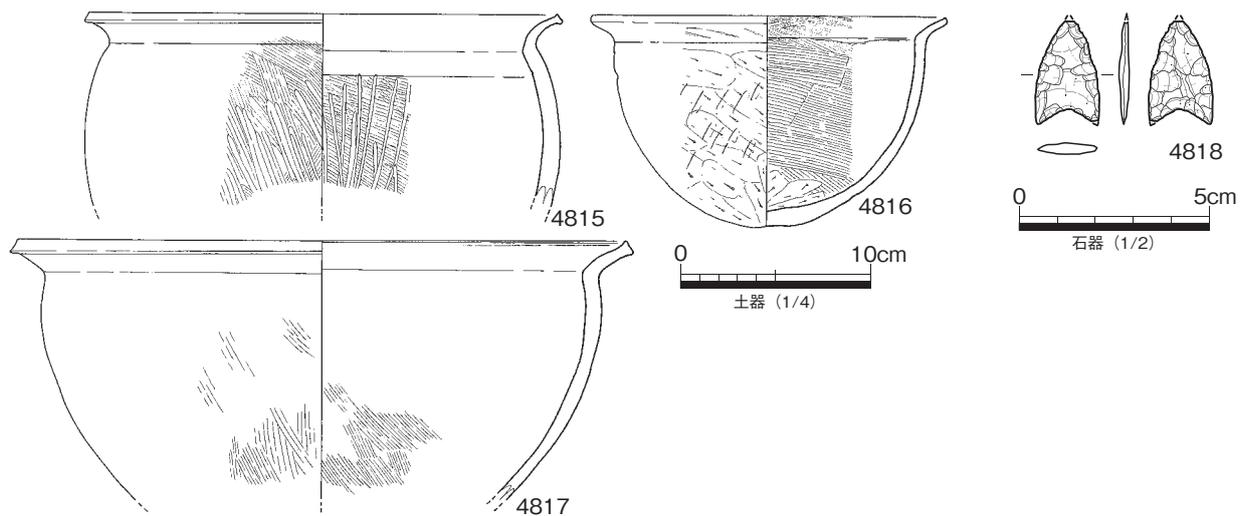


図 452 SR02 上層 J ブロック番号取り上げ出土遺物 (4)

SR02 上層出土遺物 (図 453 ~ 456)

土器 出土土器・土製品には、壺 (4819 ~ 4840)、甕 (4841 ~ 4867)、高杯 (4868.4869)、器台 (4870)、鉢 (4871 ~ 4883)、蓋 (4884.4885)、支脚 (4886 ~ 4887)、ミニチュア土器 (4888) がある。

4821 は短頸広口壺であり、口縁下端部を水平方向に摘み出す形態は、備中地域に見られるものである。資料的には、上東遺跡東鬼川市地区溝 3 等に類例があり、鬼川市Ⅱ式に比定される。4823 は、口縁部を上方に拡張するもので、備後地域の短頸広口壺と見られる。4834 は、鋤先状口縁ともとれる口縁下端部を拡張する壺であり、外面に鋸歯紋を刻む。器台の口縁部と捉えるには、口縁部の上端の拡張が僅かであり、口径も考慮して壺として復元した。地域の特定に困難を極めるが、東北部九州から西部瀬戸内地域が想定される。4842 は高松平野の香東川下流域産の甕であり、下川津Ⅰ式・①段階に比定される。4848 の甕は弥生終末期中段階に位置付けられ、肩部外面にヘラ描きの弧線による記号紋を描く。4855 は口縁部形態や内面の指頭圧痕等から見て、高松平野の香東川下流域産の甕の系譜を引き継ぐ古式土師器の甕であり、古墳前期に下る。4865 は内面の口頸部境までケズリが及び、内傾する口縁端部内面を内側に摘み出すもので、布留系甕と見られる。4860 ~ 4867 は古墳初頭から前期に下る古式土師器の甕である。4868 の高杯は、内面にベンガラによる彩色が見られ、胎土中に角閃石を含む灰色系の胎土をもつことから、備中地域からの搬入品と考えられる。

4872 は内外面をベンガラによって彩色を行う台付鉢であり、備中地域の才の町Ⅰ式に比定される搬入品である。4875 は吉備系の大型鉢であり、口縁部や胴部形態に若干の相違点があることから、模倣品の可能性が高い。4886 の支脚は、上端部を U 字状に窪める形態をもつもので、遺跡内及び周辺で類例が少ない。(信里)

青銅器 4889 は連鈕式銅鏃である。刃部上半及び茎部下半が欠損する。刃部は他の銅鏃と比べ、仕上げ研磨が丁寧に行われており、表裏鏃の研ぎ出しまで完成する。ただし、刃部の厚みは貧弱である。元々刃部付近の湯回りが悪かった可能性が高く、関部の研ぎを丁寧に行うものの、左右の形状が大きく異なる仕上がりとなる。これは、関部付近の銅厚が少なかったか、あるいは逆棘部まで銅が回らなかったことが原因と考えられる。茎部は安定した厚みがあるが、側縁のバリは除去されてない。これらのことか

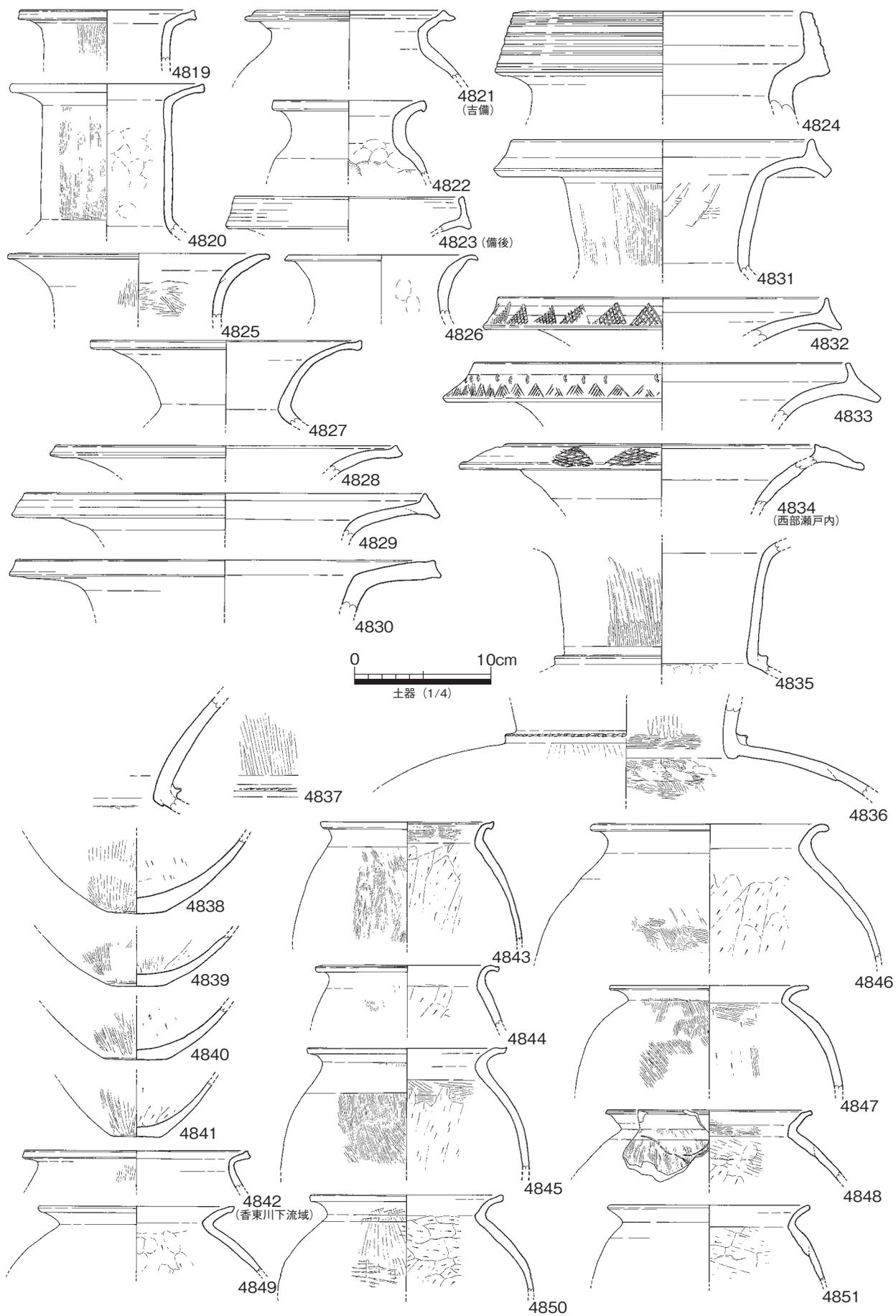


図 453 SR02 上層 K ブロック番号取り上げ出土遺物 (1)

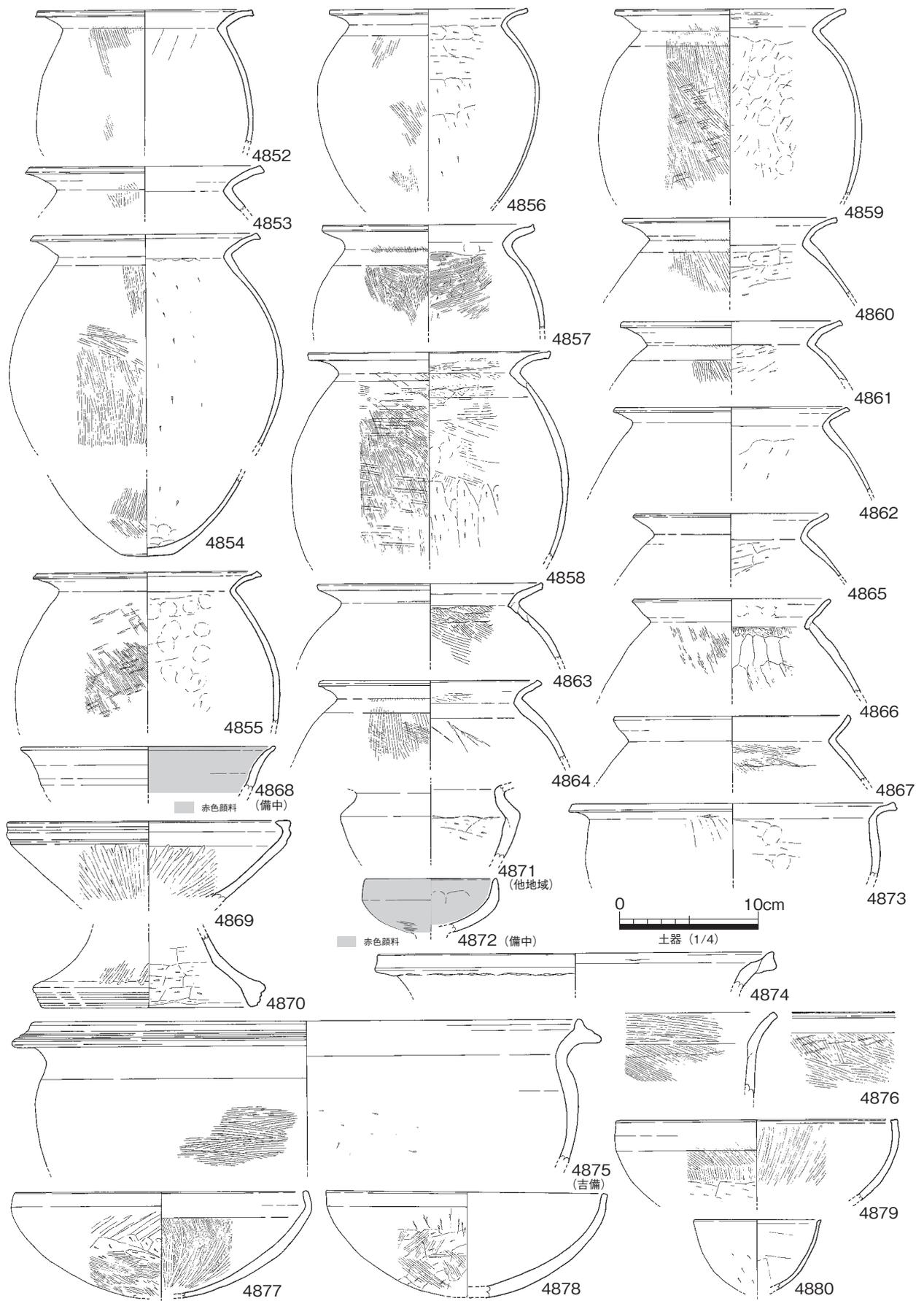


図 454 SR02 上層 K ブロック番号取り上げ出土遺物 (2)

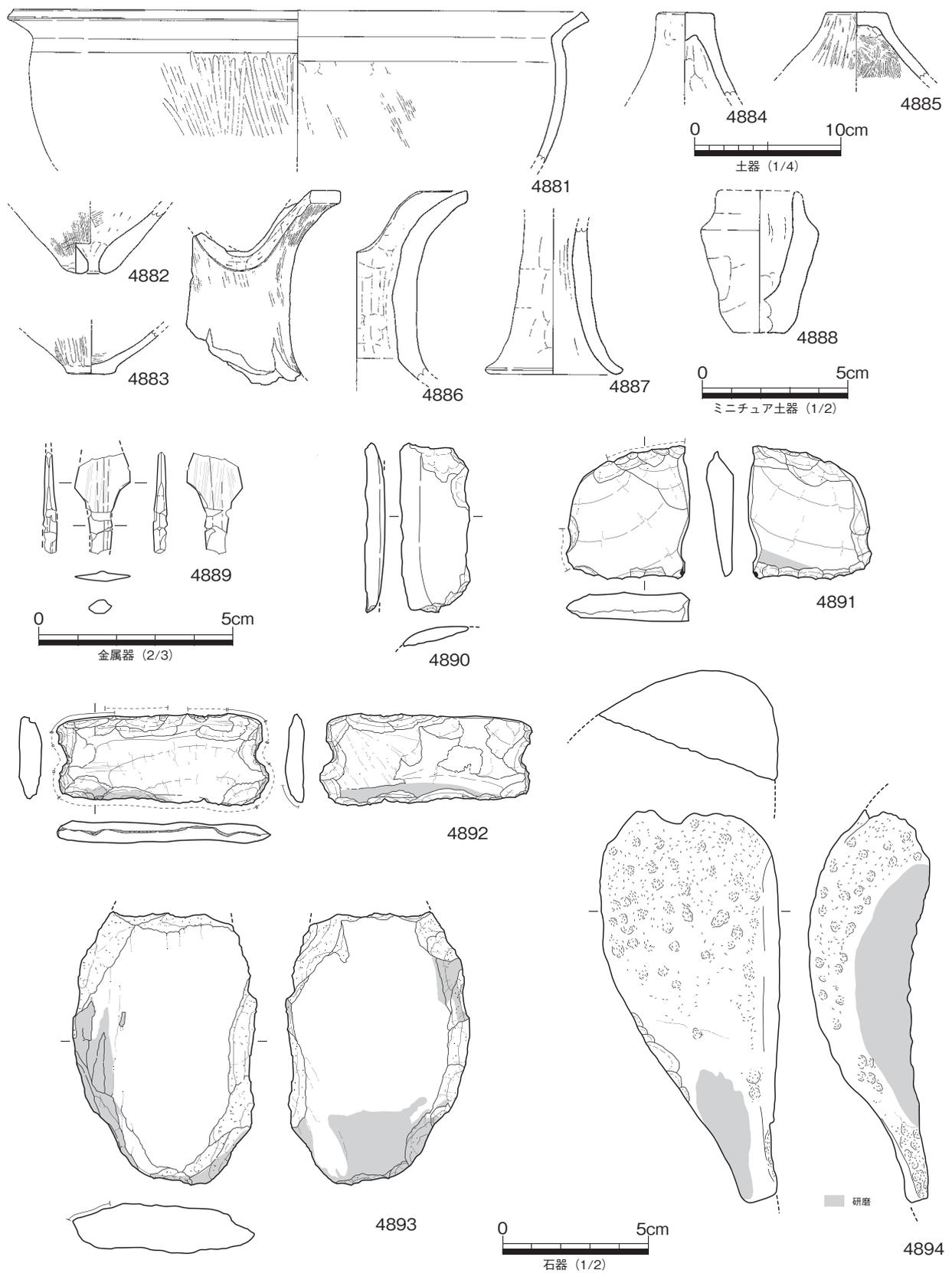


図 455 SR02 上層 K ブロック番号取り上げ出土遺物 (3)

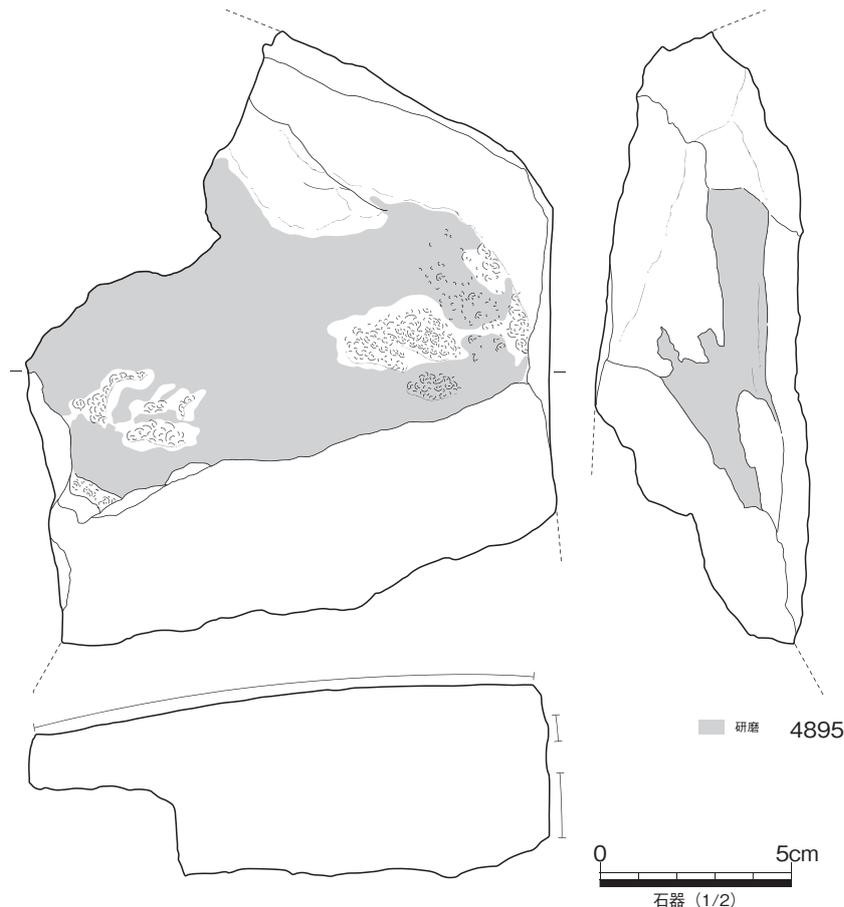


図 456 SR02 上層 K ブロック番号取り上げ出土遺物 (4)

ら、研磨の仕上がりは良好であるものの、素材の限界から最終的な製品完成には至らなかった個体である可能性が高い。

石器 4890 は淡緑色で白縞の多い石材を使用した柱状片刃石斧の破損片である。剥離した表面のみ残る。4891 はサヌカイト製打製石庖丁である。側縁に浅い抉りを備える。刃部は再調整され、器面の一部にのみ強い磨滅痕が残る。刃部の再調整は片面からのみ施される。4892 は黒色頁岩製の小形の磨製石庖丁である。左右の抉りを敲打により施し、背部は研磨による丁寧な面取りを施す部分と、敲打により刃潰しする部分が共存する。器面の研磨は剥離面の凹凸が残る程度の軽度の研磨が施される。刃部は元々研磨により仕上げられたものと思われるが、敲打により再調整が施される。器面下半の刃部付近には使用による光沢を帯びる磨滅が残る。打製・磨製の両技術が混在する製品である。4893 は結晶部が多い暗灰色を呈する結晶片岩を素材とする打製石斧である。刃部及び側縁に使用痕が残る。縄文時代の石棒等に多用される石材である。縄文時代あるいは弥生時代前期の混在品である可能性が高い。4894 は不定形で丸みを帯びた形状の砂岩製磨石である。周縁部には敲打痕が残り、器面に軽度の研磨痕が残る。被熱のためか一部赤色を呈す。4895 は流紋岩製砥石である。器面に多数の小気泡を有する灰色石材で、香色山ではなく天霧山の流紋岩に近い。板状に整形した石材の表面及び側縁に平滑な研磨痕が残る。大きさから見て置き砥石である。(森下)

SR02 上層出土遺物 (図 457 ~ 462)

土器 出土土器・土製品には、壺(4896 ~ 4931)、甕(4932 ~ 4994)、高杯(4995 ~ 5020)、器台(5021 ~ 5024)、鉢(5025 ~ 5050)、支脚(5051 ~ 5056)、ミニチュア土器(5057.5058)が見られる。

4094 は突帯・棒状浮文・線鋸歯紋で加飾する細頸壺の胴部片と見られ、吉備地域からの搬入・模倣土器と考えられる。4905 は外面にベンガラによる彩色が確認できる細頸壺の胴部片であり、備中地域からの搬入品である。4919 の複合口縁壺は周防地域に見られるものに類似している。4929 の広口壺は、古墳初頭まで下る形態をもつ。

4932、4935 ~ 4937 は高松平野の香東川下流域産の甕である。4937 の内面には、種子圧痕が見られる。4954 は古墳前期まで下る古式土師器の甕である。4968、4971 の甕は、内面の口頸部下までケズリが及び口縁端部内面を摘み出す布留系甕である。4997 の高杯は、口縁部形態や施文の特徴から、吉備系と見られる。5001、5010 は香東川下流域産の高杯。5009 は古墳初頭の高杯であるが、胎土は石英・長石粒を多く含み精製品ではない。5014 の高杯は、脚端部の形態が備後北部地域の佐田谷墳墓群 1 号出土資料に類似している。5021 は外面にベンガラによる彩色が施される。(信里)

石器 5060、5061 はサヌカイト製打製石鏃である。5060 は剥片周縁に部分的に調整加工を施した未製品、5061 も左右の形状が不均等で最終仕上がりまで到達していない未製品である。5062 ~ 5064 はサヌカイト製打製石庖丁である。5062、5063 は側縁に抉りを備える。5064 は刃部の再調整が施されており、元の器面には顕著な磨滅が残る。5065 は安山岩板材の表面に多数の敲打痕が残る叩石である。細かい単位のあばた状の敲打痕である。5066 は片麻岩製の砥石である。表裏に平滑な研磨面が残る。特に図の左面は光沢をもつ強い研磨痕である。(森下)

SR02 上層出土遺物 (図 463)

土器 出土土器・土製品には、壺(5067 ~ 5070.5072.5073.5076)、甕(5071.5074.5075.5077 ~ 5082)、高杯(5083.5084)、鉢(5085 ~ 5091)、支脚(5092.5093)がある。

5069 の広口壺は口縁端部を僅かに拡張するもので、古墳初頭の様相が強いものである。5080 の甕は、口縁部の屈曲点がかなり下方にあり、古墳初頭に下る。5083 の高杯は脚部の透かし孔を縦位に穿つもので、本地域には見られず、吉備地域に多く見られる属性である。(信里)

SR02 上層出土遺物 (図 464)

土器 5094 は、口縁部内面を円形浮文で加飾する中期後半新段階に特徴的な属性をもつ。5095 の器台は、口縁部外面及び内面に波状紋を施すもので、施文の特徴から吉備系と判断される。5096 の広口壺は、頸胴部に刻目紋を施す突帯と口縁部下端に刻目紋をもつもので、他地域からの搬入品の可能性がある。5102 は、脚部に多孔透かしが見られる器台である。(信里)

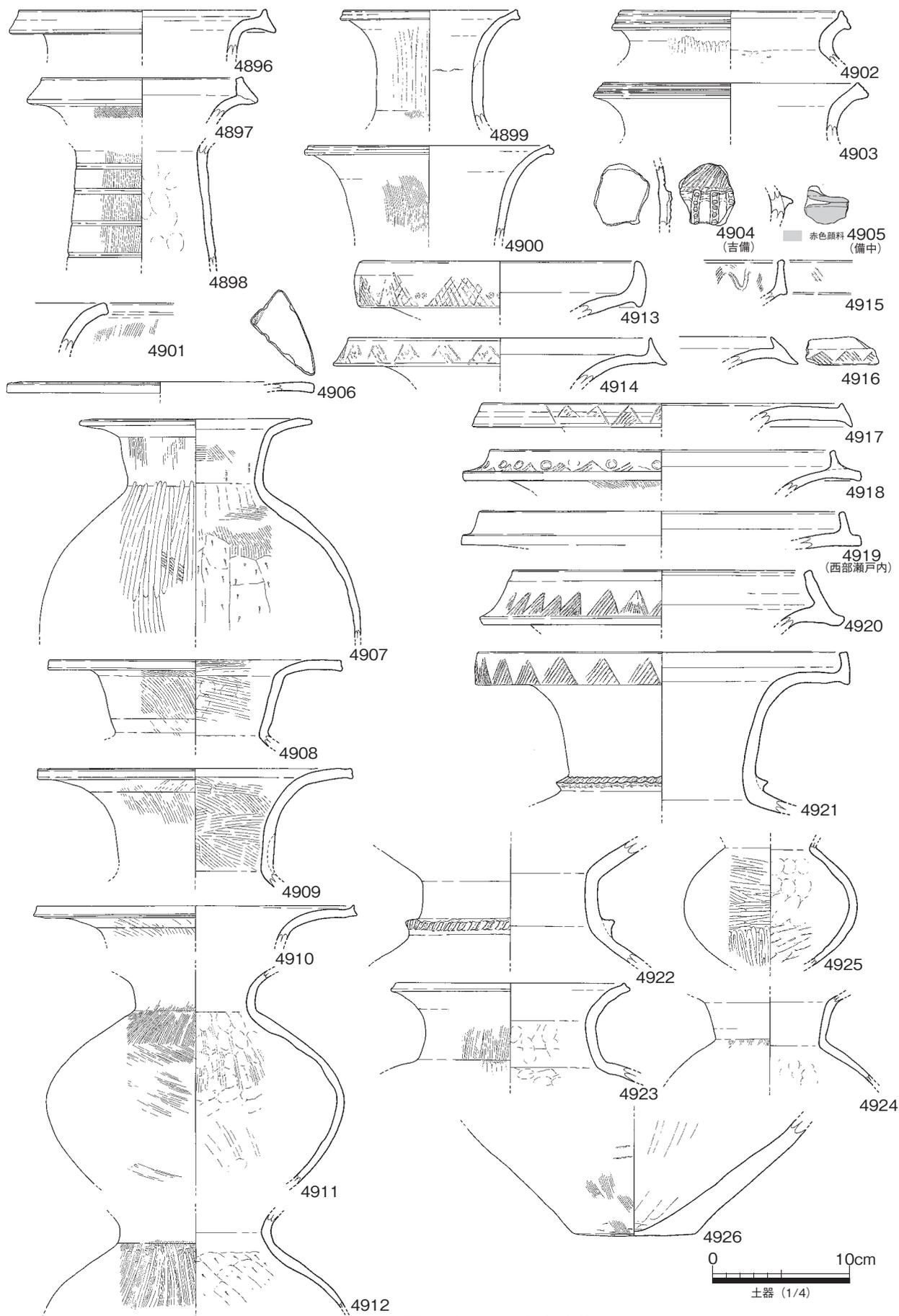


図 457 SR02 上層 L ブロック出土遺物 (1)

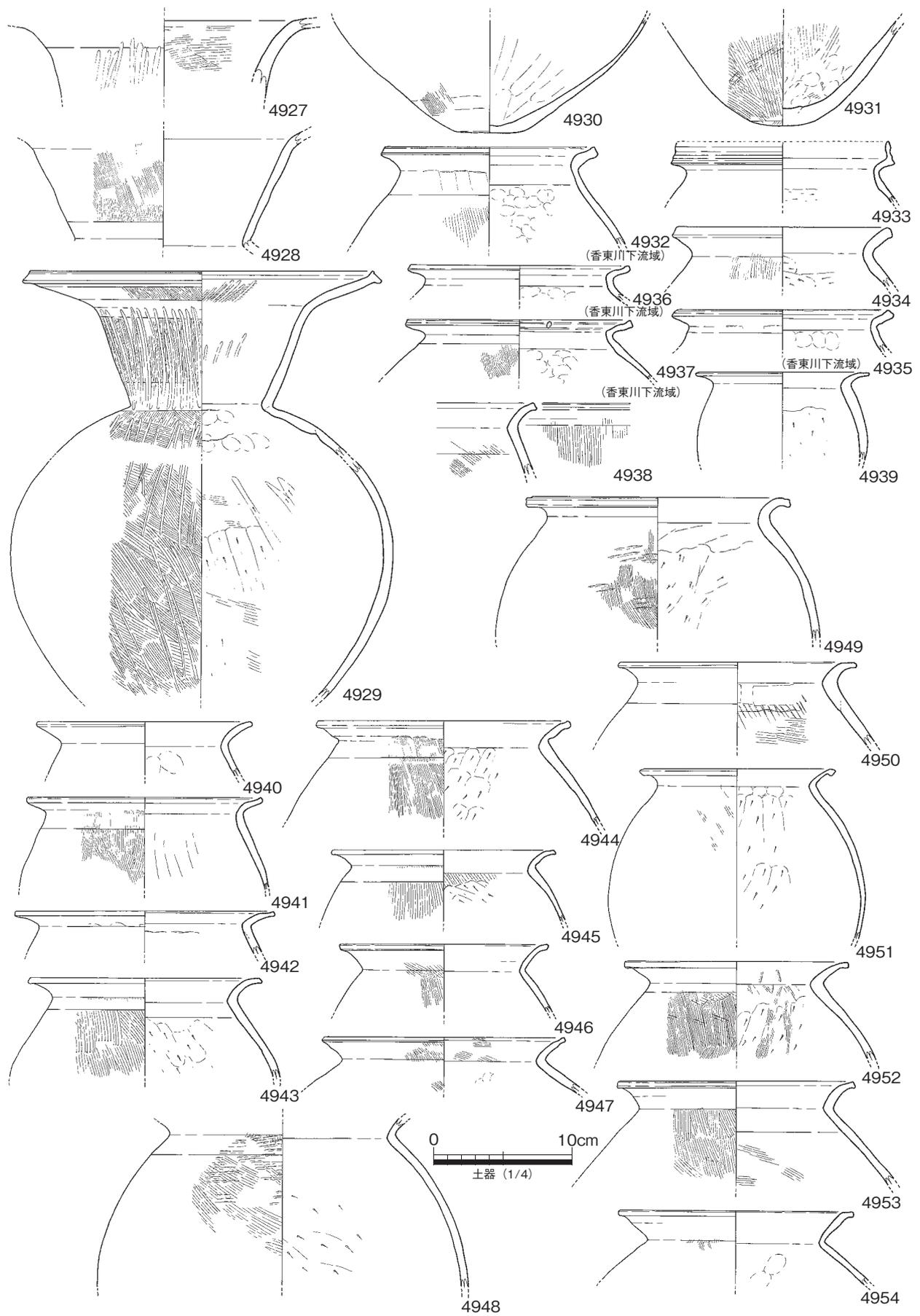


図 458 SR02 上層 L ブロック出土遺物 (2)

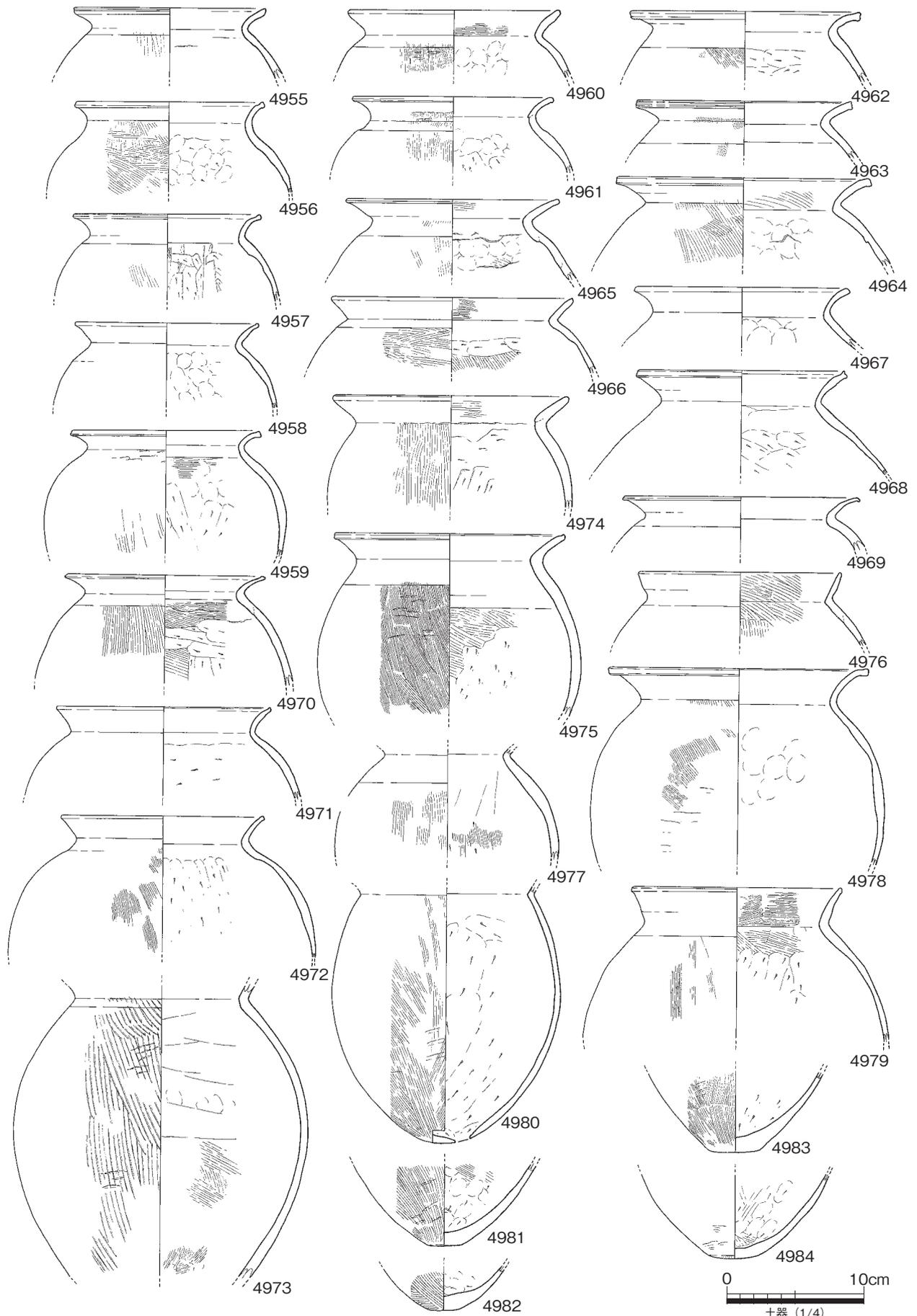


図 459 SR02 上層 L ブロック出土遺物 (3)

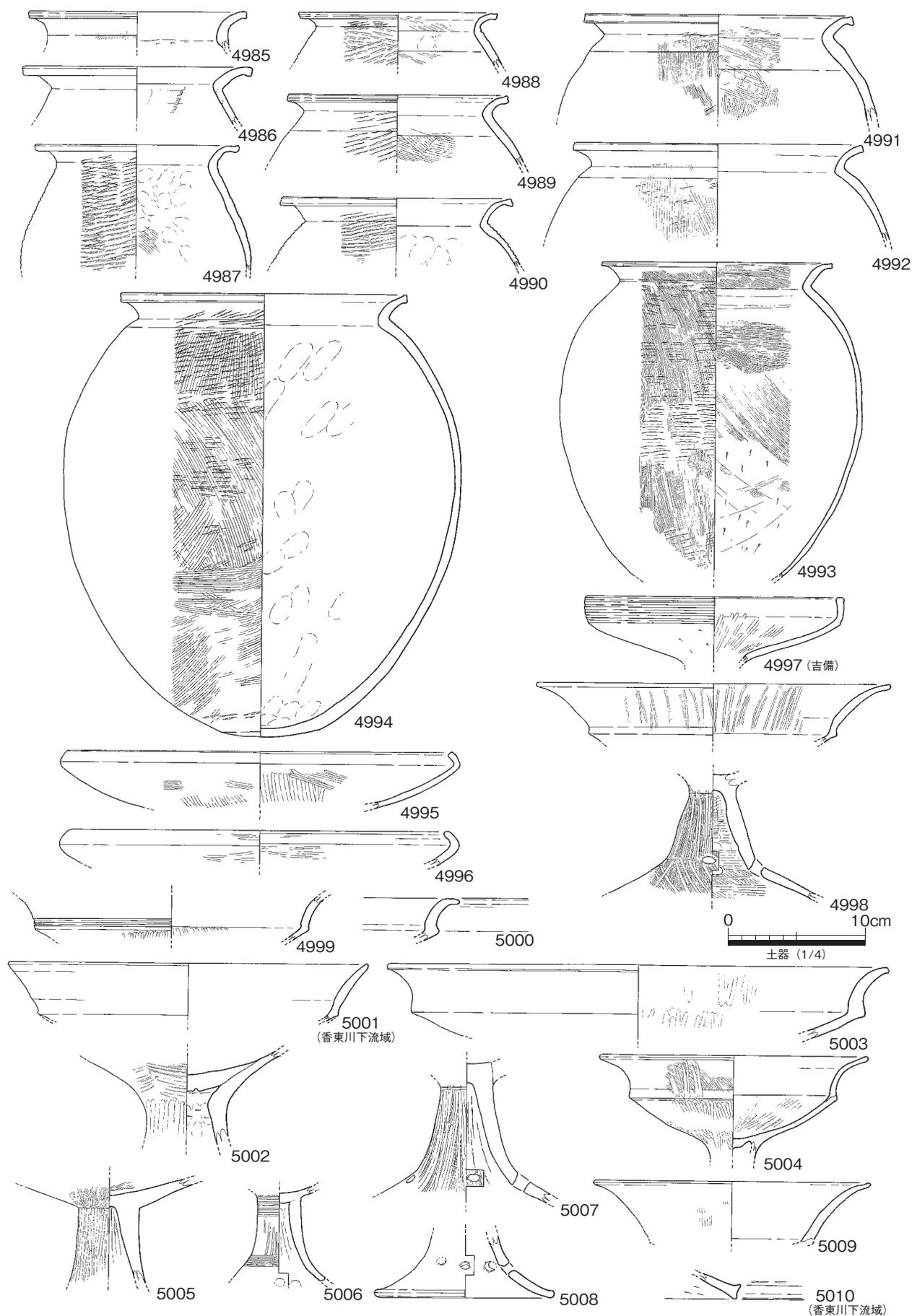


図 460 SR02 上層 L ブロック出土遺物 (4)

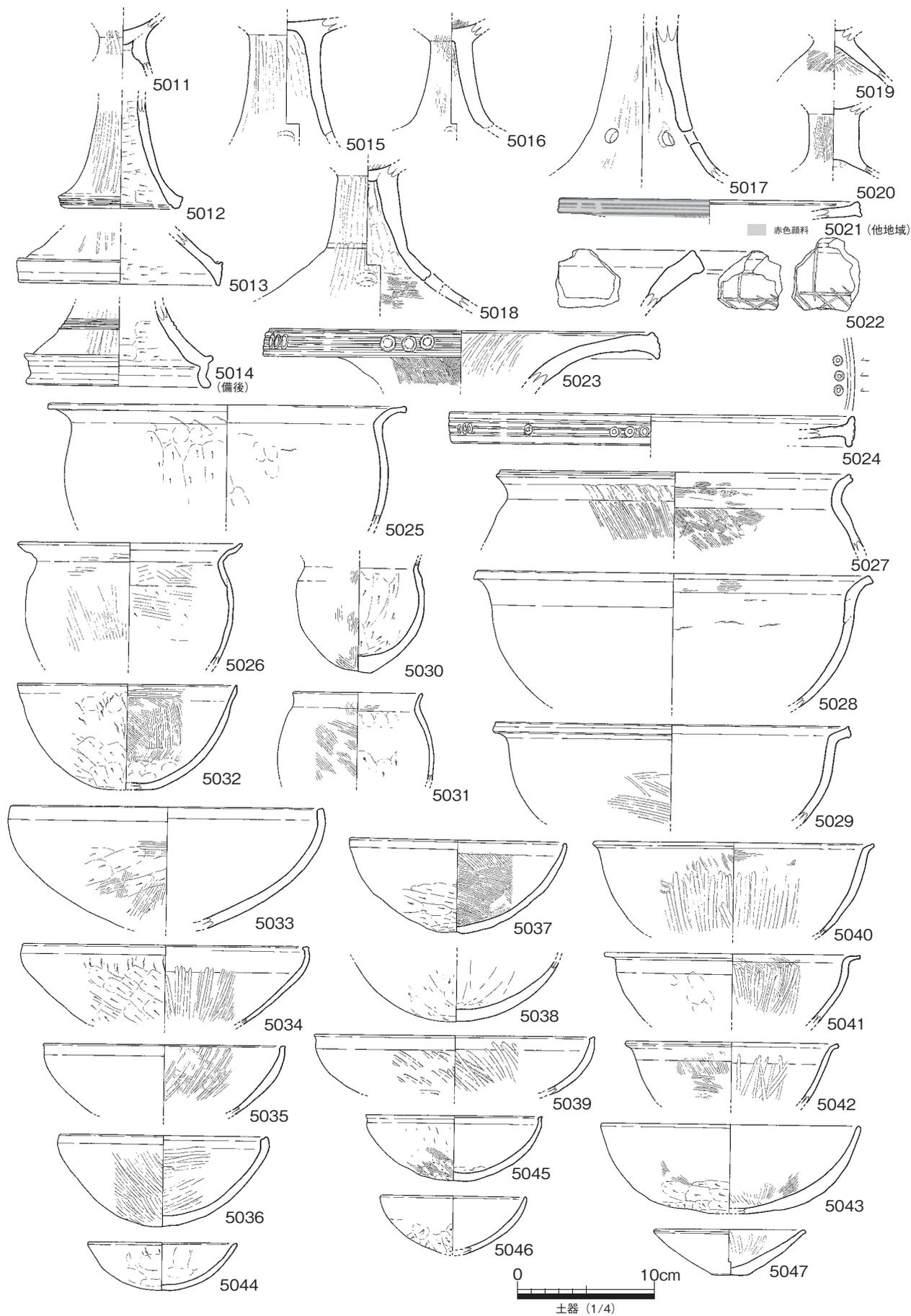


図 461 SR02 上層 L ブロック出土遺物 (5)

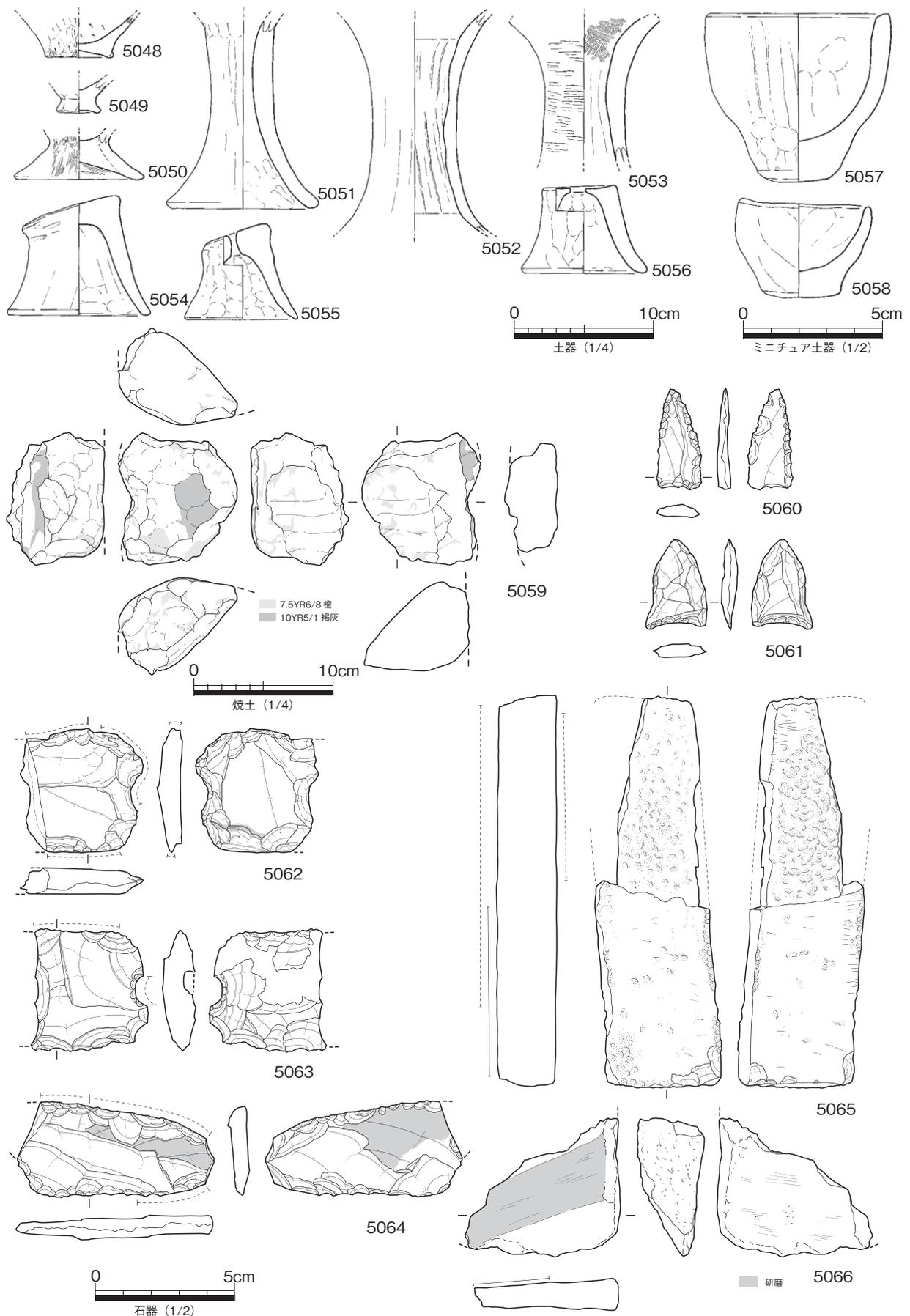


図 462 SR02 上層 L ブロック出土遺物 (6)

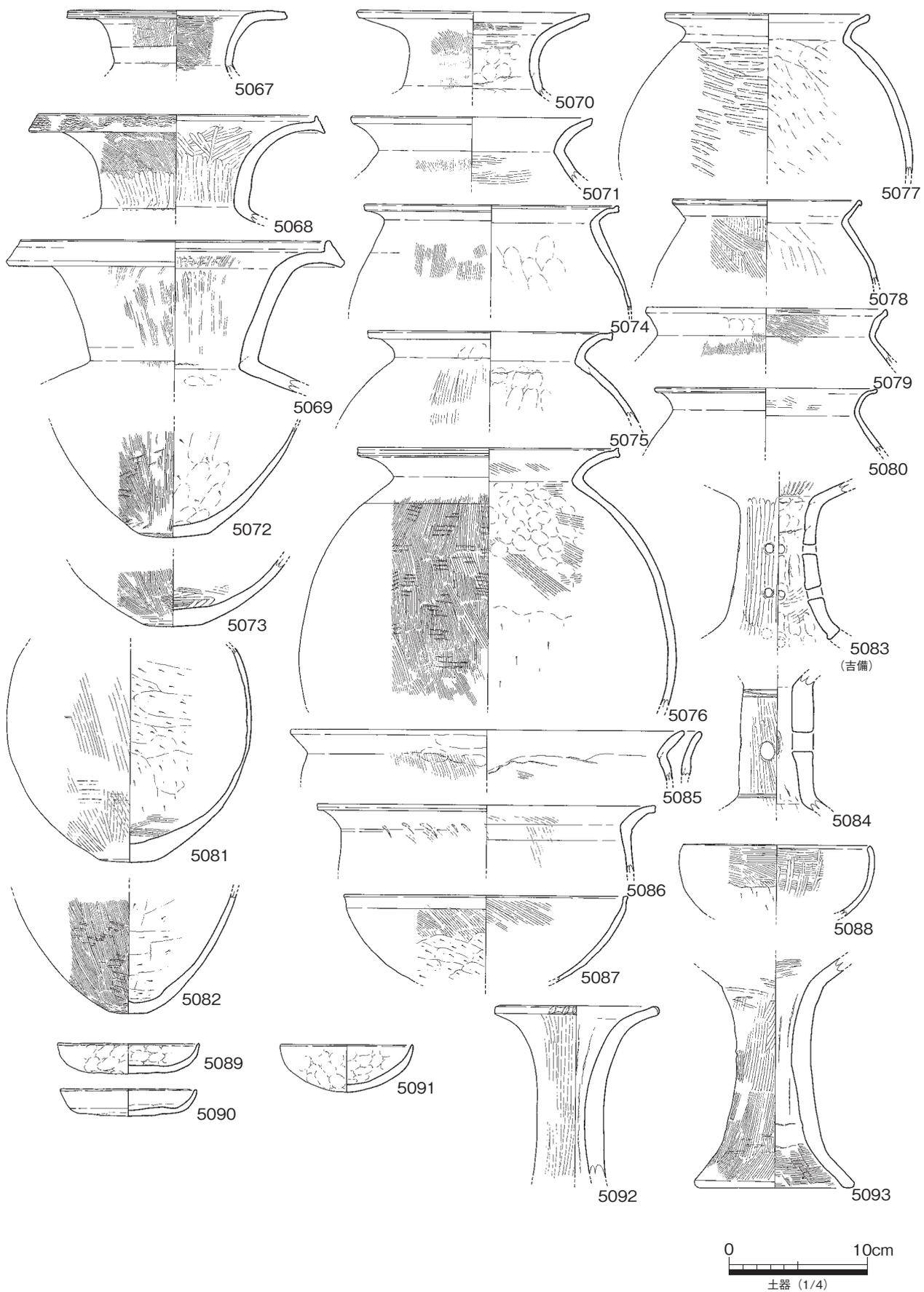


図 463 SR02 上層 L ブロック番号取り上げ出土遺物

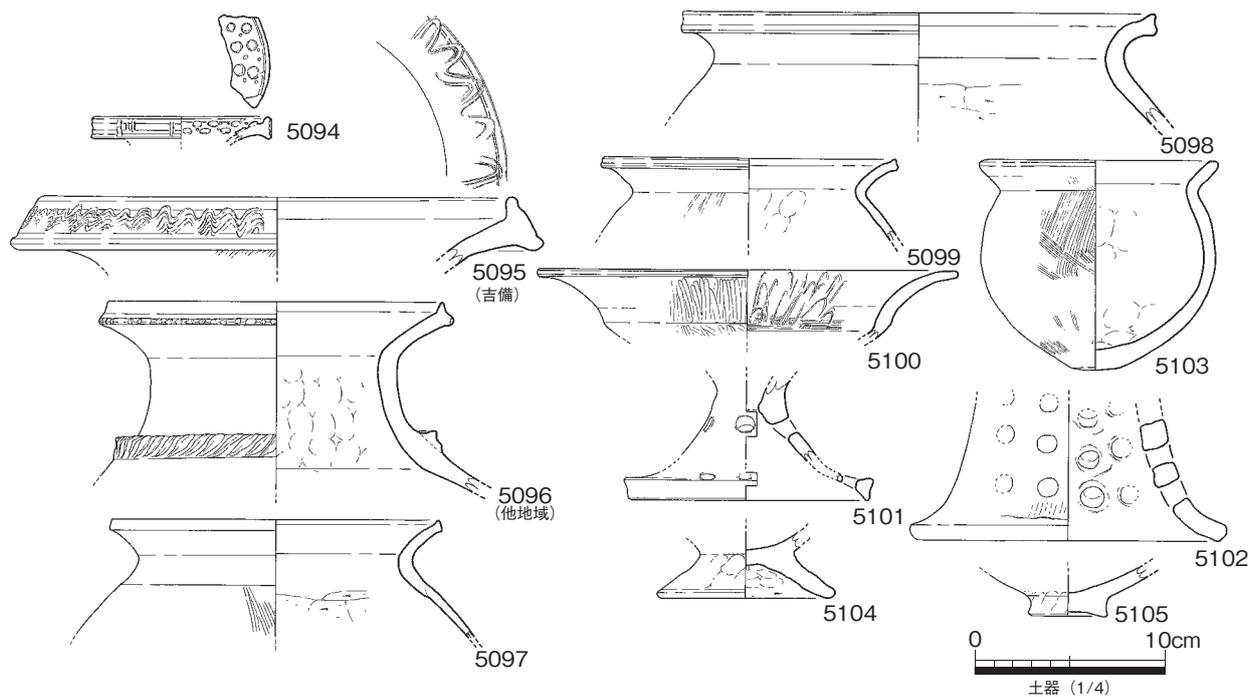


図 464 SR02 上層 M ブロック番号取り上げ出土遺物

SR02 上層出土遺物 (図 465 ~ 468)

土器 出土土器・土製品には、壺 (5106 ~ 5123)、甕 (5124 ~ 5136)、高杯 (5137 ~ 5146)、器台 (5147 ~ 5155)、鉢 (5156 ~ 5168)、支脚 (5169 ~ 5173) がある。出土土器は、後期前半古段階から終末期新段階までの時間幅が看取されるが、全体的には後期前半期のものが多い。

5106 の広口壺内面には、竹管紋を縦位に施文し記号紋の表現とする。5111 の広口壺は頸胴部境の 2 条沈線間に半裁竹管による列点紋を充填するもので、他地域の属性をもつ。5114 は壺頸部片と見られ、外面に記号紋が見られる。5116、5117 は壺の胴部片であり、外面に横位の突帯を付与するもので、他地域からの搬入品の可能性が高い。5116 は断面方形と三角形の突帯が組み合うもので、旧練兵場遺跡 26 次調査で出土している豊前地域の広口壺に類似する。5119 は長頸壺の頸部片と見られるが、施文の属性は他地域からの搬入品を示唆するものである。5120 の短頸広口壺は、備後地域からの搬入品と見られる。同地域の V -1 ~ V -2 様式に比定されよう。5121 は吉備系の細頸壺の胴部片である。5122 は扁平な胴部をもつ壺であり、備後地域の V -1 様式頃の短頸広口壺の搬入品となる可能性が高い。5133 は壺底部と見られ、外面にベンガラによる彩色が見られる。

5128 は高松平野の香東川下流域産の甕であり、下川津Ⅱ式・②段階に比定される。5139 は中期後半から継続する口縁部が内傾する高杯の最終形態であり、後期前半古段階に位置付けられる。5141 は高松平野の香東川下流域産の高杯であり、5156 は全体形状が不明なものの、色調や角閃石を含む胎土の特徴から、備中地域からの搬入品と見られ、鬼川市Ⅱ式に比定される。

5174、5175 は、複数の熱変部が見られる焼土塊である。5176 は長方形を呈する鉄片である。現状で機能部位の確認はできない。(信里)

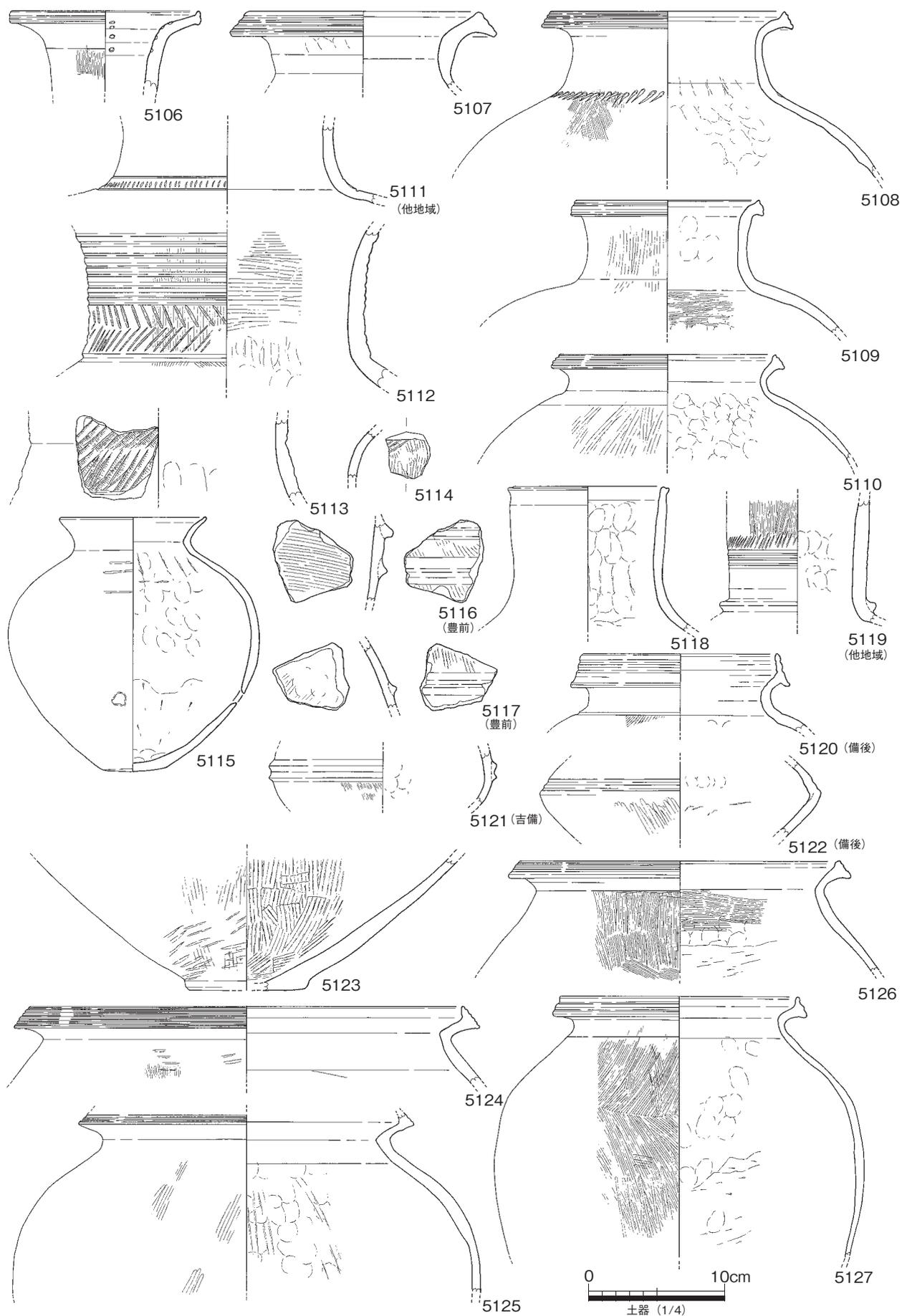


図 465 SR02 上層 N ブロック出土遺物 (1)

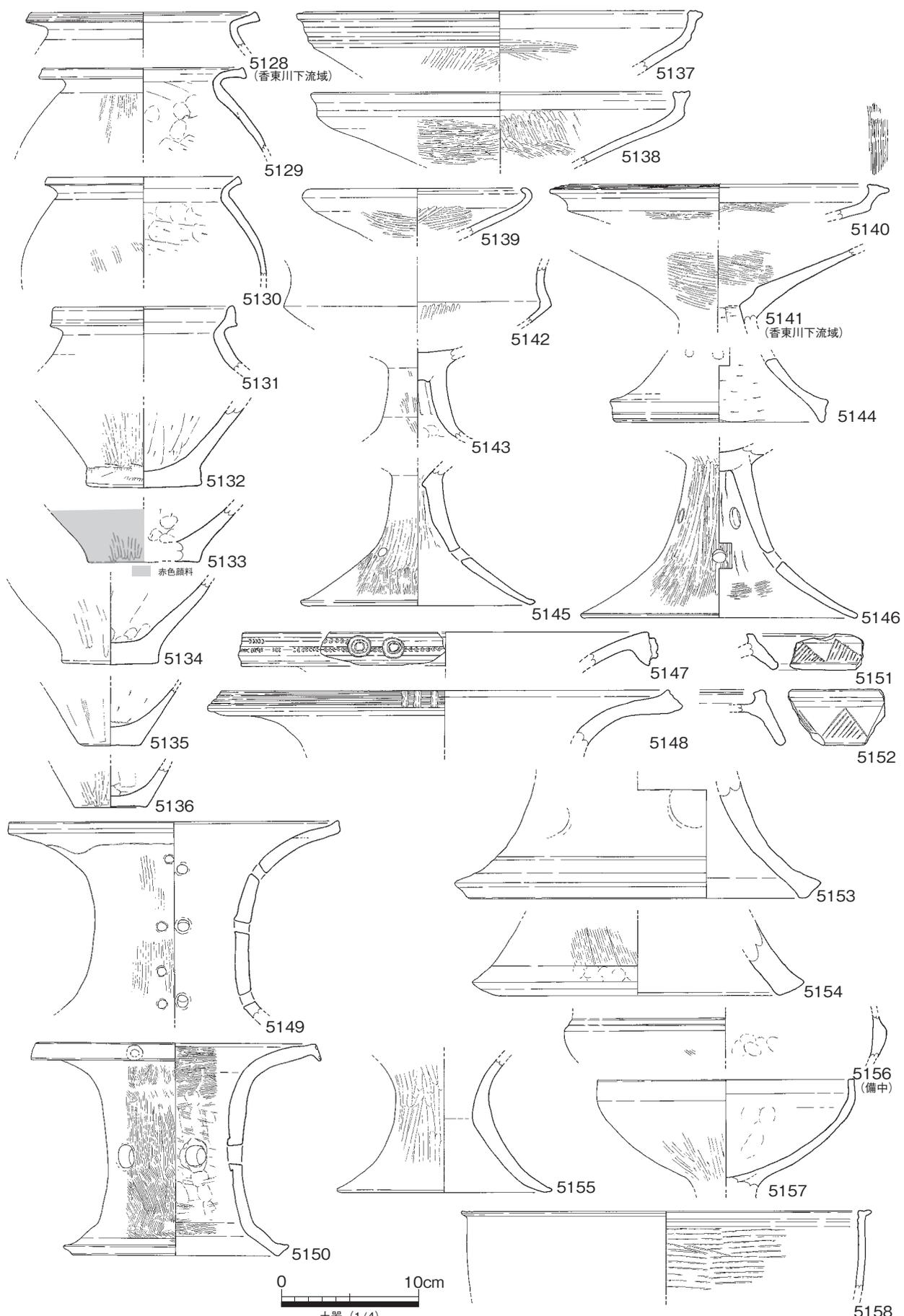


図 466 SR02 上層 N ブロック出土遺物 (2)

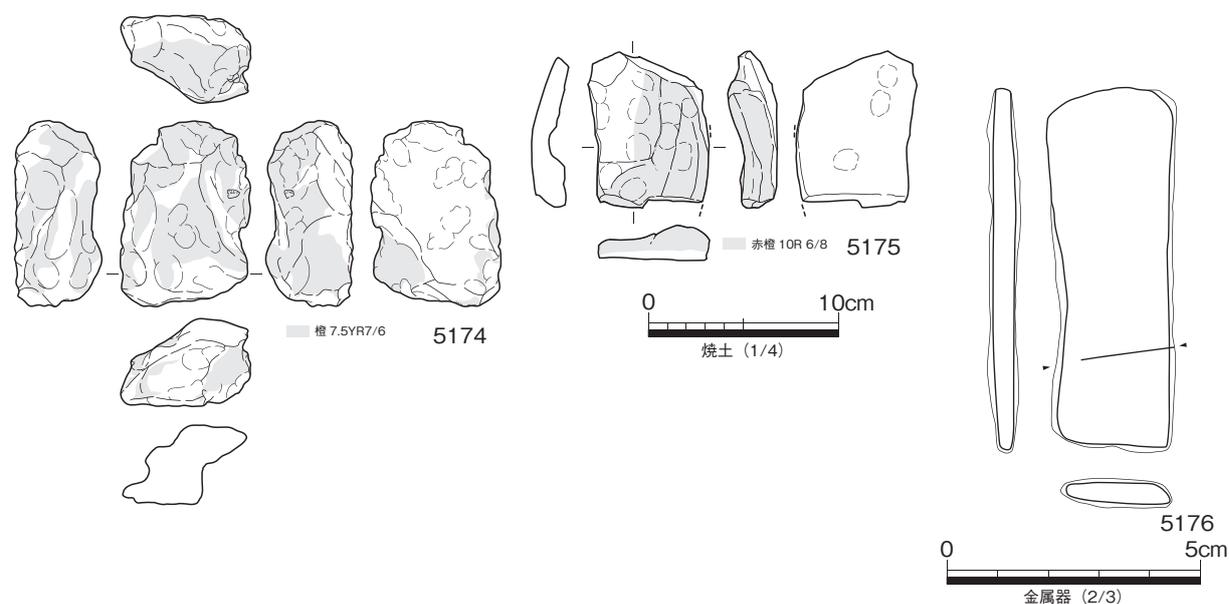
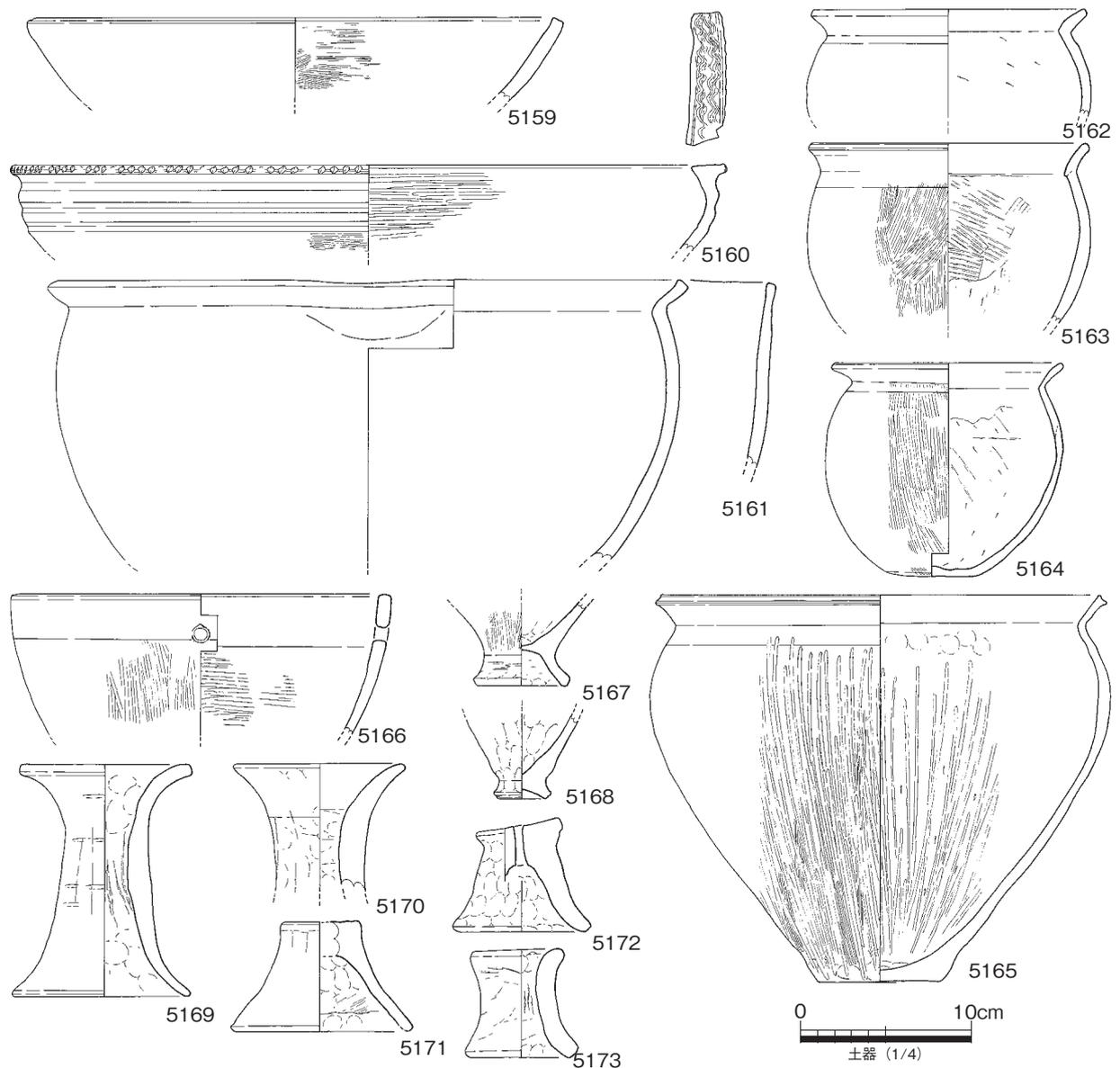


図 467 SR02 上層 N ブロック出土遺物 (3)

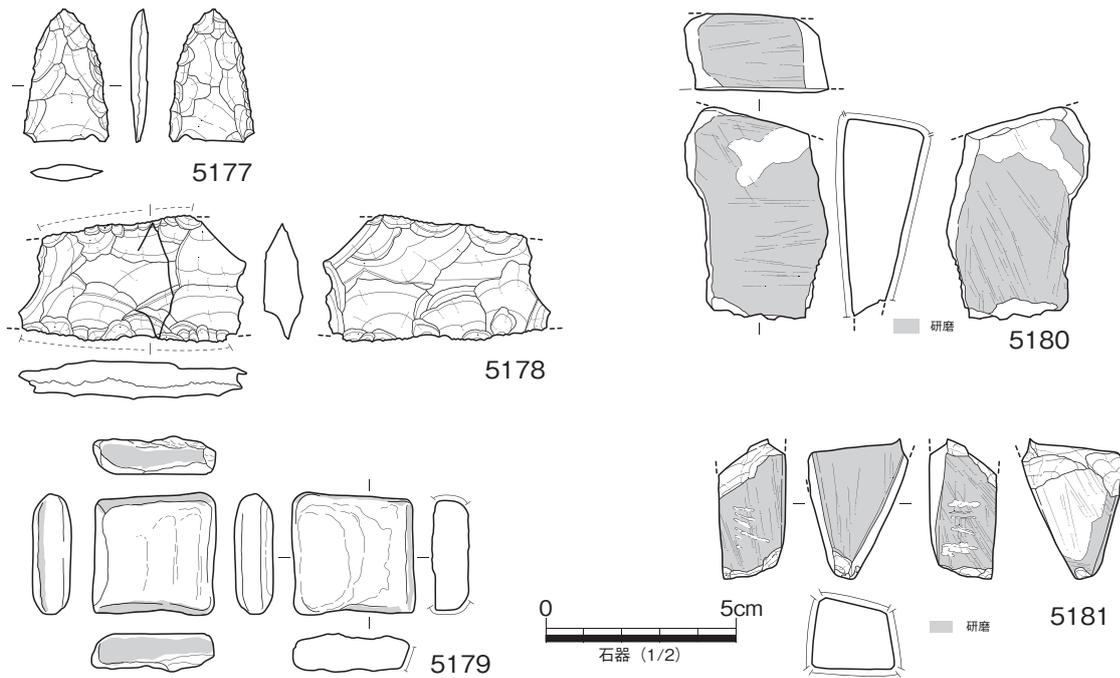


図 468 SR02 上層 N ブロック出土遺物 (4)

石器 5177 はサヌカイト製打製石鏃である。基部及び先端部の調整加工が不十分で、未製品と考える。5178 はサヌカイト製の楔状石核である。上下縁に敲打痕が残る。5179 は赤灰色を呈する白縞の多い結晶片岩を石材とする擦切り切断具である。石材はいわゆる紅簾片岩と称され、弥生時代後期以後、サヌカイト製品の衰退に反比例して讃岐平野に多数流入する打製石器石材である。正方形で厚みのある剥片で、表裏には剥離面の凹凸が残る。四周側縁に顕著な磨滅痕もしくは研磨痕が残る。石材特性上、微細な擦痕は残らないが、器体に平行する方向で使用した可能性が高い。結晶片岩を素材とする切断具が当遺跡で出土しており、使用によって側縁が消耗し、最終形態がこのような形態の残滓となるものと推定する。片岩系石材は石の切断によく使用される石材で、玉製品の製作過程では石鋸と称される。当遺跡では近隣の香色山流紋岩を石材とする砥石を多数生産しており、その擦切り切断等に使用した可能性が高い。

5180 は流紋岩製の砥石である。表裏面及び側縁 1 面に平滑な砥面が残る。縦横両方向の線状痕が観察できる。5181 は黒色頁岩製の砥石である。すでに報告した 4356 と石材・形態・使用痕が類似する。下方が窄まる形態で下端部に敲打痕が残り、側面に顕著な研磨痕が残る。側面の下方に特に強い研磨痕が残る。手持砥石と推定する。(森下)

SR02 上層出土遺物 (図 469 ~ 472)

土器 壺 (5182 ~ 5197)、甕 (5202 ~ 5221)、高杯 (5222 ~ 5235)、器台 (5236 ~ 5240)、台付鉢・鉢 (5241 ~ 5252.5254)、蓋 (5253)、支脚 (5255 ~ 5257) が見られる。全体的に弥生中期後半から後期前半期のものが多く、中層以下の下位の堆積層を誤って掘削している可能性がある。

5188、5189 は胴部に貼り付け突帯をもつ壺であり、5188 は沈線紋と列点紋、5189 は下位の突帯上面に刻目紋を施す。ともに他地域からの搬入・模倣土器と考えられる。5188 は若干の歪みが観察される。5189 の刻目紋と無刻目紋の突帯の組み合わせは、26 次調査で出土した豊前地域からの搬入品に類似しているが、胎土は異なっている。5200 は高松平野の香東川下流域産であり、細頸壺の胴部片と見られる。扁平な胴部形態をもつことから、下川津 I 式かそれ以前の後期前半期の所産と見られる。5201 は吉備系の細頸壺の胴部片であり、縦位の棒状浮紋を施す。5213 は頸部に貼り付け突帯を施す甕であり、他地域の影響が見られる。弥生後期から終末期にかけて頸部に三角形突帯を施す甕は、豊後地域の後期前葉から中葉にかけて見られるが、口縁部形態が異なっており、西部瀬戸内地域からの搬入品と推定しておく。

5216 は破片の断面を介して内外面に黒斑が広がるもので、土器焼成時に生じる破片と見られる。5234 の高杯脚部は、形態から備後地域からの搬入品の可能性が高い。5247 の鉢の外面には焼成破裂痕が見られる。

5254 は高杯と同様の脚台もつ鉢と見られ、備中地域の鬼川市 I 式に比定される搬入品である。(信里)

石器 5258 ~ 5260 はサヌカイト製打製石鏃である。形態から見て、いずれも最終調整加工に至っていない未製品と考える。いずれも風化は進行していない。

5261 ~ 5264 はサヌカイト製打製石庖丁である。このうち 5261 は不定形で厚みのある剥片に抉りを施したもので、器面に磨滅が残ることから、小形品ながらも使用に供した製品と見られる。その他の 3 点は長さがいずれも 10cm を越える通常サイズの製品で、表裏面に顕著な磨滅痕が残る。5262 はサヌカイトの板状素材から石核幅一杯の剥片を連続的に剥取する金山型剥片剥離技術による横長剥片を素材とする。抉りは明瞭ではないが、瀬戸内沿岸に多い、金山産打製石庖丁の規格品の条件を備える。5263、5264 はサイズや使用痕は 5262 と共通するが、素材剥片は典型的な金山型剥片剥離技術によるものではない。むしろ剥片剥離時の事故品を使用している可能性が高い。(森下)

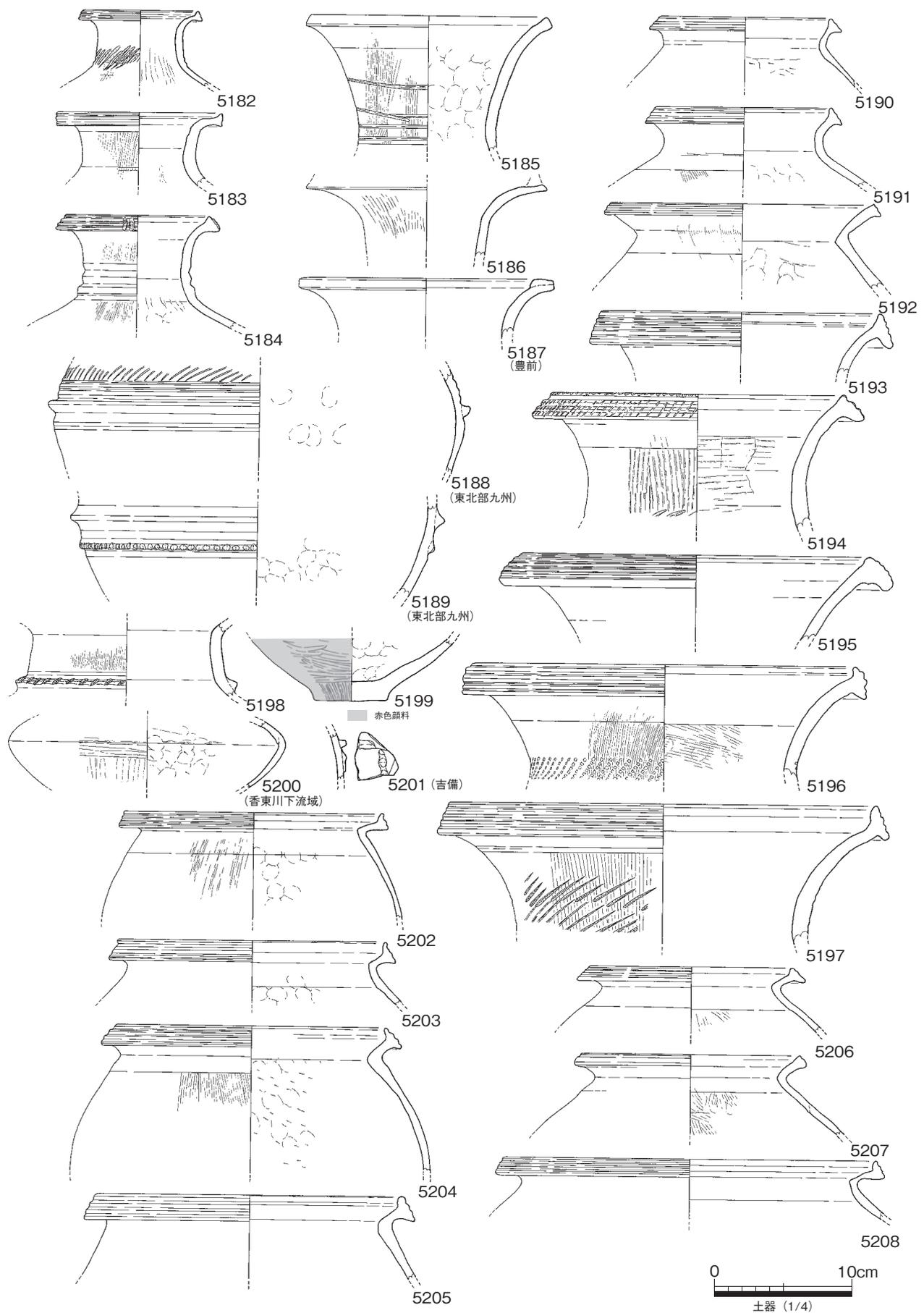


図 469 SR02 上層 O ブロック 出土遺物 (1)

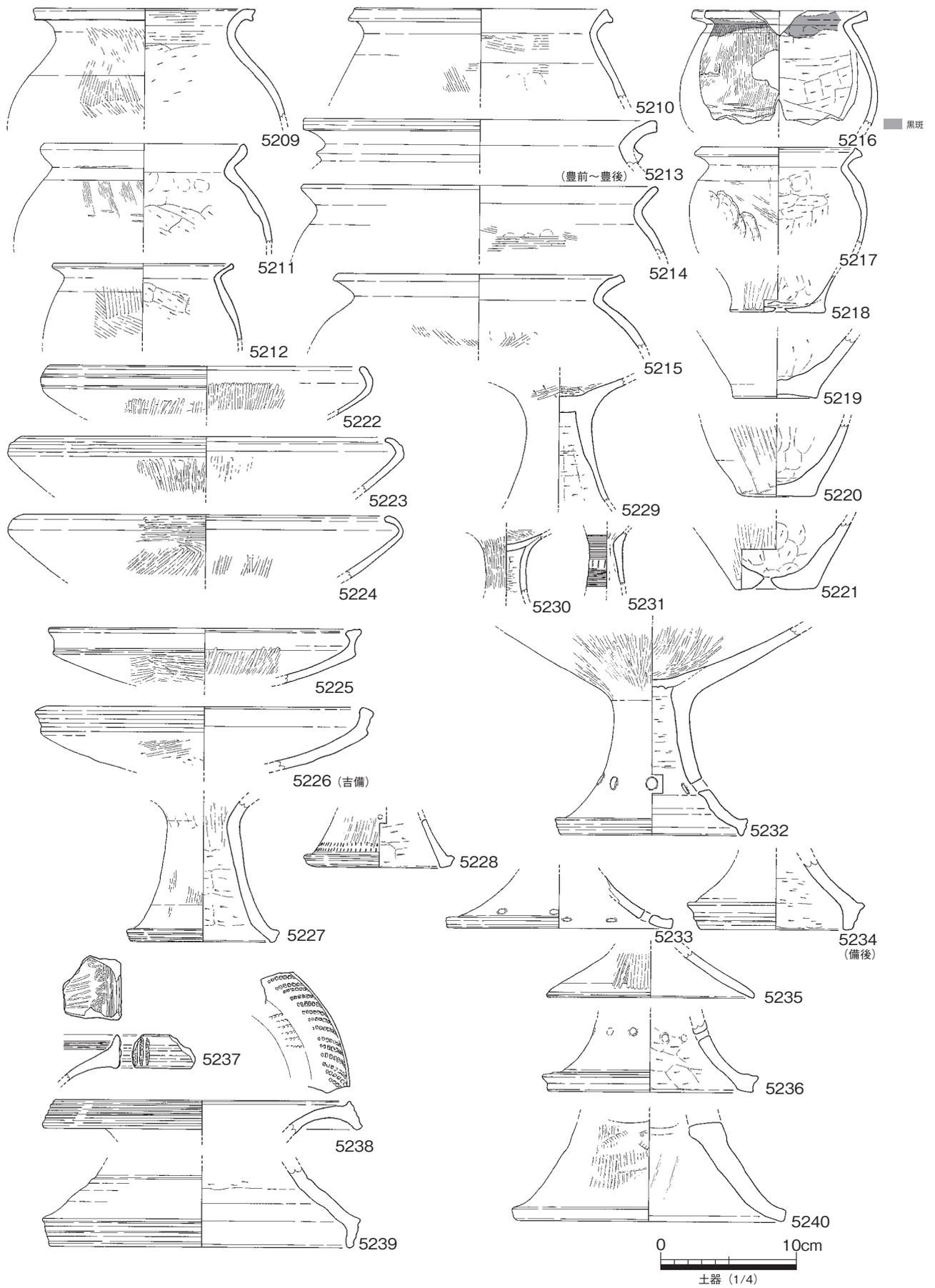


図 470 SR02 上層 O ブロック出土遺物 (2)

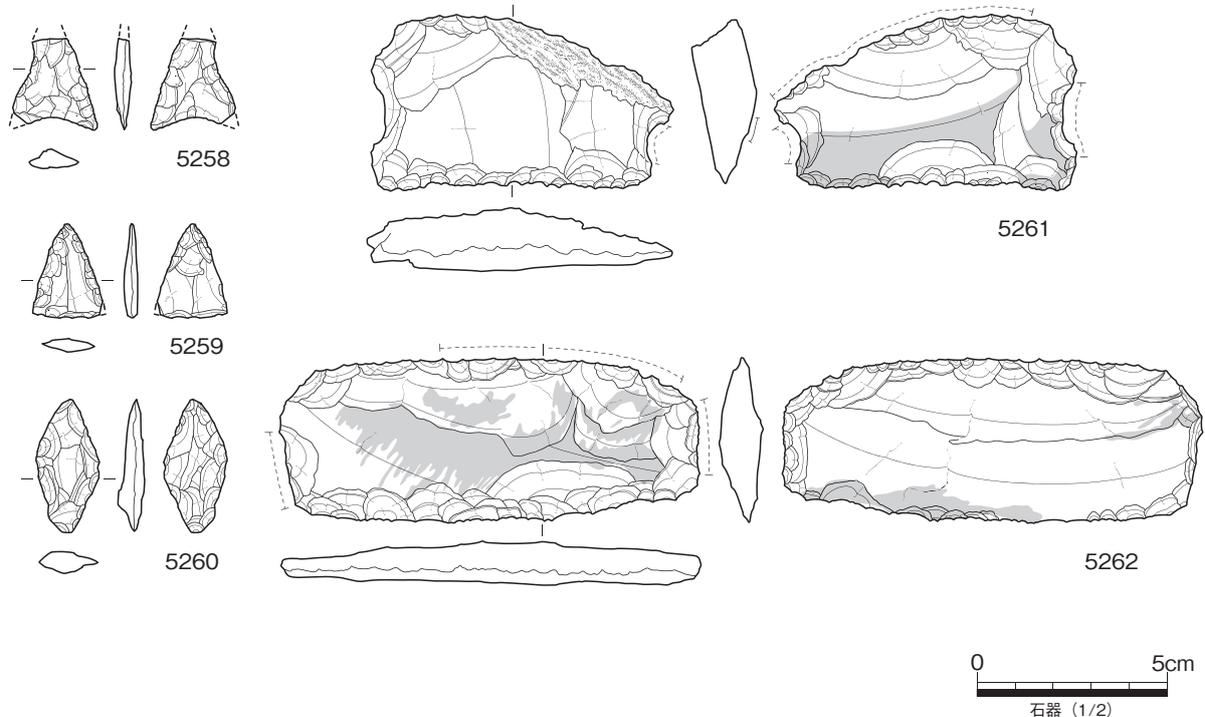
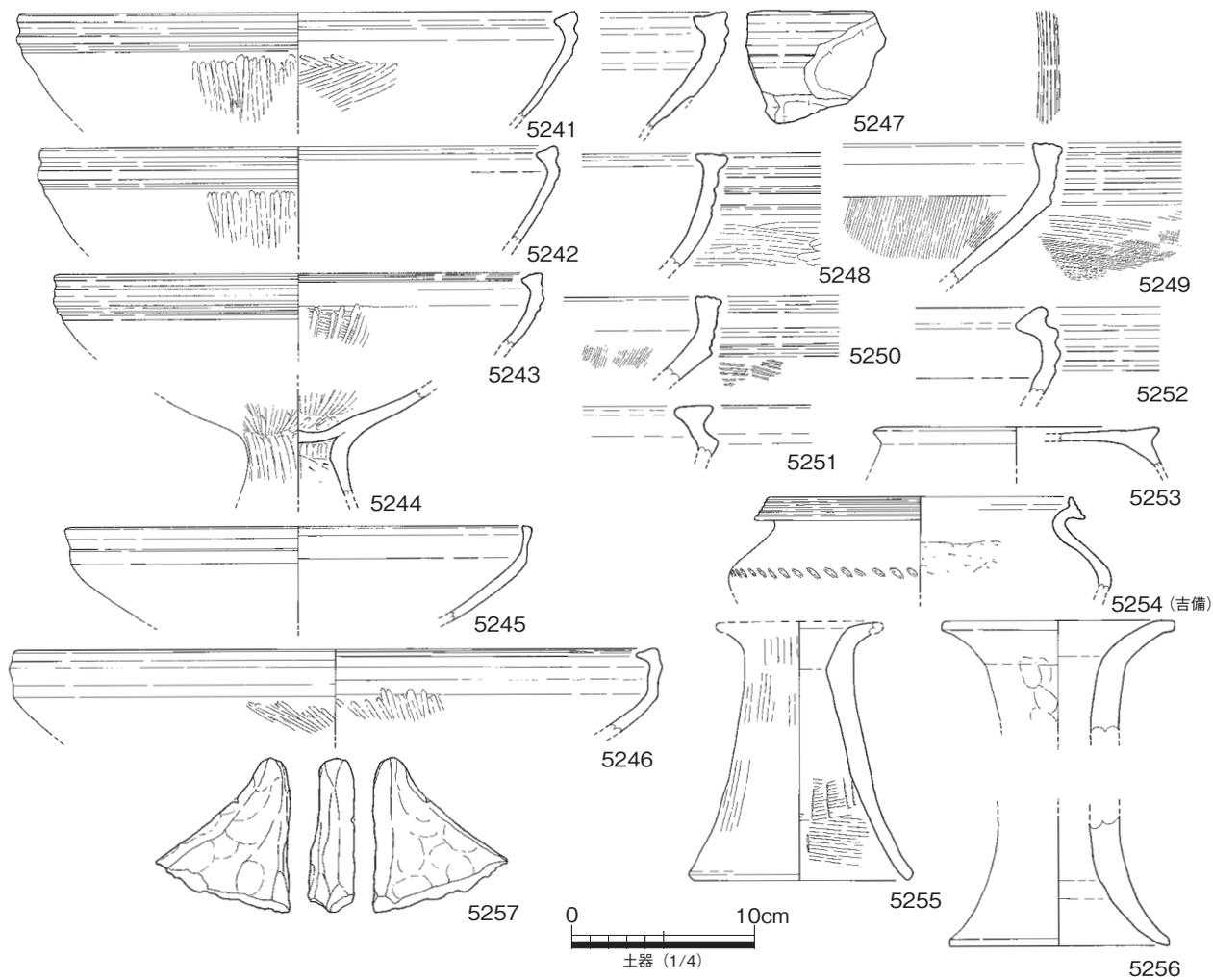


図 471 SR02 上層 O ブロック出土遺物 (3)

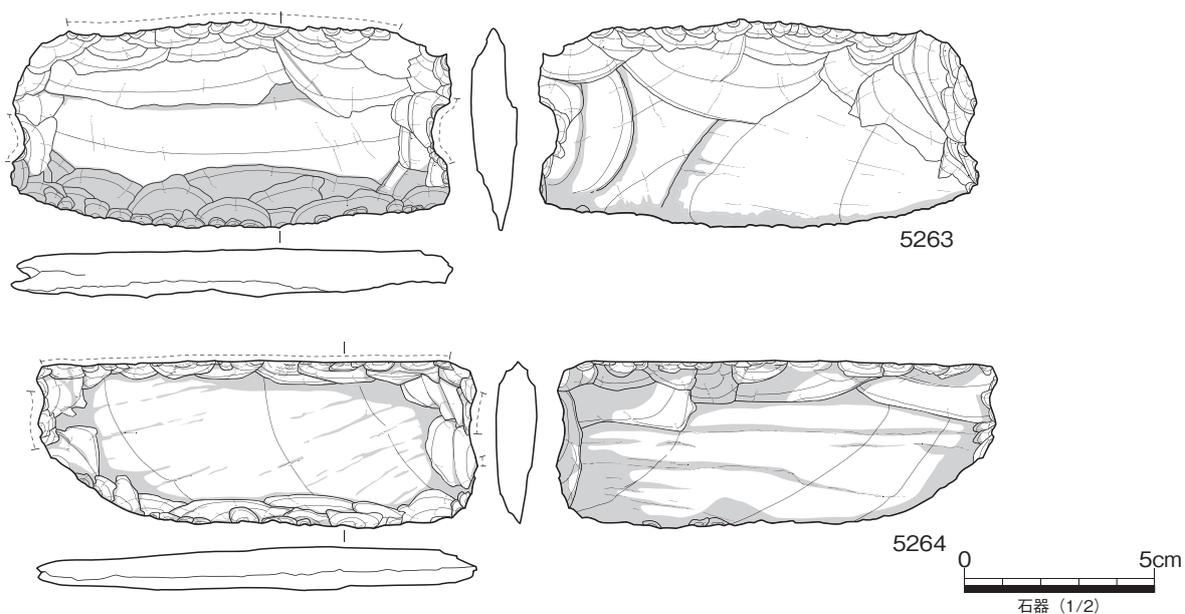


図 472 SR02 上層 O ブロック出土遺物 (4)

SR02 上層出土遺物 (図 473 ~ 475)

土器 出土土器・土製品は、壺(5265～5278)、甕(5279～5306)、高杯(5307～5312)、器台(5314.5315)、鉢(5316～5326)、支脚(5328.5329)、分銅形土製品(5330)がある。出土土器は弥生後期前半期から古墳前期に及ぶ時間幅をもち、少数の他地域からの搬入品を含む。

5271 の広口壺の頸部外面には、ヘラ描きによる山形状の記号紋が見られる。5275 は複合口縁壺の頸部片と見られ、突帯上面を入念に斜格子紋を刻む属性から、伊予中部地域からの搬入品と考える。5291 の甕は、古墳初頭まで下るものと見られる。5300、5301 は口縁端部内面を肥厚する布留系甕である。5302、5303 は、香東川下流域産の甕の系統と見られる土師器甕であるが、それと異なる胎土をもつ。5307 は香東川下流域産の高杯であり、下川津Ⅳ式・④段階に比定される。5311、5312 は装飾高杯の脚部片である。5330 は分銅形土製品である。共伴する土器群を絞り込めないが、後期前半期以前のものに伴う可能性が高い。(信里)

石器 5331 はサヌカイト製打製石剣基部片である。左右に敲打痕が残り、刃潰しを行うが、表裏面に階段状剥離を伴う凹凸部が除去されずに残る。また、基部には敲打の際に生じた碎片剥離痕があり、上部の折損面も敲打調整による折損の痕跡が残ることから、製作途上品の可能性が高い。5332 は淡緑色で白縞が顕著な結晶片岩を石材とする柱状片刃石斧である。基部のみが残り、下半部は折損する。また、器面の一部は表面の剥がれが生じ、4890 のような器面剥落片が生成される。敲打痕が各所に残り、叩石に転用される。5333 は流紋岩製の砥石である。不定形な置き砥石で、正面に強く光沢のある研磨面を残す。斑晶の多い石材で、天霧山産石材である可能性が高い。(森下)

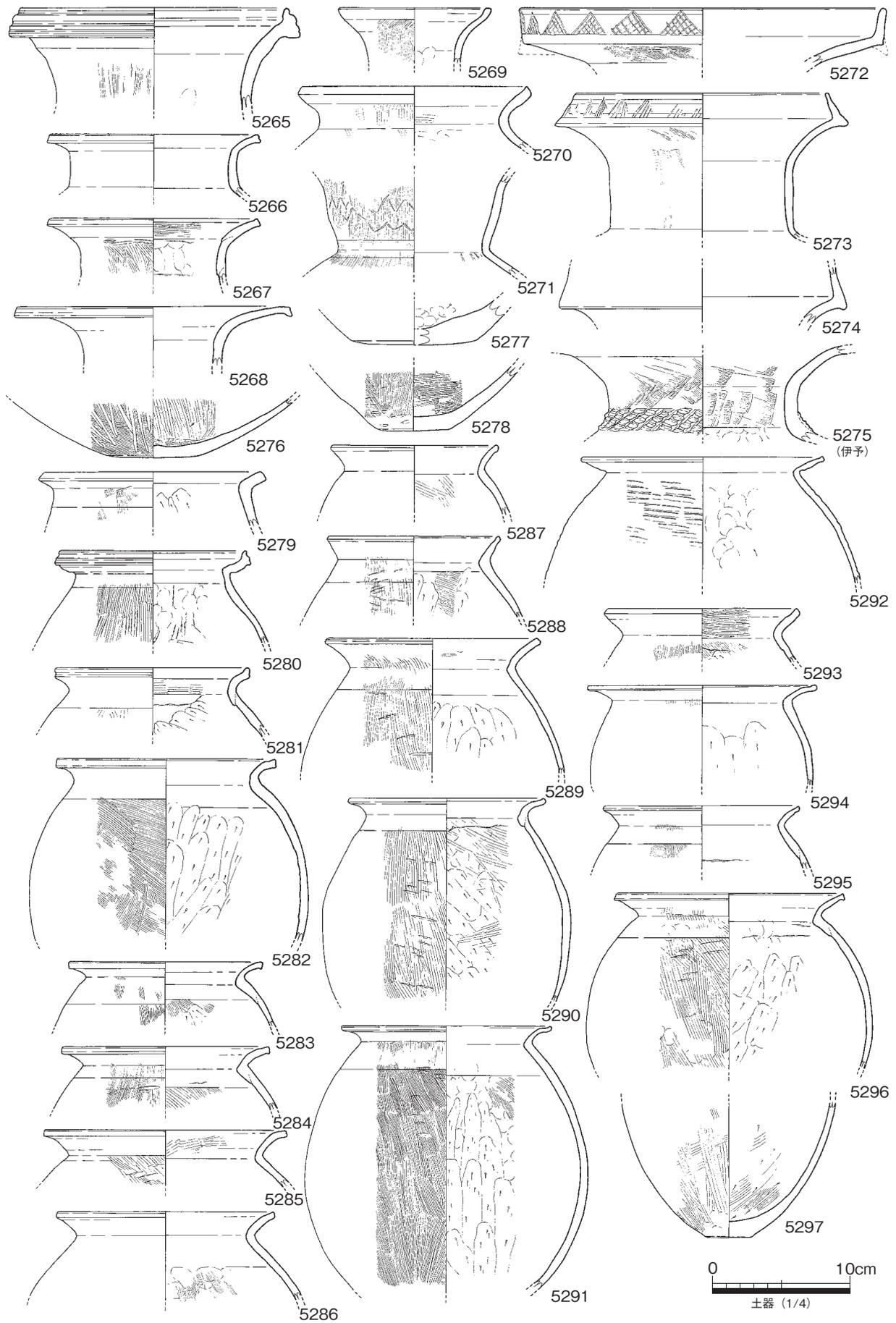


図 473 SR02 上層 P ブロック出土遺物 (1)

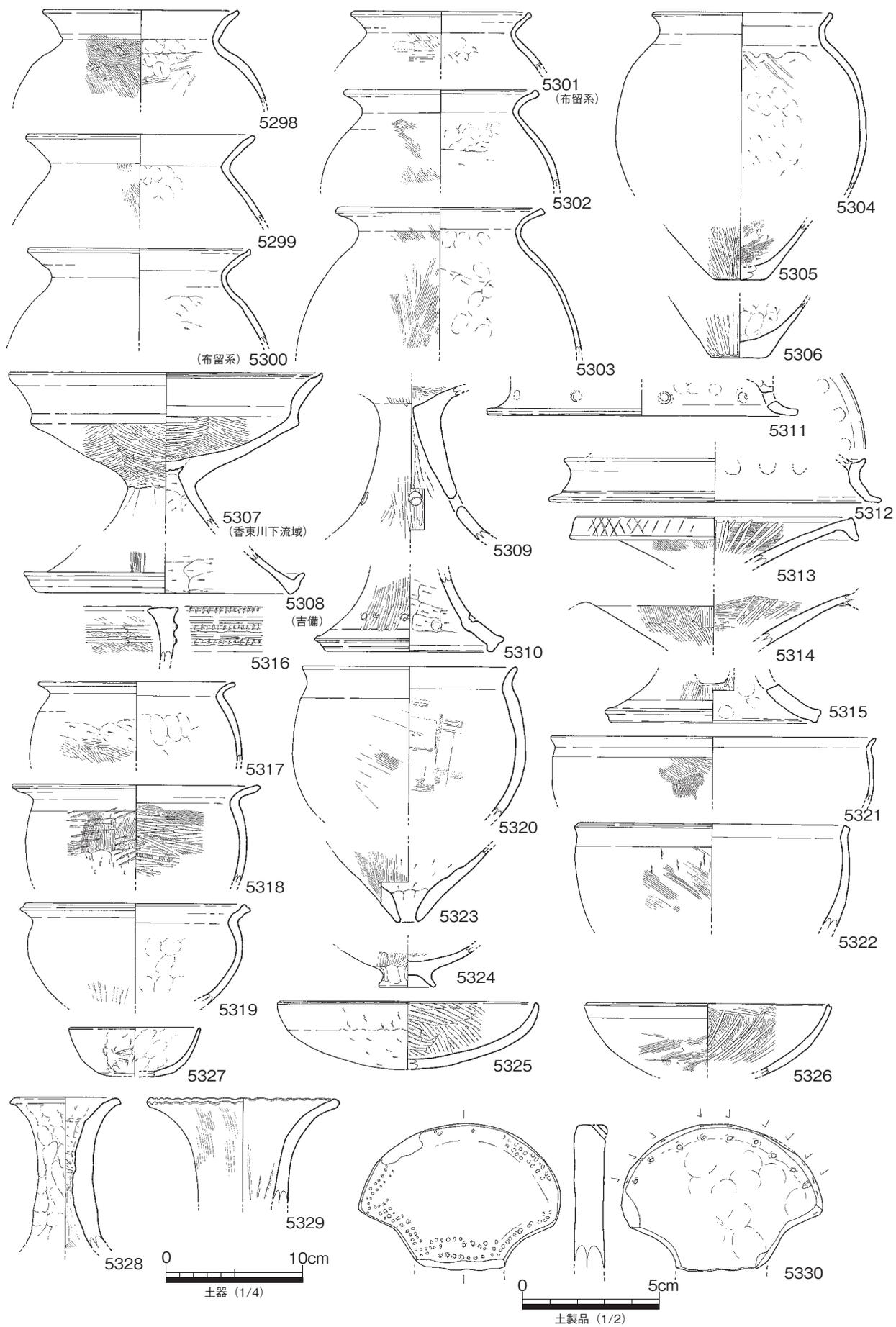


図 474 SR02 上層 P ブロック出土遺物 (2)

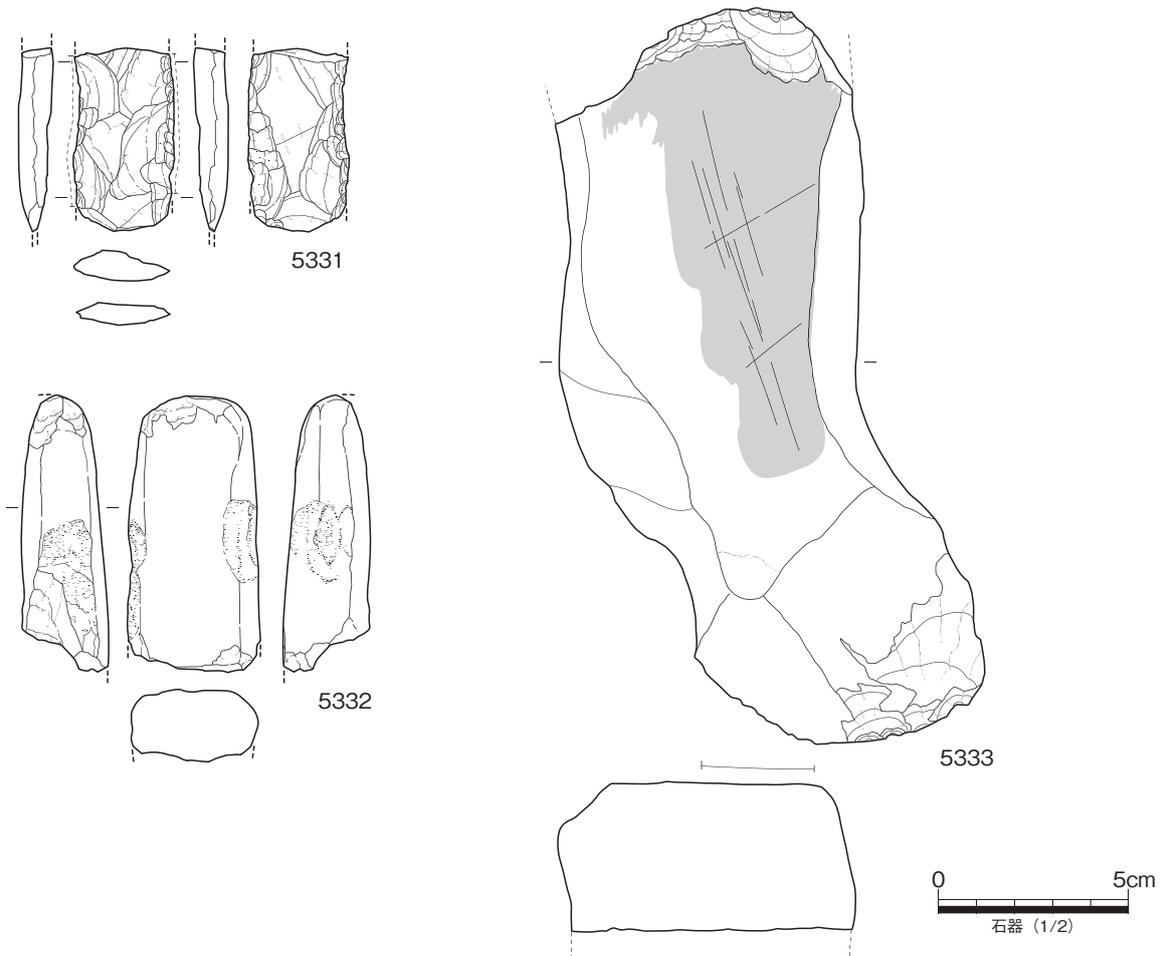


図 475 SR02 上層 P ブロック出土遺物 (3)

SR02 上層・層位不明出土遺物 (図 476 ~ 481)

土器 出土土器・土製品には、壺 (5334 ~ 5389)、甕 (5390 ~ 5412)、高杯 (5413 ~ 5430)、器台 (5431 ~ 5435)、鉢・台付鉢 (5436 ~ 5455.5458)、把手付片口皿 (5456.5457)、支脚 (5460 ~ 5466)、ミニチュア土器 (5467)、紡錘車 (5468)、分銅形土製品 (5469) が見られる。これらの遺物は、位置の特定を行わず取り上げたものやトレンチ等により帰属層位が判明しないものである。したがって、出土土器はかなりの時間幅をもつものとなる。

5355 は肩部外面に逆 U 字形の浮紋を貼り付け記号紋の表現とするもので、胎土中に片岩粒を含む阿波地域からの搬入品と見られる。5356 は内外面をベンガラで彩色を施す壺であり、形態や彩色の特徴から備中地域の長頸壺の口縁部と見られ、搬入品と考える。鬼川市 I 式に比定される。5357 の短頸広口壺は、備後地域のものに類似している。胎土は在地品と差異が見られないため、忠実な模倣品と考える。5357 の複合口縁壺も備後地域の後期前半期に見られるものに類似している。5366、5367 には記号紋が見られ、5366 は絵画表現に近い。

5372 は備後地域の V -3 様式に見られる複合口縁壺と見られ、搬入品と考える。5380 は肩部外面に突帯を施すもので、他地域からの搬入品と考えられる。5381 の大型壺は、刻目紋を施す貼り付け突帯と櫛描波状紋で加飾するもので、複合口縁壺の頸部から肩部片の可能性が高い。複合口縁壺の主要分布圏である西部瀬戸内地域からの搬入品と推定しておく。5382 の内面には、ベンガラと見られる赤色顔料

が付着している。

5420 は高松平野の香東川下流域産の高杯であり、後期初頭に位置付けられる。5421 は内面にベンガラによる彩色が見られる高杯で備中地域からの搬入品である。鬼川市Ⅲ式に比定される。5422 は外面の櫛描直線紋と縦位に配列された透かし孔等の属性から、吉備系の高杯と考えられる。5423 は外面に羽状の列点紋を施すもので、安芸地域からの搬入品の可能性がある。5430 は脚端部に粘土板を貼り付け、内部に自然礫を封入するもので、恰も鈴付高杯のようである。5432 の器台脚部は備中地域からの搬入品と考えられる。

5442 は、完形に復元できる脚台付鉢であり、弥生中期後半新段階に位置付けられる。5445 は山陰系の低脚杯と見られるが、胎土は在地品と差異がないため、模倣品と考える。5456 は把手付片口皿であり、内面に朱の付着が確認できる。5457 は支脚の可能性も残るが、断面及び側面形から、把手付片口皿の把手部と考えた。現状で、赤色顔料の付着は確認できない。

5467 は内面の底部を中心とした範囲に黒色の付着物が僅かに確認できる。5466 は甕の胴部片の転用と考えられる紡錘車である。5470 は不明土製品である。土器と同様の焼成を受けており、複数のネガ面をもっている。(信里)

石器 5471 ～ 5473 はサヌカイト製打製石鏃である。5471 は僅かな周縁加工のみ施した未製品である。5472 は側縁の一方のみに細かな調整加工を施し、対縁は粗い加工のままの未製品である。5473 は他の石器と比べ風化が進行しており、縄文時代の混在品と推定する。

5474 は結晶部が多い灰色を呈す結晶片岩の切断片である。図の上端は敲打により面を整えた形跡が残る。5475 は淡緑色を呈す結晶片岩製の柱状片刃石斧である。刃部側の半折品で縦割れが生じており、元の面は片面しか残らない。5476 は片面加工のスクレイパーである。風化が進行し、縄文時代の混在品と推定する。5477 は加工痕を有する剥片である。側縁に小さな抉りを備えるが、打製石庖丁と見るには小形過ぎる。5478 は刃部に刃縁に平行する方向の線状痕を伴う磨滅痕を残すサヌカイト製の剥片である。擦切り切断具である可能性が高いが、他の石器と比べ風化が進む。

5479 は砂岩製の叩石である。上端、側縁に顕著な敲打痕を残す。5480 は凝灰岩製の砥石である。4面に砥面が残り、石材は県内石材ではない。ただし、器面の一部にモルタル状の付着物が残ることから、近現代の攪乱部のものが混在した可能性も否定できない。(森下)

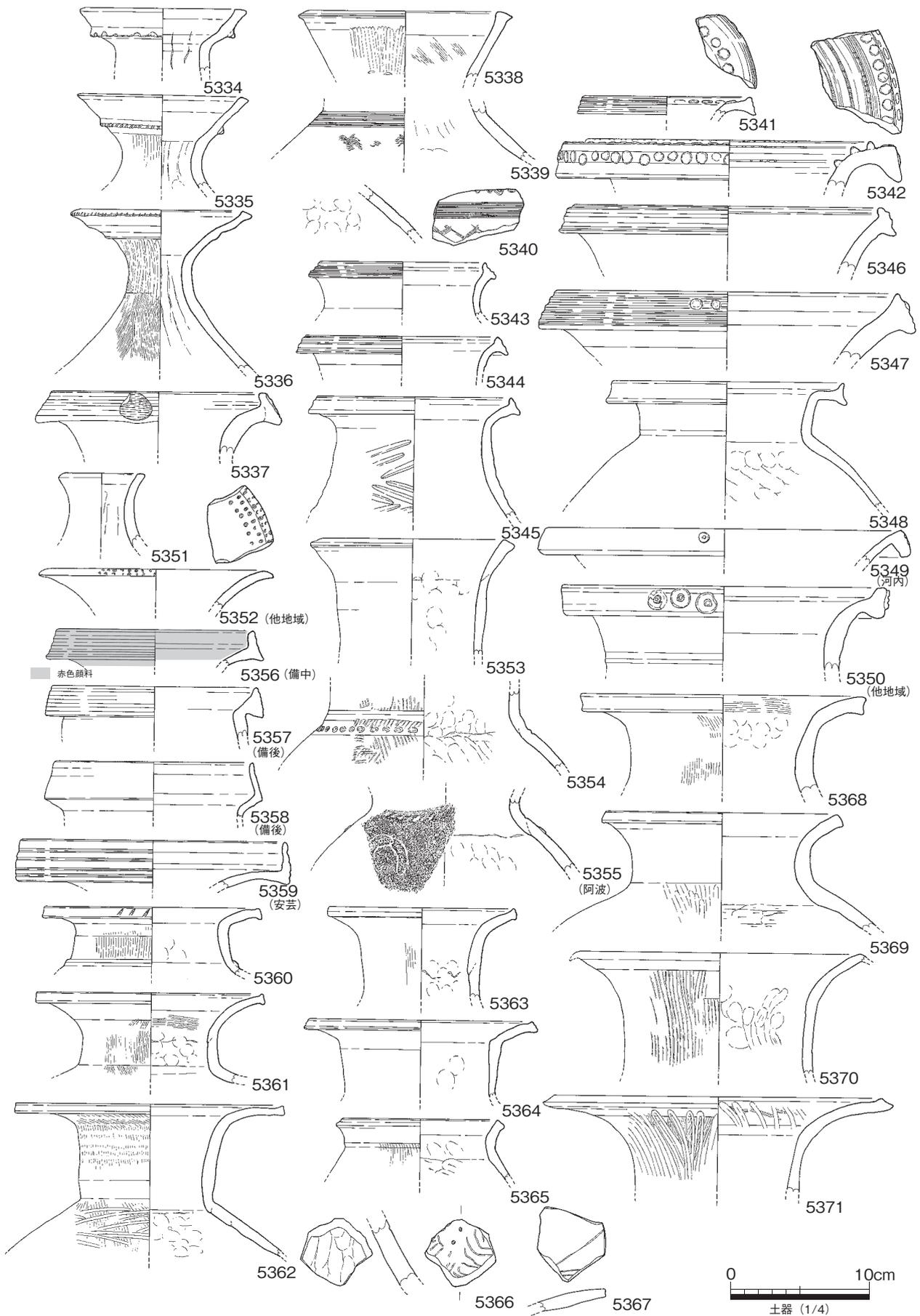


图 476 SR02 上層層位不明出土遺物 (1)

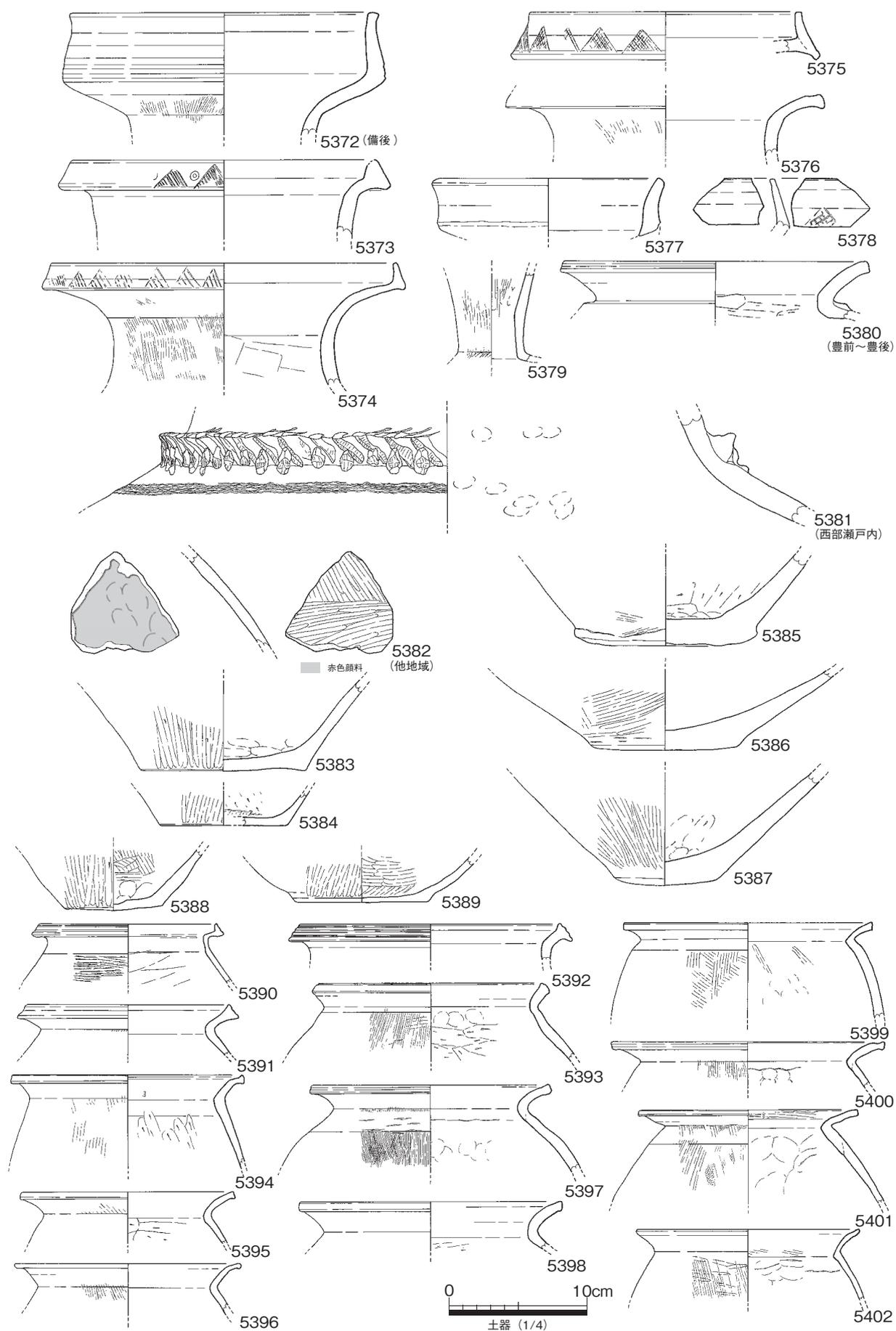


図 477 SR02 上層層位不明出土遺物 (2)

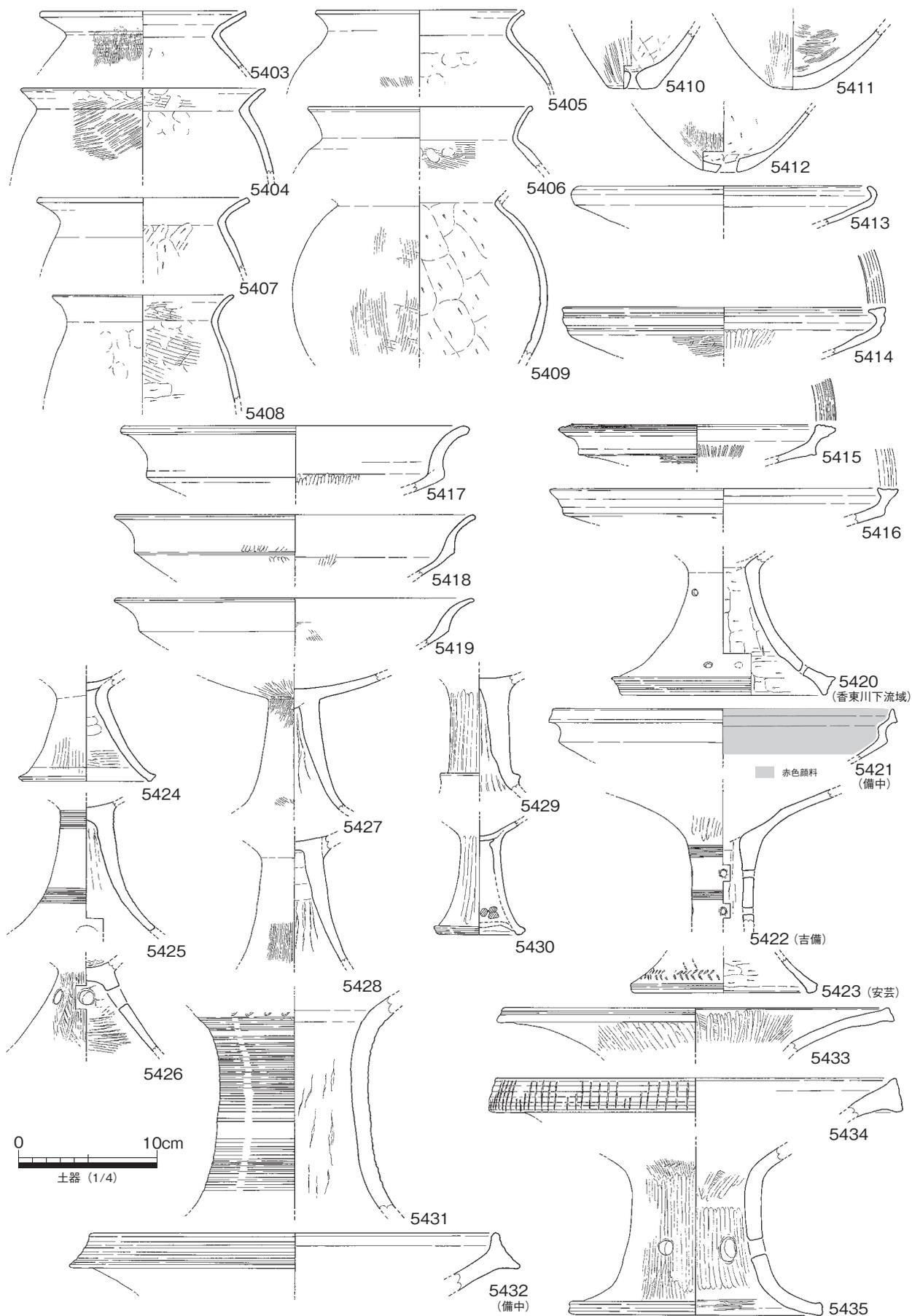


図 478 SR02 上層層位不明出土遺物 (3)

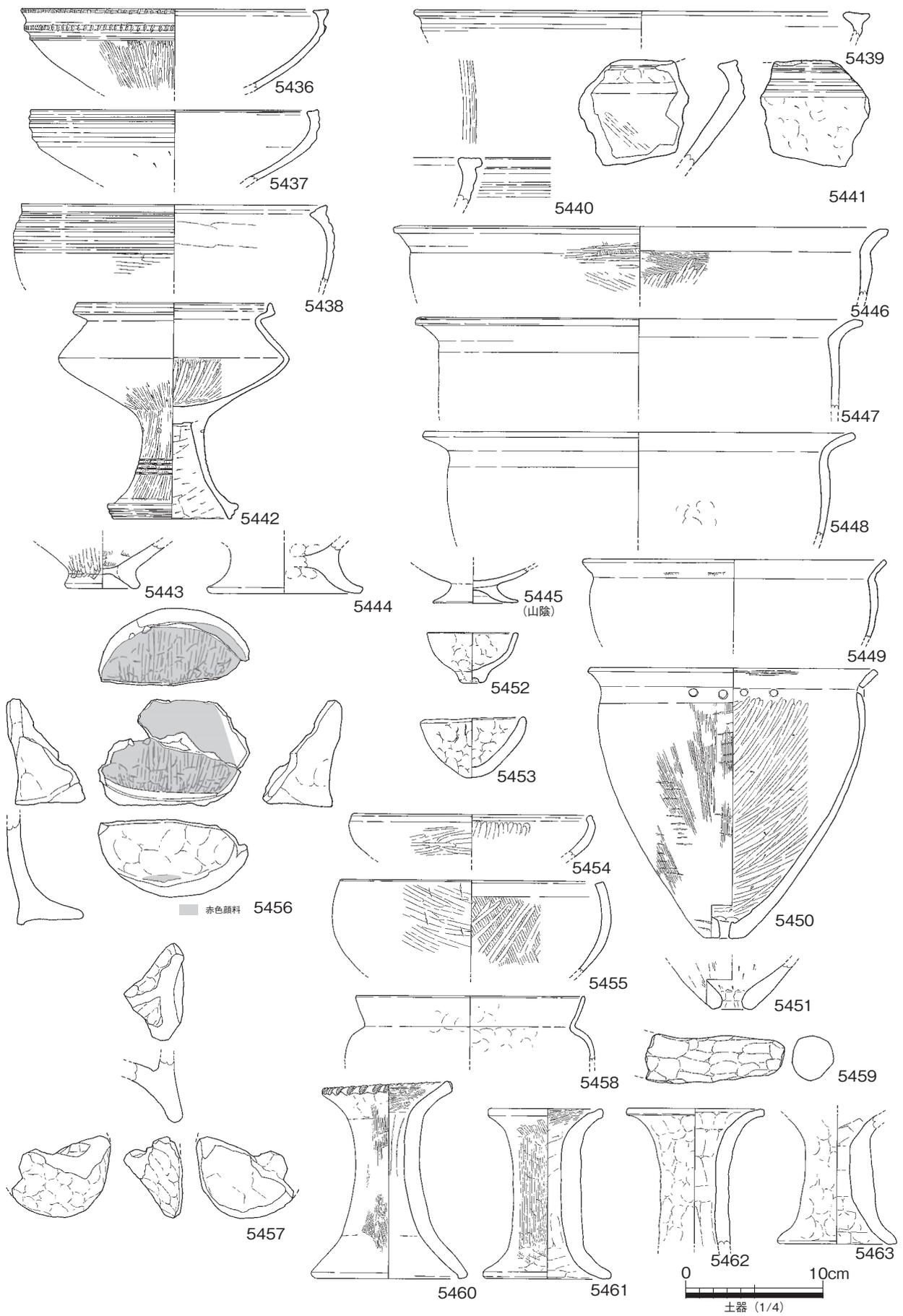


图 479 SR02 上層層位不明出土遺物 (4)

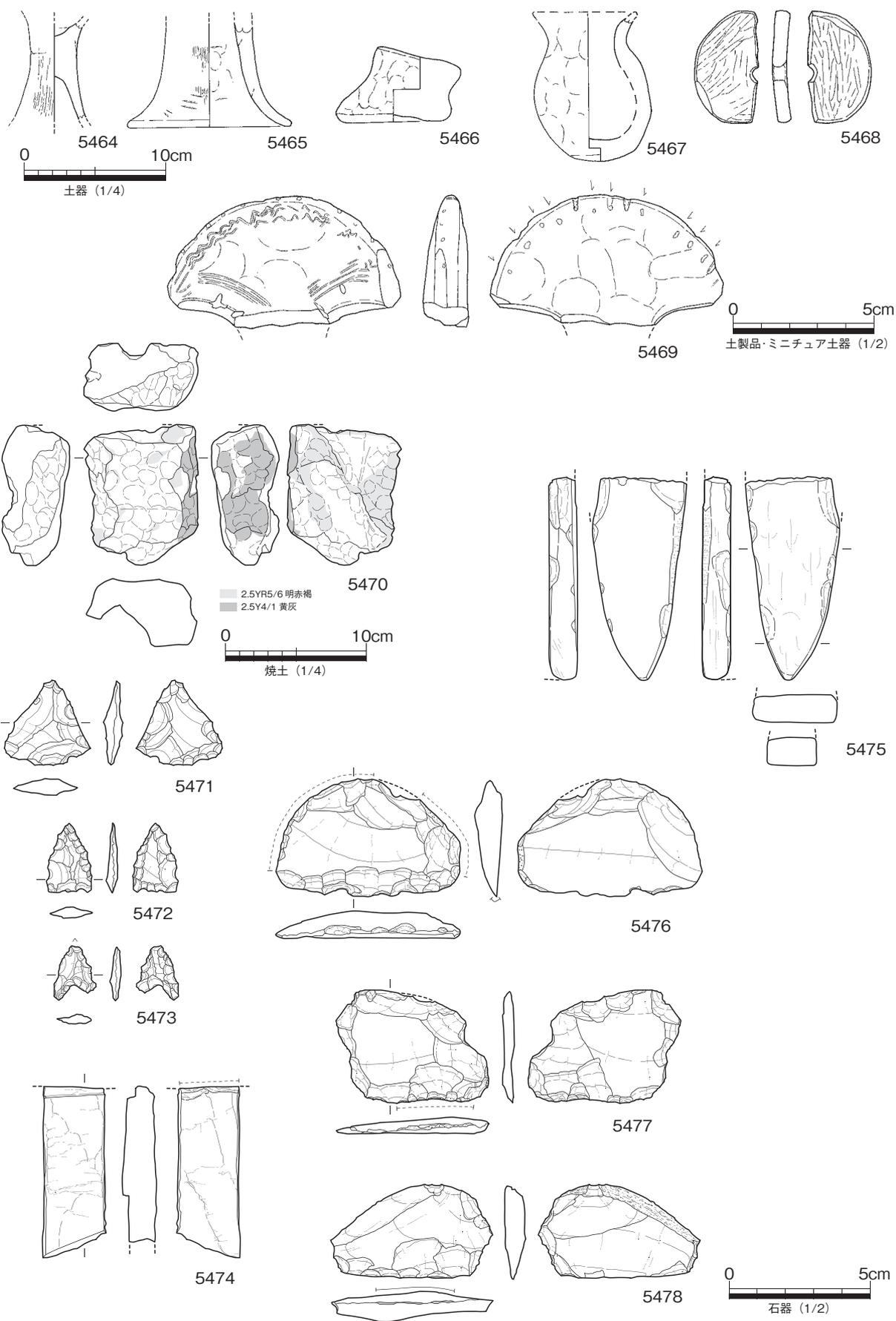
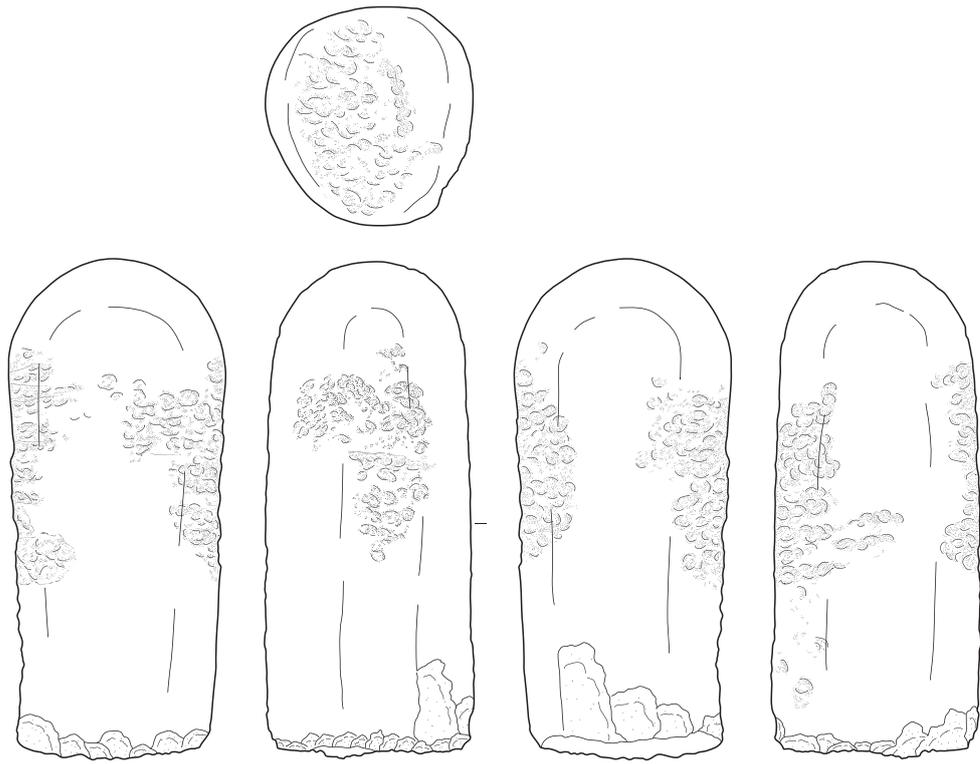
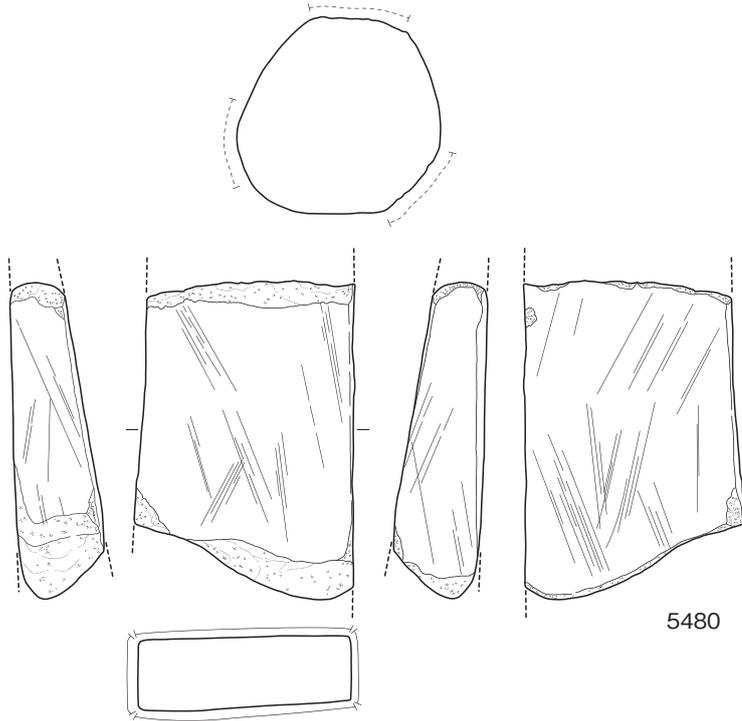


図 480 SR02 上層層位不明出土遺物 (5)



5479



5480

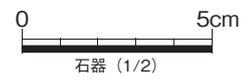


图 481 SR02 上層層位不明出土遺物 (6)

第9節 遺構に伴わない遺物

図482～487の遺物は、予備調査トレンチや遺構検出作業中に出土したもので、帰属する遺構の特定ができないものを一括して提示したものである。

土器 5485、5492、5493はベンガラによって彩色される壺であり、備中地域からの搬入品である。5486の複合口縁壺は、西部瀬戸内地域からの搬入品の可能性が高い。5488は吉備系の細頸壺であり、突帯間に棒状浮紋を施す。5489、5490の算盤玉状の胴部をもつ壺は、備後地域からの搬入品と見られる。5491は外面をベンガラで彩色を行う壺で、備中地域からの搬入品と見られ、5485、5492、5493と同様の胎土をもつ。5498は口縁部外面に櫛描波状紋を施す高杯であり、この施文規範は、遺跡内及び本地域内で類例を見ない。5500の高杯脚部片は、外面をベンガラによる彩色を行うもので、形態や胎土の特徴から備中地域からの搬入品と見られる。5495は弥生前期の甕底部である。5501、5502は縄文深鉢と見られ、後期及び晩期中葉の所産と見られる。5509は分銅形土製品で、櫛描原体による列点紋での加飾が見られる。5540は有溝の土錘である。穿孔は行われておらず、石錘と同じ溝を施す。(信里)

青銅器 5544はC区遺構検出中に出土した銅鏃刃部の小片である。錆化が進行し、刃部表面の片側のみ器面が残る。鏃が縦方向に認められ、研ぎを丁寧に施したものと考えられる。大きさ等から見て連鈕式で間違いないと考えられる。

玉類 5545、5546はガラス製小玉である。いずれもスカイブルーの色調を呈す。直径はいずれも3.5mmで、高さは5545が2.2mm、5546が3.0mmと後者の厚みが目立つ。上下端の小口面の形状は5545は丸く収め面をもたないが、5546は上下ともに面取りを施す。5546の器体内部には縦方向の微細な気泡を認める。

石器 5547～5593はサヌカイト製打製石鏃である。圧倒的に平基式が多く、大形のもの素材面に打製石庖丁に通有の磨滅を残すものが多い。5547、5549、5588、5593は少数派の凸基式である。5593は関部が外に向かって尖り、茎下端も下方に向かって尖る形態で、外来系の石鏃と考える。ただし、石材は他の石材と同じく風化が進行していない金山産と推定できるサヌカイトである。

5594～5596はサヌカイト製打製石錐である。5595はツマミ部を端整に作出する。他の2点はツマミ部形態が左右不均等であるが、作用部下端には使用痕が残る。

5597～5606はサヌカイト製打製石庖丁である。いずれも決して端整な剥片を素材とする訳ではないが、刃部付近に使用痕を残すものが多い。

5612はサヌカイト製打製石斧である。刃部に強い磨滅痕が残る。5613、5614は結晶片岩製の柱状片刃石斧折損片である。5614は深緑色を呈し、比重が大きい石材である。5615は流紋岩製の磨石である。形態から見て、投弾の可能性もある。石材は表面に多数の気泡が残ることから、天霧山石材である可能性が高い。5616、5617はサヌカイト製の楔状石核である。

5618は流紋岩製の叩石である。横方向の細かな線状敲打痕が目立つ。5619は黒雲母花崗岩製の叩石である。器体中央が敲打により強く窪む。この石材は極めて硬質で、現在備讃瀬戸の坂出市岩黒島に産出するものである。サヌカイト石材産地である坂出市金山では、多数の石材とともに、叩石も散布するが、この石材も少数ながら含まれている。平野部の通常の弥生時代集落遺跡ではあまり出土しない石材である。

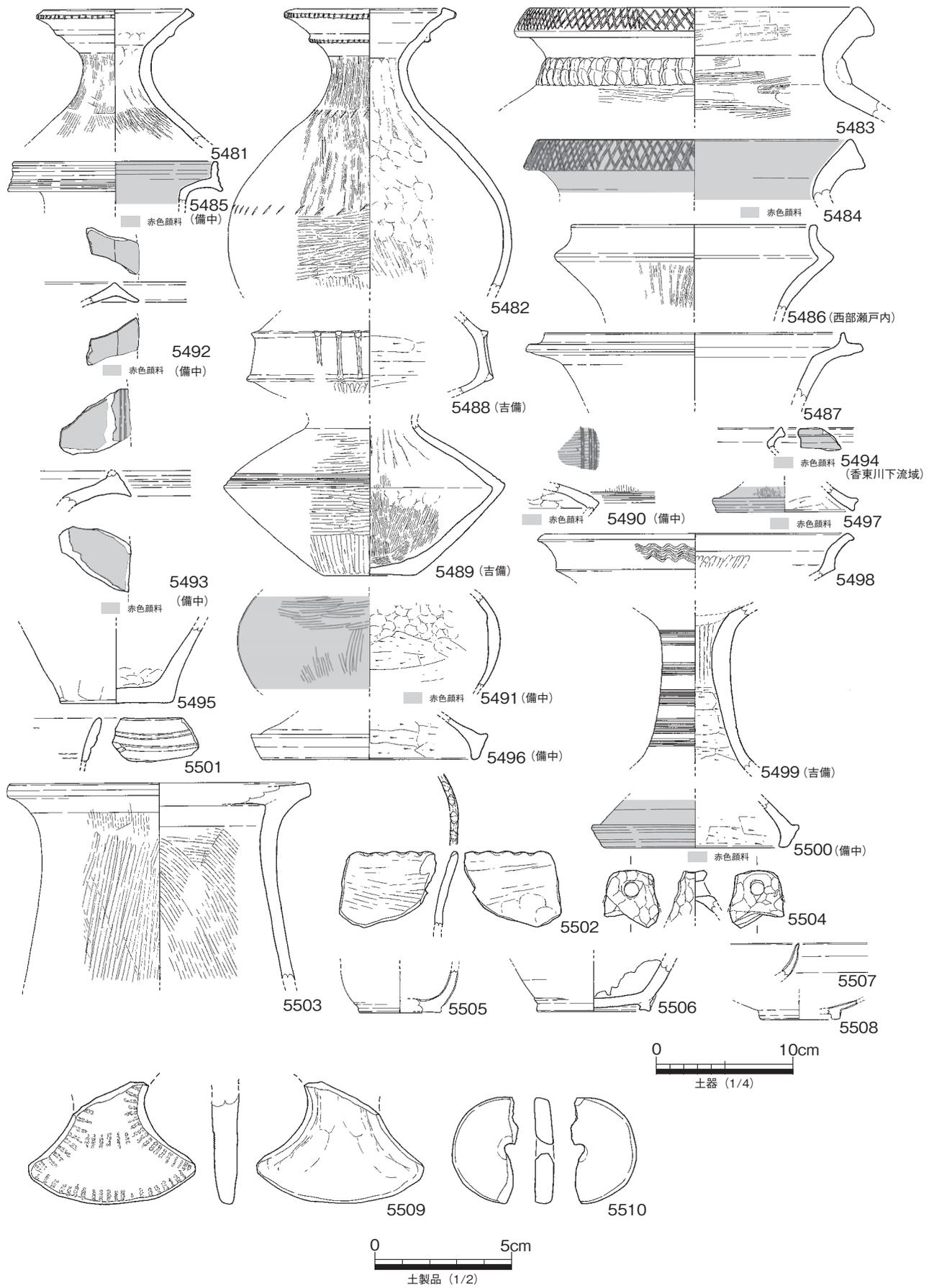


図 482 包含層出土遺物 (1)

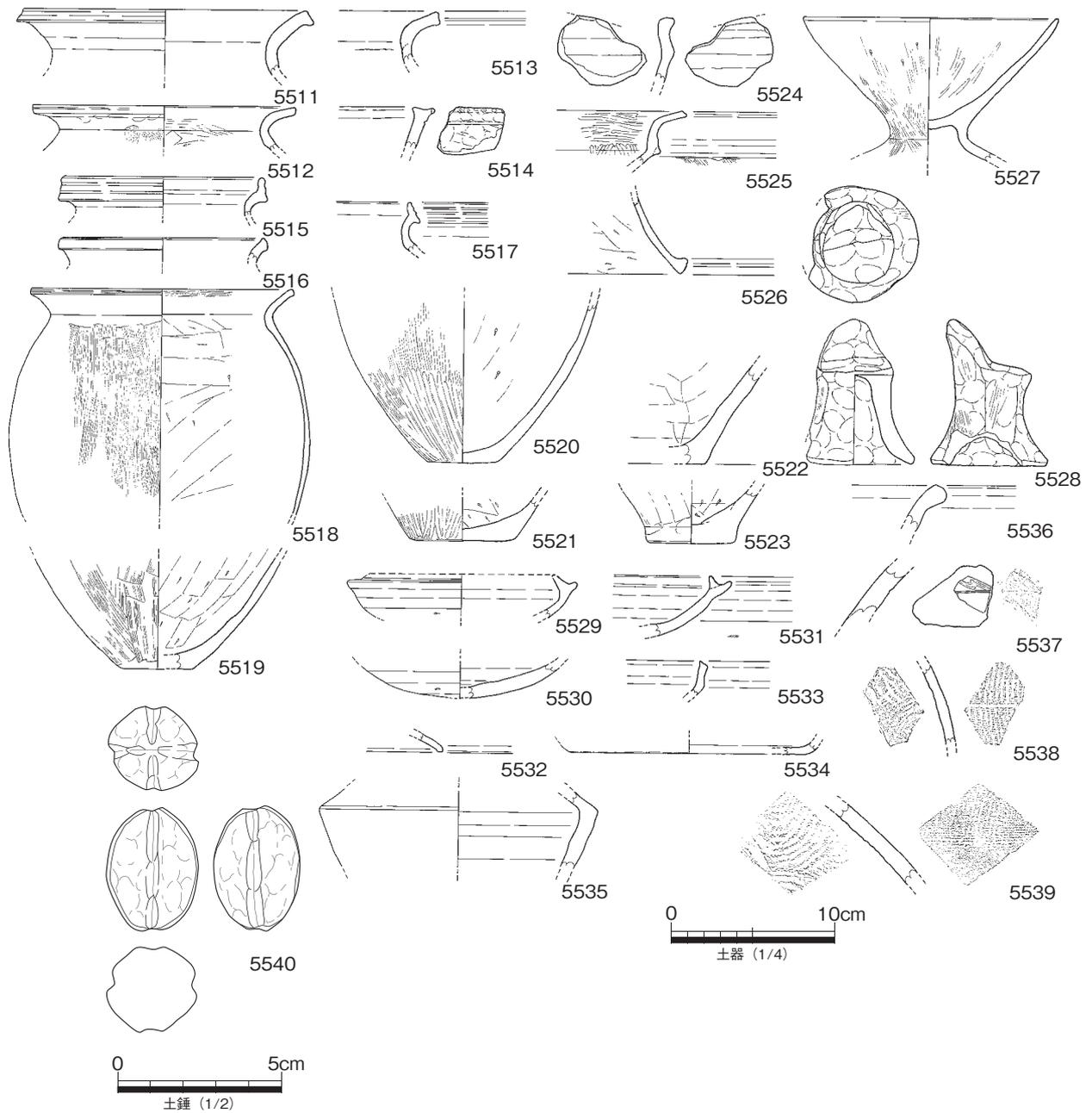


図 483 包含層出土遺物 (2)

5620は黒色頁岩製の砥石である。方柱状の各面を砥面として使用する。5621は流紋岩製の砥石である。やや歪な方柱状石材の側縁4面を砥面として使用する。縦方向の線状痕が特に顕著に残る。石材は気泡が少ない香色山産と考えられる。5624は全面研磨の花崗岩製磨石である。図に示した範囲は特に強い研磨が施される。肉眼では赤色顔料は認められない。(森下)

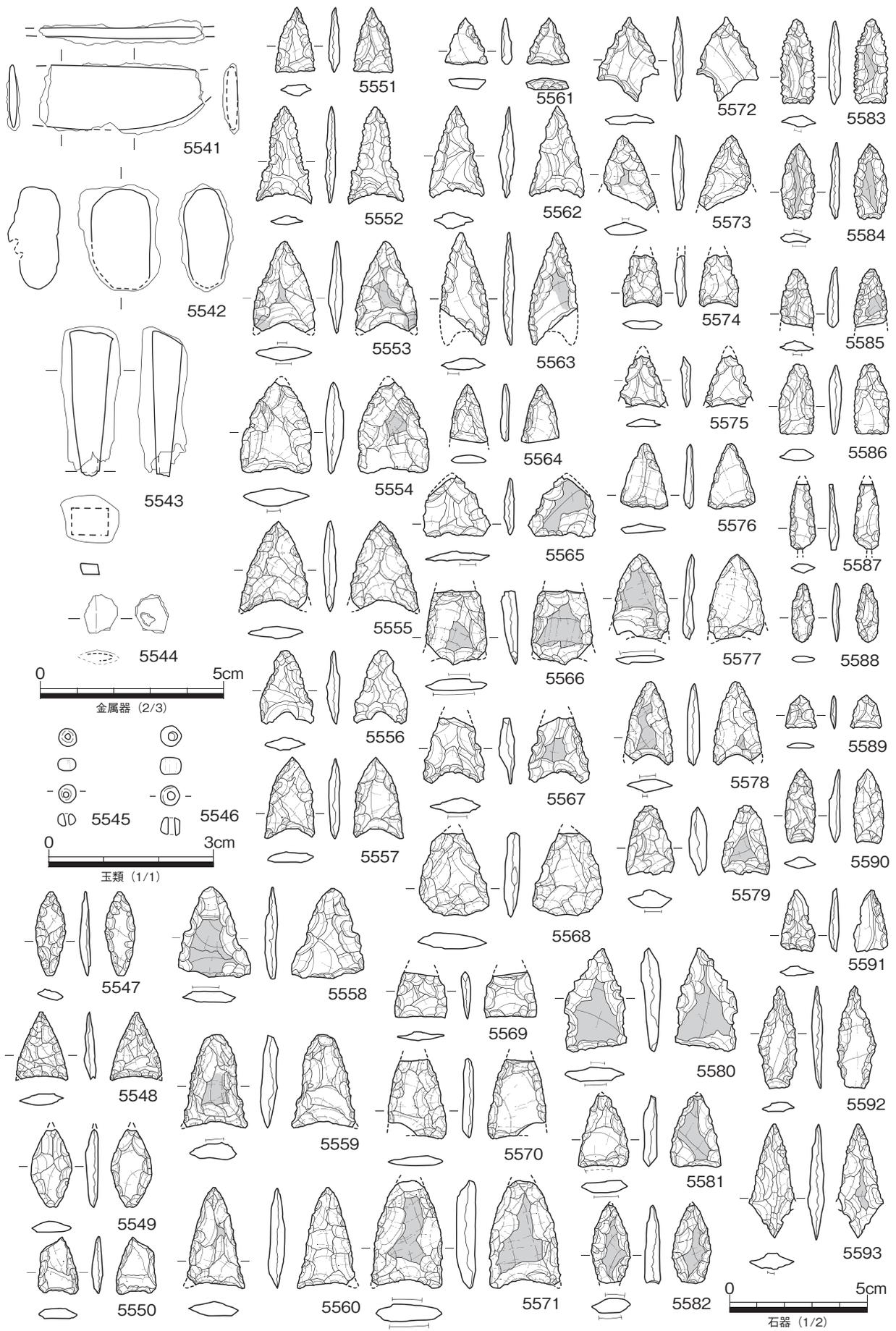


图 484 包含層出土遺物 (3)

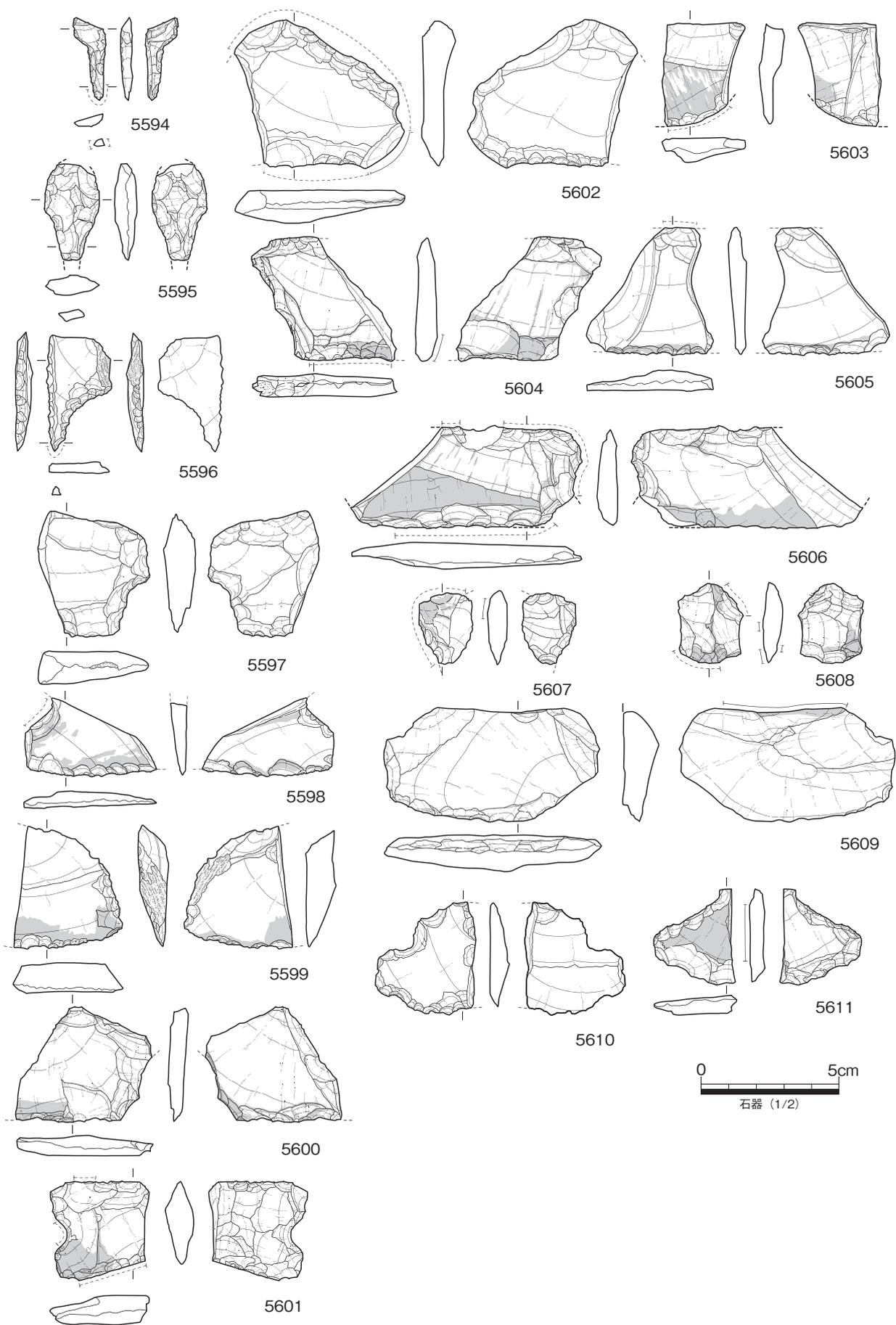


图 485 包含層出土遺物 (4)

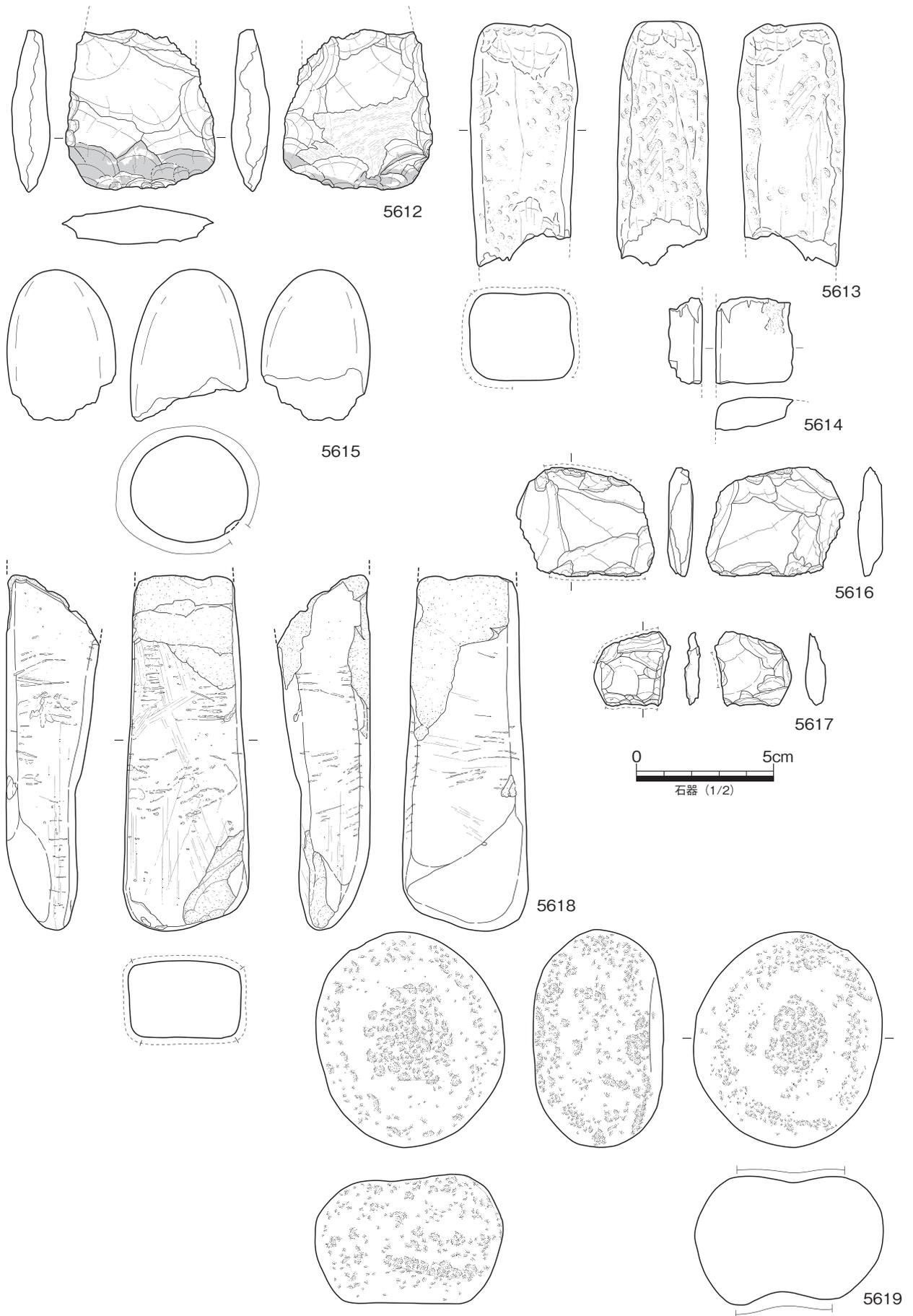


图 486 包含层出土遗物 (5)

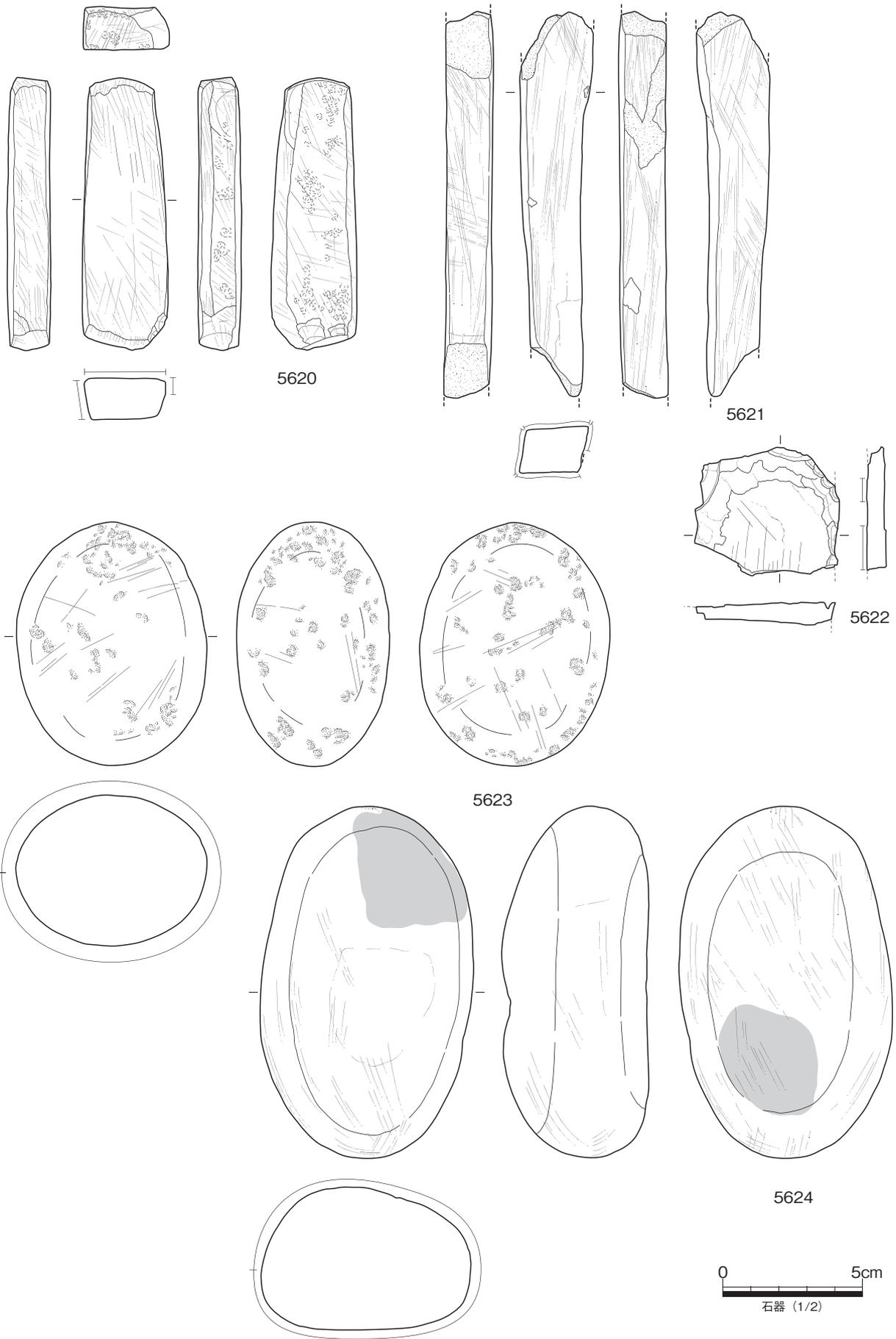


图 487 包含層出土遺物 (6)